默阿彌脚本集

第二巻

黙阿彌の似顔繪

縮屋新助 (洲崎土手の場)

穂積新三郎 (團十郎)　笹葉おきち(お鈴) (吉六)　縮屋新助 (小團次)　美代吉 (粂三郎)

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌脚本集　第二巻

東京
春陽堂版

（舊『狂言百種』第三號に添へられたる饗庭翁の序）

昔し近松門左衛門。狂言綺語の道をかりて。讃物乗の縁となさんと。都萬太夫座に筆を採りしも。其頃は、海道下りの大和通ひのとまだら〳〵とした大ぬめり。氣の長い見物春の日を暮惜みて。ヤンヤヤツチヤと引伸したる褒詞。氣乗がなければ御法も說けず。氣草臥して人形へ宗旨をかへぬ。去程に偖も其後。釣枝の花紅葉幾春秋を經。廻る月日の本舞臺。三間のあひだに四情をあらはし。五番續に六度の萬行を示す。趣向おひ〳〵細密になり作に新奇を競ひしも。いまだ。一乗五律の道を心田に馴せ。八藏三筐の波を口海に飜へすの妙に到らざりしに。こゝに時來りて石鷄旭光に羽たゝきし。石猿忽然破れて默阿彌翁の出世あり。劇場大に光明を放ち。世話狂言新に面目を開く。神儒佛の敎を假名に和らげ。愛惡慾の迷を眼前に諭す。面白く樂しく哀しくまた可笑しく。世態人情一として。筆に洩れたるものはなし。これまことに文人の舌。慧にして窮らざるものか。看客感歎せざるなし。淵默にして雷聲の響き渡つた名作の。多かる中より百番を撰出し。今回春陽堂より出版す。我輩翁の作にもつとも信心厚き者なり。先年講頭の春の屋と謀り。翁の作を新聞紙へ出して。世に其妙味を傳へしも。わづかに一二種なるを遺憾とせしに。此事あるは本意にかなへり。演劇脚本新板の。悅びのあまりに門外漢の篁村。わなゝく聲に口上云爾。

明治廿五年皐月

饗庭篁村識

（舊『狂言百種』の第一號に添へたる默阿彌の自序――原文のまゝ）

人來と告ぐる藪鶯と共に入來る一友人割下水の通りをば人力車の繁く通るは梅屋舖へ行く雅客なるべし是から己も見に行く氣だが一所に出掛る氣はないかと誘引はれたれど寒さに屈着服を着換て出るのが面倒止にしやうと辭したれば何老人の着換ずとも平生着の儘往かれよと勸められて浮々出掛合乘車で龜井戸の清香庵へ往きて見れば調度見頃の盛りにて園中床几の明きもなく此處に三個彼處に五個洋服和服の差別はあれど世の流行を穿ちたる各客美々敷服飾に金時計の鎖輝き垢に塗れし平生着の古布子では肩身が狹く早々にして立歸り歎息なせしは跡の月春陽堂の主人が來り我が若き頃綴りたる安政時代の狂言を出版なさんと思ふにぞ何々の本を貸しくれよと賴みに應じて二組三組春陽堂へ送りしが清香庵にて熟考と己が後悔なしたるは今や演劇盛んにして名高き學者の先生方が新奇を競ふ脚本は梅見の雅客に異ならず美々敷意匠の傑立に金時計の光り有る脚色の改正臺詞の高尚此處に三組彼處に五組續々出版有る中へ素より野卑な世話狂言無學無識の手に成れば時代違ひ假名違ひ糸拔け多き唐棧寫し僞物の拙作を平生着の儘修正の洗濯もせず出版せしは嗚呼肩身の狹き事にこそ。

旹明治廿五年三月中旬本所二葉町の茅屋において

古河默阿彌記

默阿彌脚本集第二卷目次

挿繪目次

前座は伊丹屋重兵衞が故しゆうの爲の
人殺しよしないことゝ氣も筑田鬼藏
小兵衞が質入の茶入を詮議に町髮結ひ
結ぶ元結惡緣に二世を掛たる後の月
尾花才三が戀中は材木町の白木屋お駒
時菊月狂言
御贔屓御好

怪談御伽草

後座は座頭の文彌こと官金ゆゑに身を
果す恨みは忽廻り來て仁三が强請に
居酒店ぞつとおしづが死靈のたゝり敵
同志と白無垢に一對そろふのちの雛
契情古今が色客は柴居町の黒木屋彥三

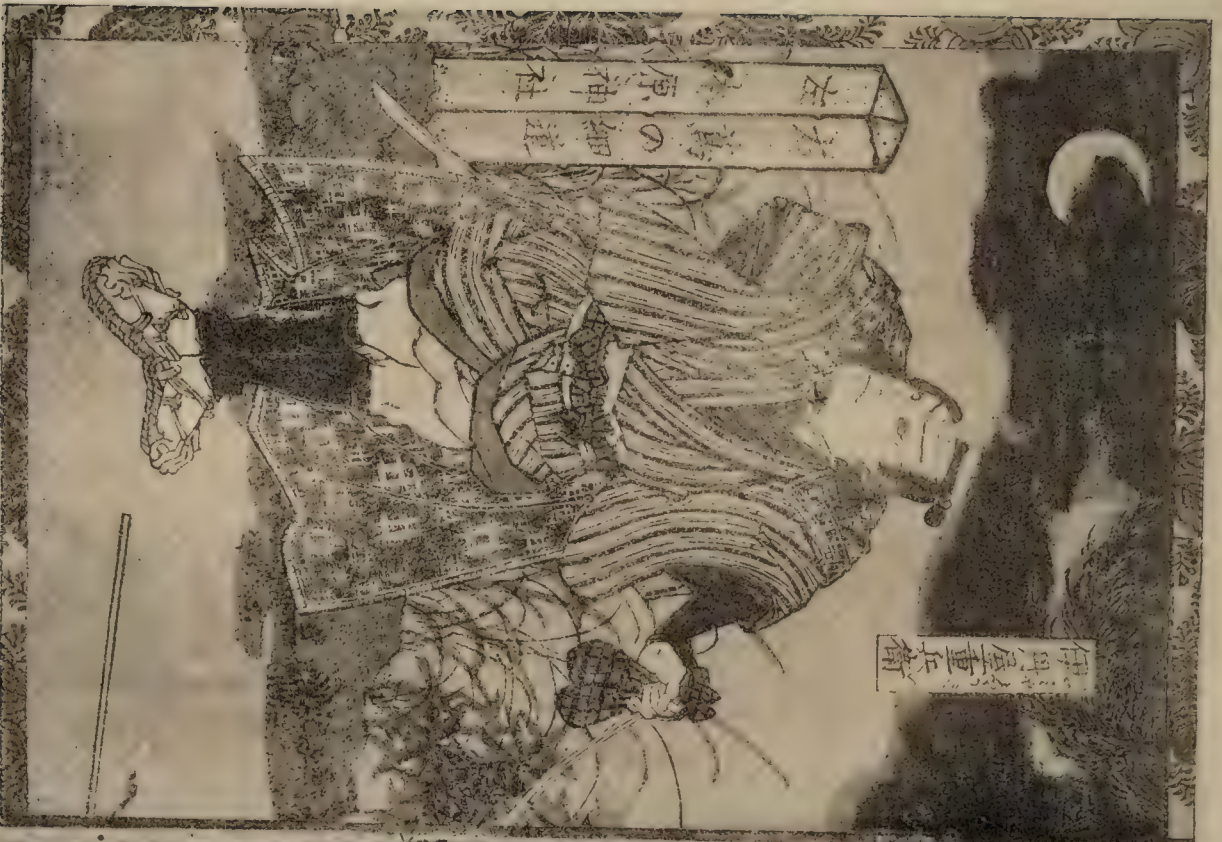
世界緘二組三組

座頭文彌殺しの「宇都ノ谷峠」は安政三年九月、作者四十一歳の折市村座に書卸された。全篇を通じて哀愁に富み陰慘の氣の横溢してゐる作で、世話物中の代表作である。殊に鞠子の宿から殺しに至る一幕は興味の中心でもあり、その描寫は精細を極めてゐる。また、この作者に取つてのスツールム、ウント、ドランクとも稱すべき市村座時代（即ち小團次との結托時代）の最初の作である點に於ても記憶せられねばならないし、小團次の寫實的藝術によつて幕末の頽廢的劇壇に一味の革新的氣勢を示した、その第一聲である點からも輕視すべき作ではない。年代記には「當新狂言は元祖金原亭馬生の座頭殺しのはなしの仕組み、……鞠子宿藤屋文彌重兵衞仁三出合ひ、宇都ノ谷峠殺し……柴井町重兵衞宅文彌幽靈怪談の場古今大當り、古今彥三心中文彌幽靈この所怪談大出來大當り」とある。小團次が殺しの場で文彌から仁三へ替るその手際が鮮やかで巧みであつたとか、幽靈になつて出たり消えたりする所に業事師としての特色を發揮したとかの話が傳へられてある。

書卸しの時の役割は、市川小團次（文彌、仁三）、坂東龜藏（伊丹屋重兵衞）、尾上菊五郎（文彌姉お菊後に古今、重兵衞女房おしづ）、坂東彥三郎（佐々木桂之助、彥三）河原崎權十郎（尾花才三郎）、市村羽左衞門（文彌妹おいち）、淺尾與六（尾花六郎左衞門、坊主小兵衞）中村歌女之丞（腰元小牧、白木屋お駒）、關歌助（佐野松屋清兵衞、國侍鹿子島新吾）、中村鴻蔵（判人善六、大阪者太郎兵衞）、嵐吉六（とぶ市、下剃萬治）、市川新升（筑田鬼藏）等。

挿畫にしたのは初演當時版行された草双紙の口繪殺しの場である。

大正八年十一月　　校訂者誌す

盲人文弥
提婆仁三
伊丹屋重兵衛
右 蔦の細道
左 原神社

蔦紅葉宇都谷峠（宇都谷峠座頭殺し―五幕十一場）

序幕

櫻川佐々木家の場
柴井町伊丹屋の場

〔役名――伊丹屋十兵衛實ハ尾花の若徒、佐々木桂之助、尾花六郎左衛門、筑田喜藏、尾花才三郎後に髮結才三、望月丹下、佐野松屋淸兵衞、女衒源六、田川伴藏、鳴子曳六、伊丹屋丁稚三太、茶道兵才、十兵衞女房おしづ元伊筒屋の抱勝山實ハ六郎左衞門娘おしづ、佐々木家の腰元小牧實ハ白木屋お駒、佐々木家の妾千種等。〕

（佐々木家塀外の場）――本舞臺正面一面の練塀松の釣枝、中央に用水桶、總て佐々木家塀外の體。△○□の中間三人、提灯六尺棒を持ちて在り、時の鐘にて幕明く。

△ 筆助、可內、何と今夜も雨氣と見えて、暖かなことではないか。

○ 時候は寒いはうが順だが、夜更になると袷ぢやあ冷附くやうだわえ。

□ その冷え〳〵とするところへ、用意の江戸一（ト袂より三合德利を出して）それ〳〵これさへありや

△あ夜明まで、何のことはない。
○ツイとろ〳〵と寢るといふのか、いや覺束ねえ番人だ。
△手前のやうに酒の好きなものは親達の勘當、すでに御家老の筑田喜太夫様の御子息喜藏様が、御納金戸を二百兩遣ひ込み、御追放にならしやつたを知つてゐるか。
□その二百兩も色狂ひといふでもなく、ぱつと遣つたといふ噂もないが、
△派手なお噂は聞かねども、今日此頃は以前お邸に勤めてゐた中間の坊主小兵衛とかいふ者の世話になつてござるといふが、手に覺えた内職はなし、得手、とゞのつまりが、斬取り強盗は武士の習なぞと手前勝手な道理を附けて、悪いことを仕出すものだ。
○この頃の物騒と言ひ、屋敷奉公はしても、劍道の道は少しも知らず、險難性だから中々盜人を捉へようなどゝいふ手柄ができるものか。
△さうあきらめて見りやあ二本差しても犬威し、案山子に劣つた男だなう。
□筆助はともあれ、汝あ嗅茶にまかれて二本棒だらう。
○その二本棒は樂しみだが、その傍で毎晩一合酒といふのも氣晴らしになるやつよ。
△そんなら一合はずまうか。

兩人　又味噌を上げようと思つて、

△　何にも言ふな、元〆の肩へ乘つて來いといふに。

兩人　おんぶとあれば、何時でも、

△　火の用心々々。

ト三人は上手へ入る。此の時凄き合方になり練塀より、見越の松、用水桶を傳はり、筑田喜藏頬冠りにて、口に更紗包みの茶入の箱を咬へ出來り、本舞臺へおり、身繕ひをして、

喜藏　佐々木の重寶花形の茶入、この預りは豫て遺恨ある尾花六郎左衞門、茶入紛失なす時は切腹、身共はこれを賣却なして此の身の有附、どれ人目にかゝらぬその中に、塒を替へて工夫を付きようか。

ト思入あつて行きかける。此時後ろへ尾花六郎左衞門蛇の目の傘にて顔を隱し伺ひゐて、此時喜藏の鐺を取つて引戻し一寸立廻り、結局喜藏退れて花道へ行く、これにて、

六郎　曲者、

トいふ。喜藏小石を取つて打附ける、六郎左衞門は傘にて受ける思入あつてきつと見送る。此の見得風の音にて道具廻る。

（佐々木家千種部屋の場）――本舞臺常足の二重、正面一面の金襖、二重中央に千種妾の打扮にて住ひ、この傍に蒔繪の煙草盆、文庫の上に鼻紙及び守り本尊を黒の厨子に入れ經卷を載せてある。平舞臺に腰元二人、他に二人の腰元襷がけにて茶道兵才に向ひ、各々紅葉の折枝を持ち立廻つてゐる。白囃子にて道具納まる。と又立廻つて結局兵才打ちすえられる。

兵才　まゐつた／＼。

腰一　何と兵才殿、女子でこそあれ覺えの手の内、

同二　これにもこりず御自慢なされまするかえ。

兵才　イヤもう恐入りました。然し負くるは勝の慣ひとやら、無手ながらかうして、

ト兵才腰元の一へ組付く、一これを振切つて突退ける。又立かゝるを二後ろより兵才の眼を隱す。兵才手を取らうとするを兩人してしつかと押へつける、兵才足をばた／＼しもがく、

千種（思入あつて）おゝ女中方、お手柄々々、それにて縛しめ、暫く糺明、（ト文庫の紐を投げてやる。）

同人　心得ました（ト兵才を縛る。）

腰二　重ね／＼の耻辱をとりし兵才殿、我々へ降參なせば、

皆々　この糺明は許しまするぞ。

兵才　えゝ情ない、女子と侮り生捕らるゝとは。
腰一　以後の見せしめ、お中の口まで引ぱつて參じませう。
同二　こりやよい所へお氣が附かれました。憎さも憎し、何ぞ仕置をいたしませう。
同一　その思ひ附はいつそのこと、墨塗りにいたしませうか。
千種　それも一興、兵才殿の面體を反古染にしてもだいじない。
腰一　かしこまりました。さあお許しの出たからは、觀念したが、
皆々　よいわいなう。
兵才　桃栗觀念耻かきねん、わしは殘念、もう御免。
腰三　へらず口を利くからは、それ墨塗りぢや〳〵。
皆々　かしこまりました（ト硯を取る。）
兵才　これはたまらぬ。
ト兵才逃げだす。此時花道より望月丹下出來り、この狀を見て、
丹下　これは〳〵打揃うて何事をしめさるのぢや。扨は女中衆達の手込めに逢ひし兵才どの。さりとは
面白をかしい御殿の有樣、ちと身共へもお聞かせなされい。

腰四　いえ〳〵あなた方の御存じないこと。
皆々　思ふ存分折檻をいたしまする。
兵才　存分にされては堪らぬ。丹下殿女中方へお詫をお願ひ申しまする。
丹下　いやはや卑怯千萬。何かは知らねど身共に免じて御了簡なされて遣はされい。
腰二　丹下樣の御挨拶、この後兵才殿が劍術の惡口さへ言はれぬとあれば、なあ呉竹どの、
同一　それ〳〵、武藝を蔑する兵才殿、是に懲りてきつとたしなみめさるゝなら、皆々へも執成し、
丹下　拙者もお詫いたすほどに、
三人　お許しなされませいなあ。
千種　丹下殿のお口添へ、いよ〳〵降參とあるならば、
兵才　いやもう降參所が坊さんでござる。お女中方、これ、頭に免じて坊主眞平御免下されい。
皆々　おゝほゝゝゝゝ（ト笑ひながら紐を解く。）
兵才　やれ〳〵面目次第もない（ト下手へ退る。）
丹下　兵才殿たしなまつせえ。けれう身共が參り合せて其方の仕合、拳も鈍き茶道の身で劍術は無益の沙汰。身共などは斯く兩腰をたばさみ、立派に御知行頂戴いたしてこそ弓馬鎗刀の心掛なうては

ならぬ。尤も千種の方は劍術御執心とあつて、附々の女中までに御指南なさるゝと承はるが、兵才殿が此の體裁、感心仕つてござる。

腰一　いやもう、拙き業も女子の一心、

一二　お耻しう存じまする。

丹下　又拙者もよい折柄なれば、千種の方へ御稽古を願ひたう存じまする。なんとお叶へ下さるか。

千種　未熟の手の內、どういたしましてお立合ひなりませうや。ほんの申さば戲同樣なことでござりまする。

丹下　その戲れが大執心、幸ひこれに紅葉の折枝、色づくところが又一しほ、さゝ是へ〳〵。

千種　そのやうにまでおつしやるを辭退致すも不興とやら。腰元衆丹下殿のお相手に出やいなう。

腰一　最前から望む所と存じをれど、お許しもない其中に、

同二　此の方より願ひましては、失禮と存じまして控へてをりまする。

同三　たつて御所望なれば、千種の方の仰せの通り、そち達の中望月樣のお相手に、

一二　かしこまりました。（下立上らうとするを丹下思入あつて、）

丹下　あいや暫くお控へなされい。拙者が相手と申すは千種の方、我が手の內は鈍くとも、免許を受け

たる秘事口傳いたす儀もござる。それとも御意に適はずば、是にござる桔梗どの身が相手になら
つしやれ。

腰三　どういたしまして未熟の私、あなた樣のお相手なぞとは思ひもよらぬことでござりまする。

丹下　なるほど、こりやさう思はつしやるも尤もぢやが、望月丹下も夜叉鬼神ではござらぬ。女子を相
手に致すからは、ずんどあしらうて遣はさう。（ト言ひながら立つて、その腰元の後ろより）コウ組み
つかれたら、どうぢや／＼。

ト抑へ付ける。これにて他の腰元三人丹下へかゝる。兵才これを好き機會と下手へ來り、月の備へ物
の團子、枝豆などを取つて喰ふ。この中丹下さん／＼に打すえられる、こゝへ兵才薄のつばなを持來
り丹下の耳へ入れる。丹下はこれにて耳の穴をほじりながら兵才を追廻す、その中丹下は薄の花活を
引つくり返し水流れるこなし、腰元四人は丹下をめつた打にする。兵才は花活を取つて顏を突込み、
花道へ行く、

丹下　まゐつた／＼。

皆々　こりや丹下樣、御卑怯でござります。

ト その中に兵才は花道へ入る。と花道より尾花六郎左衞門出來り、

六郎　後の月見に奥殿の賑ひ、實に太平の瑞相（ト舞臺へ來り）こは千種の方にはまづ御健勝の體、大慶至極に存じ奉りまする。
五人　あなたは尾花六郎左衛門様、
六郎　いづれも打揃うて、當日の賀儀祝し申さん。
千種　月を祝して今日の出仕、互ひの滿足、
六郎　取分けお次で伺ひまするに、望月氏を始め腰元衆の武藝のお試し、感心仕つてござりまする。
丹下　身共は未だ獨身でござる、相應な縁談がござるかな。
六郎　これはけしからぬ、聾耳話しだ。
丹下　兎角女は容姿形、女に力はいらぬこと、
六郎　あはゝゝゝゝ、少々氣逆せと見ゆる。
皆々　おほゝゝゝ、
丹下　是さ〳〵身共が申すこと間違つた儀は申さぬ。そのやうに笑はるゝな、をかしうはござらぬ。
腰一　それ〳〵、それが違うてをりますぞえ（ト大きな聲にていふ。）
丹下　あの、相應な縁談があると申すか。

腰二　もし〳〵、丹下様はどうしたことか、きつうお耳が遠うおなりなされましたなあ。
同三　あまり打ちすえた故、顚倒なされて、俄の聾耳、
同二　ほんにさうでござんしたか、笑止なことでござんすわいなあ。
千種　いや〳〵そりやさうではあるまい。年の加減餘病の業とか申す事か。
腰四　千種様へ申上げまする。お耳の遠いその譯は、あの兵才殿が薄のつばなを振廻し、その時丹下様のお耳へつばなが入りましてから、俄の聾耳でござりませう。
腰二　ほんに、それで聾耳になりましたか。
皆々　爭はれぬものでござりまするなあ。
六郎　いかさま、物の譬に聞き申せしが見るは始めて、丹下殿を打ちすえしはあつぱれ感心、まさかの時は一方の禦ぎともなつて頼もしい。
千種　未熟の教へも武家のたしなみ、生兵法は怪我のもと、
六郎　いや〳〵左にあらず、女ながらも武家のたしなみ、誠や人間は病ひの器、どうか直して遣はしたい。
ト此中丹下耳の穴をほじる、皆々へこなしあつていろ〳〵をかしみの思入。千種の方は六郎左衛門の

顏色を見て、

千種　丹下殿の病ひより、疾より見ればこなたの顏色常ならず、息づかひも苦しき樣子、服藥せずばかなふまい、養生が肝要なれば心得違ひの、いや、藥違ひのないやうに、

六郞　こは有難きその仰せ、いかにも持病の惱みはあれど、何、これしきに屈せぬ某、別に替りはなけれども、老少不定は時を嫌はず、こゝらが常の心得かと存じまする。

千種　おゝ聞及ぶそなたの氣質、忠義ばかりか何事も義は鐵石のまことの侍と、君にも日頃御噂、隨分其の身を大切に、國家の礎朽ちせぬやうに、

六郞　心の磐石くだくるとても、忠義の魂變ぜぬそれがし、

千種　勇ましきその詞、これより直に君の御前へ、

六郞　拙者も同道、

千種　尾花殿、

六郞　望月樣はこれにゆるりと、

千種　サ、皆もいつしよに、

六郞　まづ、

皆々　お越しなされませう。

ト唄になり、皆々奥へ入る。丹下獨り殘り思入あつて、

丹下　何の事ぢや、身共一人置きざりにしてべちやくしやべつて奥へ行きしが、たゞ不思議なに耳のあんばい、がんく致して聞えねども、わざと聞える態に見せかけその座を繕ひおけば、尾花を始め千種の方それと知らぬは身共が頓智發明と申すものぢや。これを思へば世の中に利口な者は身共一人、此上は諸事萬端引受けて普請奉行お金方、役德は皆ずり込み、小牧をくどいて身共が女房、さうまく行けばよいが、

ト手を組み思案のこなし、奥より田川伴藏、鳴子曳六出來り、

兩人　丹下さま（ト言つても聞えぬ思入、兩人思入あつて、）

伴藏　望月氏何をうつかり、田川伴藏、

曳六　鳴子曳六、豫て申し談じたる一件も大半上首尾、

兩人　（猶だまつてゐるので、）もし、丹下樣（トきつといふ。）

丹下　（心附き、兩人を見て）是は各々、唯今出仕めされたか。

伴藏　いかにも左樣、貴殿は何やら考へて御思案の大福餅、旨いことをやらるゝな。

曳六　その分口なら身共へも（ト言ひかけるを、）

丹下　いや、斯やうでござる。手前儀はちと仔細あつて耳を遠方へ遣はしました。唯今何かと御意なされたが、少しも聞えませぬて。

伴藏　それは氣の毒、申し談ずる一儀もあれど、聾耳となられては、

曳六　お年も若いが聾耳とは、あんまり聞えぬ御病體、

伴藏　丹下殿は三十になるやならずにつんしうとは、嘸聞きたうあらうのに、

丹下　なぜ聞かせては下さんせぬ（ト淨瑠璃を語る。）

兩人　えゝ何を馬鹿々々しい。

ト丹下の脊なたゝく、これにてぎつくりし耳の聞えるこなし、

丹下　あゝ嬉しや〳〵。

兩人　何が嬉しうござる。

丹下　唯今御兩所がどつさりたゝくそのはずみ、つかへし耳がなほりました。

曳六　すりや貴殿のお耳が元々に聞えるやうにおなりなされたとか。

丹下　さればのこと、はずみに打つたが勿怪の幸ひ、蟻の囁くも聞えまするて。

伴藏　それは重疊、然らば豫て筑田喜藏殿が心を合せ、尾花親子諸共に何ぞれかぞれ罪にとつて落せし上、彼等二人をぼんでんごく、

曳六　佐々木の家で兩人が重役になる上は、心のまゝと思ひの外、あの喜藏殿は御納戸金二百兩こもうせしを尾花親子に見出され、門前より阿呆拂ひ、

伴藏　それ故猶々遺恨重なる尾花親子、筑田氏が計略を以て昨夜寶藏へ忍び込み、

丹下　あこれ（トあたりを伺ひ）六郎左衛門が預かる所の花形の茶人を盜み取る手筈、首尾よく奪ひ取られしか、

曳六、その儀も上首尾、然し今朝より紛失せし噂もなきは合點行かぬ。

伴藏　それが則ち智謀拔群なる六郎左衛門、御家の瑕瑾と相なる故、事穩便に計らふ手段、

丹下　それで樣下は殘らず知れた。先刻出仕の六郎左衛門、彼れが五音を探り見ん、

兩人　それこそ妙計、

丹下　これ（ト制して）御兩所ござれ。

兩人　心得ました。

ト唄、調べになり丹下先に兩人奧へ入る。花道より尾花才三郎出來りて、

才三　恐れ多くも我君の御寵愛深く、未熟なる某へ殿樣のお髮結を仰せ付けられ此身の面目、今日式日のことなれば、刻限よりも早けれども、取次の御茶道當番は誰人ならん、何はともあれ心急き、御詰所にござらねば萩の間へ推參いたさう。さうぢや〳〵、

ト奥へ行かうとする。此時奥より佐々木の腰元小牧出來り、互ひに行逢ひ思入あつて、

小牧　あなたは才三郎樣、唯今御出仕遊ばしましたかえ、

才三　いかにも、疾より出仕はいたせども、茶道衆もござらねば其取次を相待つところ、小牧どの、憚りながらお尋ねなされて下されぬか。

小牧　そりやもうお心易いことなれど、そのやうにお急きなされずともよいほどに、まあお下にござんせいなあ。

才三　それぢやと申して、

小牧　はて大事ござんせぬ、御用の御邪魔はいたしませぬ。御殿の樣子はよう存じてをりまするぞえ。

才三　いかさま、晝夜お附の小牧どの、こりや尤もであつたわいなあ（ト下にゐる。）

小牧　もし才三樣え、ちとお願ひがござりまするが、おかなへなされて下さりまするかえ。

才三　いやもう男女のへだてはあれども、傍輩の此方樣、身にかなうたことなれば、

小牧　嘘ざやござんせぬかえ。

才三　嘘僞りは大嫌ひ、してお頼みのその仔細は、

小牧　あの百人首の歌に、瀨を早み岩にせかるゝ谷川の割れても末に逢はんとぞ思ふと申しまするは、どういふ心でござんすぞえ。

才三　そりや崇德院の御製、一つ流れの水なれども、物にへだゝり離れ〳〵になるにもせよ、いつか又一つになるといふ待ち詫びたる戀歌の心と思はるゝわいなう。

小牧　てもしほらしい、一つ流の御奉公いたしまして、人目の關にへだゝるとも、末は女夫になられまするかえ。

才三　そりや、その人々の心々さ。

小牧　そうして、あなたのお心わえ、

才三　そりや人としてこの道を嫌ふは、木石とか申すものゝ手前共は大の不骨、親のゆるさぬ不義放埓左樣なみだらは致さぬ心さ。

小牧　して〳〵、親々のお許し受くる其時は、

才三　いやでござる（トきつといふ。）

小牧　そりやあなたお胴慾でござります。私の心を知らぬか何ぞのやうに少しは不便と思召し、御推量なされて下さりませいなあ。

才三　武士たる者へ、異なことのおつしやりやう、はて迷惑千萬な義でござる。

小牧　あれ、又そのやうなことおつしやつて、氣強いばかりが武士とは申しませぬ、戀も情も知る人を仁者とか申しまする。

才三　仁も過ぎれば癡人とやら、木石と言はれうとも、その身を堅固に致さねば不義者の汚名を受け、掟を破る不忠の科、戀の道こそ知らずとも弓馬の道なら心を砕く某へ、重ねてかやうなみだら千萬、申し出せば其の身の破滅、たしなみめされ小牧どの。

小牧　（立上る才三の袂を控へて、）そりや又あんまり、

才三　あいや不骨の某、必ずお氣にさへられな。

　　　ト才三御振切つて奥へ入る、小牧思入あつて、

小牧　思ひこがるゝ才三さん、氣強ひばかりが殿御の常か、なま中言出し此の儘に、かなはぬ戀とあきらめても、心の中が耻しい。なんとしたらよからうぞいなあ。

　　　ト歎息したる思入、奥より丹下伺ひ出で、

丹下　それにござるは小牧殿、見るは眼の毒障るに煩惱、聞けば聞きばら、なま中耳が聞えずば、こなたの歎きは聞かねども、いまの述懐、才三がことはすつぱりと思ひきつたがよささうなものぢや。

小牧　さうおつしやるは丹下さま、

丹下　丹下此度はぬさも取りあへずこなたの戀路を適へんと、思ふ心は手向山、

小牧　その親切はお嬉しう存じまするが、もう何事もふつ〳〵おつしやつて下さりますな。

丹下　言ふは言はぬにいや增す戀路、才三ばかりが男ではあるまいし、某とても獨身なれば、結ぶの神の引合せ、これさ、つんとしては譯が分からぬ。戀知り男になびきをらぬか。

小牧　(丹下の手をかけようとするを振拂つて)御本性でおつしやることか知らねども、この中までは喜藏殿の御難題、お屋敷を追放よりやれ嬉しやと悅ぶ甲斐もなさけなや、相手替つてあなた樣、みだらなことをなされると、御重役のお方でも用捨は致さぬ、御人體にもないそのお顏で、色の戀のとちとおたしなみなされませ。

丹下　こりやだいぶ手强うでかけたな。よし〳〵おぬしがさういふ心なら、可愛さあまつて憎さが百倍刀にかけてもくどき落さう。

小牧　てもまあ、お役がらにも似合はぬ仰せ、お掟を背く不義の成敗、その刀でなされますか。

丹下　その掟を存じながら、何故又才三にうつぽれた、

小牧　えゝ存じませぬ、知らぬわいなあ。

ト言ひながら突退けて顔をぴつしやり打ち、唄になり奥へ入る。丹下残つて、

丹下　どう言へばかういふと、中々手しぶいあの小牧、是といふのも才三めに心を通はすとち女め、今にほえ面かゝしてくれる。

トばた〳〵になり、奥より才三郎剃刀を持つて逃げて來る、後より佐々木桂之助殿の打扮にて長煙管を持ち出來る、これに以前の四人の腰元、伴藏、曳六の近習兩人、何れも留めながら出る。

桂之　予が面體へ疵を附けた不屆き奴、常ならぬ式日に血を文して衣服をけがし、濟まうとおもふや、あまりと申さば奇怪至極。

才三　恐れながら思はぬ麁相、幾重にも御宥免願ひ奉る（ト平伏する。）

丹下　（思入あつて）恐れ多くも御主君の面體へ疵をつけて、御宥免で濟まうと思ふか。

伴藏　左樣々々、平日主君を輕しめたる罰は目前。

曳六　今更お詫を申すとて、この大罪が脱れうか。

丹下　こりや我君のお手おろさるゝまでもなく、いで某が成敗仕らん（ト立ちかゝる）。
桂之　丹下控へい。
丹下　あいや／＼御前、不屈至極の尾花才三、御家の掟以後の見せしめ、しばり首はお定り、その太刀
　取りは某が、
桂之　いや、その成敗は予が致す。
丹下　すりや、御前樣が、
腰元　お手づから、あの才三さまを、
桂之　いかにも、新刀の試しも自業自得。
丹下　さすがは君の思召し、恐れ入つたる御成敗、斯く罪も極るからは、大小捥ぎとり繩附にして廣庭
　へ引きすえい。
曳六　かしこまつてござります。
　　ト兩人才三の大小を取り、下緒にて後手に縛る。
桂之　言はうやうなき人非人め、それ、廣庭へ引立てい。
伴藏　はつ。君の上意お立ちなされい。

才三　あゝ、斯くなり行くも生者必滅、
丹下　引かれ者の小唄ぢやなあ。
ト皆々よろしく思入、此見得にてよろしく道具廻る。
(廣庭の場)——本舞臺高足の二重、本緣附、上手障子家體、上下網代塀、下手萩の下草、調べにて道具留る。とこゝに紺看板の中間三人竹箒と手桶とを持ち掃除してゐる。
○　何と折平、當家の殿樣は御仁心なお人ぢやと聞いたが、人の噂とは大きな違ひだなう。
□　御酒の機嫌か知らねえが、お側にござる尾花才三樣をお手討になさるといふのは、あんまり短氣なお仕置だなあ。
△　剃刀で疵を附けた位なら、人を殺なふ殿樣でもねえが、それには何ぞ言譯のならねえ失敗があるのかもしれねえぜ。
○　あの才三樣も、今年が厄年でもあらう。
□　二十四五といふ奴は、男の大厄だ。
△　あたら尾花を枯らすのだなあ。

○えゝしやれどころぢやあねえ。掃除ができたら來やれ〳〵。
　ト箒手桶をさげて下手へ入る。合方になり奥より以前の腰元四人出來り障子家體へ向つて。
腰一　千種樣それにおいで遊ばしまするか、
同二　我君樣よりの仰せ付、
同三　御臺樣の御口上で、
四人　ございまする。
千種　（家體の中にて）御臺樣の御口上とな、それへ行つて承りまするでございませう。（ト上手の障子を明ける、と内は總て部屋の模樣、二重へ來り手をつかへて）お取次御太儀、して御臺樣の御口上とは、いかに仰せ出されました。
腰一　先刻よりあなた樣のお願ひ、老女千年樣を以て申入れたるところ、
同二　尾花才三郎役目の落度とは申しながら、我君の御怒り強く、
同三　再三お諫め申せどもお用ゐなく、庭前に於て君の御手討と事極り、
同四　唯今これへ引出し、御成敗との、
四人　儀でございまする。

千種　すりや、いよ〳〵死罪と極りましたか。

腰一　さるによつて御臺樣の仰せには、千種の方より願ひの趣き殊勝なる思召しを感じたまひ、

同二　暫く猶豫のその中に經文讀誦致せよと、仰せ出されましてござりまする。

千種　はつ、有難きその仰せ、生死不定の世の中なれば、我人ともに果敢ない身の上、定業とは申しながら、今を盛りの尾花才三、散り行く命も過去の因緣、せめて未來の土產にもと觀音菩薩の功力によつて成佛得脫致させんと、願ひ出しがお聞濟みの上からは、時刻を待つて讀誦せん。それなる尊像經卷諸共、これへ持つて來や。

四人　かしこまりました。

ト經机に載つたる經卷尊像をよき所へなほす、千種の方はちり手水をして經卷をいたゞく、と上手にて、大聲の聲にて「歩め」と聲し、以前の近習二人して才三を引き立て、後より丹下附添ひ出來る。

近習　下にをらう。

ト以前の下郎めい〳〵土俵を擔ぎ、菖蒲革の侍手桶を持ち出來る、丹下土壇の指圖をし思入あつて、

丹下　千種の方には、是においでなされましたか。御覽の通り尾花才三郎は死罪と極り、見る影もないこの體相、何と無慘な狀ではござらぬか。

千種　不慮の議に就き果敢ない身の上、一倍不便に思ふ故、御臺樣へお願ひ申し、せめて未來の土産にもと御經讀誦いたしまする。

丹下　へえゝ、それは御奇特、然し此の期になつて此方樣が經文を讀まれても、何の爲めになりませう。譬に申す牛に經文無益なこと、いらざるお願ひお止まりなされいサ。

千種　丹下殿控へめされ、無益と申すはこなたの雜言、御臺樣の仰せによつて、普門品をさづくるに止まれとは誰人が申しました。

丹下　さあ、それは。

千種　常ならぬ御臺樣の仰せなれば聞捨てならぬ今の一言、御臺樣へ申上げきつと事を正しませうか。

丹下　さ、それは、

千種　人の愁ひを悦びなさるか。

丹下　さうではなけれど、

千種　なければ讀誦の批判なさるか。

丹下　なか〳〵左樣な、

千種　左なくば言譯、

丹下　さあ、

兩人　さあ〳〵。

千種　言譯なければこの座をとく〳〵、

皆々　お立ちなされい（トきつといふ。丹下こなしあつて）

丹下　でも繩附をこのまゝに、

千種　科人なれば讀誦濟むまで此方へ、預かる上は氣遣ひなし、下部を引連れ早くお次へお立ちなされ。

丹下　（ぐつとつまつて）然らば科人お預け申す。是を思へば才三殿、死花の咲く果報者羨しいと言ひたいが、忌はしいこの繩目、不淨者のその傍にべん〴〵とゐようより、下部どもは身について參れ。

中間　心得ました。

丹下　然らば科人は、千種樣繩附のまゝお渡し申す。

千種　御念に及ばぬ。

丹下　どりや休息致すであらうわえ（ト丹下先に中間附いて入る。）

腰一　邪非道の望月丹下も、其理に服してこそ〳〵と立退きますれば、

同二　寸善尺魔のない中に、お經文を讀誦あつて、才三樣の未來の迷ひ、

同三　お晴らしなされてあげましたら、其の悦びはいかばかり、
同四　名僧智識の引導より、尊いことで、
四人　ござりませう。
千種　これにて普門品を唱へまするであらうわいなあ。
腰一　左樣なれば私共は、その由を御臺樣へ、
千種　御苦勞ながら、
皆々　後ほど御目にかゝりませう。
ト腰元四人奥へ入る。千種の方あたりを見廻し經卷を取つて、
千種　實に果敢ないは人の命、露霜よりもたもちがたなし、
才三　明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半の暴風もこの身にあたる私へ、お經文をお授けなされて下さるとは、有難い結緣と存じまする。
千種　武士の耻あるものと思ひなば、最期に未練はあるまじきが、煩惱の絆に迷ひ、見苦しき死を遂げんこと末代の耻辱、さるによつて普門品の威德を以て未來永劫成佛なされや。
才三　こは忝きその御詞、死するに未練はござらねども、我君の御怒りによつて御手討に相なります

千種　れば不忠の汚名、せめてのお慈悲お情には、切腹仰せつけられなば此身の本懐、かくまで厚きこゝ
なた樣のお情を以て、この儀御執成下さらばこの世の望み更になし、何卒御聞濟み下されうや。
尤もなる願ひなれど、死するを執成す謂なし、とてものことに助命を願ひて歸り花、世を忍ぶお
心はないかいなう。
才三　いつたん罪に極まる上は、助命を願ふ未練はござらぬ。
千種　さればのこと、こなたに未練がないにもせよ、未練を殘すものがある。
才三　そりや誰人か、
千種　外でもない、この千種私ぢやわいなう。
才三　何と（ト思入。）
千種　さあ、觀音經の終らぬ中死急ぎをなされずとも、まあこゝへ來てお經を受けたがよいわいなう。
才三　やはりこのまゝ、これにて聽聞仕らん。
千種（經卷を持つて、）「妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五」、お前は二十四、
才三　や（ト思入。）
千種（また經をしやんと持ちて、）「爾時無盡意菩薩卽從座起偏袒右肩合掌向佛」、

ト經を讀みながら、だん〳〵土壇の中へ入る、是にて才三だん〳〵押されて土壇の外へ出る。千種これに構はず附廻しのやうに舞臺の中央へ來る。才三これを不思議に思ひ、

才三　千種樣には、こは何事をなされまするぞ。

千種　(經を止めて)何事とは胴慾な、日頃から戀したれど儘ならぬ身の情なさ、空に月日を送るうちお前樣には不慮の御最期、とても逢はれぬことなれど、御臺樣へお願ひ申し、觀音經を授けんと言ふたはみんな僞り事、人目を拂ふ上からは、お命を永へてお屋敷を立退き、夫婦になつて下さんせいなあ(ト碎けたる思入にていふ、才三こなしあつて、)

才三　さうとは知らず死ぬる今際に、佛道の教を受けんと思ひのほか、言語に絶えしその詞、狂氣の沙汰か但し又、それがしを嘲弄めさるお心か。

千種　勿體ない、お主樣は兎も角も、觀音樣を欺いてもあなたに逢うて本心が明かしたいばつかりに、

才三　聞くもなか〳〵けがらはしい。そもこなた樣は賤しき身でありながら、殿樣の御不便を蒙むり朝暮の活計、その御恩を忘るゝのみか罪ある我へ戀慕をしかけ、なほ〳〵罪を重うせんと、こりや何者にか頼まれしか、縛の身でないことなら不義の大罪殿へ注進致さんに、今にも死ぬる某が見のがすは寸志の情、この後とても心を改め、我君を御大切にいたさねば、天罰其身に報いまする

ぞ、ちえゝ見下げ果てたる不所存者、情ないお人ぢやなあ。

トきつといふ、千種は耻入りたるこなしにてうつむく。此時四つの時計鳴る、中間及び丹下いできたりて、

丹下　今うつ時計は已の上刻、千種樣の御用向も終うなば、土壇の中へ歩まつせえ。

才三　疾より覺悟の尾花才三、何時なりとも早く死刑に行はれよ。

丹下　おゝよい覺悟だ。科人を引きすえい。

中間　はあゝ（トオ三を元の所へ引立てろ、丹下あたりを見廻す。）下にをらう。

丹下　さあこれからは身共が役目、死罪の場所へ女は無用、千種樣には最早用事もござるまい。奥殿へお越しなせえ。

千種　そのお指圖なら要らぬ世話、申し殘せしこともあり、その一段聞き切るまでは御臺樣へお答へがならぬわいなあ。

才三　あいや、その儀は某一言半句の御返答は仕らぬ。唯心にかゝるは殿樣の御身の上。千種の方には君のお傍へ、少しも早く。

千種　斯くまで忠義なこなさんを、刀の銹にかけるとは、あたら花を散らすのぢやなあ。

ト千種の方は思入あつて奥へ入る。才三眼を閉ぢて覺悟の思入、下手より前の近習二人出來る。

伴藏　丹下殿には刻限違はず、目張りの御役目御苦勞千萬、

曳六　それがしも死罪の場所へ罷出しは、朋友よりの誼、御前よしなに、

兩人　お執成し下されい。

丹下　各々方は身共次第、死罪と極まる才三殿、今改めて申すではござらぬが、朋友の某なれば申聞けん、罪ほろぼしだよく聞かつせえ。元來貴殿は親御の權威を鼻にかけ、第一家中の者を眼下に見下し、蔑にいたされたを今思ひあたつたであらう。

伴藏　身共などは尾髭の塵を取らぬ故、さして出世は致さねども、此の身は安泰といふものだ。

曳六　奥女中へ取入つて、いゝごま第一の不忠のお手前、とう〳〵仕舞ひが縛り首。

丹下　はて、天道は正直、惡いことは出來ぬものだ、むゝはゝゝ（ト嘲笑ふ。）

桂之（上手障子の内にて）やあ、かしましい、丹下控へい。

丹下　はつ（ト驚き控へる。障子明くと小姓二人を從へて桂之助ゐる。）才三郎をお手討の用意申付置きましてござりまする。

桂之　丹下、その方は文武兩道は申すに及ばず、諸事萬端の掛引人に勝れて才あるもの、さるによつて

丹下　予が心にも適ひし故、傍近く召使ふが、嘸満足であらうな。
桂之　それに引きかへ、才三めはさして功なき愚者、助命致すも無益の者、
丹下　御意の通り功なき者を御扶助遊ばさるゝは無益の至り、彼等如きを則ち祿盗人とか申すのでがな
　ござりませう。
桂之　いかさま、さうであらう。
丹下　これなる才三亡命の上は、我君樣へお願ひがござりまする。何卒御聞濟み下されうや。
桂之　其方の願ひとあらば、何事なりともかなへくれん。
丹下　先以て大慶に存じ奉る。そのお願ひと申しまするは餘の儀でござらぬ。唯今彼れが相果てます
　れば、毎朝のお髪結の儀は、これにをりまする田川伴藏、鳴子曳六の兩人へ仰せ付けられ下さり
　ませう。
桂之　其方が推擧なれば苦しうない。順役申し付けるぞ。
丹下　はつ、こは有難き仕合せ。御兩所我君の御諚嘸御満足でござらうの。
伴藏　貴殿の御推擧を以て、身不肖なる我々へ右のお役目仰せ付けられ、

曳六　此の身の面目、冇難う存じ奉りまする。
丹下　さあ御兩所、我君の御許容ある上は重役方へお役目披露、少しも早く此の場を退出、
作藏　はつ、左樣ござらば我君樣、
曳六　丹下どの、
兩人　御前よろしう（ト兩人下手へ入る。丹下思入あつて）
丹下　いざ我君、御猶豫あつては臣下の者、他聞の憚り、以後の政事が相なりますまい。才三如き不忠の輩お手討に遊ばされしとて、不仁の君と嘲りもござるまい、片時も早く御手討に遊ばされませう。
桂之（舞臺へおり才三の傍へ行き、思入あつて）こりや才三、予が寵愛致せしをば、自分の才智と心得、物に傘ぶり日每の增長、あまつさへ唯今の落度免れぬところ、その仔細は家に仇なす汝が相格、未然を察する某なれば、予が手にかくる觀念いたせ。
才三　はつ、大罪を犯せし才三郎、いかなる刑に行はるゝとも憎むべき謂なし、不肖なる某が勿體なくも殿樣のお手にかゝるは身の仕合せ、さはさりながら今年まで御扶助を受けし御恩も送らず、相果てまするが心外に存じます。

桂之　やあ、この期に及んで忠義だて、聞く耳持たぬ覺悟なせ。
才三　疾より覺悟仕つてござりまする。
丹下　はていゝざまだ。やい不忠者の尾花才三、自體汝らが日頃からいけつしらけたしやつ面をひけらかす故、女子供が附廻すをよい事に心得、そは附いてをる故に今日のやうな大事が出來いたす。それも身共がいらぬ世話、はてさて笑止千萬（ト桂之助の躊躇ふを見て）さ、我君、御猶豫あらず、新刀のお試し。
ト桂之助頷き白鞘を抜き才三の眼前へ突きつける、才三首をさし出し觀念の思ひ入、
桂之　覺悟はよいか。南無阿彌陀佛、
ト言ひざま丹下の首を打落し、返す刀にて才三の縛を解く、才三心得ぬこなしにて、
才三　これは、
桂之　是にて成敗相濟んだ。兩人の者、早まるれ、
ト千種、小牧、奥にて『はあゝ』と返事して出來る、才三こなしあつて、
才三　合點行かざる我君の御賢慮、罪ある某を御手討になさるべきを、縛ばかり切り解き、助命下さる其の仔細は、

桂之　まつ斯く爲すも、勸善懲惡、
才三　ちえヽ有難うござりまする。
千種　もはやお許しある上は、
小牧　御安堵なされ、才三殿、

ト千種才三へ大小を渡す、才三兩腰をとる。

桂之　予が額へ疵つけしを落度なりと、すでに死刑に行ふべき旨、嘸不仁なる某と恨みつらん、其の儀も承知いたせしかど、これ幸ひと繩うつて罪科脫れず、斯く庭前へ引出せしは仔細あつてのことぢやわえ。
才三　して其仔細は何のやうな儀でござりまするな。
桂之　才三郎、近う。
才三　はつ（ト桂之助の傍近く寄る。）
桂之　その仔細別儀でない、今曉七つ時そちが親六郎左衞門が預りおく花形の茶入、寳藏へ秘めおきしを奪ひ取つたる曲者あり、これまさしく此程追放なせし筑田喜藏が輩の所業なれども、この事表だつて詮議いたせば家の瑕瑾、事荒だてなば其の品の、知れざることもあらんと存じ、兎や角せ

んと思ふ中、そちが僅少の落度を言ひたて、罪に落して追放致す、何卒暫らく汚名を受け、忍び忍びに寶の詮議、役目と申すは此の儀ぢやわい。

才三　すりや、父六郎左衛門がお預かりの花形の茶入紛失とな、えゝゝゝ（トびつくりする。）

六郎（上手より出來りて、）我君これに渡らせたまふか、恐れながら昨夜お夜詰引けて後、もはや七つに程近き故、愛宕山圓福寺へ參詣なして歸る途中の練塀外、怪しき曲者松ヶ枝を傳はりおりるを捉へしが宵の小雨にぬかり道、思はずすべりし隙を伺ひ、行衛知れず曲者を取逃したる身どもの落度、なれども此事他聞を憚り、何氣なき體にもてなし、殿樣へまづかくと申上ぐれば有難くも、汝に詮議いたせよとの御諚なるぞ。

才三　はつ未だ若年未熟なる某なれど、大切なる御寶詮議の役目を蒙むる上は千辛萬苦なすとても、尋ね出し奉らん。

六郎　その花形の茶入に添へたる包みは鴛鴦布、色情に溺れ不淨をそゝぐ其時には、必ず凶事ある試しもあれば、若年の其方へ心得の爲め申傳へん。

桂之　いや、六郎左衛門、若年の才三なれども、かねて色情に溺れぬ心底、篤と見屆けおいたれば、心遣ひには及ばぬぞ。

才三　すりや、某の心底を、
千種　今こそ明かす手段と申すは、死ぬる今際のこなた樣へ普門品に事寄せて、不義をしかけしこの千種、恥しめられしまごゝろは、あつぱれ君の御眼力、
小牧　私とても同じこと、お指圖受けて恥しい、戀に事寄せあられもない、あのゝものゝと申しましたを必ず笑うて下さりまするな。
才三　さばかり深き殿樣の思召しとも存じませず、千種殿、小牧殿、無禮の雜言御用捨下さりませ。
六郎　斯くまで深き君の御賢慮、これより直に御暇賜はり、落着くところは其の以前召使つたる若徒作平、唯今にては柴井町に酒店を出しをるとのこと、彼れを賴つて身を忍び、寶の在所を詮議いたせ。
才三　かしこまつてござりまする。然らば、これより、
ト桂之助思ひ入れ、近習に持たせし手箱の中より金を出して、小牧に渡し、
桂之　茶入求むる用意の金子（トオ三へ渡す。）
才三　重ね〳〵の御惠み、左樣ござれば御前樣、千種樣にも御機嫌よろしう、
六郎　悴、もはやお暇いたすからは、暫しの間町家の住ゐ必ず怠ること勿れ。

才三　長居はおそれ、あなたも堅固で、

六郎　そちも達者で（ト苦痛のこなしにて名殘りををしむ。）

桂之　六郎左衞門一世の別れ、忰才三へ暇乞ひの盃しやれ、

六郎　なに、一世の別れとは、

桂之（六郎左衞門をとくと見て）六郎左衞門、そちや切腹いたしをらうな。

才三　なんと御意遊ばしまする。

桂之　我心中を見ぬくこと、ふゝゝゝらそこの中を見るが如し、始終の樣子を察せしところ、眼中のどよみ、五音の狂ひ、呼吸の息の合はざるは汝切腹なせしに相違なし、

六郎　むゝ（ト思ひ入あつて）おどろき入つたる御眼力、いかにも茶入失ひし申譯には、まつ此の通り、ト肌をぬぐ、襦袢血に染み、白布にて腹帶をしてゐる。才三びつくり傍へ寄つて、

才三　すりや親人には、申譯のその爲めに御切腹なされしか、ほゝほい。

六郎　縛り首にも及ぶべきところ、切腹なすは武士の本懐、我に必殘さずとも紛失の茶入尋ね求めて歸參なし、再び尾花の榮えを見せよ、草葉の影にて相待ちをるぞよ。

才三　茶入紛失なしたる故、親人にもこの生害、この盜賊は父の敵、日ならず詮議し出して御無念を晴

らし申さん。

六郎 出かした〳〵。

才三 われも門出に別れの盃、

ト手水鉢の柄杓を取つて水を汲み、六郎左衞門に出す。六郎左衞門苦しげに水をいつぱい呑み、才三、残りをぐつと呑みほし愁ひの思入、此中桂之助、小牧、千種この態を見て愁ひの思入、六郎左衞門こ、なしあつて、

六郎 最早近づく此身の知死期、息ある中に門出々々、

才三 はつ（ト身繕ひして行きかゝろ、下の方より伴藏つか〳〵と出て、）

伴藏 死罪と極まる才三郎の命を助け、紛失なしたる花形の茶入を詮議の役、はてゆるがせな御成敗。

桂之 他聞を憚る一大事、それ（ト才三へ目くばせする。）

才三 （心得て）大事を知つたる田川伴藏、動くまいぞ。

伴藏 何をこしやくな（トかゝろ、この時曳六伺ひ寄つて、）

曳六 才三、觀念、（ト切つてかゝるを立廻つて兩人をぐつと引き敷く。）

桂之 其奴ら兩人は、喜藏丹下へ加擔のもの、

兩人　何を（ト跳れ返す、又立廻つてよきほどに、）

桂之　斬つてしまへ、

才三　はつ（ト兩人を斬倒す。）

桂之　見事、

ト六郎左衞門につたりと思入あつてがつくりとなる。才三寄らうとして顔をそむけ、刀の血を拭ふ。千種は感心のこなし、小牧才三へ見惚るゝ、千種小牧と入替つて文庫を持たせる。と、時の鐘、誂への小鼓にて、双方よろしく、ひやうし幕。と幕引附けると直に尻明けに引返す。

（柴井町伊丹屋の場）——本舞臺三間の間常足の二重、塗家作り、軒口に伊丹屋と印したる紺暖簾、やへ八重桔梗の紋付きあり。正面暖簾口、下手酒樽の書割、一升桝、一合桝其の他漏斗などつぎ場の道具、いつもの所門口。下手黒板塀、石の重りをしたる用水桶、兩社大神宮と印したる祭禮の提灯を立てあり、總て酒屋の店がゝり。神明の祭りの態。聖天の鳴物にて幕明く。と丁稚三太徳利に酒を計つてゐる、中間、寺の下男、長屋の嚊などがや〳〵言ひながら買ひ物をしてゐる。

三太　もし〳〵お上さん、澤庵は賣りきつてしまつた。

嗅　え丶この小僧としたことが、それだから早くおくれといふのに、
三太　お前ばかりのお客ぢやあるめえし、しづかにしてくんねえ。
嗅　鼻つたらしめ、口ばつかりまめな奴だよ。
○　これ〳〵丁稚、手前ばかりで手が廻るまい、こ丶の家には番頭も主人もならぬか。
三太　番頭さんは出番で、若い者は屋敷廻り、
□　そんなら、評判の内儀に店へ出て貰へ。
△　さうだ〳〵お上さんの顔でも見りやあ、いくら待しても堪忍してやるから、早く呼べといふに、
三太　お前もい丶氣な人だ。お上さんの顔を見よう〳〵と思つて、その油揚を狐にでも取られるだらう
△　晝日中狐がゐるものかえ、
　　トこの時さし金附の鳶一羽おり來り、寺男の持つて來た岡持の油揚をさらつて行く。
皆々　そりや〳〵鳶が、
△　え丶さらやあがつたな、どうするか見やあがれ（ト空を見上げて下手へ入る。）
◎　さあ、早く一合くんねえ。
三太　あい〳〵（ト德利をとつて酒をつぐ。）

◯ つぎを氣を附けてよ。
三太 下素ばつた人だ。
○ こゝの家へ來ると、咽喉がぐび〳〵する、五勺ばかりはずまう。
○ ときにお中間さま方も、こゝの家へ酒を買ひに來さつしやるが上さんは美しい容貌でござるの。
□ 左樣々々、新橋きつての評判さ、それで私らも愛宕下からひやかしながら來たのさ。
○ ほんに男といふものは御苦勞なことだなう、こゝのお上さんは元は吉原の井筒屋の花魁で、勝山
嗅 とかいふ全盛の太夫さんぢや。
◎ そんなら仲の町ばりと見えるの（ト茶碗酒を呑む。）
嗅 小僧さん、こんなにお客を待たさずとも、こゝへお上さんをよんで皆さんに見せてお上げな。
三太 神明樣の見せ物ぢやああるめえし、よく見たがる人達だの。おい〳〵お上さん、ちよつと見世へ
來ておくんなさい、お上さん〳〵。
しづ あい〳〵今行くわいなあ（ト奥よりおしづ世話女房の扮裝にて糸卷の糸を卷きながら出來る。と皆々お
しづに見とれ〻こなし）ほんにお前一人で困つたであらう、お剩錢でも上げるのかえ。
三太 何さ、お剩錢ぢやあござりません、こゝへ來てゐる折公がお前さんの顏が見たいといふから、そ

れでお呼び申したのさ。

しづ　これはしたり、お客様へむかつてどうしたものぢや、皆さん御免なされませ。身體ばかり大きうても腕白者で困ります。

ロ　何さ、子供だもの、しようがない。然しにこりと笑つた所を見りやあ腹も立たねえのよ。

しづ　ほんにまあ、御冗談ばつかり、おほゝゝゝ。

△　さあ〳〵いつまで見ても飽きはない。

皆々　先樣はお代り〳〵。

三太　代はお戻り〳〵。

ト皆々より錢をとつて錢箱へ投げ、德利岡持などを提げ、捨ゼリフにてわや〳〵下手へ入る。

しづ　三太やそなたもよう働きやるが、お客でもかまはず氣にあたるやうなことばかり言うてからに、その度々に冷汗をかくわいの。

三太　なんの氣の弱いお上さんだ、笑つてゐると直に貸しになるから、何でも現金に賣るのが、一番勝だぜ。

しづ　そこらはだいぶ賢者ぢやと褒めにやならぬわいなあ。そりやさうと今のお客様に帳面へ附けるの

はないかや。

三太 何さ、ありやあみんな現金ばかりさ。それといふのもね、お前さんの顔が見たいと言つて、愛宕下、西の久保、鐵砲洲からも（ト手を鼻の先へ出す。）

しづ あゝ、びつくりする。

三太 どん〳〵買ひに來ますぜ、どうでもお前樣はこちの家の福の神だねえ。

しづ そなたの言やる通り、福の神なら苦勞をせぬが、私が廓を出てもまだまあ身請の殘金が濟まぬので、こちの旦那もいろ〳〵と心遣ひばかりある所へ、わたしの弟の才三郎が浪人なして掛り人、今朝用足しに行きやつたが、もう今に見える時分、お茶の仕度でもしておかうかいの。

三太 そりやあ私にも出來るが、今言はんしたお前さんの事で金が濟まないから、旦那さんも案じると言はんすが、家にお金がなくてもひとりでに澤山できることがあるぞや。

しづ 何ぢやえ、澤山お金ができるとはえ。

三太 ほしけりやあ私が出してやらう、待たんせ〳〵（トあちこち思ひ入、おしづも不思議に思ひ、）

しづ えゝ、何をしやるやら阿房なことをして叱られまいぞえ。えゝもう辛氣な、お茶の仕度でもしませうか。

ト おしづ奥へ入る。三太は手桶の柄杓を持つて門口の用水の傍へ行き、

三太　聞き及ぶ中山寺の觀世音、無間の鐘をつく時は、海川へはまる所のお金が集まるとのこと、鐘にもせよ、石にもせよ、桶にもしろ、志すところは無間の鐘、此の世はひるにせめられてもだんないく大事ない。

ト 無暗に用水桶の石をたゝきながら空を見上げて思ひ入。屋臺ばやしになりて、伊丹屋十兵衞千木箱と泥生姜をさげ、佐野松屋淸兵衞女郎屋の亭主、女衒の源六附いて出て來る。

淸兵　もしくそこへ行きなさるは、伊丹屋十兵衞さんではないか。

十兵　（振返つて見て）これは誰かと思つたら、佐野松屋の御亭主に判人の源六さん、お前樣は神明樣へ御參詣でござりますか。

淸兵　どうして、そんな悠暢なことぢやない、お前の所へ來たのさ。

源六　丁度いゝ所で逢ひました、こゝは門中、

十兵　まあ、家へ行つて話しませう。

淸兵　そんなら十兵衞さん。

十兵　さあ、おいでなせえ。

十兵　これ三太手前何をしてゐるのだ、お客樣がおいでなさるに、家へ入つてお茶でも汲まねえか。

三太　私あいま無間の鐘を撞くところだ。

十兵　えゝべらぼうめ、家へ入れといふに、

三太　だんない〳〵大事ない。

十兵　何をいふのだ。

ト叱りつける。此時空より以前の鳶飛來つて油揚を三四枚ばら〳〵と落とし。淸兵衞、源六の頭上へ落ちる、三太あわてゝ、

三太　そりやこそ金だ〳〵（ト拾ふ。）

兩人　なに、金とは、

ト兩人きよろ〳〵してあたりを見廻す。源六すべつて油揚をとつて不思議のこなし、十兵衞は呆れて、

十兵　もし〳〵その油揚は鳶が落したと見えます、羽織も頭も油だらけ、

兩人　違えねえ、こりやあ油揚だ。

十兵　まあ〳〵家へお入りなせえ。（トこれにて兩人身體を撫で〳〵家へ入る。）その油揚を拾つて何にする、

捨てゝしまへ。
三太　お上さんにやらうと思つたが、こりやあ油揚だから狐に化かされたか。
十兵　しつかりしろ（ト脊をたゝく。）
三太　あい、しつかりした（トしやんとする。）
十兵　あゝぬけ作め（ト引寄せて囁く。）
三太　おつとしよ。
　ト下の方へ入る。十兵衛家へ入り門口をしめる。
十兵　おいでそう〳〵鳶がさらつた油揚で、お羽織もどこもかしこも汚れました。
清兵　かう十兵衛様、羽織どころか私が顔をよごしちやあ濟みますめえ、今考へて見りやあやつぱり鳶にさらはれたやうなものだ。
源六　もし〳〵旦那、そのお腹立は御尤もでござります。まあ私も參りましたからは、あなたのお顔の立つやうに談じませう。
　ト此時奥よりおしづ小土瓶に茶碗二つ、口取の菓子鉢を持つて出で來り、
しづ　源六さん、親方樣も御同道でようござんした。

源六　あゝ花魁ぢやあねえ、お上さん、すつぱりと廓詞がぬけましたね。

しづ　はい、親方さんまだ御挨拶もいたしませぬ、どなた樣も御機嫌ようおいでなされますするか。その節は何かとお世話になりまして、今に御恩は忘れませぬ。まあお茶一つ、

清兵　あい〳〵。

トおしづ兩人に茶を出す、兩人とつて、源六思ひ入あつて、

源六　ときに十兵衞さん、今日はちつと野暮な事を言ひに來ました。ほかのことでもない、こゝにゐる勝山さんの身の代、聞けばお前の主人の家の娘、是非身請がしたいといふ故、忠義な事實めいな人だと思つたから、この親方樣へもだん〳〵お願ひ申して、二百兩の所を百兩金取つて殘金百兩貸して上たも、こりやあほんの男づく達引といふものでござりますぜ。かう今までべん〳〵と引張るわけぢやあありさうもねえもんだ。お前方は人を馬鹿にしなさるのかえ。（ト角目だつていふ。）

十兵　（思入あつて）もし源六さん、お話しづくのことだから、御損亡をかけるやうな私でもござりませぬ、商人の店頭、私も大なり小なり暖簾をかけてゐる眞面目な酒商賣、不義理を致すやうなことは天道樣をかけて致すことぢやあござりませぬ。問屋の仕切り何やかや手延びになつてお氣の毒でござります。

ト言譯に困るこなし、おしづ以前よりふさいだる思入あつて、

しづ　親方の手前を思へばこそ、源六さんもかれこれとおつしやるものゝ、實にこちらでも朝夕苦勞致してをりまするこど、どうぞお前のおとりなしでいつ幾日といふ手堅いことにいたしましたら私の心積りもござりまする、な、親方さんえ。

清兵　（煙管の吹殼をたゝきながら）源六をこゝへおいて言ふぢやあねえが、奉公人を女護の島ほど抱へておく佐野松屋清兵衞、今まで勝山がことに何一つ不足もなし、第一勤めがいゝから、とてものことに好いた所へ、やるのが双方よからうとおもふから、十兵衞さんに身請をさして丁度半年、私やあかう見えても涙もろいが、又錢金のことなら用捨も勘辨もねえことは、此の勝山がよく知つてゐる。その又おれを不義理にするとは、勝山と云ひ源六も目先の見えねえものぢやあねえか。

源六　十兵衞樣、あの通り親方の言はつしやることを、無理か無理でねえか默つてゐちやあ分からねえわな。此の百兩の金も、相手が十兵衞だ、石に判だと思ふから私が請合つて貸して上げた百兩、今日の明日のとべんべんだらり、旦那へ對して私が中途でやりくつたやうに思はれて、痛くねえ腹を探られるやうなものだから、旦那をお連れ申して野暮に大きな聲をしても、白い黒いをわけにやならねえ。

十兵 だん〴〵のび〴〵になつたのは申譯もない御無沙汰、かれこれ申したところが御承知もなりにくうござりませうから、どうぞ當月晦日まで、

清兵 いやその晦日も十四日も聞き飽きた、安請合に請合つたとて大まい百兩といふ金がさうちよつくらにできるものかな。吉原から小三里の道を歩いて來たからは、十兵衛様手短にかうしやせう。お前の金ができるまで、勝山を家へ預からう。金ができたらいつ何時でも駕籠を持つて迎ひに來なせえ。それが手附かずの話だ。

源六 なるほど、こりやあ近道だ。十兵衛さんその積りにしやせう、それがいゝ〳〵。

ト源六立ちかゝるを十兵衛思入、おしづ兩人の間へ入り思入あつて、

しづ もし〳〵そのやうにおつしやらずと、又御相談のいたしやうもござりまする。親方さん、源六さん、廓へ行けなら參りませうが、どうも今とおつしやつては、なあ十兵衛さん。

十兵 そりやあもう耳を揃へて百兩の、金がなければ連れて行かうとおつしやるが、そう自由にもなりますまい、

清兵 そりや又どうして、

源六 何故ならない。

十兵　さればでござりまする。身の代金は二百兩、内金百兩お渡し申してござりますぜ。
清兵　その百兩取つてあるから、勝山をこゝへよこしたではないか。
十兵　さゝそれぢやによつて、十兵衛がしつかりと預かりました。
源六　して後金の百兩をべん〳〵だらりと引つぱるから、玉を連れて返るのに、それでもこつちが過りか。
十兵　過りどころか、得手勝手といふものだ。
兩人　そりや又何故に、
十兵　玉を引上げ、渡した金の百兩は、
兩人　や、
十兵　清兵衛さん、あまり勝手がすぎませうぜ。
源六　もし〳〵親方、こいつあだいぶ手重くからんでまゐりますぜ。
清兵　源六、何もかも胸にある、百兩位はほしきやあ今でも返してやらあ。
源六　そんなら金子を、
清兵　佐野松屋の清兵衛、百や二百の端金はちよつと出るにも御所持だわ。（ト胴巻より包金を出し、）さ、

これを取つたら言分あるまい。
十兵　ありますね。
兩人　まだあるかえ。
十兵　半年あまりの雜用ざらひ、お前の出ようがそでないから耳を揃へて貰ひたい。
清兵　どういへばかういふと、横つたほしに出かけたな。
十兵　何もよこしまは申しません、あまりと言へば因業故、
源六　なに因業だえ、因業でも巾着でも取らにやあならねえ身請の金、耳を揃へて請取らにやあ、代官所へ引立て、砂利を摑んで恐れながらの根くらべ、
清兵　ぐず〳〵言はずと引立てろ。
源六　さあ、勝山さん、歩みなせえ（トおしづへ手をかけるを十兵衞へだてゝ）
十兵　さうはならねえ。
兩人　ならずば金か、
十兵　さあ、
兩人　引立てようか、

十兵　さあ、それは、

兩人　金を濟すか、

十兵　さあ、

三人　さあ〳〵、

ト詰めよつておしづを引立てにかゝる。この以前より尾花才三郎下手より出で門口に伺ひゐて、この時づか〳〵と内へ入り源六を突廻し、清兵衞をへだてゝ、

才三　其方達は内儀を捉へて、こりや何とする。

源六　（呆れて）見りやあお若いお侍、

清兵　何とするとは知れたこと、貸した金の濟方に私が所へ連れて行くのさ。

源六　それを不承と思ふなら、百兩といふ金を立なせえ、よもやお金はむづかしさうだ。

清兵　大小さしたお侍、めつたに口出しはできますまい。

才三　（思入あつて）いかにも、金子遣はさう。

兩人　そりやあ、まことに、

才三　後とも言はず、唯今呉れう。

兩人　え丶（ト びつくりする。才三懷中より包金を出し、）

才三　掛矢形の封印なれば、中改めて受取りやれ。

清兵　まことに百兩。見ず知らずのあなたからは受取りにくい、なう源六、

源六　左樣々々、十兵衞さんも男なら百兩出して貰ひませう。

才三　こりや町人、身が所持の金子は不通と申すか。

兩人　さうではなけれど、

才三　然らば金子受取つて、宛名は十兵衞、請取が申受けたい。

清兵　さうおつしやることならば、唯今請取を認めませう、それ源六（ト矢立を渡す、源六紙入より紙を出しさら／＼と認め清兵衞へ渡す、清兵衞讀んで紙入より實印を出し、三判捺して、）へい、身請の殘金百兩の請取お渡し申します。これで金子は濟みました（ト金を懷中する。）

源六　長居はおそれ、旦那急いで汐溜から船としませう。

清兵　むら田がおれの馴染だ、源六行かうか。

源六　皆さんおやかましうござりました（ト兩人門口へ出る。）

才三　兩人待て（ト思入あつていふ。）

源六　へい。御用でもござりますかえ。
才三　殘金百兩相渡せば、此方は身請の客ぢやぞ。
兩人　へい。
才三　その身請の客の店頭で、遊女屋渡世なすものが立騷いで濟まうと思ふか。
兩人　へい。
才三　そのまゝにては歸さぬぞ（トきつといふ。）
兩人　えゝ（トびつくりしてへたる。）
才三　と申す所なれど、言はゞ目出度き身請故、このまゝに差し許すぞ。
兩人　それはけつこうな思召し、
才三　えゝきり〳〵とうせをらう。
兩人　へい〳〵〳〵（トあわてゝ門口へ出で、）
清兵　やれ〳〵嬉しや、得手かういふ終ひは酷い目に逢ふものだ。それをこのまゝ打たれもせず、
源六　濡手で百兩しめるとは、もし旦那お禮がしつかりござりませうね。
清兵　此の禮はお定まり、五分の禮だ。

源六　いや五分とは有難い。
清兵　その禮はこれだ（ト以前鳶のさらひし油揚をつまんで出す。）
源兵　この油揚が禮とは、
清兵　はて、五分（昆布）に油揚といふわ、
源六　えゝ、油揚とは一兩かえ、あんまりひどいね。
清兵　それぢやあいつそ何にもやらず、五分たゞ（昆布鱈）とはどうだ。
源六　いや、悪い洒落だ、はゝゝゝ。
ト兩人足早に花道へ入る。十兵衛後を見送りて、
十兵　若旦那、何とお禮を申しませうか、思ひがけない大まいの百兩、あなた樣より拜借致しまして、面目次第もござりませぬ。
しづ　兄弟とはいひながら、今は流浪の才三殿、お前の金を借受けてはどうも私が濟まぬわいな。
才三　姉者人、その心遣ひは御無用になされませ。今更いふに及ばねども、お前が幼いその時に、氏神の祭禮の折から勾引されて苦界の勤め、故主の娘と十兵衛殿身請なしたる姉者人、後金の催促に詮方盡きたる今日の手詰、見るに忍びず用立てたる百兩は、紛失なしたる寶の茶入詮議の爲めの

用意金、まだ手がゝりのあるではなし、その心遣ひは無用になされませ。

しづ　兄弟の義理を思ひ、その志しは嬉しいが、今にも寳の詮議して在所知れなば金の入用、

才三　それぢやといふて現在の姉者人に二度の勤めがさせられませうか、寳は身のさし合せ、一寸延びれば廣い世界。それがしとても流浪の身の上、殿へお髪を上げたを幸ひに、今より町髪結と姿を替へ、密に寳の詮議をなさん。もし手がゝりのことあらば、その時必ず十兵衞殿、

十兵　其の儀はお氣遣ひ下されますな。私も後金の百兩の心當りのないではございませぬ。其の仔細と申しまするは、元私は大津の生れ、親共は身貧な暮しの黒木賣り、兩親ともに歿りし後弟を連れて御當地へ立越え、私は親旦那樣へ若徒奉公、弟の彦三は材木町の白木屋へ養子に遣はし、私は朋輩どもと口論いたし御暇を願ひしに、有難い親旦那の御助力にて酒屋渡世の身が一身、稼ぎ溜たる百兩にて身請なしたる女房が後金の心當は、以前親どもが召使ひましたる藤助と申す者、唯今にては京都にて相應なる暮しをして、書状の便りもいたしますれば、それへ頼つて百兩の金借用いたす心積り、兩三日の中には上京致さんと存じましたが、直に明朝出立致しませう。これおしづや、明日早く旅立するから、留守を必ず頼むぞや。

しづ　そりやもう家のことは必ず案じなさんすな、然し旅の用意もなければ、明日といふのもあんまり

急で、せめて二三日仕度して暦を選んで立たしやんせいなあ。
十兵　いや〳〵、もし寶の手がゝりが急に知れまいものでもなし、思ひたつたが最上吉日、是非とも明日は早く旅立ち、
才三　そんならどうでも立たつしやりますか。道中無事に戻られるやう、神明様へ參詣して來ませう、（ト下手へ來て）然し、あんまり性急で、なれぬ旅では、
ト此の時奥より三太丸盆に茶碗を三つ載せ持つて出る。
三太　もし、なれた風味の甘酒、祭り祝ひに一つあがらんかえ、（ト三人の前へ出す。）
十兵　おゝよく氣が附いた。一夜酒といふからは、今宵を直に立祝ひ、
しづ　暫しの別れ、奥でゆつくり、
三太　うまいな〳〵。
十兵　三太、汝ものんだか。
三太　お初穗をやらかしました。
十兵　すばやい奴め。（ト思入あつて）ほんに、才三樣へおみやげを、（ト以前の千木箱を出す。）
才三　千木箱は飴でござるか。

しづ　雨では今宵は、
才三　定めし、しつぽり、
十兵　旅の仕度を、
三太　立振舞に、

ト三太十兵衛の前へ顔を出す、十兵衛頭を打つ、才三は門口を明ける。これを木の頭、

才三　降らねばよいが、

トオ三空を見上げ十兵衛頭へ手をあげる。おしづ十兵衛の手を持つて顔をそむける。これをキザミ、

賑やかなる唄にて、よろしく、

ひやうし幕

二幕目　芝片門前文彌内の場

〔役名＝＝座頭文彌、白木屋彦三、坊主小兵衛、筑田鬼藏、髮結才三郎、佐野松屋清兵衛、女衒源六、綿屋の若い者與助、座頭でく市、こぶ市。文彌母おりく、文彌妹お菊、同妹おいち等。〕

（文彌宅の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、所々へ瓦をおきしこけら葺の屋根。正面三尺の佛壇、これ

に鴛鴦布の袱紗打敷にかけあり、此の脇一間反古張りの障子。下手は折廻し鼠壁、上の方葺下しの下家、いつもの所門口。下の方後へよせて裏長家の雪隱。下座の前黒塀、門口に「もみりやうじ鍼治灸點、文彌」といふ木札。總て芝中門前文彌宅の態。こゝに文彌母おりく世話婆の打扮にて綿を摘みゐる。傍に綿屋の若い者與助煙草を喫みゐる。下手に文彌妹おいち素麪櫃の上にて手習をしてゐる。此の見得稽古唄にて幕明く。

りく　もし與助さん、この十袋は明日まで待つて下さりませ。

與助　あい、明日中でようござります。摘賃は此間のと一緒に七百五十持つて來ました。（ト財布より錢を出しておりくに渡す。）

りく　これは有難うござります。

與助　おいち坊、よう手習の精がでますの。

いち　いえ／＼、私や一向精はでませぬわいな。

與助　いや／＼、いつ來て見てもよう精が出ます。

りく　仕合せと手習ひが好きでござります。お恥しいことながら私は手習ひが嫌ひで、一字一點讀めませぬ故せめて子供等には手を書かせたう、姉めも小さい時から仕込みましたお蔭には、人なみに

は書きまする。親の慾目かおいちめも年よりは良うできますやうに思はれます。

與助　できるとも〳〵なか〳〵十歳や十一で、このやうに書くものはない。

りく　有難うござります。これ、與助さんがお褒めなさる、精を出さねばならぬぞや。

いち　あい、よく精を出しますから、どうぞ私にもお金さんのやうなお机買うて下さんせいな。

りく　おゝ、春になつたらよいのを買うてやらうわいの。

ト花道より小兵衞出來り門口へ來て、

小兵　婆アどん、今歸つた、（ト内へ入る。）

りく　何と思ふて歸らしやつた。

小兵　何と思つて歸るものだ、おれが家だから歸つて來たのだ。

りく　あんまりおれが家〳〵といふて下さんすな、こゝの家は文彌の名前、何一つ持つても來ずにあんまり大そうなことを言はしやんすな。

小兵　言はねえでどうするものだ、十年此方子供めらの足手を延ばした其の上に、汝にも暑いめ寒いめさせず、餓じいめをさせねえのは、誰が蔭だと思やあがる。

りく　えゝもおいて下さんせ、そりやこつちで言ふことぢや、賃綿摘んだり人仕事したり、夜の目も寢

ずに精出して、子供を始めこなたまで私が過しておいたのぢやわいな。

小兵　僅少な仕事を鼻にかけて、亭主の箔を剝がしやあがるな。

（ト小兵衞鐵砲笊より秤を出し、これを振上げ打たうとするをおりく留める。）

與助　これはしたりどうしたものだ、若い者ぢやあるめえし、よい年をしてお互ひに夫婦喧嘩は見ともない。もうよいかげんにしなせえな。

りく　いえもう、人樣の笑ひ草になるのが厭でござります故、言ふまいとは思ひますけれど、

小兵　言ひたくなくば何故だまつてゐねえ、この梅干婆アめ。

りく　なにをこの藥鑵親仁め、

與助　これさ〳〵もうよいかげんにしなせえと言ふに、この子が怖がつてゐるわいな、さういつまでも言つてゐられると、私も歸るに歸られねえ。中に入つた不肖に五合買はうから、それで了簡して下さい。

りく　いえ〳〵お前さんにお錢を遣はしましては、濟みませぬわいな。

與助　なにさ、澤山は買はない、酒が五合に肴が二百、兩方でたか〴〵一朱（ト財布より一朱を一つだし、小兵衞の前へおき）これで了簡して下せえ。

小兵　こんなことをなすつちやあお氣の毒でござります。然し折角の思召し、お貰ひ申しておきます。（ト金をいたゞき）婆アどん、中なほりにお角力酒屋へ行つて、何ぞ見つくろつて來て下せえ。

りく　えゝも忙しいのに、よく人を遣つてからに（ト言ひながら味噌漉を持ち行きかける。）

與助　どれ、そこまでいつしよに行かう。

小兵　これは與助さん、とんだ御厄介になりました。

與助　もう喧嘩は止しにしなせえよ（トおりく與助門口へ出て）いや、困つた代物だ。

りく　あれだから喧嘩は絶えませぬ。

與助　尤もなことだ。さあ行きませう。（ト兩人花道へ入る。）

小兵　よくつべこべとしやべりやあがる婆アだ。コレお市燗のできるやうに、奥へ行つて火を起しておいてくれ。

いち　あい〳〵。

ト稽古唄になり、おいち奥へ入る。花道より筑田鬼藏浪人裝にて出來り、

喜藏　文彌といふ座頭の家が小兵衞の家だといふことだが、どうぞ家にゐてくれゝばよいが（ト本舞臺へ來り門口より内を覗き、がらりと明けて、）小兵衞家にゐたか（トづつと入る。）

小兵　喜藏樣か、びつくりした。
喜藏　此間から突當てようと、手前が後を追つて歩いた。
小兵　何ぞ用でもあつてかえ。
喜藏　用も用大用だ。(ト上手へ住ひ) 外でもない、此間手前に賴んだ彼の品は幾何の質に入れたのだ。
小兵　彼の品とは何かえ、お前の盜んだ茶入のことかえ(ト大きな聲でいふ。)
喜藏　あこれ、しづかに言へ。
小兵　あの花形の茶入なら、百兩に置きやした。
喜藏　なに百兩においた、いや太え奴だな。持主に半金渡し、どこの國にか五十兩上借りをする奴があるものか。
小兵　ないとは言はれねえ、こゝにありやす(ト煙草を呑みながら、煙管にて鼻をたゝく。)
喜藏　いゝいけしやあ／＼とした奴だ、どうしてくれう(ト喜藏悔しき思入。)
小兵　どうともお前の勝手にしなせえ、堅氣な者の代物なら僅一分の上借でも言立によりやあ盜人同然それとこれとは違ひやす。而も佐々木の家の重寶、直足の附く代物を承知で質に置くからあ、まさかの時は一緒に行く氣、拔き損やあ首仕事、五十兩ぢやあ安いものだ。

喜藏　すりや、盗物故高をくゝり、上借をしたといふのか。なるほどこれは惡い奴だ。（ト佛壇の袱紗を見て）あの佛壇の打敷は茶入を包んだ袱紗だが、何で家へ殘しておいた。

小兵　あれを明けてやつたところが羽織の紐と同じことで、百にもふめやあしねえ故、そこで婆ァの氣休めに、打敷代りにやつたのさ。

喜藏　流石は年の功だけあつて、百の錢にも拔目はないな。仕方がない、五十兩はきれいに汝にくれてやるが、おれも酒と假宅で此の頃はちやんころなし、改めて十兩ばかり小遣ひを貸してくりやれ。

小兵　そりやあありせえすりやお貸し申しますが、上借をした五十兩は半月ばかりに取られてしまひ、二朱の金にも困る仕宜、丁度幸ひお前を玉に十か二十になる仕事があるが、半口乘つてくんなさらねえか。

喜藏　そりやあ金にせえなることなら。して、その仕事は、

小兵　家の婆ァが盲目めに官位を取つてやりてえと、喰ふものも喰はねえで溜めた金が十か二十、私にかくして出來た樣子、盲目を欺して引出す積りだ。

喜藏　どういふ法でその金を、

小兵　そりやあ私が胸にあります。然しこゝで話しもなるめえ。

喜藏　どこぞで一ぱいやりながら、
小兵　あら筋を話しませう。
喜藏　そんなら小兵衛、
小兵　若旦那、さあ行きませう。
ト稽古唄にて兩人下手へ入る。花道より文彌の姉おきく、島田娘の打扮にて、袋に入りし三弦を抱へ出來る。後より女衒の源六つき出來り、花道にて
源六　もし姐さん、それぢやあお前の家は向うかえ。
きく　はい、あれが私の家でござんすわいな。
源六　揉み療治の看板の出てゐる家だね、よし〳〵後方親方を連れて證文に來ます。
きく　どうぞ只今も申します通り、廓へ行くといふことは文彌にはおかくし下され、お屋敷へ御奉公に參ります積りにおつしやつて下さりませいな。
源六　そりやあ必ず案じなさんな、わつちも親方も俄や茶番が好き故、ちつとは狂言心がありやすから兩刀帶の積りで迎ひに來やす。
きく　左樣なれば、また後程、

源六　面談いたすでござらう（ト肩を張つて堅く言ひ、）おきやあがれ、もう侍になるやつはゝゝゝゝ。

　　ト源六は引返して入る。おきくは舞臺へ來り、

きく　かゝさん、今歸りましたわいな。（ト家へ入る。）

いち　（奥より出來りて）姉さん、今日はお早うござんしたな。

きく　おゝおいち、かゝさんは奥にゐやしやんすか。

いち　いゝえ、かゝさんは父さんのお酒を買ひに行かしやんしたわいな。

きく　すりや父さんが歸らしやんしたとか、えゝも折の惡い、何處にゐやしやんすぞいな。

いち　今までこゝにゐやしやんしたが、見えぬからは又どこぞえ、

きく　どうぞ行つて下さんすればよいが、

　　トおきく案じる思入、合方にておりく味噌漉と徳利をさげ、口小言を言ひながら出來り、門口を明け
　　おきくを小兵衞と思ひて、

りく　さあ、呑みたくば呑んだがよい。（ト肴と徳利を突出す。）

きく　（びつくりして）母さん、私やお酒は嫌ひぢやわいな。

りく　おゝ娘か、ほゝゝゝ、今親父殿といさかうた故、腹立まぎれに見違うたわいの。これおいち親

父殿はどこぞへ行たか。
いち　あい、家にはゐやしやんせぬわいな。
りく　どうぞもう歸つてくれねばよいが（ト おきくに向ひ）それはさうと、今日はどうであつたの。
きく　あい、悦んで下さんせ、今日はいつもよりお客も多く、さる旦那樣から御祝儀をお貰ひ申しましたわいな。（ト おきく帶の間より巾着を出し、紙包の金と錢を出す。）
りく　それはよいことをしやつたの、わしも今日は綿の摘賃、草双紙の綴代、何やかやで一分あまりになつたわいの（ト 佛壇の下段より小文庫を出し、内より錢と金を出し見せる。）
きく　どうぞ早うお金を溜めて、文彌の官金がとつてやりたい。忘れもせぬ三歳の年、私が抱いてつい落し、石に打附け情なや兩眼ともに潰せしあの子、せめて望みの官位でもとつてやらねばこの姉のどうも義理が濟まぬわいな。
りく　はて、それとても約束事、その替りには若い身で恥も厭はず茶見世へ出て、淨瑠璃を語つて人樣に合力受けるも文彌の爲め、そなたの蔭で今日のを入れ十五兩餘になつたわいな。（ト 文庫の金包へ金を一つにする。）
きく　とはいへ、座頭の官位でさへ、百五十兩要るとのこと。

りく　身貧な暮しで大まいの、
きく　金の出來よう當もなし、
りく　はて、何としたら、
兩人　よからうなあ。（ト兩人思入、おきく思ひ出せし動作あつて、）
きく　これはしたり、私としたことが、大切の撥を茶店の床几へ忘れて來たが、かゝさんお前太儀ながらちよつと行て來て下さんせいな。
りく　おゝ、あの撥を失うては、明日から生業の障りになる。つい一走り行て來ようわいの。
きう　ついでながら身替りの地藏樣へ、私の替りにお參り申して來て下さんせいな。
りく　おいおい。歸りに神明前の泉市樣へ寄つて、草双紙をとつて來る程に、ちつと遲うならうわいの。
ト言ひながら門口へ出る。
きく　そんならゆるりと行てござんせいな。
りく　どれ、行て來ようわいの。
ト四つ竹節になり、おりく花道へ入る。おきく文庫を佛壇の下へ仕舞ふ。又稽古唄になり花道より髮結才三郎手拭の片襷下駄がけ、鬢盥をさげ髮結ひの打扮にて出來り、直に門口へ來て、

才三　をばさん、お家かね（ト門口を明ける。）

きく　おや、髪結の才三さんかえ、母さんは今愛宕下まで行きましたわいな。

才三　さうでございますか（ト内へ入り）おきくさん、御面倒ながらどうぞ油手拭を洗濯して下さりませ。

きく　はい〳〵畏りましたわいな。

才三　嘸油染みてお困りでござりませうが、一人者の悲しさ洗人がござりませぬから、お頼申します。

きく　ほんにお一人では嘸お困りでござりませう、早うよいお上さんをお持ちなさんせいな。

才三　いくら持ちたくつても、誰も女房になるものがござりません。（ト佛壇の袱紗へ目を附け思入あつて）もしお菊さん、ぶしつけなことを言ふやうだが、お前さんのお家に合しては、あの佛壇の打敷は立派な布でござりまするが、一寸拜見いたしたうござります。

きく　あい、これでござんすかえ、（ト袱紗を取つて見せる。）

才三　（裏、表を見て）こりやあ結構な品だ、表は古代の鴛鴦布裏はもえたつ飛龍紋、まさしくこれは、（ト思入あつて）異なことをお聞き申しまするが、この打敷は久しくお家にござりますか。

きく　いいえ、その袱紗は此間父さんがどこでやら買うて來なさんしたのぢやわいな。

才三　むう、して親御さんの御職業は、

きく　さあ、父さんの職業は（ト言ひ兼ねる。）
いち　紙屑屋でござんすわいな。
才三　へゝい左樣でござりますか。こりやあ結構な品だ、大切になされませ（トおきくに返し、）左樣なら御面倒でも早く洗つて下さりませ。
きく　直に洗つてあげますわいな。
才三　（門口へ出て）はいおやかましうござりました（ト合方にて花道附際まで行き思入あつて、）はて心得ぬは今の打敷、世にも稀なる鴛鴦布は紛失なせし花形のまさしく茶入を包みし袱紗、此家の内にあるといふは、もしや寶の盗賊が（ト振返り見る途端に、おきく門口を明け見て、）
きく　まだおいでなさんせぬか。
才三　いゝえ、唐櫛の掃除をしてゐました。どれもう一精出しませうか。
　　ト稽古唄になり才三郎合點の行かぬ思入にて考へながら花道へ入る。おきく後を見送り門口を閉め、
きく　これおいち、そなたにちつと頼まにやならぬ事があるわいの。
いち　姉さん、わたしにお頼みとはえ。
きく　さ、そなたに頼みは（トあたりへ思入あつて）奥でとつくり話さうわいの。

いち　そんな姉さん、

きく　妹おじや、

ト寺鐘になりおきくおいちの手を引き奥へ入る、寺鐘を打上げ床の浄瑠璃になる。

〽世の中の善きも悪しきも見えぬ眼に突く杖の木は直なれど、心ゆがみし座頭の坊、孝子文彌を右左り、なさけ用捨もあらけなく、

トこれへテンツヽを冠せ、花道より座頭文彌下駄にて杖を持ち、これをでく市こぶ市の二人同じく座頭の打扮にて、文彌を引立てゝ出來る。後より白木屋彦三羽織着流し町人の打扮にて、捨ゼリフにて留めながら出來り、花道にて、

こぶ　やい〳〵汝は憎い奴だ、市名も取らぬ分際で四分の者に突きあたり、ろくすつぽうの詫もせず、

でく　盲人の法を知らぬからは、誰が弟子だか師匠へことはり、きつと仕置をせねばならぬ。

文彌　そのお腹立は御尤もでござりまするが、突きあたりしはあなた方より、いえ、私の不調法、幾重にもお詫いたしますほどに、どうぞ御了簡なされて下さりませ。

彦三　どういふ譯か知らないが、最前から二人して可哀さうに打ち打擲、もうよい加減にお前方も了簡してやんなさいな。

こぶ　えゝこの人は大きにお世話な、仲間の法ですることだ。素人の知つたことぢやあない。
でく　了簡しろならしまいものでもないが、たゞ了簡がなるものか、いけ馬鹿々々しい、
兩人　退かつしやい〳〵、
　　ト兩人又杖で打つを彦三留めて、
彦三　これさ〳〵お前方もさりとは執着い人達だ。いかに眼が見えぬとて、このひがひすな座頭殿をめつたむせうに打毆き、ひよつと打ちどこでも惡くつて、もしものことがあつたなら、假令官位のある身でもその分には濟みさうもないもの、人の留めるその中によい加減に了簡しなさい。わしも中へ入つて酒の一つも進ぜませう。どうぞ了簡して下さい。
　〽酒と聞いては二人とも、元より眼のなき座頭の坊、
こぶ　そりや、何と言はつしやる、わしらが了簡することなら、お前が酒を買はつしやるとか。
でく　どこのお方か知らないが、さりとは眼の明いた御挨拶、お前に免じて、
兩人　了簡しませう。
彦三　すりや了簡して下さるとか、それは早速忝けない（ト紙入より金を出して一分紙に包み）少しばかりだが、これで歸りにいつぱい呑んで下さりませ（トでく市に渡す。）

でく（探り見て）これは〳〵有難うございます。
こぶ　これ〳〵幾干ある〳〵、りやんこか〳〵。
でく　どうして〳〵額だわ〳〵。
こぶ　なに額だ、どれ〳〵（ト探り見て）こいつあ話せるな。
でく　晩に橋向うへ泊りに行かう。
こぶ　そのこと〳〵。こりやあ旦那有難うございます。
彥三　何の禮に及ぶものか、さあ〳〵早く行かつしやい。
でく　はい〳〵。何とこぶ市、見ず知らずの者に一分出して下さるとは、このやうな旦那はあんまりないの。
こぶ　針とは、氣の利いた旦那樣だ。
〽慾に心のくら闇も金の光りに座頭の坊、杖突きたてゝ急ぎ行く（ト兩人花道へ入る。）〽後を見送る彥三に文彌はおづ〳〵前へ出で、
文彌　これは〳〵何れの旦那樣でございますか、あなたさまのお蔭にて今の難儀を脫れました。えゝ有難うございまする。

彦三　さて〳〵祝儀座頭といふものは、意地の悪い憎いもの、めつたむせうにお前を打つたが、どこぞ怪我でもしはせなんだか。
文彌　いえ〳〵どこも何ともござりませぬ。
彦三　いや〳〵だいぶ身體に泥がついてある。
〽衣類の砂を打拂へば、（ト彦三文彌の砂を拂ひやる。）
文彌　これは憚りでござりまする、もうよろしうござりまする。
彦三　そうしてお前の家はこの近所かえ。
文彌　はい、この向うが私の家でござりまする。
彦三　なるほど、揉療治の札が出てゐますの。
文彌　左様でござります。いやも穢うはござりますが、一寸お立寄り下さりませ、母にお禮を申さしたうござりまする。
彦三　なにその禮には及ばぬことだが、お前の麁相でないことを家の衆に話して聞かさう。
文彌　左様ならお立寄り下さりますか。どれ御案内いたしませう。
〽勝手覺えし我家の門、文彌は彦三伴ひて、

本舞臺へ來りて）母さん、今歸りました。
〽聲に姉妹立ちいでゝ、
ト奧よりおきくおいち出來りて、
きく　おゝ文彌戻つたかいの。
いち　兄さんだいぶおそうござんしたな。
文彌　姉さん、妹、して母さんは、
いち　今愛宕下まで行かしやんしたわいな。
文彌　おゝさうであつたか。さ、旦那樣、これへお通り下さりませ。
トこれにて彥三內へ入る、
きく　これはどなた樣でござりますか、ようおいでなさいました。
彥三　御免なされませ（ト上手へ通る。）
〽お菊はふつと彥三の取り形り見ればしとやかに、由ありげなる當世風、てもよい殿御と見とれゐる、文彌はそれと氣も附かず、
トこの中彥三は上手へ住ふ、おきくは彥三を見てうつとりと見とれてゐる。

文彌（思入あつて、）これ姉さん、あなたにお禮を申して下され、今家へ歸る道にて四分の衆に突當たら
れ、おのが麁相をこつちへ塗りつけ、市名をとらぬ身を以て何でわしらに突當つたの、詫の仕や
うが悪いのと杖をもつて打ち打擲、酷い目に逢ふ所をこの旦那樣の御挨拶で、無事に歸つて來ま
したほどに、ようお禮を申して下され、
きく　それはまあ何と御禮を申さうやら（ト彦三をぢつと見て恥しき思入）あなた有難うござりますわいな。
彦三　いやも、同じ盲人のその中でも祝儀座頭は検校や勾當なぞが貸金の催促に歩く故、意地の悪い者
とは聞けど、あまりと言へば無理難題、見兼てわしが中へ入り、やう〳〵濟ましは濟ましました
が、見なさる通り着物もよごれ、綻も切つたれど、必ずこつちの悪いのではない程に、そのこと
を話さうと、それ故一緒にまゐりました。
きく　それはまあ御親切に、有難うござりますわいな。
文彌　これ〳〵姉さん、まだその上に四分の衆に御酒代迄もあなた樣がお出しなされて下されました、
母さんがお留守故姉さんお前二人前ようお禮を言うて下さりませ。
きく　あい〳〵お禮が申したうてならぬわいの、これ〳〵おいち、そなたもお禮を申しやいの。
いち　あい〳〵。

きく　重ね〴〵のあなたの御恩、有難うござりますわいな。
文彌　有難うござります。
いち　有難うござりますわいな。
きく　まだ〳〵そのやうなことでは濟まぬ。あなた有難うござります。
文彌　いやも有難うござります。
トおきく文彌あちこちして、とゞ兩人向ひ合ひ、
兩人　えゝ有難うござります（ト互ひに辭儀をする。）
いち　（見て）兄さん、そりや姉さんぢやわいな。
きく　ほんに、文彌か、
文彌　姉さんであつたか、はゝゝゝ。
〽これも他生の緣ならめ、
彥三　いやもそのやうに禮を言はれては、逆せ上つてなりませぬ。
文彌　これおいち、お茶でも上げぬかいの。
いち　あい〳〵（トおいち茶を汲み、茶臺へ載せて出すな）

きく　いえ〳〵私が上げるわいな（ト茶臺をとつて耻かしさうに、）あなたお茶を一つお上りなされませいな。

彦三　いやも必ずかまうて下さりますな。

　トこの中文彌あたりを探り煙草盆を探り取つて、

文彌　これ〳〵おいち、お煙草盆をあげぬかいの。

いち　あい〳〵（トおいち取るをおきく引きとつて、）

きく　私があげるわいの。はい、お煙草をおあがりなさりませいな。

彦三　えゝも構うて下さるなといふに、

いち（おきくに隱してにそつと茶を汲みて）はい、お茶一つお上りなさりませいな（ト茶を出す。）

彦三（取つて）これは〳〵まだありますのに、

きく（また茶を汲んで）も一つおあがりなさりませいな。

彦三　またお茶でござりますか。もう〳〵このやうには呑めませぬ。

きく　それでは私のはお厭でござりますか。

彦三　いえ〳〵さうではなけれども、

文彌　これはしたり姉さん、もうよい加減になされませ、彼方が御迷惑の樣子ぢやわいの。それはさうと旦那樣、母が歸られましたなら是非お禮に上りませうが、あなた樣はどちらさまでござりますか、お名前を承りたうござりまする。

彥三　それはいと易いことなれど、なにこれしきの事にお禮を受ける覺えもなければ、

きく　いえ／＼あなたのお名前を、わたしもちつと。どうぞ、お聞かせなされて上さりませいな。

彥三　そのやうに言はるゝを言はぬのも却つていかゞ、私は本材木町の白木屋の養子彥三といふ者ぢやが、必ず禮には來て下さるな、却つて迷惑しますわいの。

文彌　すりや、あなたは材木町の白木屋の若旦那、

きく　彥三樣とおつしやりますか。

トおきく索麪櫃の上の手習草紙へ彥三の名を書留める、彥三もおきくへ思入あつて、

彥三　いや先刻からよほどの間、得意まはりがおそなはれば、もうお暇いたしませう。

文彌　でもござりませうが今暫時、何はなくともお煮花でも、

彥三　いえ／＼先刻から何ばいも／＼、お茶は御馳走になりました。

きく　左樣ならば、もうお歸りでござりますか。

彥三　これを御緣に、この邊へまゐつた折はおたづね申さう。

文彌　どうぞお立寄りなされて下さりませ。

ト彥三立上る、おきく本意なき思入、おいち彥三の草履をなほし、

いち　はい、お履物、

彥三　これは憚り（ト彥三門口へ出で、おきく〳〵思入あつて）あ、あたら花をば、

きく　え、

彥三　いやさ、話しにその中まゐりませう。

〽心殘して彥三は見返り〳〵歸り行く、

ト彥三思入あつて行きかけ、振返りおきくと顏見合せ、心殘して花道へ入ろ。

〽影見ゆるまで延上り、見送る姉を見えぬ目に知らぬ文彌はこなたへ向ひ、

トおきく門口の柱へすがり、うつとりと彼方を見送りゐる。おいちは煙草盆茶碗を片附けゐる、文彌探り〳〵上手へ向ひ、

文彌　もし姉さん、信心はしようもの、今日の難儀を彥三樣のお情故に助かりしも神や佛の皆御利益、何と有難いことではござりませぬか。もし姉さん〳〵、なぜ物を言はつしやりませぬ。

いち（これを見て）もし、姉さんは門口に、今のお方を見送つてゐなさんすわいな。

へ言ふに盲目の勘もよく、扨はと悟る弟に姉はうつとり心も附かず、

ト此中文彌扨は彦三に心有るかといふ思入、おきくは延上り影の見えぬ思入にて、

きく　あゝ姿と言ひ心と言ひ、てもまあよい男ぢやなあ。

文彌　姉さん、よいとは何が、

きく　さあ、よいといふたは、お天氣ぢやわいな。

文彌　はあゝさうでござりましたか。いや、よいと申せば彦三樣は聲柄と言ひよい男でござりませうな。

きく　よいとも〳〵、とんと錦繪に畫いた彦三郎のやうぢやわいの。

文彌　それでお前も、

きく　え、

文彌　いや、彦三郎は最屓でござりますな。

きく　いくら最屓に思ふたとて、私などが及ばぬこと、殊には廓へ（ト帶の間より書置の文を出し思入。）

文彌　や（ト合點の行かぬ思入。）

きく　さあ苦勞忘れにせめて一幕、どうぞ見たいものぢやわいな。

〽お菊は胸のもつれ髪かき上乍らしほ〳〵と、外面に出て妹を招けばさとくも走り出で、

トおきく思入あつて門口へ出で、おいちを招ぐ、おいち心得つか〳〵と門口へ出て、

いち　姉さん、何でござんすえ、

〽言ふをおさへて囁けば、

そんなら、さつきの話しの後を、

きく　家では文彌に憚りあれば、何かは隣りで、妹おじや。（ト兩人下手へ入る。）

〽手を引連れておとゞいは隣りの家へ忍び行く、知らぬ文彌はこなたへ向ひ、

文彌　もし姉さん〳〵、あゝ又門口ではないか、

〽言ひつゝ門口探り見て、

こりや門口でもないが、もしや今の彥三樣のあとでも追うて行かれたか。おいちや〳〵、はあゝこれも一緒に行たさうな。あゝ人の心は知れねども、彥三樣には姉さんも何やら心のある樣子、とはいへあなたは白木屋の若旦那とあるからは、所詮及ばぬことなれど、男と違つて女の身は氏なうて乘る玉の輿、どういふ緣で末始終願ひの叶ふまいものでもない。私も願ひの官金を早う溜めて官位を取り、最前いぢめた四分の奴等を見返してやりたいものだ。えゝ、見返す眼はなかつ

たもの、はゝゝゝ。どれ汚れた着物を着替へませうか。

〽勝手覺えし戸棚の中、着替への布子取出す拍子に落つる黒羽織。

ト文彌戸棚より布子を出す、この時黒の單羽織落ちる、文彌取上げ、

こりやお師匠樣から貰うた羽織(ト一寸いたゞき傍へおき)いや布子より、今日はまだ溜つた金を見なかつた。どれ、一寸お目にかゝらうか。

〽文彌はあたりに人のなき折を幸ひ佛壇より官金取出し算へ見る身の樂しみも寸善尺魔、喜藏小兵衞のわるものが謀し合してあはたゞしく門の戸明けて駈込む小兵衞、逃がしはせじと喜藏が引附け、

ト此中文彌思入あつて佛壇より以前の文庫を出し、中より金を出し算へながら嬉しき思入。此中下手より小兵衞、喜藏出來り、門口より窺ひ呫き合ひ、わざとバタ〱と足音をさして小兵衞内へ逃込むを喜藏引つとらへて、

喜藏　汝、逃げるとて逃がさうか、

小兵　どうぞ御免なされて下さりませ。

〽聲にびつくりあたふたと、文庫を羽織でうち隱し、

ト文彌あわてゝ文庫の蓋をなし、あり合ふ黒の羽織を冠せ、

文彌　おゝさういふ聲は、おゝ親父樣ぢやござりませぬか。

小兵　文彌か、面目ない〱。

文彌　こりやまあどうなされたのでござります。

喜藏　どうも致さぬ、此奴めは身が紙入を拔きとつた。

文彌　えゝ、すりや親父さまには、

喜藏　盜みをひろいだ。

〽聞くに文彌は小兵衞にすがり、

文彌　これ親父樣、何か樣子は知らねども、せつぱ詰つたことあつて貧の盜みでござりませうが、情ないことして下されましたなあ。

〽わつとばかりに泣きふせば、小兵衞はわざと哀れげに、

小兵　これ文彌、とんだ權太のせりふだが、常が常故この小兵衞が慾にふけつて盜みしかと思ふでおらうがさうではない。これまで婆ァや子供等に苦勞を掛たも取る年に、眼が覺めて見りや面目なくせめて我身の言譯に、親子三人喰ふものも喰はずに溜めると噂に聞く、その官金の足しにもと思

つた所が出來ぬは金、所詮この身はわるものと名をとつたる上からは、お上のお處刑受けると

も、そなたに官位が取つてやりたく、盜めば直に天の網かゝりや繫がるそなたに又、苦勞をかけ

るが面目ない。

〽身をかきむしる後悔も、嘘言僞りと文彌は知らず、

文彌 すりや親父樣には、是までにうつて替つて私を不便と思ふて官金の足しに盜みをなされしとか、

その思召しが千萬兩、もう〳〵金子は入りませぬほどに、盜みし品をお返し申しお詫申してこの

後は、さもしいことはふつつりと思ひとまつて下さりませ。

〽涙ながらに眞實の異見、してやつたりとうなづき合ひ、

ト文彌小兵衞にすがりいふ。小兵衞、喜藏うまいといふ思入。

小兵 おゝそなたの異見に附いて、盜んだ品はお返し申さう。もしお侍樣、今お聞きなさる通りの譯、

せつないことでござりますれば、どうぞお許しなされて下さりませ。

喜藏 盜んだ品を返すことなら、倅に免じて許してくれう。

小兵 それは有難うござりまする。サアお受取り下さりませ。

〽怪しの紙入取出せば、喜藏は中を改めて態とびつくり仰天なし、

ト小兵衛古びし紙入を喜藏に渡す、中を改め見て、

喜藏　さあ、ないわ〳〵、金入の中へ入れおいた金子が見えぬが、扨は手早くもこかしをつたな。

小兵　めつさうなことおつしやりませ、こかした覺えはござりませぬ。

喜藏　なに、ないことがあるものか。

文彌　して、その金子はいかほどでござりました。

喜藏　さあ、その金額は、（ト喜藏いくらに言はうといふ思入、小兵衛二十兩に言へと二本指を出す、喜藏呑込み）おゝ、入れおいたは二十兩だ。

文彌　えゝ（トびつくりなす、小兵衛心得思入あつて）

小兵　いえ〳〵、金入の中にござりましたは、百足小判と文錢ばかり、金といつてはござりませぬ。

喜藏　おゝそのほかに封金にて高野へ納める祠堂金が二十兩入れてあつた。さあきり〳〵と出してしまへ。

小兵　いくら出せとおつしやつても、盜まぬものは出されませぬ。

喜藏　汝盜人たけ〴〵しいと、出さぬといつてその分におかうか。

へ我手の平を打叩き、音を聞かする打擲に小兵衛は苦しき聲を出し、

小兵　あゝ痛い〳〵、そう打たれては死にます〳〵。どうぞ堪忍して下さりませ。

ト喜藏自分の手をたゝき、小兵衞を打つ態に見する。小兵衞打たれる思入にて、

喜藏　そんなら金を出してしまへ。

小兵　それぢやといふて、

喜藏　出さずば、汝、まつぷたつに、

〽鯉口ならせば文彌はおどろき、

文彌　まあ〳〵お待ちなされて下さりませ（ト喜藏を留め、）これ親父樣、命に代へる寶はない、取つたら取つたと詫言して、早う金をお出しなされませ。

小兵　さあ、取つたものなら出しもせうが、元より取らぬ二十兩、强つて取つたとおつしやるなら此身の潔白、すつぱりと切つて、疑ひお晴らし下され。

喜藏　むゝよい覺悟だ、どれ眞二つにいたしてくれう（ト喜藏又鍔音をさせる。）

文彌　あゝこれ、お侍樣、必ず早まつて下さりますな、私には義理ある親、殺さしましては、

ト文彌喜藏を留める、兩人うまいといふこなしあつて、

喜藏　むゝ、義理ある親故殺しては濟まぬとあるなら待つてもやらうが、取られし金はいかゞ致す。

文彌　その二十兩は私から、あなたへお返し申しませう。

喜藏　取られし金さへ返すことなら、此の方とて事は好まぬ、さあ、その金子を受取らう。

文彌　たゞ今差上ますでござりまする（ト文彌思入あつて、）もし旦那樣え、あなた樣へ私がお願ひがござります、と申すは外でもござりませぬ、唯今上げます二十兩の中五兩ほども足りますまいが、その金とてもおろそかに溜めた金ではござりませぬ。目の不自由な私に官位が取つてやりたいと、お年寄られし母さまがすゝぎ洗濯縫仕事、その片手間に賃綿や草双紙の綴さへも廻らぬ糸のきしみがち、見兼ねて姉が茶見世へ出で、一錢二錢の合力受け語る哀れな淨瑠璃も、身につまさるゝ三の切、これもみんな我身故と、眼は見えねども心に見え、こぼるゝ涙呑込みて、吹く笛の音もかれ〴〵に、苦勞身にしむ秋の夜の風も厭はず療治にあるき、親子三人夜の目も寢ず稼ぎ溜めても朝夕の煙の代に半なり、殘るは僅な端錢、昨日は五十今日は百微塵積つて山とやら、やう〳〵溜めた十五兩（ト文庫より錢と金を出し、布子と羽織も列べて、）足らぬところは私が着替布子に師匠から貰うた黑の夏羽織、薄い世帶のその中で、年月溜めた此の金を親の爲めとて一時に出すを不便と思召し、これにてどうぞ親父さまの命を助けて下さりませ。もし、お願ひでござりまする。

〽この年月の艱難も水の哀れや官金に、布子を添へてふし拜む文彌が心ぞいぢらしゝ、

ト文彌布子の上へ金をおき喜藏を拜む、兩人うなづきて、

喜藏　木綿布子にべんべら羽織・五兩の質には高いものだが、そちが心が不便故、これで命は助けてくれる。

文彌　すりやお助けなされて下さりますか、ちえゝ有難うござりまする。

〽騙らるゝとも知らずして、悅ぶ我子を尻目にかけ小兵衞はハッと空涙、

ト文彌悅ぶ。喜藏金をとつて懷へ入れる。

小兵　はあゝ（ト泣く眞似をして）あゝ世の中に汝のやうな孝行な者がまたとあらうか、親甲斐もないこの小兵衞を親と思うてこの年月艱難苦勞して溜めた金もをしまず、着類まで添へて助けてくれるとは、子とは思はぬ、これ文彌そなたの眼には見えまいが、おりや手を合してをがんでゐるわいの（ト文彌の鼻の先へ足を出しをがむ。）

文彌　あゝ勿體ないことおつしやりませ、親のことを子がするはこりや世間の當り前、それを禮をおつしやつては却て罰があたりまする。

小兵　なんの、これが罰どころか、をがまずにはゐられぬわいの。

ト尻を捲つて文彌の鼻の先へ出す、文彌拂ひのけようとして尻を探る、小兵衞はおどろき飛退く。

喜藏　あゝ盗みをひろぐ人でなしの子には稀なる親孝行、五兩足らぬもこのまゝに免してくれるも子のお蔭（ト喜藏門口へ行く。）

小兵　その子の爲めと盗んだる紙入故に目串がぬけず、騙りとらるゝ二十兩、

喜藏　どうしたと、（トきつといふ、文彌中央にて喜藏を留め、）

文彌　あもし、何事も私を不便と思うて、

喜藏　むゝ、そちに免じて許してくれる。

文彌　有難うございまする。

喜藏　あゝ命冥加な親仁だなあ。

ヘ命みやうがと言ひ捨て逃足早き門の口、小兵衞は衣類を小脇に抱へ、拔足さし足立出て、

ト喜藏門口へ出る、小兵衞布子と羽織を引抱へ門口へ出て、

小兵　喜藏さん、うまく行きやした。

喜藏　さうよ、思つたよりうまく行つた。

小兵　然し、高野へ納める祠堂金とは、あんまり露骨であつた。

喜藏　何だ、布子と羽織を持つて來たのか、可哀さうにおいてくればいゝに。

小兵　どうで官金を取つたからは、もう家へは歸らねえ。四百がものでもとらねえのは損だ。

喜藏　いや、慾どうしい奴だ。

小兵　はて、年を取ると誰でもさうだ。

〽始終立聞く文彌はびつくり、

文彌　（何心なく門口にて二人の話を聞きびつくりして、）扨は騙りであつたるか、やゝゝゝ。

〽尻へにどうと倒るゝ文彌、聲におどろき兩人は後をも見ずに走り行く。

ト文彌はあきれてどうとなる。外の二人は驚き尻を端折り逸散に花道へ入る。文彌は起上りて、

あゝこれ待つて下され、親父さま、

〽駈出す拍子門口の柱へばつたり仰向に、はずみを打て倒れしが、起上つて齒噛みをなし、

ト文彌つかく＼と行き、門口へ突きあたり倒れ、起上つて悔しき思入。

えゝ、所詮追ひかけ行つたとて、眼の見えぬ悲しさは鼻の先にゐられても、それと知れぬ身の因果。いかになさぬ仲ぢやとて、あまりと言へば情ない、かういふことゝ知らぬ故、母さまや姉さまのいくせの思ひでやう＼／＼と溜めて下された十五兩、斷りなしに遣うては濟まぬ事と思ふたれど、義理ある親の命づく、どうも子として見てゐられず、よしや後にて母様にお叱り受けなば其

時は、我身の命を捨てゝもと覺悟極めて遣ひし金。あゝ眼かいも見えぬ者をだまし、騙りとると
は親父様、お前は鬼か蛇かいの、
〽身をかきむしる悔み泣き、かくとは知らず立歸る姉は不思議と門口より、内の様子を伺ひ
ゐる、文彌はやう〳〵泣く眼を拭ひ、
ト此中文彌よろしく思入、下手より以前のおきく、おいち出來り、門口にて内の様子を窺ひゐる。
あゝ此の事を母さまや姉さまに言ふたなら、何故父様のいふことを眞實にしたと仰しやらうが。
よい衆の身の上なら僅な金であらうけれど、その日暮しの身の上では、又と出來よう當もなし、
親兄弟の丹精を徒勞にした申譯、口でまだ〳〵言はうより、いつそ淵川へでも身を沈め、さうぢ
や〳〵、
〽けつそうかへて駈出るを、おきくは門の戸明けて入り、
きく（此時内へ入りて）いや、その覺悟には及ばぬわいの、
文彌や、お前は姉さん（トびつくりなし、逃げようとする。）
きく　あゝこれ逃げるに及ばぬ、門口で様子はあらまし聞きましたが、必ずきなく〳〵思やんな。父様に
騙られしその金よりも輪をかけて、たんとお金ができたほどに死なうなどゝいふ悪い了簡出しや

んなや。

文彌　それぢやといふて母樣やお前が折角溜めた金、どうも私や言譯がない。

いち　もし兄さん、姉さんが又澤山お金を上げると言はしやんす故、そのやうなこと言ふて下さんすな。私や悲しうなつてならぬわいな。

へ涙ぐめば、

文彌　おゝよう言ふてくれた、嬉しいぞよ。とはいへ私に姉さんが、今の金に輪をかけて下さるとはそりや僞り、私に力をおとさすまいため。

きく　いえ〳〵僞りではさら〳〵ない、今に百兩渡さうわいの。

文彌　えゝ（トびつくりなし）そりやまあどうしてその金が、

きく　さあ、まだそなたには話さねど、さるお屋敷の奧樣へ拙い藝の淨瑠璃がお耳に入つて所望され、今日お屋敷へ上る積り、貧しい暮しに仕度もなかろと、衣類はもとよりさし物まで、皆お上から下されしまだその上にお手當とて、金子百兩下さる約束、今に駕籠にてお屋敷から迎ひの衆が來る筈ぢやわいの。

文彌　そりやまあほんのことでござりますか、これといふのも日頃から、親を大切兄弟を憐れんで下さ

る心故、天道樣の皆お惠み、そのあまりにて此身の仕合せ、えゝ有難うござりまする。
ト歎きの中の悦びも裏表なる姉弟、嬉しいに附け悲しいに附けて涙ぞさきだてり。折からこ
こへ吉原から駕籠をつらせて佐野松屋、
ト花道より佐野松屋清兵衞、女衒の源六附添ひ、後より駕籠舁四手駕籠を擔ぎ出來り、
源六　はい、御免なさいまし。
清兵　あゝこれ源六、屋敷から來た積りぢやあないか。
源六　ほんに、さうであつた（ト大きな聲して、）賴まう〳〵。
いち　あい、どちらからおいでになりました（ト門口を明ける。）
源六　私かえ。身共は、屋敷から迎ひに參つた。
きく（門口へ出て來て）これは〳〵むさくろしい所へ、ようおいで下されました。さあ〳〵あれへお通
り下さりませいな。
清兵　左樣なら御免なせえ（ト言ひかけるを源六袖を引く。）いや、罷り通る、許しやれ。
ト兩人おきくと頷き合ひ上手へ通る。文彌思入あつて、
文彌　もし、姉さん、どなた樣がおいでなされました。

きく　今言うたお屋敷から、迎ひにおいでなされたのぢやわいの。
文彌　それはまあようおいで下されました。私は文彌と申す盲人にて、即ちお菊の弟にござりまする。
清兵　(侍の思入にて)すりや、その方がお菊殿の舍弟でござるか、以後は入魂に賴みます。
源六　もし旦那、上手さうな按摩さんだ。いや、座頭殿でござる。
きく　これおいち、お茶をあげぬかいの。
いち　あい〳〵(ト茶を汲み、兩人へ出す。)
清兵　いや、かまやるな〳〵。
文彌　して姉樣が御奉公に出ますのは、どなた樣のお屋敷でござりますな。
源六　あい、奉公に出るのは吉原さ。
文彌　えゝ、
清兵　あいや、吉原の近所にて、えゝ、見返り播摩守と申す大名でござる。
文彌　へゝえ、吉原の近所に、そのやうなお屋敷がござりましたかな。
源六　あるとも〳〵、吉原の近所故、世間では吉原御殿と申すわ。
清兵　而も、尾州侯の五軒長屋に習ひ、五十軒などゝいふがあれば、

源六　また、世繼長屋、稻毛長屋などゝいふお長屋もあるて、

文彌　へゝえ、左樣でござりますか、してあなた方は、

清兵　私でござるか。いや、身共でござるか、身共は稻荷九郎助と申す奥用人でござる。

源六　拙者は朝日如來次と申す御錠口番でござる。

文彌　これからは私もお屋敷へ出ますれば、御懇親にお願ひ申しまする。

源六　ときに姐さん。いやお菊どの、遠方のことなればお仕度を早くなされ。卽ちこれは上より下さる裲襠小袖（ト手拭をとつて出す。）

きく　これは〳〵結構な品を、有難う頂戴いたしますわいな。

清兵　まづ何は兎もあれ、ものゝ取極なれば、請狀を致すでござらう。（ト懷より年季證文を出す。）

源六　文彌殿が名前主のことなれば、印形を出さつしやい。

文彌　かしこまりました。

ト文庫の中より印形を出し渡す。清兵衞證文へ判を押し、

清兵　文言はよむに及ばぬ、お定りの年季證文いや奉公人請狀、約束の手當金卽ち百兩渡し申す。

ト胴卷より百兩包みを出し、おきくに渡す。

きく　これは有難うござります。さあ文彌これはそなたへ、（ト百兩を文彌に渡す。）

文彌　やこりや姉さん、小判でござりますな、生れて始めて百兩といふ金を持つて見ました。えゝ有難うござりまする（ト金をいたゞき、）もし姉さん、何はなくともお前も身祝ひ、お二人樣へ御酒一つ。

きく　それも調へておいたわいの。これおいちその鯛の鹽燒をこゝへ持つて來やいの。

　　ト おきくは母おりくの買つて來た味噌漉の中の肴へ思入する。

いち　あい、このぬたでござんすかえ。

きく　あ、それではない、こちらのぢやわいの（トおいちに呑み込ませる。）

いち　あい／＼。

　　ト呑込み、八寸の膳の上へぬたの小皿を載せ出す。おきく五合德利の酒を燗德利へうつし、土瓶へ入れる。源六思入あつて、

源六　いや、これは御叮嚀な、御無用になされればよいに、九郎助殿御覽なされ、この鯛の鹽燒は眼の下一尺八寸もござりませう。

清兵　いかさま、これは見事なことだ。

源六　こちらは何だ、ひらめの刺身に口取物、臺重は鮑に初茸、此又鮭の照燒は唾のたまるほどうまさ

うだ。

清兵　こゝらでこんな料理をするは、神明の車屋であらう。これはく大そうな御馳走だ。

きく　(德利を出し)さあ、お燗がよろしうございます。お一つお上り下さりませ。

清兵　どれ、お辭儀なしに御馳走になりませう。

きく　おいち、お酌をしやいなう。

いち　あいく。

　　ト　おいち酌をする、兩人よろしく吞む。

文彌　お口には合ひますまいが、澤山召上つて下さりませ。

清兵　いやも、御酒と申しお肴と申し申分はござらぬ。

源六　ちよつとお近附にけんじ天皇と致さう、いや、仕らう(ト文彌に猪口をさす。)

文彌　私は一向不調法でござります(トよろしくのんで)是は御返盃にいたしまする(ト源六へさし、)いや御用人樣へ伺ひまするが、姉はお屋敷へ上りまして、何御奉公を勤めまする。

清兵　おゝ、姉御はお仕立がよい故、ぶつ附仲の町へ出す積りだ。

文彌　何とおつしやります。

清兵　いや、仲の町ではない、中奥へ出す積りだ。
文彌　へい、お側女でござりますか。
源六　左樣さ、突出しの時には、蕎麥も配るのさ。
文彌　いづれ其中母と一緒に御禮ながら上りませうが、お年寄樣は何とおつしやいます。
清兵　あゝ、家での年寄は遣手のお爪、
文彌　へゝえ、お爪さまとおつしやりますか。
源六　いやく　お年寄とはお局の事、おゝお局ならば岩藤どのと言ひます。
文彌　左樣でござりますか、して御中老樣は、
清兵　中老はおますにおきん、
源六　あ、もし、何をおつしやります、中老は尾上どのでござります。
文彌　それでは、芝居でいたします鏡山のやうなお名でござりますな。
源六　さあ、お局と中老は、何處の屋敷でも同じ名でござる。
文彌　左樣でござりまするか。
ト此中おきくはらくと思入あつて、

きく　まあお話は後にして、も一つお上りなされませいな。
清兵　いや〱先刻から數獻過し、殊のほか銘酊いたした。
源六　身共は殊に肴をあらし、ゲップウの出るやうだ。
清兵　もはや夕頃におもむけば、仕度がよくば同道いたさう。
きく　はい、もうよろしうござりますわいな。
源六　（思入あつて）いや、これは見事々々、今まではうつて變り、御殿模樣の鹿の子入り、やの字姿は又格別だ。
〽聞くに文彌はぞく〱悦び、
文彌　あゝその見事な御殿風を、一目なりとも見たいものぢや、これおいち嘸やそなたは羨しからう。
いち　いえ〱私や（ト言ひかけるをおきく目で制へる、）あい、姉さんのあの裝をお前に一寸見せたいわいの。
文彌　あゝ見たうて〱ならねども、見ることならぬ因果な身、せめてのことに探つてなりと、
〽立寄る文彌にお菊はびつくり、四邊見まはし佛壇の打敷取つて膝に當て、
ト文彌探り寄る、おきくびつくりして、佛壇の以前の袱紗をとつて膝にあて、

きく　これ、こゝを探つて見やいの。

〽手を持ち添へて膝の上、袱紗の模様をさぐらすれば、

文彌（思入あつて）これはまあ、結構さうな縫模様、一目なりとも見たいものだ（ト文彌膝の所に顔を寄せて）もし姉さん、このお小袖は抹香の匂ひがしますの。

きく　え。こりや抹香ぢやない、匂ひ袋ぢやわいの。

〽弟をくろめる詞のあや、傍であぶ〳〵くるわの亭主、

清兵　さあ〳〵太う酩酊致したれば、日の暮れぬ中に同道致さう。

きく　はい、唯今參りますほどに、暫く門口でお待ち下さりませいな。

清兵　然らば御馳走の醉ざまし、風に吹かれて相待ち申さう。

源六　後のいつぱいが利いたかして、ひよろ〳〵と致すやうだ。

〽わずかな酒にひよろ〳〵と醉ふた裝して門の外、後におきくはしよんぼりとせき來る涙呑込みて、

きく　これ文彌、わしが御奉公に出るからは、母樣のお力はおいちが年が行かぬ故、眼は見えいでもそなたばかり、どうぞ今の百兩で官位をとつて、これまでにいぢめた衆を見返した上、言ふまでは

なければども、お年寄られた母さんを大切にかけてたもいの。

文彌 そりやもうお前がない後は、眼は見えいでも母樣のお世話は私がしますほどに、必ず案じて下さるな。

きく 就いてはおいちも、母さんやこの兄さんに世話やかせず、素直に御用をたしませうぞや。

いち あい、母さんや兄さんの御用は素直にいたします程に、春になつたら腰折の人形買うて下さんせ。

きく おゝ、買うてやりませうとも〳〵、春にならずと此の頃に、よいのを買うて屆けるぞや。

いち 嬉しうござんす。

きく そんなら私やもう行きますぞ。

文彌 あ、これ、一日母さんにその裝を見せて行かしやんせ。

きく 豫て母さんは御存じ故、逢はいでもだいじない。殊には段々取る年に涙脆うなつた故、定めて家にゐやしやんしたら、生別れでもするやうに（トホロリとして、）けつく逢はぬがよいわいの。

文彌 いかさま、こゝに母さんがゐられたことなら、泣かつしやろ、私も悲しうて名殘りをしうござりまする。

〽文彌が泣けば妹も共に泣く音の哀れさを、身に知る雨の袖袂、

ト文彌おいちしく／＼と泣く、おきくも名殘をしき思入にて、

きく　あもう／＼そのやうなこと言うてくりやんな、心が殘つて惡いわいの。どれ、日の暮れぬ内行きませう。

文彌　あゝこれ姉さん、お前は常に癪持なれば、お師匠樣に貰うたる熊膽入りのこの丸藥（ト文庫より藥包みを取出し）これをお前に上げるほどに、紀念と思ふて下さんせ（トおきくに渡す。）

きく　あゝこれ、紀念とは氣にかゝる。

文彌　あいや、紀念ではない、そりや餞別、

〽何の心も附かずして、門出を祝ふ餞別を紀念と言ひし一言は、後にぞ思ひ知られける、

ト此中おきく心にかゝる思入にて門口へ出る、おいちつか／＼と行つて、

いち　姉さん、もう行かしやんすか（ト袖にすがる。）

きく　さつきのことを頼むぞよ。

いち　あい。はあゝ（ト泣くを、）

きく　あ、これ（ト目で制へる。おいち口へ袖をあてる。おきく淸兵衞に向つて）これはお待遠でござりましたわいな。

清兵　いざ、お仕度がよくば、それ、鋲打これへ、
源六　はあ、
〽氣轉四つ手の駕籠の垂れ、上ぐるまおそしとのりうつれば、
トおきく心の急く思入にて駕籠に乘ろ、文彌門口へ送り出で來て、
文彌　そんなら姉さん、御機嫌よろしう。
きく　そなたも達者で、
文彌　あゝ、どうやら死別れでもするやうに、
いち　私も悲しうござんすわいな。
清兵　あ、これ、目出度い門出に、
源六　涙は不吉、
きく　弟、さらば（ト駕籠の垂れをばらりとおろす。）
清兵　それ、乘物上げい。
源六　はあゝ。
〽はつとばかりにかき上ぐる。駕籠におきくは忍び泣き、廓をさして急ぎ行く、

ト若い者駕籠を舁上げ、淸兵衞、源六せり立て花道へ入る。

いちおゝ、もう表が暗うなつた。どれ、灯しの仕度をしませうか。

〽とつかはおいちが奥へ行く、後に文彌は金おしいたゞき、

文彌　あ、姉さんのお蔭にて、思ひがけない　この百兩、母さんにお目にかけなば、嘸お悅びなさることであらう。早うお歸りなさればよいに、

〽待つ間ほどなく母親が、歸る日暮の急ぎ足、

ト花道より以前のおりく足早に出來り、

りくやれ〳〵日が短かうなつた。今しがた七つをうつたに、もう足元が暗うなつた。（ト言ひながら門口へ來り）あい、今戻つたわいの、（ト內へ入る。）

文彌　や、母さんお歸りなされましたか、お待申してをりました。

りく　待つてゐたとは、何ぞ用でも、

文彌　さあ、外のことでもござりませぬが、姉さんがお屋敷へ御奉公においでなされました。

りく　何、おきくが御屋敷へ奉公に出た。

文彌　お前さまも御存じぢやござりませぬか。

りく　いや〳〵そのやうな事は知らぬ。今聞くが始めてぢやわいの。
文彌　はて、合點の行かぬ、御存じのやうにいふてゞあつたが、
りく　して、その先は何樣ぢや、
文彌　さあ、吉原の近所にて、見返り播摩守樣といふお屋敷ぢやわいの。
りく　はて、そのやうなお屋敷は聞いたこともないわいの。
文彌　それでも先のお屋敷から、立派な刺繡のお小袖やお手當金も百兩下され、而も鋲打の乘物でお迎ひにおいでなされました。嘘でない證據はこの金（ト文彌金を出しおりくに渡す。）
りく　刺繡の小袖で鋲打に乘るのは立派な御奉公、殊には大まい百兩のお手當までも下さるとは、願うてもない身の仕合せ、それを私に隱すは不思議、こりや唯事ではないわいの。
文彌　え〻（トびつくりなす。）
りく　して〳〵證文へ判でもしやつたか。
文彌　はい、請狀とやらへ判をおしてやりました。
りく　その證文の文言は、
文彌　お定まりぢやと申します故、つい承はらずにしまひました。

りく　えゝ目かいも見えぬ身を以て、譯も聞かずに證文へ何故印形をおしてやつた。母が歸つた上の事と言ひ延べてはおかなんだ。お屋敷なればよけれども、どんな所へおきくをば連れて行たやら知れぬわいの。

文彌　すりやお屋敷ではなかつたか、ほい。

〽はつとばかりに氣も半亂、どうとなりしが起上り、程は行くまい、後おひかけて、（ト行かうとするをおりく止めて。）

りく　えゝ、とりのぼせて、これ文彌、目も見えいで何處をあて、

文彌　それぢやといふて、

りく　はて、待てと言はゞ待ちやいなう。

〽爭ふ中へ妹おいち、文たづさへて立ちへだて、

ト文彌行かうとするをおりく留める、此の時奥よりおいち文を持出で兩人を留めて、

いち　あゝもし、母さんも兄さんも、必ずお案じなされますな、姉さんの行先は私が知つてゐますわいな。

文彌　おゝおいち、そなたが知つてゐやるとか。

りく　して、行く先は何處なるか、
兩人　早う言うて聞かしやいの。
いち　あい、姉さんの行先は、このお文に書いてありますわいな。
　　〽差出す文を文彌は取上げ、
文彌　えゝ、この文を讀んだなら、定めて樣子も分からうが、何をいふても見えぬ此眼、
りく　眼は見えながらこの母は、皆目讀めぬ盲目同然、
文彌　こりやどうしたら、
兩人　よからうぞいの。
　　〽途方に暮るればおいちはさかしく、
いち　もし母さん、私が讀んで上げませう。
文彌　あゝさうぢや、そちばかりは眼が見える。早う讀んで聞かしやいの。
りく　どれ灯りを點けてやらうわいの。
　　〽母はこちこち火打箱、燈つくれば書置をおいちは開き聲張上げ、
いち「一筆書き殘しまゐらせ、左候へば弟文彌事幼き時に我身が脊負ひ緣より落し石にてうち、終に三つ

の年よりして盲目となり候故、物の色さへ知らぬ不便さ、成人するに從がつて過越し方を思ひ出し、盲目となせし身の詫に、せめて官金調へて行末樂に致させ度く、御前樣にも御苦勞かけ、丹精いたし候へども、はかぐしく調ひ申さず、いかゞはせんと思ふ折節、今日愛宕下にて御祝儀を下されし御方は、吉原の遊女屋にて佐野松屋の旦那樣故切ない譯をお話し申し、百兩に此身をば苦界へ沈められ、何卒この金子にて文彌に官位を御取り下され候やう、くれぐも願ひ上げられたゞ心にかゝり候は眼の不自由な弟に、まだ年行かぬ妹を殘し、御前樣にお世話かけ候段、それのみ心ぐるしく存じられ、まだぐ申し置き度きこと御座候へども、はかどらぬ筆に書殘しられ

あられ目出度くかしく、御母樣へきくより、

ト傍の二人は呆れはて、

文彌　扨は屋敷へ奉公と僞り言ふて姉さんには、苦界へその身を沈められしか。

りく　おゝ、出かしたとは言ひながら、なぜ一言此の母に相談かけてくれぬぞい。

文彌　おゝさうぢや、この金持つて姉さんを廓から取り返さん、

ト行かうとするをおりく留めて、

りく　あゝこれ、そなたは知るまいが、印形なした上からは、たとへその金倍にしても返さぬのが廓の

法。

文彌　すりやもう取返すことはならざるか。目が見えぬばつかりに現在姉を廓の勤め、あゝこの眼が明きたい〳〵、

〽悔み歎けば母親が、

ト文彌眼を明きたき思入、おりくこなしあつて、

りく　その明きたがる兩眼をつぶせし姉が言譯なれば、志しを徒勞にせず、官位を取るが姉への孝行。

文彌　とは言へ、座頭の官位さへ、百五十兩要るとの事。

りく　その足らずめは京都へ上り、そなたの師匠一老さまへお願ひ申さば適ふは必定、

文彌　そんなら、これから京都へ上り、あ、その行く道の路用の金が、（ト當惑の思入。）

りく　それぞ幸ひ、溜めたる金を、

文彌　さあ、その金は親父さまに騙られましてござりまする。

りく　えゝ、すりや、あの人でなしに、やゝゝゝ。

〽聞いてびつくり母親が、呆れ果てたる表の方、

ト此中下手より以前の才三郎出で門口にて伺ひゐて、此時、

才三　いや、その道中の路用の金は、わしがお貸し申しませう。

〽言ひつゝ入る才三を見るより、

いち　(見て)や、そなたはさつきの才三さま。

文彌　緣も由りもない者に、

りく　路用の金を貸さうとは、

才三　唯は貸さぬ、質がとりたい。

文彌　そりやいかなる品を、

才三　あの佛壇にかけてある、鴛鴦切の袱紗が望み、

りく　すりや、あの袱紗を、

才三　五兩の質に預かりたい。

〽金とりだせば母親が袱紗をとつて才三に渡し。

トオ三懷ろより金を出しおりくの前へおく、おりく佛壇の袱紗をとり、才三に渡して、

りく　はて、物ずきな、何で袱紗を、

才三　望むはこつちの詮議の當、

文彌　え、
才三　さあ、まとまらずともその金を、路用になして、少しも早く、
文彌　えゝ有難うござりまする。
〽えゝ有難やと親と子が勇み悦ぶ表口、隙もあらばと伺ふ小兵衛、おいちはそれと目早く見附け、
ト此中下手より以前の小兵衛うそ〳〵と出來り、門口を覗くをおいち見て、
いち　あれ、父さんが、
文彌　えゝ、（トおどろく拍子に懷中より金包をばつたり落す。）
小兵　落ちたはまさしく。
ト小兵衛つか〳〵と入る。文彌金の上へぺつたりと座り、
文彌　いえ、何でもござりませぬ。（ト才三小兵衛を見て、）
才三　寶の盗賊、（ト捉へようとする。）
小兵　南無三、（ト此時おいち行燈を吹消す。）
〽闇はあやなし、

トオ三小兵衛にかゝるをおりく支へる。小兵衛は門口を出る、文彌探り寄つて門口をしやんと締め、ホット思入、双方よろしく、三重時の鐘にて、

幕

三幕目

鞠子宿藤屋の場
宇都谷峠殺の場

〔役名──伊丹屋十兵衛、座頭文彌、提婆の仁三、薩摩侍鹿子島新吾、大阪者太郎兵衛、日光の百姓出津村の勘太、江戸つ兒がら熊、藤屋の亭主四郎兵衛、江戸つ兒消炭の龜、どんどろ坂の兵藏。藤屋の女房おむら、同下女おいれ、同おせん等。〕

〔藤屋店頭の場〕──本舞臺三間の間常足の二重、正面藤屋といふ紺の長暖簾。上手間平戸の戸棚、下手茶壁、講中の掛札。上の方一間海鼠壁、丸の内に御泊宿鞠子宿藤屋と印しあり。下の方一間出格子、總て東海道鞠子宿藤屋店頭の態。二重に藤屋の女房おむら掛硯りを控へ帳面を附けてゐる、下女二人は留女にて一人の田舍道者を引張りゐる見得にて幕明く。

いね　もし、あなた、お泊りぢやありませんか。

せん　奥座敷が明いてござります。
兩人　さあ、お泊りなされませいな。
道者　こりやあ美しい姐え達、喰ひ物はどうでもいゝが晩にお酌をしてくれるか。
せん　いえ〳〵鞠子の宿で名代の藤屋、そのやうなことはいたしませぬわいな。
いね　女郎衆なら呼んであげますぞえ。
道者　馬鹿なことを言つたものだ、長旅をするものがそんな事をしてなるものか。
いね　左樣なら外へ行つてお泊りなされませいな。
道者　えゝ野暮な奴だな。（ト下女二人の脊をたゝき上手へ入る。）
せん　えゝ、好かない道者面だよ。
むら　おいねや、奥の八疊は江戸のお二人連と大阪のお方ばかりかえ。
いね　いえ〳〵京のお方も薩州のお侍樣も、御一緒でござりますわいな。
せん　それにまだ年の若い按摩さんがおいでなさんすわいな。
むら　江戸のお方は勇み衆故、間違ひのできぬやう、時々座敷を氣をつけてくりや。
いね　そりやもう如才はござんせぬ。今も見舞うてまゐりましたわいな。

ト馬士唄になり、花道より百姓勘太草鞋菅笠にて小包を背負ひ出來る。
せん　あなたお泊りぢやござりませぬか（ト袖を引く。）
勘太　夜通し歩くわけにもいかねえから、泊りは泊るが定宿がある、駄目なこんだ引かつしやんな。
せん　どちらが御定宿でござりますか、手前は鞠子の藤屋でござります。
いね　お風呂も丁度わいてをります、お泊りなされませいな。
勘太　えゝ此の女どもは油斷のなんねえ、おれが定宿がその藤屋だ、どうしてそれを知りをつた。おれを泊めてえと思つて、鞠子の宿の藤屋でござるなどゝ、其の手は喰はない、おいたがえゝ。
いね　何で嘘を吐きませうぞいな、あれ御覽なさいまし、鞠子宿藤屋と壁に記してござりますわいな。
勘太　（壁をよく〳〵見て）はあ、そんならこゝが名代の藤屋かな。實は定宿でもなんでもないが、後の立場で教はつて來たのだ。
むら　それはようおいでなされました。まあおかけなさりませいなあ、これお茶を持つて來なよ。
ト奥にて『あい』と返事して小女盆へ茶をのせ持來り、おせん盥へ水を取る。
小女　お茶をおあがりなされませ。
むら　お荷物はこちらでお預かり申しませう。

いね　お笠はこれへかけておきますぞえ。
せん　おみ足をお出しなされませ。
むら　直にお風呂を召しますか。
いね　御膳を直に召上りますか。（ト皆々口やかましくいふ。）
勘太　（耳をおさへて）あゝこれ〳〵、さうべちやくちやと言はれては、逆上せてなんねえ。どうぞ靜にして下せえ。ときに旅籠錢はいくらだ。
むら　はい、東海道はお定り二百文でござりますわいなあ。
勘太　晝辨當はつきますかね。
むら　お望みなら差上げませうわいな。
勘太　大きさはどの位だな。
いね　どのやうにでも結んで上げませうわいな。
勘太　梅干と澤庵をいれて、尺二寸廻し位に結んで下せえ。
せん　かしこまりましたわいな。
勘太　それ極めたら草鞋をぬぐべい。（ト草鞋を脱ぎ足を洗ひながら）間違はぬやうにして下せえ。

せん　いえ〳〵間違ひはいたしませぬわいな。
勘太　好いのなら間違つてもだいじない。
小女　この人は慾ばつた人だ。
むら　これはしたり、お客樣に向つてどうしたものだ。さああなた奥へおいでなさいまし。
勘太　どりやお世話になり申さう。
むら　これ、御案内申しや。
小女　あい〳〵、

ト小女先に立ち勘太奥へ入る。と花道より十兵衞脚絆草鞋一本差し、合羽をつけし割掛の荷を擔ぎ。菅笠を手に持ち出來りて、

十兵　やれ〳〵日が短くなつた。今日は府中まで行けるだらうと思つたが、鞠子泊りで丁度好い。
いね　（十兵衞の近寄るのを見て）もしお泊りぢやござりませぬか。
十兵　あい、泊るのだが、一人旅だがいゝかえ。
いね　あなた方ならよろしうござりますとも。
せん　さあ、おあがりなさりませいな。

十兵　それぢやあお世話になりませうか。
いね　お荷物をこちらへ遣はされませ。
せん　お泊りでござりますよ。
　　トおむら出て十兵衞の荷物をおいねより受取る、十兵衞腰をかける、おせん盥を持來り草鞋をとり十兵衞の足を洗ふ、奧より小女茶を汲んで來る。
小女　はい、お茶をおあがりなさりませ。
十兵　あい、おかたじけ、(卜とつて呑む。)
むら　今日はお天氣でよろしうござりましたが、どちらからお立でござりました。
十兵　掛川から立ちましたが、大きにおそくなりました。
むら　いえ〳〵それではお早うござりましたわいな、お客樣にお氣の毒でござりますが、今晩はお泊りが多うござりまして、お座敷が込み合ひます故、お合宿にお願ひ申したうござりますわいな。
十兵　そりやあだいじござりませぬ。私も一人だから賑やかなはうがよろしうござります。(卜足を洗ひ上る。)
むら　お一人故、お大切な品はお預かり申しませうわいな。

十兵　なに荷物の中は着替ばかり、お預け申すほどの品でもござりませぬ。
いね　お風呂がよろしうござりますが、直におめしなさいますか。
十兵　ちと風氣故、湯は止しませう。
いね　左樣なら、お座敷へ御案內致しませうわいな。
十兵　どれ、草臥を休めようか。
三人　さあ、おいでなされませいな。
ト宿場の騷ぎ唄にて、この道具廻る。

（藤屋座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面床の間、上の方一間次の間仕切りの襖、下の方一面に障子立きり、角行燈をおいてある。こゝにがら熊、消炭の龜江戶つ兒の勇み裝にて、しかみ火鉢にあたり茶を吞みゐる。上手に薩摩侍新吾大髻の頭にて、懷中鏡にて鬚を拔きゐる。此の脇に大阪者太郞兵衞小さな板にて底まめの藥をねつてゐる。下手に勘太煙草を吞み、この傍にどんどろ坂の兵藏江戶近在の若い者の打扮、小楊枝を遣ひゐる。この模樣にて道具留る。

熊　もし大阪の肥つたお方え、お前何を練んなさるのだ。
龜　えゝ意地きたなしめ、喰物なら、喰はうと思つて。

太郎　いや、わしは底まめをとがめて、えらう難儀をしましたさかい。吹殼を練つて附けますのぢや。
熊　底まめなら、いゝ藥があつたつけ。
太郎　さよかな、どないな藥がありますな。
熊　節分の 柊 を黒燒にしてつけるといゝ。
勘太　はあゝ、柊が底まめの藥になりますかな。
熊　なるどころか、底まめでも手の豆でも、豆一通りの妙藥だ。
新吾　くや〳〵若い者、豆一通りの藥とあるからは、四つ目屋の代りには相ならぬかな。
熊　そりやあもう豆と名のついたものなら、何豆にでも利きます。
兵藏　何で柊がそんだに利くだんべい。
熊　知らねえか、豆なら柊（豆殼柊）と言はァ。
龜　株ウ言つて言やあがらあ。
皆々　はゝゝゝゝ（ト笑ふ、新吾腹を立つて）
新吾　うぬ、武士たるものを嘲弄いたして、ふとかい奴だ、頭打ち斬るぞ。
熊　はあゝ、眞平御免なせえ。びんた打ちきられてたまるものか。

龜　これだから、つまらねえ口をきくなといふのだ。もし、旦那どうぞ御了簡なすつて下さりませ。

新吾　以來きつとたしなみをらう。

　　ト睨みつける、この時奥より提婆の仁三上方商人の扮裝にて、手拭を持ち、湯上りの態にて出來る。

仁三　どなたもお風呂がようわいてをりますが、どうでござります。

太郎　おゝ京のお方、どこへおいでぢやと思ふたら、風呂へおいでゞあつたかな。

仁三　今よう空いてをりますが、お入りなされませぬか。

太郎　いや、私は底まめをとがめて、よう風呂へ入りませぬわいの。

熊　もし、底まめの藥なら、

龜　また四文と出かけるか。

勘太　なるほどお江戸のお方は性懲もないことぢや、はゝゝゝ。

　　ト下手よりおいね先に十兵衞出來り、

いね　もし皆樣、お狹うござりませうが、もうお一人お願ひ申しますわいな。

新吾　くや／＼外の者の頼みなら罷りならぬ所なれど、おぬしが頼み故承知いたす替り、わい共が頼みも承知いたすであらうな。

いね　そりや魚心ありや水心でござりますわいな、ほゝゝゝ。さあ、あなた此方へお入りなされませいな。
十兵　へい、どなたも御免なされませ。
仁三　さ、御遠慮なう火鉢のねきへお寄りなされ。
十兵　有難うござりまする。
いね　左様なら、皆樣お願ひ申します。
新吾　くや〳〵わい共が頼みも承知であらうな。
いね　知りませぬわいな。

トおいね奥へ入る、がら熊十兵衛を見て、

熊　龜や見や、この旦那は江戸つ兒だな。
龜　さうよ、江戸に違えねえ。
熊　どうでも江戸面は違ふな、きりゝしやんとしまつてゐらあ。
龜　これ、他國の人もゐらあ、あたり障りになることを言ふなえ。
熊　言つてもいゝや、違ふから違ふと言ふのだ。上方の贅六などゝ一つになるものか。もし旦那え、

お前さんは江戸でござりませうね。

十兵 左樣でござります、私は柴井町の者でござります。

熊 有難え、江戸兒が來たので話しが出來らあ。もしわつちらあ神田竪大工町で大工でござりますが、何事も胸に思つてゐることができませず、がら〳〵するのでがら熊と申します。又この野郎はつまらねえことをぶつ〳〵と憤りやすから消炭の龜と言ひやす、(安政の)地震この方長い錢をとつたとこから、伊勢參宮に出かけやしたが、京、大阪ですつて仕舞ひ、つまらなく江戸へ歸る道さ、何と皆さん、今夜は落噺しの三十石のやうに、國々の噺でもしようぢやござりやせんか。

仁三 はあゝ、そりやよい思ひ附ぢや、どうで宵から寢られもせず、

太郎 さよぢや、どこの方か知れもせぬ方とこないに合宿するといふも、いはゆる他生の緣とやらぢやなあ、申し、

勘太 さうでござる。一樹の影のいちごの流れとかいふことがござる。

兵藏 そりやあ爺さん、權現堂の切れた時かね。

勘太 大方さうだんべい。

十兵 これはつんぼう話しだの、あはゝゝゝゝ。

新吾　くや〱お手前は大阪の者ぢやさうなが、大阪はどの邊でござるな。
太郎　私でござりますか、大阪心齋橋通り南へ入り地へ下る東へ三軒目で加賀屋太郎兵衛と申しまする。
新吾　はあゝ、太郎兵衛かゞやと申すはお手前がことか。
太郎　御冗談おつしやりますな。
十兵　（勘太に向ひ）もしお前さんはどちらでござりまする。
勘太　わしやあ日光男體山の麓、土井遠江守樣御城下より三里の在、出津村百姓どんどろ坂の勘太郎と申します。
十兵　はあ　日光在でござりますか。してお上りでござりますか、お下りでござりますか。
勘太　伊勢參宮に上りでござります。
熊　おい、そつちの勇みの兄い、何處だ。
兵藏　おらか、おらあ江戸さ。
熊　何だ、江戸だ。受取りにくい江戸だな。
龜　引を立てにやあ、通用はむづかしい。
熊　兄い、お前江戸は何處だ。

兵藏　竹の塚さ。
熊　道理でをかしいと思つた。もしお侍様え、あなたアどちらでござります。
新吾　わいどもは薩州鹿兒島アの者なるが、劍道修行の爲めに日本六十餘州武者修行に歩く者なアるが執心なら一本まゐらうか。
ト熊の鼻の先へ鐵扇を出す、熊びつくりして、
熊　まつぴら御免なされませ。
ト此中仁三日記帳を附けてゐる、十兵衞見て、
十兵　もし、そこに帳をつけておいでなさるお方、お前樣はどちらでござりまする。
仁三　はあ、わたいでござりますか、わたいは京都下立賣松原上る所で、小間物を商賣致します仁兵衞と申しますものでござります。
熊　もし、京のお方へ、帳はいつでも附けられらあ、こゝへ來て話でもしなせえな。
仁三　はゝ有難うおますが、日記を附けます故、その晩に附けませぬと、つい附落してなりませぬ。それにまだ當宿へ狀を言傳つて參りました故、一寸屆けて參りましてゆつくりとお話しいたしませう。

熊　それぢやあ早く行つて來なせえ。

仁三（帳面を懐ろへ入れ、手紙を持つて）さよなら、直行つて參じます。どなたもお話しなされませ。

ト下手に入る。

新吾　こや〳〵若いの、宵の間に盲目がをつたではなかつたか。

熊　あい、飯は宵に喰ひやした。

新吾　えゝこや、盲目がをつたではないかといふこつちや。

熊　分からねえ、めしは喰つたといふに。

十兵　あゝもし神田のお方、その盲目とおつしやるは盲人のことでござりまする。

新吾　盲人とは何のことだ。

龜　大方唐人の親類だらう。

兵藏　盲人とはめくらのことだ。これでも引をたてずば通用はしますべいか。

熊　附目でいふから分からねえ。

太郎　ほんに、あの宵にゐられた按摩さんは何處へ行かれたらう。

勘太　たしか、隣り座敷で療治をしてゐましたつけ。

熊　如才ねえ、唯は通さねえな（ト奥へ向ひ）おい、按摩さん〱。
文彌（奥にて）はい〱、お療治なら今しまひますと參ります。
熊　面白え話があるから、そんな引けたことを言はねえで、早く來なせえ。
文彌　唯今しまひますと、直まゐります。
熊　もし、柴井町の旦那え、何處が何だのかんだのといつても、江戸ぐらゐなとこはございませんね。
十兵　そりや江戸ばかりいゝといふ譯もないが、誰しも故郷ほどいゝ所はないもので、大阪の方は大阪京の方は京、江戸で生れたものは實に江戸がいゝのさ。
熊　いゝの何のといつて較べものになりやおしねえ。もし大阪の肥つたお方え、
太郎　いやも、その肥つたお方は置いて貰ひたいな。
熊　そんなら、どぶつなお人かね。
龜　なほ惡いや。
熊　もしお前江戸へ行きなすつたことがあるかしらねえが、江戸から見りやあ京大阪なぞはくだらねえ所だ。
龜　これさ、くだつてもくだらなくつてもいゝぢやあねえか、腹を立つと惡いわえ。

熊　腹を立つたつてかまふものか、江戸に較べりやあくだらねえ所さ。
太郎　なるほどお前の言はしやる通り、私も今度お江戸見物して來ましたが、實にえらいとこぢやて。
熊　天下のお膝下だ、えらからうが。
太郎　いやもえらい犬の糞ぢや、どこもかしこも犬の糞で、あれがほんの武藏國江戸ぢやない嘔吐ぢやがな。
熊　なんだ、この土左衛門め、途方もねえことを言やあがるな。これ、犬も喰へものがあるから糞もたれらあ、茶粥ばかり喰やあがつて、鰻の頭を賞翫するとことは譯がちがわア。初鰹が三分しても片身は犬にくれてやらあ。惡くごた〳〵ぬかしやあがると、横ぞつ方を蹴破つて風穴を明けるぞ。
太郎　いや、どえらいたんくはぢやな。
熊　何がどうしたと（ト熊立ちかゝるを皆々捨ゼリフにて留める。）
十兵　これさ、つまらない事を言募つて喧嘩をしてはみつともない。お互ひに旅のことだ、まあ〳〵ふせうしなさい〳〵。
熊　何さ、大きな聲をしたくもござりやせんが、あんまり江戸馬鹿にしやあがるから。

龜　これ、いゝかげんにしろえ、柴井町の旦那が口をきいておいでなさらあ。

熊　旦那大きに有難うござりまする。

勘太　いやも、誰でも各自の國を惡く言はれると、腹の立つものぢや。然し何處がえゝの、彼處がえゝのと言ふたとて、えいと言ふたらわしらが國日光を見ぬ中は、けつこうとは言はれぬ。

十兵　これはしたり、又お前が初めなさるか。

新吾　わい共いまだ日光は見ぬが、結構なのは國元の武者小路、江戸の大名小路よりはるかに立派ぢや。嘘ぢやと思ふなら、今から薩州へ行て見て來るがいゝ。

熊　誰が見に行く奴があるものか。

龜　えゝ、だまつてゐろと言ふに、

十兵　さあ〳〵もう〳〵喧嘩はしつこなし〳〵、
　ト合方きつぱりとして、奥より文彌、風呂敷包みを腰へ結び、さぐり出來り、

文彌　だいぶお賑やかでござりますな。

熊　おゝ按摩さん來なすつたか。さあ〳〵こつちへ出ねえ〳〵。

文彌　はい、出ましてもよろしうござりまするか。

熊　いゝどころか、座頭の中座敷ずいと出なせえ。
文彌　左様なら御免なされませ（ト前へ出る。）
熊　按摩さんといふものは、勘のいゝ者だが、お前なぞはまあどこがいゝと思ひなさる。
文彌　はい、どこもよろしうござります。
熊　おつウ、胡麻をするの。
文彌　いえもう胡麻とやらではござりませぬが、眼の見えませぬ一德は、どこでも同じことでござります。
新吾　くりや座頭の坊の申す通り、關東の若い者なぞも盲であつたらよかつたに。
熊　大きにお世話だ。
勘太　いや、この按摩さんは如才ねえ按摩さんだ。
十兵　どうか療治も上手さうだ、ちつとばかり肩をつかんで貰ひたい。
文彌　かしこまりましてござります。
十兵　どなたも御免なされませ。
文彌　（十兵衞の後ろへまはり肩を揉みながら）旦那、お前さんは江戸でござりますな。

十兵　あい、わしは柴井町さ。
文彌　はあ、柴井町の旦那といふはお前さんでござりましたか。それぢやあ私は御近所でござります。
十兵　お前はどこだえ。
文彌　片門前でござりまする。
熊　もし柴井町の旦那え、この按摩さんで洒落ができやした。
十兵　はあ、何といふ洒落が出來ました。
熊　按摩旅を見ず、といふのだ。龜、どうだよからう、眼が見えねえから按摩旅を見ずさ。
龜　そりやあ分かつたが、心は何といふのだ。
熊　分からねえ野郎だ、いつでも隣の娘がさらつてゐらあ、鳴は瀧の水、按摩旅を見ず。
龜　あんまに悪い洒落だな。
熊　悔しくば誰でもやつて見ねえ、これでも隨分苦しんだのだ。
太郎　私も一つ洒落ませう。あんまと首尾よく寶藏へ忍び込みとはどうだね。
熊　べらぼうに長い洒落だ。
兵藏　短く言へば、あんまの天人かね。

熊　面白くねえの。
勘太　そんなら、座頭附けてあんま(も)をくふといふのはどうだんべい。
熊　こりやあ小父さん、下にはおけねえ。
勘太　二階へでも上るべいか。
熊　どうとも勝手にしなせえな。
新吾　わいども、一つ洒落申さう、あんまに杖ない胴慾だとは、どうぢや〳〵。
十兵　これは秀逸でござります。
熊　旦那も隅にはおけねえわえ。
新吾　然らば眞中へはじけ出ようか。
熊　はじけ出られてたまるものか。
皆々　はゝゝゝ。
文彌　あんまり皆さんが、あんま〳〵とおつしやるので、私は嚏をしつゞけで、ハツクシヨ、どうか風を引いたやうでござります。
十兵　旅で煩らつてはいかない、振出藥でも呑みなせえ。

文彌　ありがたうござりまする

太郎　ときに、もう寢ながら話しとしてはどうでござりませう。

兵藏　それがようござりまする。私などは無口だから默つてゐるせいか、眠くなりました。

熊　　何にしろ、床をとつて貰はう。

　　　　　卜がら熊手をたゝく、奧よりおいれ、おせん出來り、

兩人　はい、御用でござりますか。

熊　　おら達はどこへ寢るのだ、床をとつてくんな。

せん　はい〳〵かしこまりました。あなたと大阪のお方とお侍樣は、こちらへおいでなされませ。

太郎　どうでも江戶さんとはのがれん仲かな。

熊　　又寢ながら喧嘩をしやせう。

勘太　これ、わしどもはどこへ寢るいぢやな。

いね　お前さんは按摩さんと御一緒に、このお隣りへお休みなされませ。（卜十兵衞に向ひ）あなたは京のお方と、こゝへお休みなすつて下さりませ。

十兵　あい〳〵承知しました。

兵藏　おらあどこへ行くのだな。
せん　お前さんはお江戸でござりますから、お江戸のお方と御一緒がよろしうござります。
兵藏　有難え、江戸は江戸連れだとよ。
龜　何でもいゝから、早く行つて寢よう。
兩女　さあ、おいでなされませいなあ。
ト宿場の騷ぎ唄にてわや〳〵とおせん先に新吾、太郎兵衞、熊、龜、兵藏等下手へ入る。おいねは勘太郎を連れて上手へ入る。この中始終文彌、十兵衞の肩を揉んでゐる。
十兵　やれ〳〵大風の吹いたあとのやうだ。
文彌　やうやく靜になりました。
十兵　ときに、按摩さんもういゝ、しまひな。
文彌　いえまだ、下を揉みませぬ。
十兵　下はいゝから早く行つて休みなせえ。それ五十あるよ。(ト財布より錢を出し渡す。)
文彌　いえ、これでは多うござりまする。
十兵　なに少しばかり、とつておきねえ。

文彌　それは有難うござりまする。

いね　（出來りて）さあ、按摩さん、お前はこちらへござんせいなあ。

文彌　はい〳〵。左樣なら旦那樣、お休みなされませ。

十兵　大きに御苦勞であつた。

いね　どれ、手を引いて上げようわいな。

　トおいね文彌の手を引き上手家體へ入る。下手よりおせん夜着蒲團を持つて來て敷き、

せん　旦那、お床を延べましてござります。お休みなされませいなあ。

十兵　あい〳〵、京のお方はまだ歸んなさらねえか。

せん　はい、まだお歸りなされませぬわいな。

　ト言ひすてゝ入る。時の鐘鳴る。十兵衞床の上へ上り、鼻紙を出して枕へ當てながら思入あつて、

十兵　あ世の譬にもある通り、旅は辛いものだといふに、とりわけ辛いこの十兵衞、せつぱつまつた金の無心に、わざ〳〵京までのぼつたところ、當にしてゐた藤助が死んで間もなき初七日に行合はして、向うよりこつちが先へ力落し、南無阿彌陀佛もしんそこから、ツイ二七日三七日と二十日餘りも逗留したれど、馴染も薄い女房に金の無心を言はれもせず、詮方なさにすご〳〵と歸りは

歸つて來たけれど、家へ歸つて女房に京三界まで駈け歩き、其の算段ができぬかと思はるゝのが面目なく、江戸へ段々近附くのが却て苦勞に夜の目さへ合はぬ此身の胸算用、あゝ寢つかれずとも横になり、どれ、足でも休めようか。

ト十兵衞夜着を着て寢轉ぶ。下手の障子を明けて仁三出來り、

仁三　もうお休みなされましたか。

十兵　(床より顏をあげて)御免なせえ、今寢ました、だいぶおそうござりましたな。

仁三　いやもう、夜といふものは知れにくいもので、手紙一本で太う暇どりました。

十兵　さあ〳〵早くお休みなさい。

仁三　どれ、ふせりませうか。

ト仁三寢轉ぶ。時の鐘。ばた〳〵になり下手より新吾おいねを追ひかけ出來り袖を捉へて、

新吾　おのれ、逃げるとて逃がさうか。

いね　あれ、お放しなされませいな。

新吾　いや〳〵放さぬ〳〵、おのれ武士たる者に約束の變替いたいて、濟まうと思ふか。

いね　いえ〳〵、そのやうなことを申した覺えはござりませぬわいな。

新吾　なに、ないことがあるものか、それが不承知なことならば、こゝへ今夜泊りはせぬわ。

いね　いいえ、もうどのやうにおつしやりましても、私は存じませぬわいな。

トおいね新吾を振拂ひ奥へ逃げて入る。新吾捨ゼリフにて追ひかけて入る。仁三顔を上げて、

仁三　いやも旅籠屋といふものは、とつともう夜通しそう〴〵しいものぢや。もし江戸のお方、お休みなされましたか、もし〳〵。あゝ晝の勞れでよう寢られたやうぢや。（ト床の中で腹這ひに起き、十兵衞の寢息を考へ）どりや一服喫みませうか（ト煙草をつぎ、火入れへ手をかざし見て）あゝ火入の火が消えてしまつた、くさいが行燈でつけようか（ト行燈の灯で附けようとして灯を消し）こりやしまうた、行燈まで消えてしまうた。

ト時の鐘、凄き合方になり、仁三起上り脚袢を穿き身拵へをする。十兵衞頭をあげ伺ひゐる。仁三拔足をして十兵衞を跨ぎ、上手へ行かうとして十兵衞の包みに躓づき。取りのけようとするを十兵衞此の包みを押へゐて、ぐつと引く。仁三びつくりなして逃げようとするを十兵衞捉へようとし、仁三振拂はうとして立廻り、十兵衞仁三を押へて、

十兵　盗人が入りました。皆さん起きて下さい、御亭主灯りを、早く〳〵。

トばた〳〵になり下手より藤屋の亭主四郎兵衞手燭を持ち、おむら等以前の人々思ひ〳〵の寢起の裝

にてうろたへながら出來り、

皆々　どろばう〳〵（ト捨ゼリフにあちこちなす。）

熊　どろばうはどつちへ逃げやした。

新吾　わいども頭打ちきつてやらうと思ふたに、

十兵　いや、お案じなされますな、盗人は私が押へてをります。

太郎　やあ、こりや關東のお方か。

勘太　お手柄でござりました。

四郎　これは〳〵江戸のお客様、ようとり押へて下さりました。

むら　皆さん、お座敷に遭難はござりませぬか、お改め下さりませ。

太郎　さうぢや〳〵、めん〳〵の荷物を改めねばならぬ。

ト皆々よろしく荷物を改める。

新吾　やあないわ〳〵、わい共の大小がない。

太郎　さうおつしやれば、わしが越中褌が見えない。

熊　大方この野郎が盗んだに違えねえ。

龜　構ふことはねえ、たゝきしめろ〳〵。
兵藏　棒しばりにして、肥溜へたゝつ込め。（ト皆々わや〳〵いふ。）
四郎　まあ〳〵お靜になされて下さりませ。
勘太　何にしろお侍様の大小がなくなつては大變だ。
新吾　武士たるものゝ魂を盜むといふがあるものか、ふとかい奴め、覺えてをれ。
ト有合ふ枕にて仁三の頭をうつ、これにて額へ疵つき、仁三手拭にて押へる。
十兵　これはしたり旦那樣、額へ疵が附きました、手あらいことをなされますな。
新吾　やあ、大小を盜んだ故、打殺してもだいじない。
むら　あゝもし旦那樣、あなたのお腰は後ろへまはつてをりますわいな。
新吾（後ろへ廻りし大小を前へ廻し）やあ、これは後にあつたか、然らば何も遭難はない。
太郎　たゞ、私が褌が見えぬばかりぢや。
四郎　もし、お前樣の鉢卷にしておいでなさるのは、そりや褌ぢやござりませぬか。
太郎　やあ、こりや手拭と間違つたと見える。
十兵　それぢやあ此奴が盜んだは、私が所持の包みばかりか。（ト風呂敷包をとつて見せろ。）

熊　何にしろ太え奴だ。どんな面だか、面を見てやらう。（ト仁三の顔を上げ見て）やあ、こいつあ宵に泊つた上方者だ。
太郎　いや、油斷もすきもならぬことぢや。
四郎　（前へ出て）いえ、皆樣御苦勞をかけまして、甚だ申譯もござりませぬが、今日は據なく、私が留守故、かやうな者を泊めましてござります（トおむらに向ひ）これだから平生言はないことぢやない、おれが留守なら氣を附けろと言つておくのに。
むら　それぢやといふて、商人風のお方ぢやもの、盗人と知れるものかいな。
四郎　その盗人と知れぬ者を知るのが旅籠屋商賣ぢや。
むら　知れぬものを知れとは、そりやお前が無理ぢやわいな。
四郎　汝、亭主に口答へするな。
十兵　これさ〳〵御亭主、夫婦喧嘩は後にして早く盗人の方を附けて下せえ。
四郎　はい〳〵、よろしうござります。皆樣への申譯に、簀巻にして阿部川へ投り込みます。
熊龜　こいつあ面白い、手傳つてやらう〳〵。
仁三（顔を上げ、江戸口調にて）もし、どうぞ勘忍して下さりませ。今日から心を改めまして、決して盗

みはしませぬから、命ばかりはお助けなすつて下さりませ。

十兵（これを聞き合點の行かぬ思入にて）もし、皆さんお聞きなされましたか、上方者だと思つたら、こいつあ江戸つ兒でござりますぜ。

勘太 ほんに、今の言葉のやうす。

太郎 江戸なまりに違ひない。

仁三（思入あつて）へい、何をお隱し申しませう。生れは江戸でござりますが、身性がわるさに喰ひ詰めて、せうことなしに故郷を立退き、今では五十三次でほんの便の旅稼ぎ、胡麻の蠅でござります。

新吾 やあ、扨はおのれは胡麻の蠅か、當年四十三歳に罷りなれど、胡麻の蠅は初めて見た。

十兵 五十三次を股にかけて稼いで歩く胡麻の蠅が、着替ばかりのこの包みを何で目がけて盗んだのだ。

仁三 いゝえ、私が目がけましたは、お前樣の荷物ぢやあござりませぬ、襖をへだてゝ隣りにゐる座頭さんの包みでござりまする。實は神奈川からつけて來たが、どうもこれまで間が惡く、今夜といふ今夜こそ仕事をしようと思ひのほか、柴井町の旦那樣の荷物へ足のさはつたが此身の不運捉へられ、惡いことはせぬものと眼が覺めましてござりまする。

十兵　むゝ、そんなら隣りの座頭どのゝ包みを目がけて附けて來たのか。
仁三　今夜で三晩めでござります。
熊　うぬ、眼も見えねえ按摩のものを取らうとは、太え奴だ。
龜　江戸つ兒の面を汚しやあがつた代り、袋だゝきに毆きしめるぞ。
四郎　あもし、まあ〳〵お待ち下さりませ、こゝで打殺しでもいたしますと私の迷惑、皆樣のお腹癒せには、簀卷にして阿部川へどんぶりとやりますから、どうぞお靜になされて下さりませ。
仁三　（十兵衞に向ひて）もし、柴井町の旦那樣、盜人とは申しながら何一品とりませねば、あなた樣のお執成で、どうぞ命の助かりますやう、お慈悲でござりまする、お願ひでござりまする。

トしほ〳〵といふ、十兵衞思入あつて、

十兵　何と皆さん、憎い奴でござりますが、御連中に何一品失くなつたものもなければ、所謂罪を憎んでその人を憎まずとやら、どうか御勘忍なすつて、助けてやつては下さりませぬか。
太郎　いやもう捉へたお前がその心なら、堪忍せいで何としませう。
勘太　兎角世の中は堪忍が第一、されば往昔奈良の堪忍と駿河の堪忍とが相談して、中に天神が寢てござつたといふ譬がある。

兵藏　何を言はつしやるのだ。
十兵　もし、鹿兒島の旦那樣、あなたも御堪忍下さりますか。
新吾　わいども了簡のならぬところなれど、お手前に免じ了簡致し申す。
十兵　神田のお方もよろしうござりませうな。
熊　　簀巻にするなら手傳つてやらうと思つたが、皆さんが御承知なら御多分にやあ洩れますまい。
十兵　ときに宿の御亭主、皆さんも御承知故、お前もどうぞ了簡して助けてやつて下さりませ。
四郎　いえもうお前樣の御挨拶と言ひ、皆樣が御得心なら、何の事を好みませう。
むら　そんならお助けなされて下さりますか、やれ〳〵嬉しや、家から科人を出すことかと大てい案じたことぢやござりませぬわいな。
四郎　これ、よく聞けよ、皆樣方が御不承知なら、いやでもおうでも簀巻にして、阿部川へ打込む所危い命を助かつたも柴井町の旦那を始め、皆樣方のお蔭故、よくお禮を申すがよい。
仁三　(皆々へ向つて)へい、柴井町の旦那樣、どなた樣も此御恩一生忘れはいたしませぬ。え丶有難うござりまする。(ト仁三ひれ伏す、十兵衞思入あつて、)
十兵　人間僅五十年、半分寢て暮す時は二十五年の命だから、この後心を改めて、だいじに命を持つが

い〻。

仁三　(顔を上げ、涙を拭ひて)いえもう、これに懲りぬことはござりませぬ。簀巻にされて阿部川へ打込まれて御覽じませ、罪の深みに浮みもやらず、底の藻屑となるところ、旦那樣のお情であぶない命を拾つた上は、惡い心は阿部川へ簀巻にして流してしまひ、今日から此身は生れ替り、心ゆがまぬ肩に棒、當て〻なりとも堅氣になり、三尺店でも持ちましたら、きつと御禮に上ります。

十兵　なにその禮には及ばねど、これからこなたが心を入替へ、堅氣になるのが何より禮、必ず人とならつしやい。

仁三　あ、しんみも及ばぬそのお詞、有難涙がこぼれます。(ト涙を拭ふ。)

四郎　いや、夜更とは言ひながら、油斷のならぬ壁に耳、

むら　夜明けぬ中に少しも早く。

仁三　さやうなれば、皆樣方。

十兵　縁があつたら、

仁三　その中お目にか〻りませう。

ト仁三しほ〳〵と下手へ行き、ちよつと舌を出し、肩で笑つて下手へ入る。

四郎　扨々柴井町の旦那樣、あなた樣のお蔭にて、何一品とられませず、
むら　此のやうな有難いことはござりませぬわいな。
勘太　いやも、御亭主より泊り一同厚うお禮を申さねばなんめえ。
太郎　同じ江戸さんでも、がら熊さんとはえらい違ひぢや。
熊　何だ、えらい違ひとは、どう違ふといふのだ。
新吾　まあ、物に譬へて見ようなら、泥龜にお月樣、下駄に燒味噌かな。
熊　どつちが鼈でどつちがお月樣だえ。
兵藏　そりやあ言はずとも知れたことだ、お前等が鼈さ。
熊　何だ、この竹の塚め、鼈とは誰がことだ。（ト立ちかゝるを皆々留める。）
十兵　これはしたり、又つまらねえことを言つて、喧嘩をするのか。
四郎　まあ〳〵お靜になされて下さりませ。
太郎　お前方は寄ると觸ると、言ひ爭うては喧嘩ばかり、
新吾　物に譬へて見ようなら、犬と猿のやうだ。
熊　どつちが犬で、どつちが猿だえ。

十兵　また始めたのかな。
新吾　さあ、お手前がきやつきやといふから、猿でもあらうかい。
勘太　なるほど、思ひなしか猿に似てるやうだ。
熊　何だ、猿に似てゐる、この唐變木め、途方もねえ事をぬかしやあがる。有難くも尊くも江戸の大芝居の役者で、中村鴻藏といふ大立者に似てゐるのだ。
太郎　そないな役者がありますかいな。
熊　あるかないか、眼を明いて見やあがれ。
四郎　まあ〳〵お待ちなされませ。その鴻藏といふ役者があるかないか存じませぬが、まあ、あるとして御了簡なされませ。
熊　何だ、あるとしてとはをかしな白だね。
むら　まあ、よろしうございます。家の人は芝居が嫌ひ故、役者はとんと存じませぬが、その鴻藏は能い男で、私なぞは大贔屓でございますわいな。
熊　いや、お上さん、お前は眼の明いた人だが、御亭主は盲目同然だ。なんであんな御亭主を持ちなすつたのだ。

四郎　これは御挨拶だ。
十兵　いや、盲目と言へば、隣り座敷の按摩さんはどうしましたらう。
太郎　この騷ぎに出て來ぬとは、
勘太　どうかいたしはしませぬか。
ト勘太襖の隙より覗く。これにてこの道具少し廻りて、上手の家體を見せろ、中に文彌すつぼり蒲團を被り寢てゐる。
はあ、蒲團を被つて寢そべつてゐ申す。
十兵　まさか、寢入つてゐもしまい。
熊　どれ、行つて起してやらう。
ト熊上手の障子家體へ入り、蒲團を引きめくろ、内に文彌包みを抱へ、うつむきゐて、
文彌　あゝ、どろばうが入りました〳〵。（ト慄へゐるを、熊手をとつて）
熊　これさ、もうどろばうはゐねえよ。
勘太　安心してこつちへござらつしやえ。
文彌　はい〳〵、左樣なら、もう盜人はをりませぬか、やれ〳〵嬉しや、それで落着きました。

ト　さぐり〳〵中央へ出る。

十兵　それぢやあお前もさつきから、寢てゐたのではなかつたか。

文彌　どういたして、寢るどころぢやござりませぬ。最前からの樣子をば襖越しに聞きました。怖うて怖うてなりませぬ故、蒲團を被つてをりました。いや手前の申すことばかり申して、柴井町の旦那樣え、あまたのお蔭で助かりました、有難うござりまする。

十兵　定めて聞いてゐなすつたらうが、お前を狙けて來たさうだが、何と怖いことぢやあないか。

文彌　皆樣方と違ひまして、目の不自由な私故、一倍怖うござります、どうぞ柴井町の旦那樣え、あなたのお傍へ寢かして下さりませ。

十兵　さあ〳〵遠慮なしに、こゝへ來て寢なさい。

文彌　有難うござります。

四郎　ときに皆樣方、まだ七つ前でござりますれば、御安心なされて一寢入りお休みなされませ。

むら　どうぞ明朝は御ゆるりとお立ちなされて下さりませ。當所の名物でござりますれば、とろゝを差上たうござりまする。

新吾　わいども、とろゝは大好物、麥飯なれば猶えいが。

熊　おれもとろゝは大好きだ。
太郎　左樣なら柴井町の旦那。
勘太　お蔭で難をのがれました。
兵藏　大きに有難うござりました。
十兵　明朝お目にかゝりませう。
四郎　さあおいでなされませ。
ト皆々下手へ入る。後十兵衞、文彌殘り、
十兵　さあ〳〵按摩さん、こつちへ寄んなせえ。いや、按摩さんといふも言ひ憎ひが、お前の名は何と言ひなさるえ。
文彌　はい、私は文彌と申しまするが。して、旦那樣には何とおつしやります。
十兵　私は伊丹屋十兵衞といつて、居酒屋商賣をしてゐます。
文彌　へえ、十兵衞樣とおつしやりますか。
十兵　聞けばお前は片門前だといふことだが、旅稼ぎに出なすつたのか。
文彌　いいえ、師匠の用事がござりまして、京へ上ります者でござりますが、覺えたこと故療治をしなが

ら參ります。
十兵　何にしろ、眼の不自由な身で京まで行くは、物騷なことだ。
文彌　左樣でござりまする。こつちは少しも存じませぬが、今の奴も神奈川から狙けて參つたさうでござります。（トこれにて十兵衞南無三といふ思入あつて、）
十兵　こりやとんだことをしたわえ。
文彌　どど、どうなされました。
十兵　あゝ下素の智恵は後からと、今こゝの家の亭主が簀卷にして阿部川へ流すと聞いて不便になり、合宿衆に詫言して胡麻の蠅を助けてやつたが、神奈川から鞠子まで狙けて來たとあるからは、路用を遣つて來た仕事、これから心を改めて盜みは一切しませぬと涙をこぼして言つたのも、大方此の場を退かう爲め、先へ廻つてこなたをば待伏せなすに違ひない。早くこゝへ氣が附いたら、彼奴を縛つて問屋場へ四五日の中預けて置き、その間にこなたを立たせればよかつた。今更言つても死んだ子の年齡、えゝ悔しいことをしたわえ。
ト十兵衞悔しき思入、この中文彌苦勞なるこなしにて、
文彌　そりやお前樣のおつしやる通り、待伏せしてをるに違ひはござりませぬ。ひよつと彼奴にこの包、

みを取られた時は、生きても死んでも、

十兵　え、

文彌　いえ行くことも歸ることもなりませぬ。もし伊丹屋の旦那樣、あなたは御了簡深いお方故、どうか此の難儀をば退れやうはござりませぬか、お考へなされて下さりませ。

十兵　さあ、別に考へやうもないけれど、人によつては七つ立とか六つ立とか、又泊りも何時と極めてする人があるが、お前は是れまでどうであつたえ。

文彌　はい、目の不自由な者故、朝は大槪五つ立、暮れは七つ半に泊ります。

十兵　むゝそれぢやあ、彼奴も神奈川からこゝまでこなたを狙けて來る中、立や泊りも知つてゐよう、どうで網を張るからには五里六里と先へは行くまい、一里か二里の近い所に、五つに立てば一時早く六つから待つてゐるであらう。（ト思案して）それぢや文彌さんかうしなせえ、今夜もう七つ前後、直に今から立つたなら、夜が長いから夜の中に五里ぐらゐは行かれよう。夜が明けたなら駕籠に乘り、酒代を惜しまず急がしたら、九里と十里の違ひにならう。さうしたことなら脫れられよう。

文彌　（思入あつて）なるほど先へ乘越しましたら、どうか脫られませう。それに附けても旦那樣、お

慈悲深いをお見かけ申してあなたへお願ひがございまする。眼の不自由なその上に、東海道は始めて故、とてものことのお世話序に　どうぞ京まで御一緒にお連れなされては下さりませぬか。

十兵　それはお前が言はずとも、わしが上りのことならば一緒に連れて行つて上げるが、何をいふにもこつちは下り右と左りに仕方がないが、長い道中は兎も角もつい鼻の先の岡部へ行くに、二里九町といふ距離にて宇都谷といふ峠があるが、眼明なら知らぬこと杖一本つき外せば崖から谷へ眞逆さま、眼前人の難儀をば見捨てゝ行くは本意でない、わしも心の急く旅なれど、折角お前の頼み故その峠だけ送つて上げよう。陰徳あれば陽報ありと、お前を助けておいたなら、悪く此の身に報いもしまい。

ト十兵衛文彌を助けたらその報いで金ができようかとの思入。文彌嬉しく、

文彌　それはまあ御親切に有難うございまする。あなたのやうなお慈悲深いお方に出逢ふも、信心致す神や佛の皆お助、首尾よく京へ上りまして江戸へ歸りましたらば、どのやうなお禮でもいたしませうほどに、お連れなされて下さりませ。

十兵　なに、それにやあ及ばない。峠まで送つて進ぜるから必ず案じなさんな。

文彌　それなら送つて下さりますか、えゝ有難うございまする。（ト文彌悦ぶ、十兵衛手を叩きて、）

十兵　女中衆々々。（ト呼ぶ。奥よりおせん出來り）
せん　はい、何ぞ御用でござりますか。
十兵　いや、ちと急な用があつて、早立せねばならぬ故、梅干でも澤庵でも早いが御馳走、有合せでよいから、湯漬を二膳出して下さい。
せん　はい、かしこまりました。
　　ト おせん奥へ入る。この中十兵衞、文彌は脚絆など穿き、仕度をする。
文彌　あゝ何だか心がわく／＼と、忘れものでもせねばよいが。
十兵　よく氣を附けて仕度をしなさい。
文彌　はい／＼（ト脚絆を穿きしまひ、手を叩き）女中衆々々。
せん　（奥より出來り）はい、御用でござりますか。
文彌　今頼んだ湯漬はまだかな。早くもして下さい。眼の悪い者を連れて行くのだから。
十兵　これはしたり、眼の悪いとはお前のことだ。
文彌　ほんに、さうでござりました、はゝゝゝゝ。
　　ト合方にて奥よりおせん膳部を二膳持ち、おいれお櫃と土瓶を持ち來り、兩人へ出す。

せん　まだ御飯を焚きませぬから、お茶漬でござります。
いね　お急ぎ故お煮花で上げますわいな。
十兵　私は茶漬が嫌ひ故、茶をかけずに下さい。
兩人　はい〳〵（ト兩人給仕をし、十兵衞文彌飯を喰ふ。）
十兵　これ、しづかに喰ひなさい、急ぐ時には支へるものだ。
文彌　なに、大丈夫でござりまする。（トいふ中に文彌せきこんで胸に支へし思入にて苦しむ。）
いね　胸へお支へなされましたか。
せん　お茶でもおあがりなされませいな。
十兵　それだから靜に喰ひなせえといふのだ。（ト脊をたゝく、これにて胸の通りし思入。）
文彌　あゝ、ひどい目に遭うた。（とおせん茶を汲んで出す、文彌とつてぐつと呑み）あつゝゝゝ。
いね　まあ、お靜におあがりなされませ。
文彌　どうして靜にしてゐられるものか。（ト文彌又急いで飯を食ひ、胸へ支へ苦しむ。）
十兵　また支へたのか（ト脊を叩くを、木の頭。）
文彌　はあ、もう一膳下さい。

卜箸をしやに構へ、茶碗を出す。十兵衞よく喰ふといふ思入にて、ひやうし幕と山おろしにてつなぎ、直に引返す、

(宇都谷峠の場)――本舞臺正面高二重、この後ろ更に高き二重一面に畫心に岩組、杉の立樹には蔦絡みあり、上手前の方に古びたる辻堂。彼方一面に遠山を望み、夜の遠景。下手に宇都谷峠蔦の細道といふ古びたる傍示杭、總て東海道宇都谷峠の態、時の鐘山おろしにて幕明く。と上、下より○△の狩人二人出來りて、

○ やあ、山中の五郎平ぢやないか。

△ おゝ、さういふは鹿谷の四郎介か、もう何時であらうな。

○ 一番鷄が啼いたから、七つでもあんべい。

△ この間はさつぱり逢はなんだが、替ることもなかつたか、一寸尋ねに行かうと思ふが晝出るのが億劫でな。

○ さうよ、狩人と盜人は晝出ることのないものだ。

△ いや、盜人と言へば、此頃は海道筋は物騷だといふことだ。

○ そりやあ用心せずばなるまい。

△何の盗られるものもないくせに。
○かう見えても大金持だ。
△はあ、疝氣でかな。
○違ひない、はゝゝゝ。
△どれ、夜明までにもう一働きしようか。
○そんなら五郎平、
△早く歸らつしやい。
　ト上、下へ別れて入る。時の鐘、合方、幽めて山おろし、梟の聲にて花道より十兵衞、小田原提灯を提げて先に立ち、後より文彌風呂敷を斜に脊負ひ、菅笠を持ちて出來り、
十兵　これから路が險しいから、氣をつけて歩きなせえ。
文彌　有難うござりますが、眼は見えませぬが、杖があるだけ大きに歩き好うござります。
十兵　私が先へ立つて行くから、よく提灯で見て來なせえ。
文彌　いえ、私は提灯があつてもなうても同じことでござりまする。
十兵　ほんにさうであつたな（ト兩人話しながら本舞臺へ來り、文彌石に躓き草鞋の紐切れる。）あゝこれあ

ぶない、躓いたのか。

文彌　はい、躓づく拍子に力が入つて、草鞋の紐を蹈み切りました。

十兵　そりやあ、大變なことをした。買ふにも家はなし（ト思入あつて）よし〳〵こゝに錢さしがあるから、これで結んでおきなせえ。（ト十兵衞財布より緡を出し文彌に渡す。）

文彌　はい〳〵どうか療治ができればようござりますが。

十兵　ゆつくりと直しなせえ、その中一服やつてゐるから。

ト十兵衞提灯を辻堂の軒へかけ、緣側へ腰をかけ、摺火打にて煙草を喫みゐる。文彌草鞋の紐を緡にて結びながら、

文彌　まだ新らしい草鞋の紐がぶつつり根から切れるといふは、どうやら心にかゝることぢや。

十兵　何の氣にすることがあるものだ。險岨な路を歩いては草鞋は直に切れるわな。

文彌　なるほど、さうでござりませう。（ト文彌草鞋をなほし穿く。）

十兵　どうかそれで穿けさうか。

文彌　まづ間に合せに結びつけました。

十兵　そりやあよかつた、さあ〳〵こゝへ來て一服喫みなせえ。

文彌　有難うございました。（ト手拭にて手を拭き、煙草入を出し煙草をつぎ）一つおかし下さりませ。
十兵　そりやあさうと文彌さん、さつきから聞かうと思つたが、神奈川から胡麻の蠅がお前を狙けて來たといふが、背負つてゐる包みの中には、何ぞ大切なものでもあるのかえ。
文彌　（思入あつて）へい。御親切な旦那樣故、何をお隱し申しませう、背負つてをります包みの中には金が入つてをりまする。
十兵　いや失禮なことをいふやうだが、お前が持つてゐる金ならば、僅な金であらうのに、何でそれを神奈川から胡麻の蠅が狙けて來たか。
文彌　旦那樣方の御身分では僅な金でござりませうが、私などの身にとりましては、大まいの金でござります。
十兵　む、大まいの金とは、いくらそこに持つてゐなさる。
文彌　へい、百兩持つてをりまする。
十兵　えゝ（トびつくりして）はて、大そう持つてゐなさるの。（トぞつとして、金のほしくなりし思入にて）してまあ、お前は何しに京都へ、
文彌　はい、今出川の惣錄へ官位を取りにまゐりまする。

十兵 あゝ、若いとは言ひながら大まいの金を持つて、眼も見えぬ身で唯一人、東海道を上らうとは、さりとはあぶないことだの。

文彌 いえもう、人の氣の附かぬやう、汚れ腐つた古襦袢の中へ包んでおきまする。もし途中にて盗人に出逢つた時は身ぐるみ脱ぎ、路用も別に胴巻へ五兩入れてござりますれば、それを渡して襦袢だけ呉れろといふたら、氣も附くまいと思ひの外、神奈川から狙けて來るとは餅は餅屋、怖いことでござりまする。

十兵 かういふ怖い目をせずに、江戸で官位はとられぬものか。

文彌 いえ江戸でも官位はとれますが、わざ〳〵京まで參りますは、今出川の惣錄で今一老を勤めまするは、この文彌が師匠にて、もし官位でも取るならば五十や七十の金ならば貸してやらうと言はしやる故、此の百兩に五十兩借りて官位を取る積り、それ故どうも私が參りませねばならぬ仕儀連があつては却て邪魔と、人の心の附かぬやう泊り〳〵で療治をいたし、一人で京へ上ります。

十兵 さういふ譯なら仕方がない。私も知らぬが盲人の官位は高いものださうだ、譬にもいふ撿校千兩して百五十兩で取る官位は、何といふ官位だね。

文彌 へい、座頭の官位でござりまする。

十兵　はあ座頭の官位が百五十兩とか、唯一口に座頭の坊と口ではいふが、百五十兩とは、はて高いものだな。

文彌　いえもう知らぬお方は、盲人の中では座頭が低いやうにおつしやりますれど、なか〳〵以て容易に官位はとれませぬ。

十兵　はて、とんだものだ。（ト此中十兵衞始終文彌の包みへ思入あつて金のほしきこなし、）知らぬ先は兎も角も、聞いて見れば危險なのはこなたが背負つてゐるその百兩、今夜のほどは脱れても、その百兩を盜まれたら、こなたは何とする心だ。

文彌　この官金を盜まれますれば、私が運ももうこれまで、生甲斐もないことなれば、淵川へでも身を投げて死ぬより外はござりませぬ。

十兵　いや〳〵、そりやあ惡い了簡、人間一生は塞翁が馬、惡い事のあつた後ではまたよい事のあるものだ。よしや金を盜まれても死なうなぞとは思ひなさんな。其又金に利息をつけ、禮狀添へてこなたの所へ返しに來ないものでもない。死は一旦にして安しとやら、必ず死なうと思ひなさんな。こればつかりは私が異見、仇に思つて聞かつしやんな。

文彌　御親切な御教訓、きつと忘れはいたしませぬ。有難うござりまする。

十兵　とんだ意見で大きにおくれた。さあ白まぬ中に少しも早く、

ト時の鐘。十兵衞軒の提灯をそつと消し袂へ入れる。文彌杖をついて行きかゝるを、十兵衞思ひきつて風呂敷包みを取らうとする、文彌びつくりしてその手にすがり、

文彌　こりや十兵衞樣、な、な、何とさつしやります。

十兵　(ぐつとつまり)さあ、此の行先でこのやうな胡麻の蠅が出ようも知れぬ。氣を附けて行かつしやい。

ト包みを放す、文彌胸を撫でおろして、

文彌　あゝ、私や又ほんまのことかと思うて、びつくりいたしました。

十兵　(これでは行かぬといふ思入にて)　いや文彌さん、こなたにちつと頼みがあるが、何と聞いては下さるまいか。

文彌　へい、御恩になつた旦那樣、身に適うた事ならば、

十兵　すりや、聞いて下さるか。

文彌　して、そのお頼みとおつしやるは、

十兵　さあ、頼みといふは外でもない。その百兩の金が借りたい。

文彌　えゝ　(ト文彌びつくりなし、逃げようとするを十兵衞捉へて)

十兵　さゝその驚きは尤もだが、まあ私が言ふことを一通り聞いて下され（ト誂への合方になり）何を包まう、私は元さる屋敷の若徒にて友朋輩と喧嘩なし、既に命にかゝはるところ旦那様のお情で命助かり町家の暮し、その御主人の娘御が勾引されて廓の勤め、御恩送りに身請せし金の殘りにつまりし所、その金貸して下されたはその娘御の御舍弟にて金は殿より預かり金、一つよければ又二つと借りたる金を調達せねば、御舍弟様の御難儀故、金の工面に京都までわざ〳〵上ればその先の主人が死んだ後へ行き、鶍の嘴にすご〳〵と歸る途中で入用の金を持てゐるこなたに逢ひ、どうも見退がすことがならず、いつそ取らうか借りようかと最前からとつおいつ、種々の思ひで言ひ出す無心、長うとは言はぬ程に、僅三月か四月の中私に貸して下さらば、その百兩に利に利を添へて、きつとこなたに返さうほどに、無理なことだが文彌殿、どうぞその金貸して下され。

ト十兵衞思入にていふ、文彌術なき思入にて、

文彌　段々の事情を聞けば聞くほど切ない譯、貸せとおつしやる此の金は、胡麻の蠅に狙けられて今宵取られてしまふところ、お前樣のお陰にて無事に我手にある百兩、義理にもお貸し申さねばならぬ金をば義理をかき、お斷りを申しますは、あなたよりもこつちに又切ない譯のあつてのこと、三歳の年より眼の見えぬ私を不便に思はれて母や姉の艱難苦勞、この百兩の官金も姉が苦界へ身

を沈め、私にくれたる身の代金、官位もとらず途中にて人に貸したの盗まれたのと言ふては江戸へ歸られませぬ、さうなる時には御意見を背いて死なねばなりませぬ。もし十兵衞さま、旦那さま、お慈悲深いあなた故、こゝの所を幾重にもお聞分け下さりまして、どうぞお許し下さりませ。

ト文彌思入にていふ、十兵衞も氣の毒なる思入にて、

十兵 さういふ譯の金と聞いては、よしや貸さうと言はれても義理にも是は借りられぬ。今言つたことは水にして、聞かぬ昔と思つて下さい。

文彌 (嬉しき思入にて)すりや旦那さまには、この金を思ひきつて下さりますか。

十兵 おゝ思ひきるとも〳〵、すつぱり思ひきりました。

文彌 えゝ、それで安心いたしました。

十兵 とてものことに安心ついでに、私はこゝで別れませう。

文彌 そりや又何故でござりまする。

十兵 一旦無心を言ひかけたれば、私が送つて行つたなら、こなたは却つて怖からう、丁度こゝは峠の下口、これから先は足場もよければ氣をつけて行かつしやい。

文彌 そんならどうでもあなたには、

十兵　別れて歸るがこなたの安心。
文彌　とは言へどうやら、
十兵　怪我せぬやうに、
文彌　え、
十兵　急がつしやれ。
　　ト十兵衞花道へ行きかけ、思入あつて拔足にて下手へ返り伺ひゐる。文彌花道の附際まで行き、向う
　　へ思入あつて、
文彌　旦那樣、大きに御厄介になりました。お靜においでなされませ。もし十兵衞樣、旦那樣（ト向う
　　へ思入あつて）あゝもうおいでなされたやうだ。（ト思入あつて）人の心は知れないものだ。眼の見え
　　ぬ身を不便に思ひ、こゝまで送つて下されしお慈悲深い十兵衞樣が、うつて替つて百兩の官金貸
　　してくれとの賴み、聞けば餘儀ないお主の爲め、以前が武士とあるからは、もし切り取りでもさ
　　つしやらうかと、思へばどうやらぞつとして身の毛もよだつやうであつた。これから下りとある
　　からは、夜明けぬ中に少しも早く、道を急いで、おゝさうぢや。
　　ト時の鐘、山おろし。少し凄みの合方になり、文彌上手へ行きかゝる。十兵衞後ろより脇差を拔き、

切らうとして惡いといふ思入二三度あつて、結局後ろから思ひきつて一刀あびせろ。文彌これを知らず二足三足行き、がつくりとなり、血紅肩先へ滲むを、文彌探り見て、びつくりして、

やあ、こりや（ト倒れる。）

十兵 文彌どの、堪忍して下せえ。

ト又一刀切る。文彌起上り一寸立廻つて、

文彌 や、こりや十兵衞樣、いやさ十兵衞どの、こりやこなたは私を殺して、此金を取る氣だな。

十兵 わつつくどいつ事情を話したとても貸さぬは道理、さらく無理とは思はねど、その百兩の金がないと大恩受けたお主の難儀、道にそむいたことながら、私も以前は若徒奉公武士の祿を食んだからは、切取りなすも武士の習ひ、お主の爲めには換へられぬ。その替りには一周忌おそくもこなたの三年までには、金こしらへて身寄を尋ね、敵と名乘つて討たれる心、京三界まで驅け歩き都合のできぬその金を持つてゐたのがこなたの因果、欲しくなつたが私が因果、因果同志の惡緣か殺す所も宇都の谷峠、しがらむ蔦の細道で血汐の紅葉血の淚、此の黎明が命のをはり、許して下され、文彌どの、

ト又一刀切りつけ、包みを奪ひ取り、中より金財布を引出すを文彌しつかと捉へて、

文彌　すりやこなさんはこの金を取らうばかりに親切らしく、眼界の見えぬ私を連出し、人里放れし宇都の谷にて、殺して金を取る氣だな、斯ういふことのあることは知らぬ江戸にて母人や廓へ行かれし姉者人が、今日は彼處明日は何處と指折り算へて待ちわびるその影膳の高盛が枕飯と聞かれたら、嘸や歎きはいかばかり、これ皆こなたがする仕業、かゝる非道な心と知らず、世に賴もしき人と思ひ、佛賴んで地獄とやら、こなたは鬼か獄卒か、呵責の刄受くればとて、やはかこの金渡さうか。

十兵　おゝその恨みは尤もだが、こなたを連出し殺さうなどゝ、初手から企んだことではない。

文彌　えゝ聞かぬ〳〵、慾にふけつて盗みをするのぢや。伊丹屋十兵衞は人殺しぢや、誰ぞ來て下され。

ト文彌大きな聲するを十兵衞口を押へて、

十兵　あゝこれ、聞譯のない文彌殿、慾にふけつて慘しう何でこなたが殺されう、お主の爲にする殺生、約束事とあきらめて許して下され〳〵（ト手を放し、又切りつける。）

文彌　伊丹屋十兵衞は人殺しぢや〳〵（ト財布をかせに兩人立廻り、結局文彌したゝかに切られ）えゝ、殺さば殺せこの恨み、生替り死替り、又百生が其間蟲けらにまで生を替へ、恨みを晴らさでおくべきか。

ト風の音になり、文彌すつくと立ちて物凄き態、

十兵 むゝ、恨まば恨め、お主の爲め、もうかうなつたら是非がない。

ト文彌を切倒す。文彌よろぼひながら財布を持つたまゝ辻堂へ逃込む。十兵衞續いて入る。横手板羽目の崩れ穴より吹替の座頭血紅にて這ひ出で、後ろ向にて緣より落ちる。と其穴より十兵衞財布を口に啣へ半身出し、刀を振上げきつと見得、又吹替と一寸立廻り、よき所へ切倒し留めをさしほつと思入。財布の金を押しいたゞき懐ろへ入れ、刀の血を拭ひ鞘へをさめなどして、座頭の死骸を見て不便なといふ思入にて、

あゝ人の心と飛鳥川、流れ寄つたる合宿で、眼界の見えぬ不便さに、こゝまで送る親切もお主の爲めに入用の金子を所持なすばつかりに、うつて替つて非道にも、おれが手にかけ殺すとは、人の心も大空も替り易いが慣ひとは、はてあじきなき世の中ぢやなあ。(トホロリとして涙を拭ひ、)せめて死骸は往來の、人の目堵にかゝらぬやう、

ト文彌の死骸を辻堂の蔭へ入れ、血の附きし手を手拭にて拭き。その手拭を捨てようとして思入あつて袂へいれ、菅笠割掛を取つて行かうとする。此の時上手籔を押分け、提婆の仁三頬冠りにて十兵衞をきつと見、つか〳〵と出て腰を捉へ引戻す。十兵衞びつくりして振拂ひ行かうとするを立廻つて菅笠と荷物をよき所へおき、仁三手拭をとり兩人きつと見得。仁三十兵衞の懐ろより財布を引出し、こ

れをかせに立廻りよろしくあつて、十兵衞財布をとり懷中に入れ、仁三を捉へようとする、そのはずみに腰の提煙草入を仁三に取られる。十兵衞手早く荷物と菅笠とを持ち、つか〳〵と花道へ行く途端に、どんと本鐵砲の音するに、十兵衞笠をかざし一寸下にゐる。仁三見事に尻ギバをするを木の頭、十兵衞ほつと思入あつて、

あゝ、狩人か。

ト十兵衞割掛を肩へかけるをきつかけに、鷄笛、馬士唄、山おろしになり、仁三胸を明け、腹をいぢつて見てホッと思入。十兵衞は花道へ入る。双方見合つてキザミ、

ひやうし幕

四幕目

材木町白木屋の場
裏借家才三内の場
柴井町伊丹屋の場

〔役名――伊丹屋十兵衞、文彌の亡靈、白木屋彦三、坊主小兵衞、筑田喜藏、髮結才三郎、白木屋庄兵衞、番頭丈八、座頭こぶ市、下剃萬次、白木屋の若い者松六、同杉八、丁稚善太。十兵衞女房おしづ、白木屋お駒、同下女おかつ等。〕

（白木屋の場）――本舞臺三間常足の二重、白木屋といふ掛暖簾、正面赤壁、狀差し、中央暖簾口、押入。上手一間千本格子の家體、いつもの所門口、下手種々の材木、板割の背景、天水桶、總て白木屋店頭の體。二重に番頭裝の丈八、帳合をしてゐる。舞臺に杉六、松八若い者の裝にて、煙草を喫みゐる。角兵衛獅子の鳴物にて幕明く。

松六　こう杉八、こつちの家の聟さんは柴井町の伊丹屋十兵衛樣の弟で、小い時から貰ひ受けて、行く行くはお駒さんと妻す積りで旦那樣はおいでなさるが、算筆と言ひ男ぶりなら言分のない聟さんを、どういふことかお駒さんが嫌ひなさるは分からねえぢやあねえか。

杉八　さうよ、あの又美しいお駒さんを、聟の彥三さんの方でも嫌つて、此間から花川戶の假宅佐野松屋の花魁古今とやらに惚れ込んで、たしか今日で三日居續けをしてゐさつしやるは、どういふ了簡であらうの。

松六　何でも今に大騷動ができねばよいと思つてゐるのよ。

杉八　いやも、家のごたつくのは厭なことだなう。

丈八　これこれ手前達は、寄ると觸ると內外の人の噂ばかりする。惡い癖だ。さあさあ一服喫んだらば早く河岸上をしてしまはぬか。

松六　はい〳〵、今行くとこでござります。
杉八　さあ〳〵來さつしやい〳〵。
　ト兩人下手へ入る。花道より丁稚善太、髮結裝の才三郎鬢盥を提げ、後より萬次下剃にて毛受と砥石を持ちて出來り、
善太　さあ〳〵髮結さん、早く來てくんな〳〵。
才三　今行くよ、横町の伊勢屋をしまつて直に行くから、番頭さんにさういつておいてくんな。
善太　何さ、番頭さんぢやあねえ、お駒さんが襟を剃つて貰ひてえから、早く呼んで來いと言ひなすつた。早く來なせえ〳〵。
才三　お駒さんが呼んで來いとか、それぢやあちよつくら行かざあなるめえ。こう萬や手前先へ伊勢屋へ行け。
萬次　あい、先へ行くから、早く來なさいよ。
才三　今直に行くよ。
萬次　お駒さんぢやあ、直にやあ來られまいの。
才三　無駄を言はずと、早く行けよ。

善太　さあ、早く來なせえ（ト萬次は花道へ戻つて入り、善太は才三をひつぱり舞臺へ來て、）はい、番頭さん、
番頭さん、髮結さんを連れて來ました。（ト門口へ入りながら大きな聲にて言ふ。）
丈八　このべらぼうめ、大きな聲でびつくりさせをつた。
才三　番頭さん、今日は結構なお天氣でござります。
丈八　お、髮結どんか、待つてゐた、髭だけ一寸やつて貰ひたい。
才三　お前さんかえ、こう子僧どん、お前お駒さんが呼んで來いと言つたぢやあねえか。
善太　番頭さんだといふと、髭におそれて來ねえから、お駒さんが呼ぶといふ計略はこの善太、何と肝がつぶれたか、ばた〳〵ばつたり（ト不器用に見得をする。）
才三　えゝ忌々しい、一ぱいはめられたか、仕方がない。さ、やりませう。（ト剃刀を磨ぎにかゝる。）
丈八　仕方がないとは御挨拶だ、小僧水を汲んで來い。
善太　あい〳〵。
ト丈八中央へ坐る。善太金盥へ水を汲んで來る。才三捨ゼリフにて髭を剃りにかゝる。奥よりお駒振袖、娘の裝、下女おかつ附き出來り、
かつ　髮結どん、先刻にからお駒さんが待つておいでなさるに、何をしてござんしたえ。

才三　おかつどんか、何だお駒さんが待つてゐなさるえ、そりや私ぢやあござりますまい、外の者だらうね。
お駒　才三さん。いえ才三どの、さつきにから待つてゐるに、外の者とは何のことぢやぞいの。
丈八　もしお駒さん、お前さん髮結を待つてゐるとおつしやるが、何の御用でござります。
お駒　さあ、その用といふはな。
かつ　お駒さんが御用とは、襟が剃つて貰ひたいとおつしやつてなあ。
お駒　さあ、その襟よりはまだほかに、
才三　何だ、襟が剃つて貰ひたいえ、嘘ばかり。私ぢやあねえ。聟さんの彥三樣にたんと剃つてお貰ひなされませ。
お駒　そりや何を言はしやんす、どうして私が彥三さんに、
丈八　お駒さん、お前はあの聟さんはお厭かいな。（ト お駒の方を向かうとする。）
才三　どつこい、髭を剃つてゐる中は、こつちの顏も同然、自由にやあなりません。（ト顏を持つてこつちへ向かせる。）
善太　えゝ、いゝ氣味だく。

丈八　何をこいつが、
才三　これさ、動いちやあいけませんよ。
かつ　もし才三殿、お駒さんのお心を知つてゐながら、何を言はしやんすぞいな。
才三　お駒さんの心かえ、私あよく知つてゐます。浮氣者の情なし、初めの中は兎や角と親切らしく言つたのを、眞面目に受けたが大きな間拔け、こつちの思ふ半分も先ぢやあ思つてくれないのが、浮氣女のみんな持前、ねえもし番頭さん。
丈八　それ〳〵、いくら男の方で思うても、そこらあたりの女子の方ではつん〳〵と、ちつとはこちの心の中を汲んでくれたがよいぢやござりませんかえ。（ト又お駒の方を向かうとする。）
才三　これはしたり、そう動かれちやあ、切りますよ。
丈八　おつと切られて堪るものか。（ト正面を向く。）
お駒　いえ〳〵そんな恨みを受ける覺えはござんせぬ。私が心の言譯を、
かつ　あもし、それをこゝでおつしやつては、な、邊りに人目（ト言つては惡いとの思入）
才三　何の人目どころか、許嫁の聟さんだもの、隨分仲をよくなさるがいゝのさ。
お駒　あれ、またあんな。（ト思入。）

丈八　これ〳〵才三、聟様の彦三様とお駒さんが仲のよいのが、何で貴様は腹が立つのだ。
才三　え、いえさ、聟さんばかりならようござりますが、お駒さんにやあ此の頃また蟲がつきましたよ。
丈八　なに、蟲がついたとは、
才三　あい、蟲さ（ト才三元結をひねつて）こんな蟲がついたのさ（ト丈八の襟へ入れる。）
丈八　あゝ氣味の惡い、これ、惡戯せずと、早う剃らぬかいの。
才三　はい〳〵、ぢつとしておいでなさい。
かつ　もし、才三殿。えゝも、言ひ度うても、
　　　ト丈八へ思入、才三丈八の耳を兩手で塞ぎ、
才三　おかつどん、何が言ひたいのだ。
かつ　その言ひたいのはな（ト言ひかける、丈八思入。）
丈八　これさ〳〵、何故おれが耳を押へるのだ。
才三　いえさ、耳が剃れたか、押へて見たのさ。
丈八　惡戯せずと用がある、早く剃つてしまつてくれ。
才三　はいもう、眉毛を剃付けるとしまひでござります。危いから目をしつかりと塞いでお出なさい。

丈八　よし〳〵、それしつかりと瞑つてゐるぞ（ト丈八目を塞ぐ。）
かつ　もし丈八どの、それでは何處も見えまいがな。
丈八　どうして、さつぱり見えはしない。
かつ　見えぬその間に（ト思入あつてお駒才三へ囁く）
お駒　かうぢやわいな。
才三　そんなら、今夜私の家へ、
お駒　必ずその時私が言ひわけ。
かつ　待つてゐて下さんせえ。
才三　はい、合點でござります。（ト浮かれて、丈八の片眉毛を剃り落す、善太見て、）
善太　やあ、番頭さんの眉毛が半分なくなつた、はあい〳〵。（ト手を拍つて笑ふ。）
丈八　何、おれが眉毛がどうした。（ト撫でゝ見ておどろき）やあ〳〵、こりや眉毛が半分紛失した。
才三　ほんに、これは思はぬ粗相、眞平御免なされませ。
丈八　やい〳〵おのれは〳〵、白木屋の白鼠忠義一途の番頭たるべき丈八が眉毛を、半分剃落して濟まうと思ふか。

才三　いえもう申譯もない不調法、然し眉毛が片方殘りましてもをかしなもの、とてものことに兩方ながら剃落してあげませうか。

丈八　白痴面め、おのれ人を嘲弄しをるか、汝どうしてくれう、（ト立ちかゝる、善太見て。）

善太　やあ、をかしい、片方の眉毛で力みをる、これがほんのかたく／＼かただ（トツケをうつ眞似をする。）

丈八　おのれまでが同じやうに、たゝきのめしてくれう。

善太　そりや、怒つたく／＼、

ト善太逃げて奥へ入る。丈八算盤にて才三郎を打たうとするをお駒とめて、

お駒　これ丈八、わしが才三殿に襟を剃つてくれと頼むはずみに、そなたの眉毛をついゝ落した故、私が詑言するほどに、堪忍してたもいなう。

丈八　いえく／＼お前さんが詑をなさるが一倍腹が立ちます。お放しなされませく／＼。

かつ　これく／＼丈八殿、髪結どんもさうぢやといふてなれば、もう堪忍してやらしやんせ。

丈八　いやく／＼了簡ならぬく／＼。

才三　もしく／＼どうぞ御了簡なされて下さりませ。

かつ　あれ、あのやうに詑つてぢやわいな。さあ才三どの、お前は早う歸らしやんせ。

才三　はい〳〵左様なら、私はお暇いたしませう（ト才三鬢盥を持ち門口へ出る。）
お駒　これ才三どの、必ず晩に、
丈八　何、晩にとは、
才三　いえさ、晩ほどお詑にまゐりませう。

ト才三花道へ入る。三人は捨ゼリフよろしく、奥より善太出て、

善太　おかつどん〳〵旦那様がお呼びなさる、早く來なせえ〳〵。
かつ　あい〳〵忙しない、今行くわいな。（トおかつ、善太奥へ入る。）
お駒　これおかつ、わしも一緒に行くわいなう。（ト行かうとするを丈八とめて）
丈八　どつこい、逃がさぬ〳〵、一寸お待ちなされませ。
お駒　丈八としたことが、こゝ放しやいなう。
丈八　いえ〳〵放されませぬ。お前様に言はねばならぬことがござります、下においでなされませ。
お駒　いえ〳〵、そなたに何も聞くことはないわいなう。
丈八　お前さんがなうても、私の方にたんとござります。まあ下においでなされませ（トお駒を無理に坐らせて）もしお駒さん、お前さんはおいとしいな〳〵、小い時から許嫁の彦三様はお前を嫌ひ、こ

の頃は假宅へ居續け、山の宿の佐野松屋の古今といふ女郎に陥り、内を外なる身持放埓、親旦那も今に愛想を盡かし、追出しなさるは知れたこと、あんな水臭い男は思ひ切り、心立のよい聟をとつて、親旦那に樂をさせるが孝行といふものでござりますぞえ。

お駒　なるほど、そなたの言やる通り、不束な私故嫌うてござんす彦三樣、疾うから私や思ひきつてゐるわいな。

丈八　そんならお前は聟さんを思ひ切り、外に思ふ男でもござりまするかえ。

お駒　さあ、恥しいことながら、私が思ふは、つい、こゝらに、

丈八　私が思ふは、つい、こゝらにとは（トいろ〳〵思入あつて、）もしお駒さん、思ふ男といふは、この丈八でござりまするかえ。

お駒　何のそなたに、阿呆らしい。

丈八　なに、阿呆らしい。といふて外に男は見えず、やつぱり私ぢや〳〵。えゝ有難い忝い、さういふお前の心と知らず、もう言はうか〳〵と口までぞろ〳〵出かけても、言出し兼ねてをりました。有りやうはお前の顔を見る度に、氣も心もうき〳〵としてどうもなることぢやござりませぬ。あらうことか白木屋の番頭とも言はれる者が、どうぞ此の戀かなひますやうにと、夜々芝の神明樣

へ跣足参りをいたしました。その御利益でお前の方から、氣があるとは、えゝ有難い〳〵。

トお駒の袖を捉へるを、お駒振拂つて、

お駒　えゝも何のことぢや、惡いことしやんな。

トお駒逃げるを追廻す。花道より彦三少々醉つたる態にて出來り、門口へ來て、わざと咳拂ひをして内へ入る。丈八心附かずお駒と心得彦三を捉へる。

彦三　これ、丈八、何をしやる。

丈八　（びつくりして）や、お前樣は若旦那樣。

お駒　（もびつくりして）ほんに、あなたはいつの間に、

彦三　お駒どの、商人の店頭で不行儀千萬。いやさ、番頭殿とお樂しみぢやの。

お駒　いえ〳〵どうして私が、

彦三　いや〳〵お樂しみ〳〵はゝゝゝ。何ぢややら私も醉つて、さつぱり分からぬ。これお駒、水一つたも。

お駒　あい〳〵（トお駒奥へ入る。）

彦三　これ番頭殿、そのやうに面目ない顔せずと、私が戻つたこと親父さまへお報せ申してたも。

丈八　はい〳〵かしこまりました。折角うまくやりかけた所を、悪いところへ、
彦三　どうしたや。
丈八　どれ、お報せ申してまゐりませう。
　　ト丈八奥へ入る。お駒水呑茶碗を盆へ載せ、持つて出て、
お駒　はい、お冷水を持つて参りました。（ト前へ出す、彦三取つて）
彦三　おゝ太儀々々（トぐつと呑み）あゝ醉覺めの水、甘露々々。
　　ト思入、奥より白木屋庄兵衞老けたる打扮、羽織着流しにて出で、
庄兵　何ぢや、悴が戻つたとか（ト言ひながら住ふ。）
彦三　親父さま、唯今歸りましてござります。
庄兵　おゝ彦三戻つたか、見れば酒機嫌の様子、得意廻りに一昨日から出て、今日で三日戻らず、そりやも若い者のこと故、假宅にでもゐるのならばよけれども、日頃實貞なそち故、もし神隱しにでもなりはせぬかと、たいていい案じたに、よう無事で戻つて來やつたの。
彦三　親父様、私はあんまりようも戻りませぬ。
お駒　（思入あつて）もし若旦那、父様があのやうに機嫌ようおつしやるに、あんまりようも戻りませぬ

とは、何事でござりますえ。

彦三 はて、知れたこと、家にゐては親父様の澁い顔や、そなたの愛想のない顔を見るが厭さに、得意廻りをかこつけに此頃の夜泊り日泊り、勿體ない、十年以來御恩を受けた親父様、いや恩を受けたとはいふもの丶、こつちから頼んだといふではなし、そつちの勝手で小さい時から養子に貰はれ、何一つ不足なく育てられたは世間一體、こりや當然といふもの。その上望みもないこのお駒と夫婦にすると言はれるが、いやで〳〵そなたの顔を見る度に、いゝむしづの出るほど厭でござります。何の阿呆らしい、この身代の一つや二つ貰うたとて、町人は一夜けんぎやう若もの事でもある時は、箸も持たぬ乞食も同然、それ故片時も此の家にゐることが、私はいやになりましてござります。(ト思入にていふ。庄兵衞思入あつて、)

庄兵 これ彦三、最前からの惡口雜言、酒の上ぢやと思ふて聞いてゐたが、そんなら眞實娘や親に、

彦三 ふつつり愛想が盡きました。

お駒 もし彦三さん、御酒の上ではありながら、言ひたいがいな愛想盡し、そりやも不束な私が、御氣に入らぬは知れてあれど、何の恨みで父さんに愛想が盡きて此の家をお前は眞實出やしやんすのかいな。

彥三　おゝ出るとも〳〵、何の隱さう、吉原の佐野松屋の古今といふ女郎に馴れなじみ、引くに引かれぬ深い仲、此家を出てその女郎と夫婦になり、例令肩へ棒を當てゝしつけぬ職業してなりと、氣儘に浮世が渡りたうござります。どうぞ親父樣、私を御離緣なされて下さりませ。

庄兵　成程娘が氣に入らずこの親にも愛想が盡きて、家にゐるが厭ならば離緣しまいものでもないが、柴井町にゐるそちが兄御伊丹屋十兵衞殿から貰うた悴なれば、十兵衞殿に逢つた上、はて、厭なものなら不緣のもと、勝手に暇をやりませう。

彥三　そんなら私の、望みの通り、

庄兵　おゝ、離緣せいで何とせうぞい。

彥三　それ聞いて落付きましてござります。

ト花道より十兵衞羽織袴にて出で、舞臺へ來り、家へ入らうとして門口に伺ひゐる。此中奧より丈八、おかつ出て、

丈八　もし旦那樣、お前樣やお駒さんに愛想が盡きたといふ道樂息子の彥三殿、定めてお前樣も愛想がお盡きなされましたならば、何の十兵衞殿に御相談は入りませぬ。望みの通り、とつとゝ追出しておしまひなされませ。

彥三　誰かと思へば丈八殿、こなたにも今までは何かと世話になりました。急に此家が厭になり、離緣を望む彥三を、とつとゝ追出せとは忝い、禮から先へ言ひませう。

かつ　もしお駒樣、樣子は殘らず承りました、日頃おやさしいお心に打つて替つた若旦那樣、御離緣なされたいとおつしやるは、もしやあなたの、

お駒　あゝこれ、不束な私に愛想の盡きるは御道理なれど、日頃から御不便がる父樣を捨てゝ、家出をしたいとおつしやるは、

かつ　どうも合點がまゐりませぬ。

彥三　はて知れたこと、親父樣始め內外の者に愛想が盡きて離緣して出て行くに、仔細もございもあるものか。

丈八　いや呆れたものだ。大恩のある親旦那にふて勝手の罰あたり、傍に聞いてゐてさへ悔しくつて悔しくつてなりませぬ。私が一走り迎ひに行つて、十兵衞どのを呼んで來ませう。

ト丈八立ちかゝる。十兵衞門口にて聞いてゐて思入あつて、

十兵　あいや、お迎ひには及びませぬ。伊丹屋十兵衞丁度これへ參り合せてをります。

ト門口をあけて十兵衞入る、皆々見て、

彥三　ほんに、お前は兄者人。

庄兵　おゝ十兵衞殿、いつの間にござつた。さあ〳〵こちらへ入らつしやれ〳〵。

ト十兵衞通らうとして丈八を見て、

十兵　これは番頭さん、此間は御目にかゝりませぬ。

丈八　十兵衞樣、よくおいでなされました。ずつとお通りなされませ。（ト氣の毒さうにいふ。）

十兵　左樣なら御免下さりませ（ト十兵衞よきところへ住ひ、）扨庄兵衞樣、その後は久々お目にかゝりませぬ、御機嫌よう。お駒さんにもお變りなく、お目出度うござります。

庄兵　十兵衞殿にもお達者で、お互ひに悅びます。こなたには大阪からいつ戻られました。

十兵　へい、やう〳〵一昨日歸りましたばかり、私旅行中は何かと御厄介に與りまして、御禮の申上げやうもござりませぬ。

庄兵　いやも、別條なく戻られて、このやうな目出度いことはござらぬ。さうして大阪表の用向は調へて戻られたかな。

十兵　有難うござります。右の金子は思ひがけなく、いえ、もう首尾よく調達いたして歸りました故、御禮旁々今日上りまして、唯今お店頭で委細は承りました。詳しい樣子は存じませぬが、十二

の年から御恩になつたあなたへ對して彥三めが唯今のふて勝手、このお家に愛想が盡きて離縁したいなどゝ、まるで氣違ひ同然な奴、打ち打擲も致し度うござりますが、こゝでいたさばお家の恥、私が宿へ連歸りまして、きつと性根をたゝきなほしますが、もし役に立たぬ根性ならば十兵衛に思案がござりますれば、どうぞ私に弟めをお預けなされて下さりませ。

庄兵　いかにもこなたへ預けませう、何をいふにも若い者のこと、とつくりと彥三の了簡を聞いた上、厭のものならば厭のやうに兎も角も相談しませう。直に彥三を連れて行かつしやれ。

十兵　有難うござります。これから同道いたして歸ります。やい弟、おのれはまあ天魔の見入りしか、情ない恐ろしい根性になりをつたな。まあ何事もこゝでは言はぬ、さ、おれと一緒に柴井町へ歸りをれ。

彥三　行きますとも〳〵、愛想の盡きた家に半時たりともゐるのは厭だ、大手をふつて出て行きます。

丈八　あれ、あの通りの無頼漢、十兵衛さん、とつとゝ早く連れて行かつしやれ。

十兵　はい〳〵、いやもどなたもお腹の立つは御尤も、もしお駒さん何れ一兩日の中お詫に上ります。ほんにお前さんに上げようと、駿河細工の糸箱を買つて來て、急いで忘れてまゐりました。その時持つてまゐりまする。旦那樣へよろしうおつしやつて下さりませ。

お駒　そんなら、もうお歸りでござんすか、日頃に替る彥三さん、合點の行かぬ今日の仕儀。
かつ　どうやら御樣子のありさうな事、憚りながら十兵衞樣、御思案なされて下さりませ。
十兵　御親切に有難うござります。さあ弟、御挨拶申して行きをらぬか。
彥三　出て行く家へ何の挨拶、然しこれまで養育の恩も送らず、剩へ心にもない、いや、どうとも勝手にするがいゝ、顏を見るのもふつ〳〵いやだ。（ト言ひながら門口へ出る。）
十兵　（も門口へ出て）こりや、口數利かずと行きをらぬか。
彥三　でも、挨拶をしろとお前が、
十兵　えゝ、口强情な。左樣ならば旦那樣、
庄兵　十兵衞殿、しづかに行かつしやれ。
丈八　（門口へ來て）さあ、きり〳〵と歸つて貰ひませう。
彥三　ゐろと言つてもゐるものかえ。
十兵　はて、默つて行けといふに。おやかましうござります。
　　ト思入あつて行きかける、彥三つぶやくを叱りながら兩人花道へ入る。
丈八　やう〳〵行きをつた。もし旦那樣、あのやうな惡い奴は追出しておしまひなされまして、そこら

あたりにゐます實貞な孝行な聟さんを、お取りなさるがようござります、なあお駒さん。

ト そつとお駒の手を執る、お駒振袖にて丈八をたゝく、庄兵衞思入あつて、

庄兵 これ丈八、最前私が屋敷方へ送つた材木の帳面を調べかけておいた、汝奥へ行つて調べておいてくれ。

丈八 はい〳〵畏りました、どうで私が貰ふこの身代、お駒さんも得心で、

庄兵 や、

丈八 いや、とつくり帳の調べをいたしませう。（ト奥へ入る。）

庄兵 これ、娘こゝへ來や。

お駒 あい（トもぢ〳〵してゐる。）

庄兵 はて、こゝへ來やれといふに、（ト合方になり、お駒おかつと顔見合せ、お駒傍へ來る、）これ娘、汝は何と思やるか、日頃孝行にした彥三が、この頃の身持放埒、離緣を望む心底は何か樣子のありさうなこと、汝は彥三が家を出ても淋しいことはないか。これ、默つてゐては分からぬ。どうでも汝は彥三が氣に入らぬか。

お駒 はい（ト苦しき思入、おかつはさう言つては悪いといふ思入。）

庄兵　十二の年から養子に貰うたあの彦三、夫婦になるのが厭になつたのは、もしや外に好いた男が、いや、そんなことがあるまいものでもなければども自由にならぬが浮世の中、これ、親一人子一人ぢやぞよ。外に便りのない此の親に、必ず〳〵苦勞をかけてたもるなよ。

かつ　御尤もでござります。お駒樣に限り、そのやうなことはござりますまいけれども、また私がとつくりとお心の中をお尋ね申して見ませうわいな。

庄兵　女房が死んでから氣儘に育てた一人娘、あまい親ぢやと笑はせてたもるなよ。

お駒　もつたいない父さんのお言葉、

かつ　必ず空に思召しまするな。

お駒　ほんに思へば世の中に、

庄兵　苦勞は絶えぬものぢやなあ。

ト時の鐘にて、よろしく道具廻る。

（裏借家才三宅の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面崩れたる鼠壁、錦繪などを張りし襖を立てたる一間の押入。上手一間折廻し崩れ壁。下手一つ竈勝手道具あり。よき所に神棚、いつもの所門口、

此の外崩れし板塀、總て材木町裏借家の態。こゝに角行燈を灯し、才三以前の裝にて寢轉び、下剃萬次と合卷を見てゐる。さんげ〳〵にて道具留る。

才三　さつき伊勢屋で借りて來た草双紙は、龜井戸の國貞の繪で面白さうだ。

萬次　こりや種員の弟子の柳水亭種淸の作で、五月雨濡仲町、小三金五郎さ。

才三　ほんに草双紙で思ひ出した。今夜横町の寄席が大寄で、玉輔、扇橋、馬生三人の掛合咄だ。手前四つまで聞いて來ねえか。

萬次　そいつあ有難え、本當にやつておくんなさるか。

才三　なに、噓をつくものか、さあ行つて來さつし。(ト叺煙草入より百錢をだしてやる。)

萬次　こりや有難え。お前酒をさう言へと言ひなすつたから、買つておいたが、お客でもあるのかえ、こゝにあります。そんなら行つて來ますよ。

ト萬次はよき所へ德利をおいて、花道へ入る。才三思入あつて、

才三　いつぞや殿樣のお眼鑑にて、表向御追放と僞り、紛失なせし御家の重寶花形の茶入詮議せよと有難きお差圖、お髮を上げたを幸ひ町髮結となり、今日は淺草明日は深川と、所を替へて茶入の詮議、寶紛失の夜より行衞知れざる筑田喜藏が中間小兵衞、たしかに寶の紛失も彼等が所業に疑ひ

なし、この程芝にて測らずも、茶入の袱紗は手に入りしが、まだ兩人が行衛知れず、どうぞ早く詮議の端緒に取りつき度いものぢやなあ。

ト思案の思入。花道よりおかつぶら提灯をさげ、お駒の手を引き出來り、

お駒 そなたの教へた通り、琴の御師匠さんへ行くと父さんに嘘いふて家を出たが、早う才三さんに逢はせてたもいなう。

かつ 向うの角の長屋が才三樣のお家でござります。さあおいでなさりませ（ト兩人舞臺へ來り、門口より覗き）もし才三さん、お内でござりますか。

才三 おゝおかつどんか、さつきから待つてゐました（ト門口を明ける。）

かつ よう待つてゐておくれなされました。お駒さまお入りなされませ。

ト兩人内へ入る。才三は門口へ掛金をかけて三人よろしく住ふ。

才三 よくおいでなすつた。さあこつちへおいでなさい。

お駒 才三さんお前に逢はうと、父さんに嘘いふてやう〳〵家を出たわいな。

才三 こんな汚ない所へお座りなすつたことはあるまいが、まあゆつくりとお話しなさい。

かつ 却つてこれがお駒さんの、お樂しみでござりますわいな。

お駒　才三さん、お前も知つてござんす通り、此間から彦三さんの夜泊り日泊り、今日久しぶりで戻るや否や父さんや私へ愛想盡し、離縁してくれいと言はしやんす所へ兄さんの十兵衛さんがござんして、連立つて家を出て行かしやんしたわいな。

才三　そんなら彦三殿は、白木屋の家を出る所存で、兄十兵衛の所へ行つたと言やるか。

かつ　日頃親御樣へ御孝行な彦三樣、俄にお心の變つたは、お駒樣とお前樣の仲を御存じの上の、御離縁ではあるまいかと存じます。

才三　彦三殿の兄の十兵衛は、元私が親父樣の家來なれば二人が仲を覺り、主筋の義理を思ひ浪風立てず離縁する彦三が實の心底、盃こそせね幼きより許嫁せし彦三が女房お駒、言はずと知れた密夫の才三、添ふに添はれぬ二人が惡縁。

お駒　そんならお前は彦三さんの義理を思ひ、私を捨てるお心かいなあ。

才三　捨てる心はなけれども、浮世の義理が立たぬわいなう。

お駒　情ないこと言はしやんす。今更お前に捨てられては、私や死ぬより外はござんせぬわいなあ。（ト才三にもたれて泣く。）

かつ　お小さい時お屋敷へお上りなされて、彦三樣とお許嫁のことは御存じない故、才三樣も深いお仲

におなりなされたことなれば、親旦那様へお話し申して仕樣もやうもございませうほどに、必ずきなく〳〵お思ひなされまするなえ。

萬次（バタ〳〵にて花道より走り出來りて、）おい〳〵才三さん、もう寢なすつたか大變だ〳〵（ト門口をたゝく。）

才三　何だ、萬次か、大變とは何のことだ。

　ト兩人を後へ寄せ、門口を明ける。

萬次　大變といふのはね、横町の髪結の親方の家に夫婦喧嘩があつて、皆々行つてゐるから一寸顔を出しなさい。（ト手を取り、引つ張る。）

才三　なに、親方の所に喧嘩がある、今こつちにちつと用があるから、手前いゝやうに言つてくれろ。

萬次　いゝえ、それぢやあ惡いから、一寸おいでなせえ〳〵、（ト引張る。）

才三　仕方がねえ、行くよ。今穿物を穿いて行くわ。

萬次　穿物は何でもようございます、さあ早くおいでなせえ〳〵。

才三　忙しねえ男だ、今行くといふに、

　ト才三穿物を搜す振りにておかつに囁き、門口へ出る。萬次引張り花道へ入る。お駒おかつ見送り門

口をしめる。時の鐘になり、花道より筑田喜藏五十日鬘頰冠り着流し大小にて、又小兵衞は白髪鬘一本差にて出來り、

喜藏　裏家住居の才三が家へ忍んで來てゐる白木屋の娘、日頃の思ひを晴らさうといふ小兵衞めが思ひ付き、

小兵　當百四枚で下剃の野郎をうまく欺し込み、才三めをつり出させ、あとへこつそりしけ込む魂膽、ちつとも早く行かつしやれ。

ト兩人舞臺へ來り、門口より伺ひ聞き合ひ、そつと門口を明けて入る、内の兩人見て、

かつ　どなたでござります、此方の主人は出られまして、私共は他所の者でござります。

小兵　(門口へ掛金をかけて)やかましい、默つてうしやあがれ。

兩人　(兩人をすかし見て)あれ、盗人が(ト大きくいふ。喜藏刀を抜きて)

喜藏　聲をたてると一突だぞ(ト刀を突立てる。)

兩人　えゝゝゝ。

ト逃げようとするおかつを小兵衞引附ける。喜藏はお駒の帶を捉へる、帶ずる〳〵と解ける。

喜藏　腰元小牧、筑田喜藏を見忘れはしまい、久しぶりであつたなあ。

ト帶の端を捉へきつと思入、お駒喜藏を見ておどろき、

お駒　や、ほんにお前は喜藏さんどうしてこゝへ、

かつ　そんならもしや、お駒さんが忍んでおいでを聞きつけて、

喜藏　佐々木の屋敷にゐる中から、附けつ廻しつ口説いても、得心しない腰元小牧、尾花才三にうつゝほれて、追放された後を慕ひ、屋敷を下つて親の家、才三も今は町髮結ひ、二人が仲のむやくしさいつか一度は此の念を晴らさうと思ふ中、今夜手前が家を拔け、此の家へ忍んで來ると聞き、僞迎ひをかけ才三めを、巧い手段で追つ拂ひ、これからおれの隱れ家へしよびいて行つて自由にするのだ。

お駒　えゝ、かういふことゝ知つたなら、此家へ忍んで來まいもの。これおかつ、どうせうぞいなう〱

かつ　よろしうござります、私がついてゐます。めつたに手込にはさせませぬ。

小兵　やかましい、邪魔をしやあがるな。

かつ　いえ〱そこ退かしやんせ。

小兵　えゝうるせえ奴だ。

ト小兵衛おかつを蹴倒す、おかつ脾腹をあてられウンと倒れる。

お駒　あれ、おかつが（ト立ちかゝる。）
喜藏　ぢつとしてゐろといふに、
　　　ト引きすえる、小兵衞こなしあつて、
小兵　もし喜藏様、邪魔のない中女めを、早くしよびいて行かつしやりませ、
喜藏　おゝ合點だ、さあ、おれと一緒に來しやあがれ。
お駒　いえ〳〵、何でおのれの自由にならうぞ。
喜藏　えゝやかましい。
　　　ト喜藏お駒をかい込む、お駒あれえ〳〵ともがく、喜藏懷中より手拭を出し猿轡をかける。小兵衞は
　　　門口を伺ひゐる。その中おかつムゝと心附、これを見て、
かつ　お駒さまはやらぬ〳〵。
　　　ト喜藏の足にすがり附く、小兵衞臺所より薪を持來り、おかつの帶際をとつて引据え、
小兵　邪魔をしやあがると、かうだぞ。
　　　ト小兵衞おかつを續けうちにうつ。これにておかつ苦しみ、喜藏の足を放す、此間に喜藏お駒を抱へ
　　　門口を出ようとする。花道よりバタ〳〵にて才三走り出來り、門口を明けようとして明かぬ故内の様

子を窺ふ。内より喜藏門口を明けるを才三すかし見て、

才三　やゝ、お駒を手込に、何者なるぞ。

喜藏　誰でもねえ、筑田喜藏だ。

才三　なんと、（ト才三内へ入り、喜藏を附廻し、お駒を圍ひ）おゝ珍らしや筑田喜藏、扨は屋敷にゐる中より心をかけし腰元お駒を、手込めのこの場の有樣。

喜藏　いかにも汝が言ふ通り、思ひをかけたお駒故、何といつても連れて行くのだ。

小兵　此の家へ忍んで來ることを、ちらりと聞いたを幸ひに、下剃野郎の僞迎ひで、汝を釣出しその後の明巣へしかけて寢鳥をさす小兵衛樣の指金だ。腹が立つなら勝手にしろ。

才三　おゝ存分にする。まだ其の上に二人の者に詮議がある。（トつか〳〵と行き押入より一腰を出す）

小兵　こりやをかしい、何で二人に、

兩人　詮議があるとは。

才三　仔細は其身に覺えがあらう、佐々木の重寶花形の茶入、盜み取つたる筑田喜藏、此のほど芝にて手に入れたる鴛鴦布のこの袱紗（ト二幕目で手に入れし袱紗を出して見せ）小兵衛が持參と聞いたるからは、二人が仕業に疑ひあるまい。さあ眞直に白狀いたせ。

トきつと言ひかけ、ぶる〳〵震へ出す。

お駒　もし才三さん、何でお前はそのやうに。

才三　やゝ折も折とて此の病ひ、えゝゝゝ（ト身體を押へ悔しき思入、兩人見て、）

小兵　何だ〳〵、やい才三、何でぶる〳〵ふるへるのだ。

才三　此程よりの瘧の病ひ、寶詮議の緒に取付きながら、身動きならぬこの業病、思へば〳〵口をしい。

ト震へる思入、小兵衛聞いて才三を蹴倒し足にて踏む。アレとお駒寄るを喜藏引附けきつと見得、

小兵　さあ野郎、動かれるなら動いて見ろ、詮議々々とぬかしても、身動きはなるめえが、

喜藏　やい才三、無念口をしいか、いゝ態々、我が尋ぬる花形の茶入はこの喜藏樣が盗んだのだ。

才三　すりや推量に違ひなく、汝等兩人が仕業よな。

小兵　盗んだ譯を言つて聞かさう、よく聞きやあがれ。御旦那喜藏樣が預かりの御納戸金二百兩遣ひ込んだを、汝が親尾花六郎左衛門に見出されて殿へ披露したばつかり、喜藏樣は門前拂ひ、それが無念さ六郎左衛門が預かつてゐる寶の茶入、ひん盗んだ落度にて六郎左衛門は腹を切り、くたばつたので意恨は五分五分、とてものことに惚れてゐる以前の家來庄兵衛が娘のお駒を取持のも、

おれが手で茶入を質に入れた金を山分にした恩返し、仔細といふはこの通りだ。憎まば憎め遠慮はねえぞ、こりや敵役の當然だわ。

ト踏みにじる。才三その足を取つて跳れ起き、小兵衛を投げのけ、きつと見得、喜藏驚き、

喜藏　や、才三郎がこの態は、

才三　おゝ虐の病ひと言つたは僞り、巧みの次第を聞かう爲め、茶入の盜賊二人とも繩打つて屋敷へ引く、さあ尋常に覺悟なせ。

喜藏　そんなら病ひと言つたのは、茶入の在所を聞く手段か。

小兵　（立上りて）それ知られた上からは、生けてはおけぬ、覺悟ひろげ。

才三　小癪な一言、茶入の在所を白狀なせ。

喜藏　面倒な、疊んでしまへ。

ト三人刀を拔き、よろしく立廻り、結局才三喜藏を一刀切る、喜藏ハッと苦しむ。お駒鬢盥の剃刀を取り喜藏へ突いてかゝる。小兵衛たぢ〳〵となり、正面の壁へ行當る、これにて壁ばら〳〵と壞れると小兵衛はその壞れより後ろへ逃げて入る、才三はその後を追かけて入る。此中お駒は喜藏と立廻りあつて、

喜藏　こりやお駒め、故主の喜藏を切る氣だな。
お駒　夫の助太刀覺悟しや。
喜藏　小癪な女め、くたばつて仕舞やあがれ。
　ト兩人立廻つてきつと見得になり、尙兩人立廻りの中にお駒も傷を負ふこと、結局お駒喜藏の脇腹へ剃刀を突込む、喜藏ハツと苦しむ、この模樣にて道具廻る。

（借家裏手の場）＝本舞臺三間一面屋根附の崩れたる鼠壁、上の方松の立木、下手崩れたる屋根を見せたる物置、總て今の借家裏の態。上手に才三刀を振上げ、下手に小兵衞傷を負ひたる態にて刀を差附けてゐる。

才三　さあ小兵衞、茶入の在所、きり〳〵白狀してしまへ。
小兵　いや知らねえ、覺えはねえ、假令また知つてゐるとても、汝に知らせてなるものか。
才三　言はずばかうして（ト小兵衞を一刀切る。）
小兵　人殺しだ〳〵。
　ト聲を立てる、才三小兵衞の口を押へ、立廻つてきつと見得、これより兩人立廻りあつて、才三小

兵衞を切下げろ、小兵衞苦しみ倒れる。才三落ちたる煙草入を見付け、中より出かゝりし書物をとり、開き見て、

才三　やこりや是茶入の質入切手、これさへあれば、えゝ忝い（ト煙草入のまゝ懐中する。時の鐘にて後ろの壁の崩れよりお駒剃刀を持ちて這ひ出ろ、才三見て）や、お駒には傷を負うたか。

お駒　才三さん、茶入の在所は知れましたか。

才三　今小兵衞が取落したる煙草入に入れあつたる、寶の茶入の質入切手。して喜藏めは、

お駒　假令惡人なればとて、現在故主の喜藏殿を我手にかけしは主殺し、その言譯は、（ト剃刀を咽へ突く。）

才三　すりやお駒には、命を捨てゝ、

お駒　惡人なれども喜藏殿を手にかけたる上からは、親へ難儀のかゝらぬやう此の身を捨てゝ、

才三　あつぱれ心底、それでこそ武士の娘、寶の茶入手に入れて殿へ差上げその上にて、後より追付死出三途、

お駒　いえ〳〵、此の場の罪は死行くこの身に引受くれば、お前は寶を手に入れて、御歸參なされたその後に、幾萬歳の御壽命過ぎ未來はどうぞ、

才三　言ふにや及ぶ、未來永々替らぬ夫婦。

お駒　そのお詞が未來へ土產。
才三　心殘さず成佛しやれ、
お駒　嬉しうござんす、
才三　見捨てゝ行くは本意ならねど、片時も早く寶の質受、（ト行きかゝる。）
萬次　（伺ひ出でゝ）うぬ、才三め、
トオ三へかゝる、才三よろしく引附ける。お駒思入あつて、
お駒　これが別れか、
才三　ふびんやお駒、
お駒　早うお前は、
才三　合點だ。
トオ三萬次を投のけ、いつさんに花道へ走り入る。お駒落命る。これにて道具廻る。

（柴井町伊丹屋の場）＝＝本舞臺三間常足の二重。正面鼠壁、中央暖簾口。上の方障子家體。下の方三尺の袋戶棚、境界四つ目垣、此の脇小庇附の伊丹屋勝手口といふ腰高の本障子。總て柴井町居酒

屋裏手の態。上手の家體に、十兵衞女房おしづ病鉢巻にて病み勞れし態、木綿夜具の上に括枕に靠れゐる。二重に以前の十兵衞行燈を點けてゐる。時の鐘、門附の合方にて幕明く。

しづ　旦那殿、また日が暮れるのかいな、あゝ日の暮れるが厭でならぬわいな。

十兵　それでもどうも仕方がねえ、そんなことを言はずとも精出して藥を呑んで、早くよくなつてくれろよ。

しづ　いくら藥を呑んだとてどうで助からぬ私が病ひ、此の苦しみをしようより一日も早く死にたいわいな。

十兵　馬鹿なことを言つたものだ。假令死にたいと言つても命があれば死なれるものぢやあねえ。病ひは氣から起きると言ふから、氣をはき〳〵持つがいゝ、何ぞ喰ひてえものでもねえかの。

しづ　いえ〳〵何も喰べたうはござんせぬ。えゝ早う死にたいわいな。

十兵　はて、困つたものだなあ。

ト暖簾口より以前の彦三出來りて、

彦三　兄者人こゝにござりましたか。姉者人お粥でもあがらぬか、拵へて來ませうか。

しづ　彦三どの、もう〳〵必ず構うて下さるな。

十兵　今も何ぞ喰へと言へば、何も厭だ兎角早く死にたい〳〵とばかり、實におれも當惑するよ。

彥三　御尤もでござります、其の御苦勞なさる中へ、又御苦勞をかけまする私の不行跡、面目次第もござりませぬ。

十兵　兄弟の仲に何そんな、氣の毒なことはなけれども、合點の行かぬ汝が心底、小さい時に白木屋へ貰はれ十二の年から大恩受けた養ひ親の庄兵衞どの、常から孝行な者實貞な者と不便をかけられた汝が、打つて替つた今の仕宜、是には何ぞ樣子がなくてはならぬ筈、兄弟の中に遠慮はないほどに、包まずかくさず其の仔細を言つて聞かせてくれまいか。

彥三　事情を分けたる兄者人のお詞、假令どのやうなことがあらうとも言ふまいと思ふたなれど、言はねば明りの立兼ねる此の身の言譯、一通りお聞き下さりませ（ト彥三思入あつて、）何をおかくし申しませう、十二の時から大恩受けた庄兵衞樣、末は夫婦と約束のお駒どの、お前の故主尾花の御子息才三郎殿と言交し今は互ひに深き仲、この彥三がある時は言はずと知れた密夫も同然、一人は恩ある養父の娘、相手は緣ある故主の御子息、この身さへ退く時は浪風立たずと思案を極め、心にもない身持放埒、愛想を盡かされ離別の望み、こゝに一つの難儀といふはふつと馴染んだ吉原の佐野松屋の古今といふ女郞、ほんの座輿に二度三度今では退くに退かれぬといふ其の譯は、

弟の行衞を尋ぬる古今、頼る方なき女の一人身、力と頼むと切なる心底、據なき義理詰故、色には染まねど孝心の道につながる惡縁は、定りごとゝ兄者人、お許しなされて下さりませ。

十兵　詳しい様子を聞いて見ればこりやさうなければならぬところ、大恩のある白木屋の家へ疵を付けず離縁をするとは、若い者には似合はぬ心底、出かしましたく。

トこの様子を聞きおしづ思入あつて、

しづ　彦三殿が小さい時から許嫁のお駒どのと言交したは私が弟才三郎、それ故科もない身に疵を附け離縁する彦三殿、面目ないやら切ないやら、そんな事を聞くに就けても、一日も早く死にたいわいの。

十兵　又そんな愚痴を言ふと、一倍病ひが重くなる。苦勞の絶えぬが浮世の中。さうしてその古今とやらの弟といふは、何國の何といふ者ぢやぞ。

彦三　その古今といふは芝の片門前で至つて貧しう暮らした者、文彌と云つて盲目の弟に官位が取らせ度く佐野松屋の家へ百兩に身を沈め、その百兩の金を持つて弟の文彌は京都へ上つたそれ限りで風の便りも音信もなく、行衞が知れぬと苦しい話し。

十兵　（聞いてぎつくり思入あつて、）何といふ、そんならその古今の弟は文彌と云ふ座頭、あの文彌といふ

か。

彦三　左様でござります。

十兵　え〻〻〻（トびつくりする。彦三合點の行かぬ思入。）

彦三　兄者人、何故そんなにびつくりなされます。

十兵　おれがびつくりしたのは（ト思入あつて、）お〻さうだ、その古今とやらが、嘸頼りないことであらうと思つて、それでびつくりしたのだ（ト言ひまぎらす。）

しづ　あれ、また肩がつかへて來た、苦しや〳〵（ト苦しき思入。）

彦三　姉者人、私が肩を揉んであげませう。

しづ　あ、彦三殿、どうで助からぬ病ひ、捨て〻おいて下さんせ。

彦三　でも、そのやうに切ないのを。

十兵　いや〳〵汝が揉んでは却て氣がつまる、おれが揉んでやるから汝は店頭へ行つて、藥を煎じて來てやつてくれ。

彦三　はい〳〵、どれ藥を煎じて來ませう。（ト彦三は暖簾口へ入る。）

十兵　（上手へ來て）どれ〳〵おれがそろ〳〵撫つてやらう。お〻だいぶつかへて來た、これぢやあ切な

い筈だ。いつたいそなたの病ひは、こゝが斯うといふ取りとめた事のない、名の附けやうのない病ひだと醫師殿の話し、何でも氣をしつかりと持ちさへすれば、斯ういふ病ひはなほるものだ。

しづ　いくら氣をしつかり持つても、毎晩々々夜半になると、枕頭へ血だらけな座頭が來る故、怖い怖いと思ふのでこんな病ひになりました。

十兵　（びつくりして）なに、毎晩々々座頭が來る、そうしてそりやいつ頃から、

しづ　十月の二十日の晩から、

十兵　なに、十月の二十日の夜から。南無阿彌陀佛々々々々（ト小聲に言つて眼を拭く。）

しづ　あ切ない、肩がつかへて苦しい〳〵

ト苦しき思入。時の鐘。花道より座頭こぶ市安下駄を穿き笛を吹きながら出て、

こぶ　按摩針の療治。

ト呼びながら舞臺へ來ろ、十兵衞聞付けて、

十兵　丁度いゝところへ按摩が來た、餅屋は餅屋だ、揉んで貰ふがいゝ。おい按摩さん〳〵。

こぶ　はい〳〵お呼びなさいましたか。

十兵　おい此方だ、療治をしてくんな。

しづ（これを聞いて）いえ〳〵旦那殿、私や按摩と聞いてもぞつとする。止にして下さんせ〳〵。
十兵 何だ、按摩はいやだ、そいつあおえねえ、折角呼んだからちつとばかり。
しづ いえ〳〵、どうぞ堪忍して下さんせ。
十兵 そうか仕方がねえ。おい按摩さん、折角呼んだが病人が厭だといふから、氣の毒だが錢はやるから歸つてくんなせえ。
こぶ いえ私あ錢貰ひぢやあなし、ただ錢はお貰ひ申しません、然し口明だからただ歸るは厭でございます、どなたでもようございますから、ちよつとでも揉ませて下さいまし。
十兵 何だ口明だから緣喜が惡いから揉ませてくれろ、なるほどこりや尤もだ、そんなら仕方がねえ、おれをちつとばかり揉んで下せえ。こつちへ入んなせえ。
しづ 旦那どの、私や座頭さんは見るも厭、そこの障子をしめて下さんせ。
十兵 おい〳〵（ト家體の障子をしめて）今薬ができるから、ちつとの中辛抱してゐるがいゝ（ト十兵衞二重下手の障子を明け、勝手口へ來り障子を明けながら）さあ按摩さんあぶねえよ、手を出しなっ
こぶ はい〳〵有難うございります。
ト十兵衞按摩を中へ入れ、障子をしめて二重の横手へ出る。この時こぶ市手をひかれながらよき所へ

連れられて來る。

十兵　座頭さん、大きに御苦勞、一服お呑みなせえ。

こぶ　（思入あつて）はい〳〵、お療治をしまつてにしませう。

十兵　そうか、おれも一昨日旅から歸つて、まだ草臥がぬけねえから、足をちつと揉んで下さい。

ト枕を出して横に寢る。こぶ市足を揉みにかゝろ、

こぶ　もし旦那、今御病人があるとおつしやつたが、お上さんでござりますか。

十兵　そうさ、女房が病氣で困るのさ。

こぶ　それは嘸お困りでござりませう、そして一昨日旅から歸つたとおつしやりますが、どちらへおいでなさりました。

十兵　據ねえ用で、上方へ行つて來ましたが一人旅といふものは面白くないものさ。

こぶ　いえも、一人旅は不自由なものでござります。

十兵　座頭さん、お前上方の方へ行きなすつたことがあるかえ。

こぶ　はい、上方まではまゐりませぬが、駿河までは參りましたよ。（ト言ひながら段々強く揉む思入）

十兵　あいたゝゝゝ痛え〳〵、座頭さんもうちつと靜に揉んで下さい。

こぶ　はい〳〵かしこまりました。

十兵　座頭さん、お前駿河はどこまで行きなすつた。

こぶ　はい、宇都谷峠まで行きました。

十兵　や（トびつくり思入、こぶ市膝のあたりをぐつと摑む思入）あいたゝゝゝ、あゝ痛え〳〵（ト跳び起き）座頭さん、お前めつぽうかいなひどい揉みやうをするぢやあねえか。

　ト薄どろ〳〵、寢鳥、凄き合方になり、こぶ市すつぽんにて文彌に替り十兵衞の足を撫つてゐる手をきつと取つて、

文彌　まだ〳〵こんなことぢやあない、骨は骨、皮は皮、揉んで〳〵揉み殺すのぢや（トきつといふ。）

十兵（見ておどろき）やゝ、唯の座頭と思つたに、扨はそちは文彌だな。

文彌　宇都谷峠の恨みの一念思ひ知れ。

十兵　おゝ尤もだ〳〵、主人の爲めに據なくそなたを殺して取つた金、口惜しからうが文彌殿、親兄弟もあらうからその人達へ恩金は、利に利を添へて戻さうから、堪へて成佛して下され。

文彌　いゝや浮ばぬ、成佛せぬ。恨みを晴らさでおくべきか。

十兵　おゝ尤もだ〳〵、許して下せえ、堪へて下せえ、南無阿彌陀佛々々。

ト大どろ〳〵にて文彌十兵衞をさいなむ思入あつて、文彌後退りにて消える。十兵衞はアツと苦しみ倒れる。暖簾口より彦三藥鍋を持ち出で、思はず十兵衞に躓きびつくりして、

彦三　や、お前は兄者人、どうなされた。もし兄者人々々。（ト引起す、と十兵衞心附きて、）

十兵　南無阿彌陀佛々々々々（ト眼を閉ぢて思入。）

彦三　是さ兄者人、氣をしつかり持たつしやりませ。

十兵　（眼を開きて）汝は彦三か。

彦三　兄者人、どうなされました。

十兵　（氣を替へて）おれとしたことが、女房の介抱でがつかりして、持病の癪が起つたのだ。

彦三　さうして、もう癪はなほりましたか。

十兵　もうさつぱりとよくなつた。（と言ひまぎらしてほつと思入。）

しづ　（障子の内にて）あゝ切ない、苦しや〳〵。

彦三　あれ、姉者人が、

十兵　また苦しいか（ト障子を明けて介抱し、）これもやつぱり文彌が祟り、いやさ、たゝいてやらうか。あゝ情ないことだなあ。

ト時の鐘、バタ〳〵になり、花道より番頭丈八走り出來り、舞臺へ來て裏口の障子へ行當り、

丈八　あゝ、ゐたわ〳〵、これ〳〵、こゝを明けて下さい〳〵。

彥三　はい〳〵、どなたか明いてをります。（ト行つて障子を明ける、これにて丈八ばつたり內へ倒れる。）え
えびつくりいたしました。や、そなたは丈八ぢやないか。

丈八　はい、丈八でござります。あわてさつしやりますな〳〵。あいたゝゝゝ。

十兵　（ト來て）これは丈八殿、何の御用で今時分。

丈八　今時分來たその用は、大變でござる〳〵。

兩人　なに、大變とはどのやうなこと、

丈八　大變といふは、娘御のお駒さんが才三の家で主人の息子筑田喜藏と中間の小兵衛を殺し、自分も
咽を突いたれど急所をよけて死にきらず、御役人方へ委細の樣子を白狀した故、庇人なれど主殺
しなればお駒さんは囚人、白木屋の家は亂ちき騷ぎでござるわいの。

十兵　そんなら、お駒どのは主殺しの囚人とな、やゝゝゝ。

彥三　詳しい仔細は知らねども、かういふ事のないやうにと、此の身一つに思案を極め、離別したのも
水の泡となつたか、ほい。

ト當惑の思入。どろ〳〵になり、文彌行燈よりよろしく現はれる。おしづこれを見て、

しづ　あれまた座頭が、あれえ（ト苦しみ、どうとなる。）

彦三　なに、座頭とは、

ト彦三の眼には見えぬ思入。十兵衞駈けより介抱して、

十兵　これおしづやアい、氣をたしかに持つてくれ。これ、弟、水を一口、早く〳〵。

彦三　はい〳〵、

ト彦三茶碗へ手桶の水を汲む。此時丈八何心なく文彌を見附けて、

丈八　や、幽靈だ。

ト着物を頭から被る。これにて彦三持つてゐる茶碗を落す。十兵衞文彌を見て手を合せるを、一時に木の頭。

彦三　とんだ、粗相をした。

ト合點の行かぬ思入にて邊りを拭く。十兵衞は口の中にて念佛を唱へる。文彌は段々正面の壁へ薄くなる仕掛け、これをキザミ、大どろ〳〵にてよろしく、

ひやうし幕

五幕目大切

柴井町伊丹屋の場
品川宿海禪寺の場
鈴ケ森提婆殺の場

（淨瑠璃）古今彥三の名を假宅に　心中玉露白小袖（富本連中）

〔役名――伊丹屋十兵衞、提婆の仁三、文彌の亡靈、白木屋彥三、尾花才三郎、文彌母おりく、桂庵婆お百、彌次馬の喜太、居酒屋の若い者彌太、丁稚三太。十兵衞女房おしづ、佐野松屋古今。〕

（伊丹屋の場）――本舞臺上手へ寄せて三間常足の二重、正面紺暖簾左右腰羽目、此上法度書の張出し、下手九尺平舞臺、酒肴と書きし三尺の立障子、內に小皿物を載せし臺、盤臺に鮪の肉塊、軒口に鮹、蛸など吊し、後ろに酒樽。舞臺前下手に三人の仕出し○△□床几へ腰をかけ、小皿物にて酒を呑みゐる。下手に番公肴をこしらへゐる。若い者彌太、丁稚三太角盆を持ち給仕をしてゐる。總て柴井町居酒屋の態。角兵衞獅子にて幕明く、

彌太　あをらい〳〵、

○　おい〳〵小僧どん、ぬるいから熱くしてくんな。

三太　はい〳〵（ト燗銚子を取つて）中臺のお二人さん、お燗なほしだよ。
△　おい〳〵若い衆、鮪鍋をもう一枚と刺身を少しばかり作つてくんねえ。
彌太　はい〳〵入口のお二人さん、鮪鍋が一枚にお刺身が一人前でます。
番公　あい〳〵、鮪鍋はお二人前だの。
彌太　知れたことだァな。
○　もし、お前さん方は大師へでもおいでなすつたのかえ。
△　いえ、私等は海晏寺の紅葉を見に行きましたのサ。
□　今日はお天氣がいゝから、嘸賑やかでござりましたらう。
△　いやも大そう人がでました。
○　いや、大そう人が出るといへば、四五日後に材木町の白木屋のお駒といふ娘が引廻しに出たといつて、見物が大そう噂をしてをりました。
△　私なぞも見に行きましたが、お慈悲なもので、死んだ故捨札ばかりで濟みました。
三太　もし、その白木屋はこつちの家の親類でござります。
○　はあゝこつちの家の親類か、めつたなことは言はれないものだ。

△　悪く言はねえでよかつた。

彌太　はい、お肴ができました。

三太　お燗もよろしうございます。

ト彌太鍋と刺身を持つて來る。三太燗銚子を持つて來る。皆々捨ゼリフにて酒を呑みゐる。甚九の合方角兵衛獅子の鳴物にて、花道より提婆の仁三そぼろなる裝女の袢天を引かけ、額に疵のある惡漢の打扮、酒に醉つたる動作、彌次馬の喜太同じくそぼろなる裝、素面にて仁三を肩へかけて出來り、

仁三　これ、そんなに引張るな。下馬の値が下らあ。

喜太　あぶないから一緒に來いといふことよ。

仁三　べらぼうめ、おらあ醉やあしねえ。（ト言ひながら居酒屋を見て）こう待ちや、こゝで一ぺいやつて行かう。

喜太　今お角力酒屋で呑んで來たばかりぢやあねえか。もういゝ加減にしや。

仁三　酒ばかりはいゝ加減にできるものかえ、もう五合も引つくり返さにや浸み足らねえ。

喜太　おらあ呑まねえから堪忍してくれよ。

仁三　手前喰はざあ、飯でも喰はつし。

喜太　先へ行くのにおそくならあ、歸りにしやな。
仁三　まあ、いゝから入れよ。
彌太　あ、おわらひ〳〵（ト呼立てる。）
仁三　何だ、おわらひ〳〵、べら棒め、をかしくもねえことが笑へるものか。
彌太　いえ左樣ぢやござりませぬ、手前は居酒屋でござりますから、お入りなさいましと申したのでござります。
仁三　入れと言はなくつても今入るとこだ。
彌太　店は込やつてをりますから、奥へいらつしやりませ。
仁三　大きにお世話だえ、どこへ行かうとおれが勝手だ。（トひよろ〳〵する。）
喜太　これサ、店は込んでるから奥へ行けよ、若い衆が困らあ。
仁三　手前おつゥ肩を持ちやあがるな。（トひよろ〳〵として○の足を踏む。）
○　あいたゝゝゝ。
喜太　それ見ろ、人樣の足を踏んだ。もし、喰え醉つてゐますから御免なさいまし。
○　なに、よろしうござります る。

仁三 よくなくつてどうするものだ。足を出してゐるから踏んだのだ。大切の足なら踏んべしよつて懐中へでも入れておけばいゝに。

喜太 これさ、詰らねえことを言ふな。汝が粗相をしておきやがつて。もしどうぞ堪忍して下さいまし。

仁三 おつウ言やあがるな。

喜太 えゝ默つてゐろといふに、

ト兩人二重へ上り胡坐をかき、懐から手を出しあたつてゐる。

○ その御挨拶には及びませぬ。ほんの出合頭でござります。

彌太 御酒はいくつかけませう。

仁三 いくつといつて高が二人だ、四升も五升も呑みやあしねえ。まあ二合かけて下つし。

彌太 お肴は何にいたしませう。

仁三 何にすると言つたつて何があるか知れるものか。先づお肴を承はらうか。

彌太 お暖かなものでは、鐵砲鍋に鮪鍋、お刺身に煮魚、はしらのお吸物にこはだのぬた、鰶の魚田も出來ます。

仁三　よくしやべる奴だな。もう一ぺん言つて見や。

彌太　お暖かなものでは、鐵砲鍋に鮪鍋、お刺身に煮肴、はしらのお吸物にこはだのぬた、鰶の魚田も
　できます。

仁三　先づ、はしらのお吸物にしよう。（ト向うの肴を見て）こう若い衆、向うに吊してあるなア何だ。

彌太　へい、鐵砲でございます。

仁三　お臺場へでも持つて行けばいゝ（ト又見て）あの隣りの首縊りを見たやうな赤いものは何だ。

彌太　あれは、蛸でございます。

仁三　なに、蛸だ（ト目を据えて見て）若い衆、あの蛸の足は何本ある。

彌太　御冗談おつしやりますな。

仁三　知らねえから聞くのだ、何本あるよ。

彌太　八本でございます。

仁三　疣はいくつある。

彌太　そりやあ知れませぬ。

仁三　分からねえ奴だな。

喜太　手前が分からねえのだ。

仁三　あの柱の傍に立つてる禿頭は何だ。

三太　番公さん、お前を禿頭だとよ。

番公　これでも昔は青かつた。

仁三　おい、昔青い禿頭は、ありやあ何だ。

彌太　あれは番公でござりまする。

仁三　番公の煮附はできねえか。

彌太　御冗談をおつしやりませ。

喜太　これ、忙がしいや、早くさう言つてやりやな。

仁三　それぢやあ先づはしらのお吸物に鮪の刺身、鐵砲鍋にこはだのぬただ。

彌太　かしこまりました。奥のお二人さんは、はしらのお吸物に鮪のお刺身、鐵砲鍋にこはだのぬたで二合かゝりますよ。

番公　あい〳〵合點だ。

仁三　おい〳〵若い衆、この野郎は呑まねえから、飯をいつしよに持つて來て下つし。

彌太　はいはい。
喜太　おい飯はいゝよ。おらあ今喰つて來たから。こう手前ごうぎに手を廣げるが、おれの懐を當にするな。おらあ一文もねえよ。
仁三　いゝと言ふことよ。手前にはゞは背負はせやあしねえ。落着いて飯でも喰え。
　ト彌太吸物刺身などを盆へ載せ、燗銚子を提げ來りて、
彌太　へい、お待遠でござりました。
仁三　待遠どころか、べらぼうに早かつた。
喜太　さあ、おらあ呑まねえから大きいものでさつさとやれ。
仁三　酒はづれはしねえものだ、一ぺい呑め。
喜太　呑まねえといふことよ。
仁三　野暮な奴だな。（ト仁三茶碗を出す、喜太つゝいでやる、仁三ぐつと呑んで）あゝいゝ酒だ（ト刺身を喰ひ、）喜太や喰つて見ろ、このきわだはめつぽうにうまい。
喜太　そりやあ芝肴だ、わけはねえ。
彌太　へい、お誂へでござります。

ト河豚鍋を持つて來る。兩人捨ゼリフにて酒を呑む。仕出しも此中酒を呑みながら、仁三を見て氣味惡き思入。

仁三　何だ、人の面ァぢろ〳〵見やあがつて、おれが面がをかしいか。

喜太　誰も何とも言やあしねえ。

仁三　なに、言はねえことがあるものか。

トこれにて仕出しはそこ〳〵にしまつて、

△　さ、おい若い衆、こゝはいくらだえ。

彌太　三百七十二文でございます。

○　こつちはいくらになるえ。

彌太　四百二十四文でございます。

○　あい、勘定はこゝへおくよ。

△　八文足らないが、一朱でまけてくんな。

彌太　へい、よろしうございまする。まあお靜においでなさいまし。

ト皆々門口へ出る。

○　いやも、とんだ生酔が來やあがつたので、うまい酒をまづくした。

△　何だか、風の悪い奴だ。

○　あんな奴にはかゝりあはないことだ。

仁三　何だと。

三人　そりや聞えた、逃げろ〳〵。（ト皆々下手へ逃げて入る。）

仁三　此奴らあ待ちやあがれ、（ト立ちかゝるを、）

喜太　これさ、うつちやつておけよ。

仁三　なに、彼奴らにかゝり合ひをつけて、勘定でも吹つかける氣よ。（ト言ひながら酒を呑み、河豚鍋を喰つて）この鐵砲はめつぽうにうめえ、だまされたと思つて喰つて見や。

喜太　おらあ河豚は喰はねえ。

仁三　何故喰はねえのだ。

喜太　命がをしいや。

仁三　しみつたれなことを言ふな。どうで疊の上ぢやあ死ねねえ身體だ。

喜太　これ、何をいふのだ。（ト喜太仁三の袖を引く、仁三思入あつて、）

仁三　おい〳〵若い衆、もう二合かけて下つし。（ト燗銚子を出す。）
彌太　はい〳〵（ト受取り、入る。）
喜太　まだ手前呑むのか。
仁三　いゝやあ、うつちやつておけ。ドレお燗の來る中寢て待たうか。
　　ト仁三ひどく醉ひし思入にて下の方へ寢る。喜太思入あつて、
喜太　もし若い衆、堪忍してくんねえよ。ひどく喰え醉つてゐるから、
彌太　いえ、どういたしまして、
喜太（仁三をゆすぶりて）これ、起きろよ〳〵、先へ行くのがおそくならあ、起きろと言つたら起きねえ
か（ト又ゆすぶり）いめえましい、とう〳〵寢てしまつた（ト有合ふ障子の衝立を仁三の前へ引寄せ身
體を匿し、）おい若い衆、お邪魔だらうがちつとの間、こゝへ寢かしておいてやつてくんねえ。お
らあちよつと行つて來るとこがあるから、もし此の野郎が起きたなら、先へ行つたといつて、そ
して勘定を取つてくんなせえ。
彌太　かしこまりました。
喜太　それぢやあ若い衆頼んだよ。

彌太　よろしうござりまする。
喜太　どれ行つて來ようか。
　　ト甚九の合方にて喜太は下手へ入る。後時の鐘になる。
彌太　とんだ居殘りをおいて行かれた。（ト表へ思入あつて）おゝ今の間にすつぱり日が暮れた。
番公　灯りの仕度をしたがいゝ（ト是にて彌太、三太灯棚と店の八間へ灯りを點ける。）今夜は肴がよく賣れたから、もう仕舞つてもいゝのだが、旦那に惡いから看板へ灯りを入れておくがいゝ。
三太　あいあい。（ト表の行燈へ灯りを入れる。）
彌太　おい、金公、今夜はたしか湯が早仕舞ひだつたの。
番公　增上寺で御法事が始まつたから、今夜から早仕舞ひだ。
彌太　それぢやあ今の中、一風呂入つて來ようぢやあねえか。
番公　生醉ひはいゝかえ。
彌太　大丈夫、眼の覺める氣遣ひはねえ、もし眼が覺めたら六百二十四文だから、小僧貰つておいてくれよ。
三太　あいあい。六百二十四文だね。

彌太　忘れるなよ。さあ行つて來よう。（ト彌太、番公の兩人は下手へ入る。）

三太　どれ、洗ひ物でもしておかうか。

ト三太下手にて德利、皿などを洗つてゐる。四つ竹節にて花道よりお百肩入の半纏、布子、紺の足袋垢擦りの附きし手拭を被り、桂庵婆アの打扮にて、文彌の母おりくを連れ出來り、

お百　をばさん、お前の行く所は向うの酒屋だよ。

りく　左樣でござりますか。

お百　まあ行つて御覽、どんなにいゝお家だらう（ト言ひながら本舞臺へ來り。）はい、御免なさいまし、おや小僧どん洗ひ物が、嘸冷たからうの、いつもながらよくお働きだ、お前のやうに働く者はこの柴井町に一人もないよ、ほんに小僧どんの親玉といふのだ。また鮪の胴骨があつたら、葱の靑所と除けておいておくれよ。トキに旦那はお家かえ。

三太　あい、奥にゐなさるよ。

お百　大門のお百婆アが雇女を連れて參りましたと、一寸さう申しておくれ。

三太　あい／＼（ト奥へ向ひ）もし旦那え、よくしやべる桂庵の婆アさんが參りました。

十兵　おい／＼今そこへ行くよ。（ト合方になり、奥より十兵衛煙草入を提げ出來り）おゝ、おつかあおい

でか。

お百（腰をかけて）旦那、此間はお眼にかゝりませぬが、めつきりお寒うなりましてござりますな、お障りもござりませんでお目出度うござりまする。先日は澤庵を有難うござりまする。早速かくやに致しまして、お前さん、親父どんと二人で久しく樂しみましてござりまする。ほんに此間の若い衆はどうでござりまするか、お前さん、ふだんお世話になりまする旦那の所故、どうぞよい奉公人をと捜しましたところ、お前さん、あの若い衆はまことにまめでそして正直で、お前さん、よく働きます。こちらのお家へ惡い奉公人をお世話いたしては濟みませぬ。まだお前さんお禮も申しませなんだが、先達は親父どんが深川までお使に參りましたそのお禮に、お金をお貰ひ申しまして有難うござります。まことにあんなことをなされましては、お前さん、お氣の毒でござりまする。まあお聞きなすつて下さりませ、お前さん、御存じのお酒好故お貰ひ申して歸りますと、お前さん、直に五合買つてくれと申しますから、お酒は旦那で清酒でもお貰ひ申して呑むがよい、それよりはそのお金で褌でも買ふがよいと申しましたを、お前さん、とう／＼お酒にして了ひました。まことに／＼困り者ぢやあござりませぬか、お前さん、酒を呑むお錢はござりますが、褌を買ふお錢がござりませんで、お前さん、お耻しいことでござりますが、三年この方褌無しでご

ざりまする、お前さん、勿論たゞの褌では間に合ひませぬ、お前さん、越中褌にいたしまして
も、二布なければできませぬ、お前さん、御存じはござりますまいが、大の疝氣持で、睾丸が大
きうござりますから、お前さん、

ト お百首を振り〳〵しやべる、十兵衛呆れし思入にて、

十兵 こう〳〵おつかあ、もういゝ〳〵、なるほど小僧がおしやべりだと言つた筈だ、實にお前は口ま
めだ。

お百 いえ〳〵、これでも皆さんが無口だ〳〵とおつしやります。

十兵 いや、無口どころか八口位だ。はゝゝゝ。

お百 ほんに私としたことが、自分の勝手なことばかり申しまして、お前さんの肝賢のお話をいたしま
せなんだ。此間お頼みなされました雇女のよいのがござりましたから、お前さん、直に連れて參
りました(トおり〳〵思入あつて)このお婆さんでござりますが、以前は相應に暮したお人でござ
りますが、お前さん、不仕合せで此間から月雇女に出なさいますが、年をとつてゐなさいます故
臺所の世話はしたくないと申してゞござりますが、その代りお裁縫はどんなことでも出來ますわ
いな。

りく（思入あつて）これは〳〵旦那樣でござりますか、お初にお目にかゝります。年とりましてござります故、お役には立ちますまいが、どうかお遣ひなされて下さりませいな。
十兵　あい〳〵。年格恰も丁度よければ、そつちさへよくば賴みたい、今言ふ飯を炊いたり、水を汲んだり、臺所の用をするものは他に爲者があるし、又裁縫もたいがい外へ出せば、小僧の仕着衣綻び位はして貰はずばなるまい。唯お前に賴むは內の者が眼が惡い故、手水に行つたり何やかやするに、男の手では氣がおけて却て病氣に障る故、その世話をして貰ひたいのだ。
りく　それは嘸お困りなされませう。私も年久しく眼の惡い者の世話を致しましたが、それは〳〵手のかゝるもの、慣れましたことなればようお世話いたしませうわいなあ。
十兵　どうぞ面倒を見てやつて下さい。都合がよくば今夜からゐて貰ひたいが、どうだらうね。
お百　直にゐて貰ひたいと旦那樣がおつしやるが、お前の方の都合わえ。
りく　はい、何も用事はござりませぬから、直にをりましてもよろしうござります。
十兵　それぢやあどうぞさうして下さい。
りく　かしこまりましてござります。
お百　これ、をばさん、こゝのお家は大切のお得意、お前氣を附けて勤めておくれしよ。お定りは一分二

百だが、湯錢はもとより、そりや古いものゝ一枚位はお心の附かない旦那ぢやあないから、必ず大切に勤めておくれよ。左樣なら、明日宿書は持つて上ります。おや、私としたことが、お上さんのお見舞も申さず御免なすつて下さいまし、小僧どん又澤庵の出しおきがあつたら、かいかくやにするから除けておいておくれよ。をばさん大切にお勤めよ。旦那おやかましう。はい、左樣なら。

トお百よろしく思入あつて、花道へ入る。三太後を見送り、

三太　よくしやべる婆さんだ。

十兵　いつもながら幕なしには困る。さあ、をばさん此方へ上んなせえ。

りく　左樣なら、御免なされませいな。(トおりくは二重中央へ上る。)

十兵　今聞けば、をばさん、お前も眼の惡い人の世話を欠しくしたと言ひなすつたが、お前の家に眼の惡い人でもあつたかえ。

りく　はい、伜が眼が惡うございました。

十兵　むゝ、その息子といふのは盲人かえ。

りく　左樣でございます。三つの年に怪我をいたし兩眼ともにつぶしまして、按摩をいたしてをりました。

十兵　して、お前の家はどこだえ。
りく　片門前でござりまする。
十兵　え（トぎつくり胸に思ひ當る思入あつて）して、その息子さんの名は何と言ひなさるえ。
りく　はい、文彌と申しまする。
十兵　えゝ（トびつくりなし）思ひがけない。してその息子は（ト十兵衞は因果が廻り來たかとの思入）
りく　（涙を拭ひて）お話し申すも涙の種、お聞きなされて下さりませ。その倅文彌ことは、しかも昨年十月初め、官位を取りに京都へ百兩持つて上りましたを、今に歸つて來るであらうと一月待ち二月待ち、待つに甲斐ない一年越し、何の便りもござりませねば、占やら巫女やら御籤も幾度か取りましたれど、心の迷ひに生死判らず、その官金も文彌の姉が苦界へ沈めし身の代金、便りに思ふ姉弟二人に別れてその後は、十一になる妹と年老い朽ちし私ばかり、足手纏ひと妹を知己へ預けて雇女奉公、をしからぬ身をながらへて苦勞致すも文彌が生死を聞いて死たうござります故、旦那樣、御推量なされて下さりませ。
　　トおりく涙を拭ひゐる。十兵衞術なき思入。
十兵　あゝ年とつた身に尤もだ。何にしろ氣の毒なことだが、してそのお前の息子どのが金を入れてお

いたのは、胴巻か財布かえ。

りく　はい、私が着てをります、この小紋の餘り布で財布を縫うてやりましたが、それへ入れてまゐりました。

十兵　（ぎつくり思入あつて）はあ、小紋の財布か、それぢやあその息子殿は所詮再び歸るまい。一年この方便りのないは、たしかに所持の官金故間違ひがあつたに違ひない。旅へ出た日を命日に訪ひ弔ひをしてやんなせえ。

ト十兵衞もホロリと思入、おりくはワツと泣き伏し、

りく　左樣なら、伜めは死にましてござりませうか。

十兵　萬に一つ無事か知らぬが、まあ死んだらうと思はるゝ。

りく　あゝ、自由になりますことならば此の身と替つてやりたいに、後へ殘つて子供故死ぬにも死なれず憂目を見ますは、何たる因果でござりませうぞ。

十兵　賴りに思ふ子に別れ、嘸お前も便りなからう、ふとしたことで思ひがけなく、さあ、かうして雇女におくといふのも、何ぞの緣であらうから、これから此方の家にゐて女房の世話をなして下さい。その替りには私がまた文彌さんになり代りお前の世話をしようから、雇女に來たと思はずにお前

の家にゐる積りで、暇があつたら寺詣り物見遊山も氣任せに行きたい時に行きなさい、小遣錢も上げるから心を樂に持ちなさい。

りく　馴染もない私を御親切にそのやうに言ふて下さる旦那樣、嚊や娘が聞きましたら悦びますでござりませう。便りのできますことならば、文彌にもこの事を言うて聞かせたうござりまする。

十兵　あゝ、その文彌さんのことは言ひなさんな。これからお前を親と思つて私が話世をしますから、必ず〳〵案じなさんな。そうしたことなら少しは、

りく　え、

十兵　いやさ、佛いぢりは年寄の役、線香でも上げてやんなせえ。

りく　何から何まで有難うござりまする。

　　トおりく手拭にて涙を拭ひ。ひれ伏す、十兵衞不便なといふ思入。此の時衝立の影に寢てゐた仁三眼の覺めし思入にて、

仁三　あ――（ト延びをしながら起上り、衝立を除けて）あゝ、好い心持に醉つてぐつすりやつた。おい小僧、水をいつぺいくんな。

三太　はい〳〵（ト下手より朝顔茶碗へ水を汲んで持つて來る。）

仁三（取つて呑んで）あゝ、うめえ〳〵。（ト呑みほして）この水の味ばかりア、下戸の奴等は一生知らねえ。（トあたりを見て）喜太野郎め、先へ行きやがつたか、おほかた勘定はしやあしめえ（ト十兵衛に向ひ、）もし、旦那、火を一つ貸しておくんなせえ。
十兵　さあ〳〵お附けなさい。（ト煙草盆を出す。）
仁三（雁首で引寄せ、煙草を喫みながら）もし旦那、勘定はいくらでござります
十兵　はい。これ小僧、店の者は何處へ行つた。
三太　湯が早仕舞ひだから、抜けない中に入ると言つて行きました。
十兵　あの、それぢやあ、御勘定はいくらだか。
三太　いえ、その生醉の勘定なら、六百二十四文でござります。
十兵　これはしたりお客様をどうしたものだ。御免下さりませ、形ばかり大きくて、まだ子供でござります。
仁三　なに生醉だから生醉だといふのだ、子供は正直でいゝ。それぢやあ勘定は六百二十四文だね。
十兵　左様でござります。
仁三　どうぞ御面倒でも、お剩錢をおくんなせえ。

十兵　はい、二朱でござりますか、一分でござりますか。

仁三　二朱でも一分でもいゝ、金はお前に預けてあらァ。

十兵　何もお預り申した覺えはござりませぬが。

仁三　なに、ねえことがあるものか、去年お前に預けておいた百兩の中で六百二十四文引いて、殘りを
　わつちに返してくんなせえ（トきつといふ。）

十兵（ぎつくりして）や（ト思入あつて）これ、をばさん、奥に病人が一人ゐるから、奥へ行つて世話を
　してくんなせえ。小僧や、をばさんを案内しろ。

三太　はい／＼。

りく　左樣なら御免下さりませ。

　　ト合方にて善太先におりく附いて奥へ入る。十兵衛仁三に向ひて、

十兵　もし、御酒の上かは知らないが、此方に何も預かつた覺えのないに預けたとは、どこで私に預け
　なすつたのだ。

仁三　何處でもねえ、宇都谷峠で、

十兵　やあ（トびつくり思入。）

仁三　何と覺えがあらうがな。

十兵　む〻、

仁三　十兵衞さん、お久しうござりやした（ト世話にいふ。）

十兵　むう、さういふこなたは、

仁三　忘れなすつたか十兵衞さん、去年の十月鞠子の藤屋で簀卷にされて、阿部川へ打ちこまれるをお前さんの情で其の晩助かつた、私あ提婆の仁三といふ旅を挊ぎの胡麻の蠅さ。

十兵　（仁三の顏をとつくと見て、）額の疵にその時の面付變つて見忘れたが、言はれて見れば覺えある鞠子で一つに泊つたお人、

仁三　こゝにお前がゐようとは、夢さらおらあ知らなんだ。今日友達の交際で、喰つた上へ又喰ひ、とう〳〵倒れてお店の邪魔、醉が覺めたか聞えた聲、はて誰だらうと延上り、見りやあ尋ねてゐたお前、どこでどう廻りあふか、惡いことは出來ねえものだ。（ト家の内をぢろ〳〵見て）三間間口の居酒店、思つたよりやあ立派な暮し、これぢやあ金を預けておいても、まあ安心だといふものだ。

十兵　最前から聞いてゐれば、二言目は十兵衞に金を預けたと言ひなさるが、私はどうも合點が行かねえ。

仁三　とぼけなさんな十兵衞さん、宇都谷峠の辻堂でうめえ仕事をしてゐながら、知らねえ顏をしなさんな。
十兵　宇都谷峠の辻堂で、うまい仕事をしたなぞとは、そりやあいつたい何の事だ。
仁三　何のこつたもねえものだ。公然で言つたらお前の爲めに惡からうと思ふから、隱してやるのにそつちから白ばつくれりやあ言つて聞かさう。あの晩藤屋を追出され、せう事なしに宿はづれの賽の神の古宮でごろりと寢たが寢附かれず、煙草をくらつてまじ〳〵と夜の明けるのを待つところへ通りかゝつた二人連、ばれた仕事の埋草に覗いて見りやあこなたと座頭、こいつあおれをはく氣だなと、後から從いて行つて見りやあ、情ごかしで峠へ連出しばつさりやつて而も百兩、胡麻の蠅も及ばねえ素人衆にやあいゝ度胸だ、長い短い言はねえから、山分けにして五十兩きれいにおれにくんなせえ。
十兵　又してもく、此の身に覺えもないことを、こりや言ひかけをさつしやるな。
仁三　むゝ、それぢやあお前はどうあつても、知らねえと言ひなさるのか。
十兵　さあ、知らぬことは何處までも、
仁三　いゝや、知らねえとは拔けさせねえ、たしかな證據を見せてやらう。

ト仁三腰よりかの提煙草入をとつて十兵衛に突きつける。十兵衛びつくりして、

十兵　や、その煙草入は、(ト取りにかゝるを仁三持ちかへて、)

仁三　どつこい、それから御覧じろツサ。黒棧留の三度形、而も金具は八重片喰、定紋附の道中提、この煙草入はお前のだらう。

十兵　その金物はいくらもある、鹽町仕入れの安煙草入れ、こりやあ世間にまゝある品。

仁三　それぢやあ、これも知らねえとか、

十兵　この十兵衛が所持といふ、たしかな證據のないものを、

仁三　よく知らねえといふ人だ。こう、これを見な(ト煙草入の段口より請取書を出して)此の煙草入の段口に入れてあつたは京から江戸へ手紙を出した島屋の請取り、名宛は伊丹屋十兵衛樣、かういふたしかな證據があつたら、知らねえとは言へめえが。

十兵　むゝ(トぎつくり思入あつて)八重片喰の紋附は鹽町仕入の金物故、私ばかりとも言へないが、その請取があるからはいかにも私が煙草入、したがそりやあ京から歸りにたしか伊勢路で落しました。

仁三　その落したといふのがもう目串の拔けねえ初まりだ。いくらこなたが白をきつても地藏の顏も三度形、この飛脚屋の請取ぢやあ知らねえとは言へめえが、後前揃はぬ言葉の文夢か現か宇都の谷

でいかに座頭を殺せばとて人を盲目にした仕方、所は蔦の細道だがさりとは太え肝つ玉、夜盜の上に人殺し、その兇狀も八重片喰、この段口の上らぬ中命替りの煙草入、五十兩ぢやあ安いものだが、默つて言ひ値で買ひなせえ。

ト仁三きつといふ、十兵衞思入あつて、

十兵　そりやあ落した煙草入を拾つてわざ〳〵この江戶まで持つてござつたこなさん故、それ相應の禮ならばしまいものでもないけれど、身にも覺えね人殺し、盜人なぞと威されてはその禮さへもできませぬ、といつたらそれを證據にして訴人をすると言はれうが、私は兎もあれこなさんは商人めかして旅かせぎ、叩いたならばどのやうな埃りが立たうも知れぬ身の上、いらざる人の世話よりも、おのが頭の胡麻の蠅、追つた方がよささうなものだ。

仁三　(尻を捲り、十兵衞に詰寄り)やかましいやい、默りやあがれ。そりやあ汝が言はねえでも江戶を喰詰め旅へ出て、胡麻の蠅をするからあ、夜盜かつさき家尻切り、時代な文句あ言ひたくねえが、暗え所へも幾度か、ひびあかぎれの切れた骸、どうで始終は刀の錆、犬の餌喰になるおれと、汝あ一所に入る氣か(ト手強く言つて氣を替へ和らかに)そりやあ惡い了簡だ、譬にもいふ此世の地獄、素人と違つて私らあ行きやあまんざら羽目通りで干物の頭を嬉しがり、嚙ぢるやうなこけでもね

え、娑婆にゐるより樂々と一疊敷に住居して、髪は日髪にしつけその掛つた着物を着る株だが、
それでも行く氣あ少しもねえ。ましてお前は素人のこと、こゝあ一番考へものだぜ。（ト和らかに
十兵衞の顏を見る、十兵衞ぢつと思案の思入、仁三又手强く）これ默つてゐちやあ分からねえ、否とか
應とか挨拶しろえ、背負つて立たれぬ兇狀持でも、汝等に頭を押へられ此のまゝ素手ぢやあ歸
られねえ。さういふ羽目になつたからにやあ、汝が惡事を言ひつけて案内がてら一緒に行かう。
おれが身體を捨てたところが高が無宿の喰詰者、三間間口の居酒店奉公人の四五人も使ふ旦那と
板附に列んで掛かりやあ本望だ。さあ、この二品を證據にして訴人をするぞ、覺悟しろ。
ト仁三きつとなつて立上る。十兵衞思入あつて、
十兵　そんならどうでも此方さんは、その二品を證據にして、この十兵衞が訴人をする氣か。
仁三　知れたことだ（ト十兵衞を見る。十兵衞當惑の思入、仁三思入あつて和らかに）とさあ見ず知らずの者
ならば言はにやあならねえところだが、鞠子の宿で命をば助けられたお前故、打明話ししなさり
やあ、殺した科も私が背負ひ、五十の所は二十でもうんといふのが根が江戸つ兒、實あ私も喰詰
めて長く江戸にもゐられぬ身體、九州路に知己があるからそれを賴つて行く積り、何をいふにも
路用に困りどうしようかと思ふ矢先、思ひがけねえお前に逢つたは、こゝで路用を借りろといふ

天道様の言はゞお指圖、寢覺の惡いこの二品、いくらかくらは言はねえから、路用の金を貸して下せえ。

十兵　むう、すりや、鞠子の宿で逢つたを縁に、路用を貸してくれとあるなら、そりや貸すまいものでもねえ。

仁三　そんなら貸してくんなさるとか、そいつあ有難い、首尾よくそれで九州まで退れて行きやあ仕合だが、もし又途中で捉まりやあ宇都の谷峠で座頭を殺し、金を取つたも私が所業と、どうで斬れる身體だから御恩送りに背負つて行きやす。その替りにやあさうなつたら、見舞ぐらゐは入れてくんなせえ。

十兵　何にしろ此方さんも、いつがいつまでさうしてゐたら、結局の仕舞は身の詰り、これから下へ行つたなら心を入替へ堅氣になり、商賣でもさつしやるがよい。澤山のことはできまいが、少し位は用立ませう。

仁三　そりやあ有難うござります。實に私も九州へ行きやあ堅氣になる氣だが、持つて生れた病ひ故又もや彼地で惡事をして江戸へ逃げて出て來たら、お邪魔ながら二階へでも匿つておいてくんなせえ。その時必ず十兵衞さん、見ねえ顔はならねえよ。

十兵　そりやあ私も男だから、砕けてお前が頼みなさりやあ世話をしめえものでもない。

仁三　さうお前が言つてくんなさりやあ、下へ行くにも氣が丈夫だ。善は急げといふからにやあ今夜直に立ちたいが、先立つ物は路用の金、二三十兩貸してくんなせえ。

十兵　かうなる上は得心づく、いかにも貸して進ぜませうが、生憎金が今手元に、(ト言ひかけるを、)

仁三　いゝけ冗談を言ひなさんな、この屋體骨で二十や三十、なにねえことがあるものか。

十兵　さあ、見かけは五十や百兩には困らぬ顔をしてゐても、内證で質をおくのが商人、二季の拂ひや五節句に困る時には神奈川の伯父のところで融通をすれば、旅へ出がけを幸ひに、私と一緒に神奈川の伯父の所まで行つて下さい。三十兩が五十兩でも金を借りて進ぜませう。

仁三　そりやあ思召は有難いが、神奈川までは一晩泊り、お前に足を運ばすのが、

十兵　丁度ほかに用事もあれば、今夜の月を幸ひにこれから行つたら曉明には神奈川迄は行かれよう。

仁三　それぢやあお前に旅立を送られて行くやうだ。

十兵　まあ何にしろ仕度をする中、一ぺいやつて待つて下さい。

仁三　丁度さつきの持越しで、熱くしてやりてえところだ。

十兵　酒も肴もそこにあるから、心置きなく呑みなせえ。

仁三　そいつあ何より有難い。
　　ト十兵衞仁三を切つてしまはうといふ思入にて立上り、
十兵　その呑む酒が、（ト末期の水といふ心、）
仁三　え（ト振返り顔を見合せる、十兵衞氣を替へて輕く、）
十兵　醉はつしやんなよ。
　　ト唄になり兩人よろしく、此の道具廻る。

（伊丹屋奥の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面暖簾口、上手は佛壇、地袋戸棚、下手鼠壁、上手折廻し障子家體、いつもの所門口、下手勝手口。こゝにおしづ眼病者の態にて床の上に夜着にもたれゐる。おりく脊を撫りゐる。此の見得にて道具留まる。

しづ　もし、をばさん、大きに開いて來ましたから、もうようござんすわいな。
りく　そのやうに御遠慮なされましては、却つてお目にさはりますわいな（ト撫りながら）してまあ。あなたは何日からして、このやうにお煩ひなされましたぞいな。
しづ　さあ、忘れもせぬ去年の十月、而も二十日の明方より風邪を引いたが初にて、一年あまりのぶら

ぶら病ひ、かてゝ加へて風眼にて、此間より兩眼とも明くことならぬ盲目同然。

りく　それは嘸まあ、御不自由でござりませうわいな。

しづ　今聞けばお前の息子さんも、眼が不自由でござんしたさうな。

りく　左樣でござります。三つの年に目を潰し、長々苦勞をかけし上行衞知れずになりましたが、大方死にましてござりませう。

しづ　賴りに思ふ子に別れ、嘸力なうござんせうな。

りく　御推量なされて下さりませいな。

トやはり合方にて、奧より十兵衞出來りて、

十兵　おゝ雇女のをばさん、御苦勞であつた。つい忙しいので忘れてゐたが、まだ藥が一帖殘つてあつた、どうぞ煎じてくんなせえ。

りく　かしこまりましてござります。煎じやうは常の通りでござりますか。

十兵　お定りの一ぱい半入れて、一ぱいに煎じるのだ、生薑が二片入りますよ。

りく　はいはい。どれ、お煎じ申しませうわいな。

トおりく枕頭にある藥包を持つて奧へ入る。十兵衞おしづの傍へ來て、

十兵　おしづ、どうだ少しはいゝか。

しづ　はい、大きによろしうございますわいな。

十兵　そりやあ何にしてもいゝことだ。そりやあさうと、おれは今夜急な用で神奈川まで行つて來ねばならぬ故、家を氣を附けてくれよ。

ト戸棚より紺の脚絆、一刀を出し、脚絆を穿きかける。おしづこれを聞き扠はといふ思入あつて、

しづ　もし旦那え、今夜神奈川へおいでなさんすは、どうぞ止しにして下さんせいな。

十兵　いや、おれも夜る夜中行き度くもないが、是非行かねばならぬことだ。丁度雇女の來たを幸ひ、あのをばさんに頼んでおけば、何も不自由なこともあるまい。直歸つて來るから氣を附けてゐてくれ。

しづ　いえ〱どうあつてもお前さんは、片時も放されぬわいな。

トおしづ這ひ寄り、身拵へする十兵衛の袖を捉へ留める。

十兵　それだといつて、免れられない急な用で行くことだ。何も女郎買ひにでも行くといふのぢやあなし、わる留めをするにやあ及ばない。

しづ　いえ〱留めねばならぬわいな、それとも強つて今宵の中行かねばならぬことならば、私もいつ

しよに連れて行つて下さんせいな。

十兵　そりやあおしづ分からねえといふものだ。達者なものなら知らないこと、病人を連れて何處へ行かれるものだ。

しづ　（むつとせし思入にて）なるほどさうでござんせう。病みほうけた私をば連れて行く氣はござんすまい。

十兵　こりやあ汝あ、いゝあじなことをいふナ。

しづ　さあ言はねばならぬ十兵衞殿、お前は私を置ざ去りに、捨てる心でござんせうがな（トきつといふ。）

十兵　（思入あつて）何を馬鹿なことをいふのだ。今でこそ女房なれ以前は恩あるお主の娘御、假令どんなことがあらうとも、汝を捨てゝ濟むものか。

しづ　いえ〳〵さうでござんせぬ。お前は捨てる心でござんす。

十兵　とは又何故、

しづ　お前の心が水臭い故、

十兵　なに、水臭いとは、

しづ　連れ添ふ女房に身の大事、なぜ明かしては下さんせぬ。

十兵　何と言やる。
　　ト稽古笛の入りし合方になり、おしづ探り〳〵佛壇の下段より小紋の財布を出し、
しづ　お前の心が水臭いといふのは、即ちこれでござんす。
　　ト財布を十兵衞の前へ出す、十兵衞びつくりして、
十兵　やゝ、これをどうして、（ト思入、おしづ思入あつて、）
しづ　いつぞやお前が上方から戻つてから、佛壇の下段は決して明けるなと言はしやんすほど見度うなり、夫の言葉を背いてはそでないことゝ思ひながら、お前の留守に下段の内明けて見ればこの財布、何故これが見せともないか不審な事とそのまゝに樣子も聞かず二年越し、最前雇女のをばさんが話を聞けば財布の合紋、扨はいつぞや上方にて調達なせしといふ金は、眼かいも見えぬ文彌殿を、
十兵　あゝ、これ（ト仁三、おりくへ憚ろ思入、おしづ小聲にて、）
しづ　お前は殺して取らしやんしたかと、ぞつと身の毛も立つ怖さ、隱すことほど現はるゝと、お前の命にかゝはる財布、絡む紐の女房に何故匿しては下さんす、現在殺せし文彌殿の母御が來た故身の大事と眼界も見えず病みほうけし私を捨てゝ逃げようとは、思へば情ないことぢやなあ。

十兵　その恨みは尤もだか、これには深い様子のあること、仔細をいふにもこの財布の裏と表に鵜の眼鷹の眼、逃げも隱れもせぬほどに、今夜一夜やつてくれ、あとでとつくり仔細を話さう。

トおしづは十兵衞に縋り泣く、十兵衞は表と裏へ憚る思入、

ト言ふにも構はずおしづ十兵衞を捉へゐる。合方段々凄みになり、おしづへ文彌の亡靈の乘りうつりし心にて、十兵衞を恨めしさうに見上げて、

しづ　えゝ恨めしい、お前はなあ、私がこの眼の潰れしも元はと言へばお前故、文彌殿がいくせの思ひで調へたりし官金を、取らうばかりに邪慳にも宇都の谷峠で殺害なせし、その一念に此の身の苦しみ、而も十月二十日の夜、明方近き小夜風にふるへ附しが病の因、つひにこの眼の潰れしも文彌殿の一念で、わが身を苦しめこなさんに慘苦を見する死靈の祟り、晝夜六度の熱の差引、骨は骨皮は皮、揉み碎かるゝ苦しみも、これも誰故こなさん故、えゝ恨めしい十兵衞殿、

トおしづ物凄くいふ、十兵衞ぞつとせし思入にて、

十兵　あゝこれおしづ何をいふのだ、そなたは熱に浮かされたのか。

しづ　何の熱に浮かされよう、大事の〳〵夫故、片時こなたの傍放れず、慘苦を見せねばならぬわいなう。

十兵　えゝ、病ひの業とは言ひながら、つまらぬことを言つてくれるな。

　　ト十兵衞おしづをぢつと抱きしめ、仁三とおりくへ憚る思入、おしづ振拂つて立上りきつとなり、

しづ　いゝや言はねば腹が癒ぬ。宇都の谷峠で文彌殿を殺害なせしは伊丹屋十兵衞、（ト言ひかける。）

十兵　（おしづの口を押へて）えゝ又しても要らぬ口、此身に覺えもないことを夢か現か情ない。

　　トぢつと思入

しづ　（振拂つて）十兵衞は、人殺しぢや〳〵。

　　トこれにて十兵衞捉へるを振拂ひ、ちよつと立廻つておしづの口をぐつと押へ、

十兵　ちえゝ、お主の娘でなくばなあ。（トおしづ十兵衞の手を振拂はうとするを十兵衞抱締るはずみに口を押へし手過つて咽へかゝりぐつと締る。これにておしづ眼を明き苦しみ、十兵衞をきつと見る。十兵衞びつくりして）やゝこりや女房を（ト手を放す、おしづひよろ〳〵としてよろしく倒れる。）手が廻つてか、敢ない最期ホヽホイ（ト十兵衞びつくりしてどうと倒れる。）

仁三　（奥にて）十兵衞さん、まだかえ。

　　ト十兵衞この聲を耳にし、二枚折屛風でおしづを匿し、

十兵　あい、今そこへ行きますよ。

ト ばた〳〵にて、奥より彌太走り出來り、

彌太　もし旦那、雇女姿が裏口から、血相かへて駈出しました。

十兵　扨は大事を、

彌太　（屏風の中を見て）や、こりやお上さんが。

十兵　あゝこれ（ト制へて囁く。）

彌太　すりや、雇女の跡追つかけ、

十兵　ちつとも早く、

彌太　合點だ、

ト時の鐘にて、彌太逸散に花道へ走り入る。奥より仁三出來りて。

仁三　さあ、仕度がよくば行きやせうぜ。

十兵　大きに待遠であつた。

ト脇差を取つて立上る。此時薄どろ〳〵にて上手障子家體へ座頭の影うつる。仁三見て、

仁三　や、あの人影は、

十兵　（見て）行燈の破れさ、

ト行燈をぐるりと廻す、破れ穴あり、これにて人影消える。

仁三　どうやら座頭に、

ト仁三ぞつとして身震ひをする。これといつしよに、十兵衛脇差をしやんと差す、これが道具替りのしらせ。

十兵　え、

仁三　あゝ、風でも引かにやあいゝが、

ト仁三尻をぐるりと捲り、小楊枝を使ふ。十兵衛屏風の中を見て愁ひの思入よろしく、時の鐘の送りにて、此の道具廻る。

（品川宿海禪寺の場）――本舞臺三間正面黒幕、卒塔婆を結込みし玉椿垣、正面低き草堤、種種の石塔、上手小高き石地藏、草井戸柳の立樹、舞臺上、下、中央に石塔、下の方草堤の淨瑠璃臺。總て南品川海禪寺墓所の態。雨聲雷の音にて道具納まる。とばた〳〵にて花道より古今島田鬘、白の小袖、淺黄のしごき赤合羽を着て竹の笠をかざして出る。あとより彦三同じく白の小袖淺黄の帯おしよぼからげ、毛氈を肩へかけ俵を冠り走り出る。と突然どんと落雷のしたる音して舞臺の柳の木に火花を散す、古今花道へどうと倒れるを彦三介抱して、

彥三　古今、心は正氣か。

古今　彥三さん、

彥三　これ。

ト留める。これより富本連中の淨瑠璃になる。

〽心中と噂を白の晴小袖、帶も彥黄の緣ぞと放れぬ手と手彥三が、肩にかけたる毛氈は何處やら寒き秋の雛、古今の髮も寢亂れし夜佐野枕にひゞきたる砧の槌も末枯れて、葉末に消ゆる草の露、置きまどはせて佇めり。（ト兩人よろしく舞臺へ來る。）

これ、古今、恐ろしい今の雷で、持病の癪でも起りはせぬか。

古今　いえ〳〵、どうで死ぬる此身なれば、怖いことはござんせぬ。

彥三　思へば浮世に捨てられた二人が身の上、死出三途の晴着にと、對に仕立てた白小袖。

古今　蓮の臺で女夫の樂しみ、早う殺して下さんせいなあ。（ト思入、本釣鐘。）

〽更渡る鐘の音くらき夜嵐に今死ぬる身も肌寒く、ぢつと寄添ふ眼もうるみ、愚痴な女に未練な男、こんな因果な惡緣を出雲とやらの神さんが結び違へて馬鹿らしい。添ひ遂けられぬ仇中で何故このやうに可愛ひと、力の限り抱きしめ淚果てしはなかりけり。

彦三　今更いふも愚智なことだが、白木屋を家出せう爲め心にもない吉原通ひ、ふつと上つた佐野松屋、そなたの顏を見てびつくり、

古今　いつぞや芝で弟の難儀を救うて下さんしたその時に、いとしらしい親切なお方ぢやと思ひこがれた彦三樣、

彦三　樣子を聞けば、そなたの身の代百兩の金を持つて出た弟の文彌の行衞を尋ぬる力と頼まれ、退くに退かれぬ浮世の義理、

古今　馴染重ぬる其中に、色や浮氣を取りおいて、眞實惚れて片時も思ひきられぬ互ひの因果、

彦三　白木屋を離別したその後は兄貴の家に掛り人、金のできよう當もなく紋日物日もそなたの身揚り、

古今　呼ばるゝだけは呼びとげても、お前と深うなつてより爲になるお客は放れ、果は二人が身の詰り、弟の生死も定まらず、生きて甲斐ない私が身の上、

彦三　思案工夫もせん方盡き、一緒に死なうと覺悟を極め、この品川の海禪寺は彦三の菩提所、こゝで死ぬるが本望故、弟子となると嘘言ふて座敷を借りて最期の仕度、

古今　首尾よく廓を拔け出て、一緒に死ぬのは嬉しいが、後に殘つた母さんに歎きをかける不孝の罪。

彦三　ふとした事の義理詰から、かうした仕儀になつたのも、

古今　前生からの約束事、
彦三　思へば、深い、
兩人　惡緣ぢやなあ。
〽顏と顏とをすりよせて、そもや初會の其夜から、男ばかりか氣にほれてやるせないほど呼びたさに、焦れてかけたる待人の來ぬに木櫛の恥かしく、心で解けた結島田、まだ年のある其中に女夫にならばどうしてと、算へ暮して灸すえる日まで互ひに言交し、悅ぶ甲斐も情なや、冥土とやらへ早く行て添ひとげるのが樂しみと、思ひつめたる女氣に男心の亂れ燒、刄になまる風情なり。（ト よろしく思入あつて、）
彦三　よしなき歎きに時移り、人目にかゝらば互ひの身の上、
古今　早うお前の手にかけて下さんせいな。
彦三　覺悟はよいか。
古今　南無阿彌陀佛。
〽いざと二人が座をしめて、覺悟ながらも惚れた同士、輪廻の絆しめからみ、これが此世の別れかと、またもや手に手執る月の雲間に浮名殘るらん。

トこれにて富本連中を消し、彦三は一刀を拔き、

彦三 南無阿彌陀佛、

ト古今の胸先を突かうとする。どろ〳〵にて彦三の腕痺れる思入、彦三又突かうとするとどろ〳〵にて兩人一寸放心する。正面の石塔の水鉢より文彌の亡靈現はれ、陰火燃える。これにて兩人心附き周邊を見て、

はて心得ぬ、思はず腕の痺れしはやつぱり未練の氣おくれか、覺悟はよいか。

古今 さあ〳〵早う。

彦三 南無阿彌、

ト又突かうとする、どろ〳〵にて文彌の亡靈刀を留る思入、彦三思はず刀を落すを古今見て、

古今 未練でござんす彦三さん、死おくれる其中に、追人の者に捕へられなば二人の恥、いつそ私が、

ト落ちたる刀を取つて死なうとする。始終どろ〳〵文彌留める思入、古今刀を落す、彦三見て、

彦三 やゝ、最期を急ぐ際となり、二人の腕が痺れるは、

兩人 はて、合點の行かぬ、

ト心得ぬ思入、文彌の亡靈思入あつて、

文彌　おなつかしや姉者人、縁につながる彦三殿、死なうといふは無分別、こゝばかりに日は照らず、何國の裏にも身を忍び、頼りない母者人や幼い妹の身の上を、必ず〳〵頼むぞや。

ト手を合せる、これにて兩人始めて文彌の亡靈を見ておどろき、

彦三　やゝ、さういふ聲は、

古今　弟文彌、どうしてこゝへ、

文彌　必ず〳〵兩人の衆、どうぞ短氣をとゞまつて具れと頼むは母者人や妹がこと、名殘りは盡きじ早おさらば、

トどろ〳〵烈しく文彌の亡靈卒塔婆の中へ消える。兩人びつくり思入あつて、

彦三　扨は今のは、弟文彌が亡靈にてあつたるか。

古今　そんなら弟は長旅にて、此の世を去りし亡魂の、

彦三　この場へ現はれ思はずも、二人が最期をとゞめしか。

古今　不便な弟が、

兩人　身の上ぢやなあ。

ト思入、禪の勤めバタ〳〵にて、花道よりおり〳〵走り出で舞臺へ來り、兩人に躓きびつくりして、

りく　もし〳〵御免なされませ、心の急きます者でござります、お免しなされませ。
　　ト此時月出る、古今おりくをすかし見て、
古今　や、お前は母さんぢやござんせぬか。
りく　（びつくりして）ほんにそなたは娘のお菊、よい所で逢ひましたなあ。
古今　思ひがけない、どうしてこゝへ。私や恥しい〳〵、勘忍して下さんせいなあ。
彦三　（思入あつて）いつぞや芝にて文彌殿が難儀を救ひしその時は、而も留守にて逢はざりしが、扨は古今が母御なるか。
りく　さうおつしやるはその時に、悴文彌が御恩になつた彦三樣、思ひがけないと申さうか。
彦三　面目ない姿でお目にかゝりました。
りく　合點の行かぬ、彦三樣といひ娘がその裝、そんなら、二人は。さうしてこゝは、
彦三　この彦三が菩提所、品川の海禪寺。
古今　どうしてこゝへ夜夜中、お前は一人ござんした。
りく　私にもさつぱり合點が行きませぬ。これ娘悦びや、今日といふ今日文彌の敵が知れたわいの。
古今　何と言はしやんす、弟の敵が知れたとはえ。

彥三　して〳〵それは何國の何者、

りく　さあ、その譯といふは、今日晝間柴井町の伊丹屋十兵衞といふ居酒屋へ、雇ひ奉公に行たところ、その十兵衞といふが、駿州宇都の谷峠で文彌を殺した奴でござるわいの。

兩人　えゝゝゝゝ（ト びつくり思入。）

りく　不思議なことは、十兵衞の佛壇の下に文彌が持つて出た小紋の財布が匿してあつたので、敵といふが知れた故、そなたに早う知らさうと吉原へ行く道を違へ、さまよひ來た此の墓原、思はず兩人に逢ふといふも、これもやつぱり文彌が導き。もし彥三樣、娘古今に力を合せ、文彌の敵十兵衞を討たせてやつて下さりませ。（ト これにて兩人心苦しき思入。）

古今　そんなら文彌は、宇都の谷とやらで人手にかゝり敢ない最期、その弟の敵といふは、

彥三　緣につながる彥三が實の兄十兵衞殿であつたるか、ホイ。（ト 當惑の思入。）

りく　（聞いて）何とおつしやる、あの伊丹屋の十兵衞といふは、

古今　力と賴んだ彥三さんの兄さんでござんすわいな。

りく　えゝゝゝ（ト びつくりする。彥三思入あつて）

彥三　深い樣子は知らねども御主の爲めに、十兵衞殿なくてかなはぬ金の入用、扨は宇都の谷峠にて金

を持ちたる弟文彌を、金がほしさに手にかけて奪ひとつたに疑ひなければ、現在文彌の敵ながら、この彦三の兄なれば助太刀かなはぬ弟の敵。さあ古今、兄の代りに彦三を此の場に於て潔よく討つて未來の弟が迷ひを晴らして呉れいやい。

古今　いえ〳〵、敵の弟彦三さん、知らぬこと故力と頼み、夫婦の縁まで結んだお前、どうして敵と討たれませう、とても添はれぬ敵同志、冥土へ行つて弟へその言譯をするほどに、お前の手にかけ私をば、早う殺して下さんせいな。

彦三　いや〳〵それでは道ならず、やつぱりそなたが彦三を、

古今　いえ〳〵私を彦三さん、

彦三　いや、そなたが、

古今　いゝえお前が、

兩人　早う殺して下されいの。

ト兩人刄を互に突附ける。おりく聞いて、

りく　いつぞや芝にて文彌の難儀を助けられたる恩義と言ひ、娘古今が力と頼み夫婦の縁を結んだと聞くからは、討つに討たれぬ文彌の敵、

古今　知らぬことゝて助太刀を、頼んだ夫は敵の弟、
りく　思ひまはせば淺ましい、血で血を洗ふ、
古今　夫婦兄弟、
彦三　因果同志の、
三人　寄合ひぢやなあ。

ト三人手を取りハア、と泣く。此の見得寺鐘にて、よろしく道具廻る。

（鈴ケ森の場）——本舞臺彼方一面の黑幕、藪疊み、眞中に題目の大石塔、上手に石地藏、下手にお駒の捨札、所々に松の立樹。總て鈴ケ森夜の體。時の鐘、雨車、波の音にて道具留る、と上手より以前の十兵衛半合羽、脚半、草履、一本差し、小田原提灯を提げ、仁三尻端折り番傘を相合にさし出來りて、

十兵　今までいゝ天氣だつたが、ばら〱降りでまつくらになつた。
仁三　もう何時だらうね。
十兵　さうさ、品川が引過だから、九つ半でもあらうか。

仁三　夜が更けた故か、べらぼうに寒い。
十兵　どうか、雨もあがつたやうだ。
　　　ト雨車止み、仁三傘をすぼめ下手の捨札を見て。
仁三　まつくらで知れねえが、この捨札は何だしらぬ。
十兵　なに、そりやあ材木町の白木屋の娘の捨札だ。
仁三　あゝ噂のあつた主殺しかえ。
十兵　存命ならば磔刑だが、死んだが増しか捨札ばかり。南無幽靈頓生菩提俗名お駒南無阿彌陀佛々々。
　　　トちよつと捨札へ回向をする。
仁三　お前知る人かえ。
十兵　あい、私が弟の縁により、白木屋は親類さ。
仁三　この捨札を見るにつけ、惡いことはしたくねえ、どうで始終は廻しの上ばつさり殺られて板附と覺悟はしてゐるけれど、紙幟や捨札を見ると身の毛がよだつやうだ。あゝ鶴龜々々。
　　　ト身震ひする。
十兵　誰しも命はをしいものだな。（ト十兵衛わざと提灯の明りを消し、）南無三、爪突いて灯りを消した。

仁三　こいつあまつくらで歩きにくい。

ト仁三行きかける。十兵衞後ろから一腰を抜き切らうとする。仁三刀の光りに振返り十兵衞と顔見合せる。十兵衞ひらりと刀を後ろへ匿す、仁三これを見て、

十兵衞さん、お前さん何で抜きなすつた。

十兵　え、さあ灯りがありやあいゝけれど、くらやみぢやあ險危、それ故威しに抜いたのだ。

仁三　いや、さうぢやあるめえ。お前おれを切る氣だらう。

十兵　なんと、

仁三　神奈川まで行つたなら金を貸さうと連れ出して、人通りなき鈴ヶ森、文彌もどきにばつさりと、こゝでおれを切る氣だらうが、その手は喰はねえ。止しにしやれ。（ト傘を持ちきつとなる。）

十兵　（思入あつて）むゝ、さう推量の上からは何を隠さう、お主の爲文彌を殺して奪ひし百兩、一旦は役に立てし故再び金の才覺なし、親戚の者に返せし上敵と名乘つて討たるゝ心、まだその金も揃はぬ中、我身の大事を知つたるこなた、無心合力したところが一度や二度ではよも聞くまい、度重なれば現はるゝ悪事千里の人殺し、お上の成敗受くる時は金も返さず親戚の者に討たるゝこともかなはぬ故、神奈川までと連出したは、こゝで此方を殺さう爲め、訪ひ弔ひはせうほどに、

ト十兵衛下にゐて言ひかける。

仁三　おきやあがれ（ト十兵衛を蹴倒す、十兵衛はどうと倒れ兩人きつと見得。）うぬ大それたぺてんしめ、表面は堅氣の商人風、内密挊ぎの人殺し、その身の惡事を隱さうとおれをこゝで切る氣だらうが、うぬらが腕ぢやあ殺されねえ。もうかうなつたら汝が身も娑婆と冥土の生別れ、提婆の仁三が引導を渡さぬとても駒の上、拔身の鎗の供揃へ、天下いつぱい淨玻璃の鏡に寫る紙幟、その身に素性を散し書、所も名におふ鈴ヶ森、犬の餌食になりやあがれ。（トきつと見得。）

十兵　さういふそなたを先馬に、冥土の旅の一里塚、此の松並木の露霜と覺悟極めて往生しやあがれ。

仁三　何を小癪な。

ト波の音になり、十兵衛拔いて切つてかゝる。仁三傘にて立廻り、仁三上手の地藏を蹴倒し臺石を小楯に上へ上り傘を開き、十兵衛下より刀をさしつけきつと見得。鳴物替つて仁三一刀切られて倒れ、十兵衛上手にて刀を振上げて見得、これより仁三紅血になり手負ひの立廻りよろしくあつて、結局十兵衛仁三を切倒し、とゞめに咽を突く。仁三突かれたまゝに十兵衛の髻を摑む。此時十兵衛立上る。仁三咽へ刀の立ちしまゝ一緒に立上る、十兵衛摑みし手をもぎ放す。仁三ひよろ／＼として刀をさしたまゝ仰向けにばつたり倒れる。十兵衛ほつと思入あつて、

十兵　不便ながらも十兵衛が惡事を知つたがこなたの不運、やがて冥土で言譯なさん、成佛得脫してく

りやれ。南無阿彌陀佛々々。

ト回向なし刀の血を拭ひ、シヤンと差し行かうとする。ばた〳〵にて上手より彦三、古今出來り十兵衞に行當り、一寸立廻つて十兵衞中央に兩人左右へ別れ、きつと見得。この時二十日の月出で、三人顏を見合せびつくりして、

彦三　や、兄者人か、

十兵　さういふそちは弟彦三、

古今　そんならお前が十兵衞樣か。

十兵　して、この女中は、

彦三　廓で馴染を重ねし古今。

十兵　すりや文彌殿の姉なるか、して〳〵二人が此の態は、

彦三　廓の金にはつまるの慣ひ、若氣の至りに忍び出で、心中なさんとせしところ、

古今　亡き弟にとゞめられ、一先姿を匿さんと大森在へ行く途中、

十兵　折も折、時も時、こゝで逢ひしは此身の願ひ、何を隱さうお主の爲めいつぞや宇都の谷峠にて、そなたの弟を殺せし十兵衞、敵を討つて佛へ手向けよ。まつた弟彦三は兄弟同腹でない證據この

場で古今に助太刀致せ、唯残念なは文彌殿を殺して取りし百兩を返せし上と思ひしも、才覺ならぬ今日の今、こればつかりが心残り、

ト ばた／＼になり、上手より尾花才三郎麻上下大小、中間箱提灯を持ち出來り、

才三 やあ十兵衛こゝにありしか、首尾よく茶入の質受なし、本地へ歸參の尾花才三、殿のお覺え目出度くして、拜領なせし金子百兩これで先頃その方が我へ返せし百兩を又もやそちへ返し與ふぞ。

ト才三郎懷中より袱紗包みの證文を出し渡す。十兵衛開き見て、

十兵 やゝこりや金子と思ひのほか、これなる古今が年季證文、

才三 その金額も卽ち百兩、それを古今へ渡しなば、そちが望みもかなふ同然。

十兵 すりや才三樣にも一部始終を、

才三 唯今姉に承つたり。

十兵 扨は女房おしづには、

才三 一旦死せしも我所持の身替り不動の利益にて、姉者人には蘇生なしたり。

十兵 はあゝ忝い、今ぞ此の身の本望成就、文彌殿の官金も元はそなたの身の代金、此の證文は百兩替り、いざ此の上は弟の敵、二人が對の白無垢も敵討のこれ晴着、さあ立上つて我を討て。

彦三　とは言へ、現在兄者人、
古今　緣につながる私がどうして、
十兵　討たねば古今彦三とも、文彌へ義理が立つまいが。
兩人　それぢやというて、
十兵　きり〳〵討たぬか。
兩人　さあ、
十兵　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
十兵　(思入あって)討たずば、いつそ、(ト十兵衛腹へ刀を突き立てる。)
才三　やゝ、こりや十兵衛には、
兩人　早まつたことして下されたなあ。
十兵　悔むは無用、十兵衛が命を捨るは豫ての覺悟、これにてどうぞ文彌殿を殺せし罪は許して下され。
才三　あつぱれ健氣なそちが生害、
彦三　浮世の義理とは言ひながら、

古今　思へば果敢ない、

兩人　緣ぢやなあ。

才三　古今が身請濟む上は、彥三諸共白木屋の家名相續いたせし上、一子出來れば伊丹屋の後見なして家名を立てよ。

十兵　殘る方なき御計らひ。

三人　ちえゝ忝い。

ト此時黑裝束の捕人四人ばらばらと出て、

捕人　人殺し、動くな。

十兵　何を、

ト此時樂屋頭取出て、

頭取　先づ今日はこれぎり。

と目出度出打し

（をはり）

「岩戸の景清」は「難有御江戸景清」三立目（序幕）の返しとして新作されたもので、嘉永三年三月、作者三十五歳の折河原崎座に於ての作である。海老藏（七世團十郎）が追放赦免となつて江戸へ歸來したお目見得狂言として、「一谷嫩軍記」に熊谷と琵琶の景清とを勤めるに際し、その前曲として、またお目見得のダンマリとして附加されたものであるが、獨立したものとして取扱はれてゐる。一流れのまとまつた狂言として見ることはできないが、作者にとつては最初に獨立して執筆したものとせられてある海老藏のその時の口上中に「……猶お土產狂言には一昨年彼地にて相勸めましたる琵琶法師の景清御覽に入れ奉りまする。然るに右景清にてダンマリを一幕致しまするやう御好みに、何がなと工夫いたしましたる所、先年五代目祖父白猿向島へ隱居いたし再勤の折柄初代歌川豐國天の岩戸に見立て三枚續きに描きましてござりまするが、この度二代目豐國又々天の岩戸に私を見立てましたる錦繪御評判にあづかりし由承り、これ幸ひと右の岩戸をダンマリに取仕組御覽に入れ奉りまする。然れどもなか〲五代目白猿同樣と增長いたしましたる心にてはござりませぬ、たゞ錦繪に本づきましての儀にござりますれば左樣思召しのほど願上奉りまする」とある。これによつてこの作の由來が明らかにされてゐる。後年時として新歌舞伎十八番の中に加へられたりしたのも、かういふ來歷を持つてゐたからであらう。

書卸しの時の役割は、市川海老藏（惡七兵衞景清）、坂東彥三郎（北條時政）、尾上菊次郎（朝日）、市川九藏（秩父重忠）、市川蝦十郎（和田義盛）、岩井粂三郎（衣笠）、尾上松綠（千葉ノ介常胤）、市川猿藏（江間義時）、坂東竹三郎（鷲尾義久）等。‖挿畫にした錦繪は國芳の筆であり、扉に用ひたのは書卸し當時使用の正本の表紙で、默阿彌の手蹟である。

校訂者誌す

大正八年十一月

難有御江戸景清（岩戸の景清＝一幕）

江之島岩窟路の場
同　岩窟の場

〔役名＝平家ノ侍大將惡七兵衞景清、秩父庄司重忠、北條四郎平ノ時政、和田左衞門義盛、千葉之助常胤、江間ノ小四郎義時、天城ノ猪の又、長谷八郎、須ノ股運平。義盛妹朝日、重忠妹衣笠等。〕

（岩窟路の場）＝本舞臺一面の黑幕、上の方藪疊、下の方松の立樹。總て江之島岩窟路の態。東西の窓蓋を下ろして暗くし、浪の音にて幕明く。と、花道より仕丁二人松明を照して先に立ち、後より鎌倉の大名六人小素袍、侍烏帽子小刀にて、各自横笛、笙篳篥、羯鼓など樂器を持ちて出來りて、

大一 此度我君賴朝公平家追討の院宣を賜はり、先達御連枝たる蒲の冠者範賴公、まつた九郎判官義經公、

大二 須磨の內裡に立てこもる平家の一門討取らんと、生田の森の砦にて今合戰の最中と聞く、

大三 疾くより彼の地へ我君も御出陣あるべきところ、この程よりの御不例にて、矢尻を研ぎしも思は

ぬ延引。

大四 それ故日夜典藥も耆婆扁鵲が醫療をたづね、お藥調進なすと雖も、
大五 更に藥の效驗もなく次第に御不例甚しく、在鎌倉の大小名安氣ならざる時も時、
大六 三日三夜以來は日月星は光りを失ひ、灯影なければ行歩もかなはず、前代未聞の天變故、
大一 時の博士に占はせしに、當江之島の岩窟に當り、金氣の光り顯はるゝは、
大二 まさに不思議の一つなりと、博士の敎へに案の如く、岩窟の口を盤石にて、
大三 鎖して通路留めしは、これ凡人の所業ならず、
大四 辨才天女の訓戒にて、神慮に適はぬことあらんと、
大五 則ち今日この所へ賴朝公の御代名として、秩父の庄司重忠殿、
大六 まつた北條和田殿始め、我々どもに至るまで、神を諫めの神事の役、
大一 最早、奉幣祈念の刻限、
大二 諸侯の御入りに間もあるまじ、
大三 別當方にて相待ち申さん、
五人 左樣ござらば安西殿、

大一　いづれもござれ。

ト皆々上の方へ入る、とばた〳〵になり花道より、須ノ股運平水汲軍兵の裝へ蓑笠を着て松明を點し出來り、呼子の笛を吹く、これにてばつたりと音して上手の藪疊を押分け、長谷ノ八郎忍者の裝にて出來る、運平之を見て、

運平　長谷樣、

長谷　こりや（ト制へ、）須の股運平合圖の呼子は、

運平　はつ、火急の御使一大事、須磨へ範頼義經二手に別れて押寄せ來り、追手は範頼搦手は軍慮に敏き義經故、要害堅固といひながら如何なる手段あらんも知れず、それ故御一同方公達方、景清樣をお待兼ね、急ぎ彼地へ御越あるやう、お迎への爲め參つてござる。

長谷　むゝ、すりや源家の奴輩が須磨の內裡へ押寄せしとな。して〳〵勝利は何れなるぞ。

運平　いまだ勝負は分からねど、いかに要害堅固なりとも油斷大敵。して、景清樣には、

長谷　むゝ、主人景清は先達て都を開きしその砌、この鎌倉へ忍び來て、先づ賴朝を討取らんと姿を替へて狙ひしかど、大望成就の時を得ず、それ故この江之島の岩窟に隱れ、妙音天女に祈誓をかけ日に譬へたる平家の重寶小烏丸の御劍へ月の兎の血潮を注ぎ、日月合して蝕となる天地の道理、

劒の威徳に三日三夜世界は暗黒、この虚に乘つて調伏なし源家の根を斷ち葉を枯らさん豫て主人の計略なり。

運平　すりやこの如き暗黑は、劒の威徳でござりましたか。

長谷　いかにも、汝は人目にかゝらぬ中夜を日についで須磨へ立越え、この地の樣子を注進せよ。我は主人ともろともに後より須磨に立越えん。

運平　然らば、拙者はこれより直に、

長谷　片時も早く、

運平　心得ました。

　　トこの時以前の仕丁出で、

仕丁　樣子は聞いた（トかゝるを見谷抜討に切倒し、）

長谷　行きやれ。

運平　ハツ、

　　ト運平は逸散に花道へ入り、長谷は上手へ入る。とこれにて黑幕を切つて落す。

(岩窟の場)——本舞臺一面に岩山の景にて、中央に七五三を張りし岩窟、この前に大いなる大岩立てかけあり。總て江之島岩窟の態。上下に錦を摺込みし幕を張り、左右に四神を飾り、舞臺前方上下に大篝を焚き、兩窓蓋を下ろし波の音にて道具納まる。

と波の音打上げ大薩摩になる。

〽夫神代の其往昔、天の岩戸の常闇に、八百萬神の神樂を奏し、常世となせし例に習ひ、今鎌倉の天變に月日の光り蝕の如く、晝夜の別あら海にかの常闇と岩窟の神をいさめの庭神樂。

ト神樂の入りし迫上の鳴物になり、舞臺中央へ北條時政錦の袋入りの鏡を三寶に載せて立ち、上手に和田義盛の妹朝日白き幣を持ち、下手に重忠妹衣笠青き幣を持ちゐる。上の方のすつぽんよりは和田義盛しでの附きし榊を持ち、下の方のすつぽんよりは千葉之介常胤鉾を持ちて、この三方同時に迫上がる。これと同時に花道へ秩父庄司重忠錦の袋入りの曲玉を三寶に載せて持ち、下手に江間小四郎義時荒事の裝にて白き鷄を抱へたる見得にて、双方見合つて迫上がる。

重忠　まことや唐土漢の高祖は、三尺の劍を以て四百餘州を切りなびけ、ついには王の位に上る。

時政　今我が君朝賴公一張の弓の雄飛に、君の宸襟安んぜんと、

朝日　奢る平家を追討の、御仁惠厚き御身さへ、物に障りの花に風、

衣笠　月に浮雲御不例に都の空へ御出馬も、昨日と過ぎて今日は又、

義盛　諸山の奉幣諸寺の祈念、丹精怠ることなけれど、
常胤　神明佛陀の加護もなく、心ならざる時も時、
義時　陰陽二精の光りを失ひ、三日三夜闇夜の如く、
朝日　かゝる不思議は世の憂ひ、
衣笠　急ぎ岩窟を開けよと、
義盛　嚴命下り神代なる、
常胤　天の岩戸を開きたる、
義時　例に習ふ神諫め。
重忠　即ち、君の名代として、秩父の庄司次郎重忠、
時政　神事の補佐は元老たる北條四郎平時政、
朝日　鈿女の舞も今樣に、和田義盛が妹朝日、
衣笠　同じ役目も不束ながら秩父の重忠が妹衣笠、
義盛　路次の警衞非常を守るは和田左衞門義盛、
常胤　添役として千葉の介常胤、

義時　末座に控へし某は岩戸を開く手力雄鈍き力も有難き、このお目見得に御贔屓の惠を江間之小四郎義時、

時政　その他三浦小玉黨、

義盛　在鎌倉の大小名、

常胤　神樂の役にたつか弓、

朝日　矢なみつくろふ武士も、

義時　貝鐘ならぬ、

衣笠　笙篳篥、

重忠　實に勇ましき、

皆々　神いさめ、

〽岩うつ波にこだまして、心耳を澄ます江之島の神の岩窟ぞ物凄き、

トこれにて花道の時政、義時舞臺へ來る。重忠思入あつて、

重忠　あれ見られよ方々、神仙自然の岩窟へ大盤石を鎖せしは、よも凡力にあるべからず。

時政　何さま、三日三夜の常闇に、それかれ思ひ合すれば、

重忠　彼の神代の故事に、天照神素盞雄尊の惡行を憤られ、
時政　天の岩戸へ籠りたまひ、
衣笠　八百萬の神々が、
義時　庭上左右に篝火を焚き、
常胤　天の鈿女の俳優に、
義盛　御神岩戸を明けたまふ、
重忠　それは遠つ神代の往昔、
時政　これは目前人の世に、
朝日　月日の光りあらずして、
衣笠　三日三夜の常闇は、
義盛　世にも稀なる、
常胤　天變不思議、
ト此時　鷄　時をつくる。
重忠　最早長啼鳥の聲を發せば、

義時　方々神樂の用意めされい。

ト下座にて大勢『はあゝ』と應へありて、本行の神樂になり、朝日、衣笠立つて舞はうとする。この時どろ〳〵になり、兩人目眩めきたぢ〳〵となる。これにて左右の篝火一時に消える。皆々きつと思入、とこの時正面の岩窟の間より後光さす。

重忠　やゝ、岩戸の中より赫々と金氣の光り顯はれしは、

時政　妙音天女の感應なるか。

義時　何にもせよ、いぶかしきは岩窟の中、

ト義時つか〳〵と行き、盤石へ手をかける、大どろ〳〵にて後光は消え、義時盤石を引き退ける、岩窟の中より景清大百日にて、錦の袋入りの小烏丸を持ち出て、前の岩へ片足踏み出し、小烏丸を拔きかけきつと見得、これにて烏澤山に飛び上がる。兩窓を明けて明るくなる。皆々景清と顏見合せ扨はといふ思入。景清小烏丸をしやんとさす。これにて又兩窓をおろし、以前の暗黑になる。夜神樂の入りし鳴物になり、だんまり模樣の立廻りにて景清は皆々の中を縫ふ。此中に天城ノ猪の又出て景清へかゝり小烏丸へ手をかける、景清これを振放すと猪の又は劍の紐を持つたまゝ下の方へ轉る。景清は小烏丸を腰にさし皆々を縫つてよろしく立廻り、よきほどに長谷八郎伺ひ出て、

長谷　重忠觀念、

ト重忠へ切つてかゝるを、重忠身を轉し突きやる、義時長谷を引附ける、此の時景清は花道へ遁れて行く、猪の叉劒の紐を持ちたるまゝつか〳〵と行き組附くを、景清小烏丸にて拔打に切倒し、猪の又は下の方へ見事に轉る。これにて烏笛になり、兩窓を明けて明るくなる。皆々景清をすかし見て、

時政
重忠　まさしく平家の、

トこれにて景清ぎつくりして、小烏丸の袋にて太刀を押へるを木の頭、兩窓をおろして暗くなり、景清は血を拭ふ思入。舞臺にては長谷八郎跳ね返すを義時片足かけて見得。皆々は景清の方を見込み引張りの見得よろしく、どろ〳〵カケリにて

ひやうし幕

ト幕外にて、景清血を拭ひし劒を見る、これにて兩窓を明けて明るくなり、鞘へ納めてきつと見得鳴物になり、花道へ振つて入る。跡シヤギリ。

（をはり）

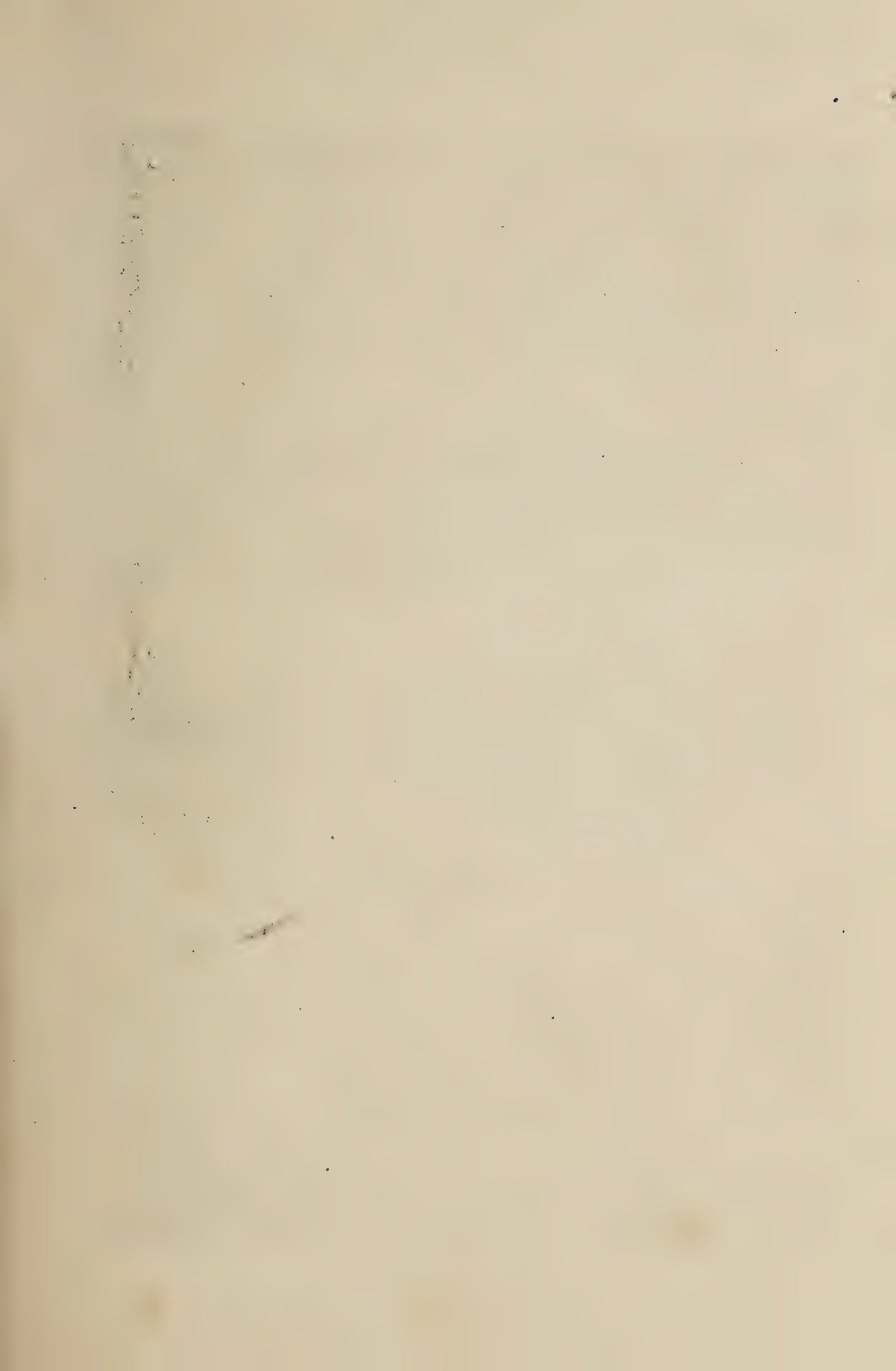
元祿正徳の昔〳〵神祇白柄よしや組武道を磨く角鍔の角だつ詞の行違ひ名に大鳥が道場へまけぬ木太刀の曙が一本まゐる喧嘩買遺恨の元は十三郎とお照が戀の詮議から姉の小磯が氣を紅裏甚三左吉も師匠とは白刃で振込む甚内へ勘當詫に片腕を切た誓もやぶれかぶれ故主の爲に喜三郎が浮世は夢か幻の異見も聞かで幼兒に書すいろはの書置もとがなくて死す身の覺悟命を捨にやる妻も蓼喰ふ蟲のすきやがし牡丹紅葉の行燈にこれ御ぞんじの男達

唯御攝力瘤

「腕の喜三郎」は文久三年八月、四十八歳の折市村座に於て書卸された。御所ノ五郎藏と共に先代小團次の演出した俠客の一である。小ぢんまりとした引きしまつた作で、よく清爽狷潔な男達を描き出してある。小團次の盛んであつた時代に、その女房役を勤めたのは四世梅幸菊五郎と先代尾上菊次郎とであるが、この作に於ける喜三郎女房おいそは、菊次郎の扮役中の傑作として傳へられてある、喜三郎宅の場に於ける弟の曙源太に對する意見ぶりなぞは、小團次をも驚嘆せしめたと「俳優百面相」にも述べられてある。殊に書卸しの當時好評であつたのは、喜三郎の子分に扮したのが、家橘、訥升、三津五郎、九藏等といふ當時人氣のあつた若手連を網羅して、それ〴〵にその特長を發揮せしめた所にも因由してゐた。

書卸しの時の役割は、市川小團次(腕の喜三郎)、尾上菊次郎(喜三郎女房小磯)、市川團藏(神崎甚内)、市村家橘(曙源太)、市川九藏(幻長藏)、澤村訥升(二見重三郎、紅裏甚三)、坂東三津五郎(前髪佐吉)、片岡十藏(大鳥逸平)、中村歌女之丞(甚内娘お照)、市村竹松(甚内倅甚之助)等であつた。

插畫にしたのは、三代目豐國筆の錦繪である。

大正八年十一月　　校訂者誌す

茲江戸小腕達引（腕の喜三郎——三幕五場）

序幕　神崎甚内道場の場

（役名——腕の喜三郎、神崎甚内、曙源太、幻長藏、紅絹裏甚三、二見重三郎、大鳥逸平、神埼甚之助、若徒正作、梅吉、蔦藏、村岡重藏、横山大助、甘川栗平、長倉運八、鹽田伴藏。喜三郎女房お磯、甚内娘おてる等。）

（神崎道場表の場）——本舞臺三間の間下手二階造り、家根付白壁、この下三尺程中窓黒き格子、この內へ簾を掛け、窓の下黒き下見板、是に續き上の方に潜門の附し黑の冠木門、此上手黑塀、すべて神崎道場表の態。爰に門弟四人白の稽古襦袢、袴竹具足にて竹刀を持ち立掛り居る。焚出しの子分梅吉、蔦藏法被姿にて御膳籠を傍へ置き、詫つて居る。この模樣白囃子竹刀の音にて幕明く。

梅吉　別に何も私どもあなた方の事を、悪く申したことではござりませぬ。

蔦藏　好な道でござりますから、此お窓から覗いたばかりでござりまする。

梅吉　若しお氣に障りましたら、

兩人　御免なすつて下さいまし。
軍藏　これ、わいらは爰を何と心得て居る、踊や三絃の稽古所とは譯が違ふは。
大助　我々共が紛骨碎心致し居る劍術修行の道場なるわ。
栗平　汝ら如き下素下郎が覗いて見ても役には立たぬわ。
運八　所謂盲目の垣覗き、それに只今聞いて居れば何か我々共をさみなす樣子。
軍藏　やい、いつたいわいらは何所の奴だ。
四人　きり〳〵爰でぬかしてしまへ。
梅吉　誰もぬかさぬとは申しませぬ、私どもは數寄屋川岸で人入を致して居ります、喜三郎が子分の者でござります。
軍藏　なに、喜三郎が子分と申すか、なるほど聞及んだる人入の喜三郎、
大助　其喜三郎といふ奴は、何か少しばかり劍術を心得て居るとのこと、
栗平　其子分故生利に是が世にいふ譬の通り、
運八　生兵法大疵の元とは彼等が事でござるて。
軍藏　やい〳〵喜三郎の子分とあればわいらでは分からぬ、兩人の内一人は留置くから分る奴を連れて

参れ。

梅吉　もし、そんな事をおつしやらずと、どうぞ勘辨なすつて下さいまし。

軍藏　えゝ何をぐづ〳〵申すのだ、わいらでは分からぬ故。

大助　きり〳〵是へ連れて参れ。

四人　早く致せ〳〵。

梅吉　左樣なら別に迎へに参りませずとも、親分の弟の曙源太と申します者が一緒に家を出ましたから只今爰へ参りまする。

蔦藏　小頭が参りましたら、それにお掛合ひなすつて下さいまし。

大助　そんなら其源太とやらは小頭か、

兩人　へい左樣でござります。

軍藏　小頭と申すからは少しは譯が分かるでござらう。

大助　源太とやらが参りなば、嚴しく談じ附けてやらう。

栗平　然らばそやつが参る迄、暫時是にて待合さん。

運八　早く是へ参ればよいが、まだ小頭の影は見得ぬか。

兩人　まだ影が見えませぬ。

軍藏　待たるゝ身より待身の譬へ、はて待遠しい。

四人　事だなあ。

ト四人は向うを見込む。子分二人は下手に氣を揉む思入、此見得白囃子にて道具廻る。

（神崎道場の場）――本舞臺上手へ寄せて常足九尺の家體、正面へ大形の襖、下手へ折廻し板羽目、是へ木太刀、竹刀、面小手など掛けて有り、ずつと下手杉戸、いつもの所門口、總て神崎道場の態。此二重に大鳥逸平袴裝一本差にて莨を呑み居る。平舞臺に甚之助袴裝にて竹刀を持ち伴藏半平稽古裝にて竹刀を持ち、甚之助と立合つて居る。此見得白囃子にて道具留る、と一寸立廻つて甚之助兩人を打据る。逸平是を見て、

逸平　いや適れ〳〵、流石は先生の御子息だけあつて竹刀の功者、息込の樣子却々年功の者も及ばぬ事お年の行かぬお腕前には感心仕つた。此上共に御出精召れたがようござる。

甚之　却々以て未熟の私、大鳥樣のお譽のお詞有難うござりまする。此上共にお稽古をお願ひ申し上げますする。

伴藏　何時もながら若先生のお手の內、

半平　恐入りまして、
兩人　ござりまする。
逸平　いやなに御兩所、何か御門前が騷がしいではござらぬか。
伴藏　なるほど、だいぶ騷々しい樣でござりまする。
半平　どうか傍輩どもの聲の樣子。
逸平　いかさま門弟衆の樣子ぢや、早く見てござらつせえ。
伴藏　然らば見屆けて參るでござらう。
甚之　早くおいでなされ。
兩人　畏まつてござる。
ト下手へ入る、合方になり上手障子よりお照振袖娘の打扮にて、湯呑を茶臺へ乘せ持出で來り、
お照　大鳥樣今日も御苦勞に存じまする。お茶が入りました、お一つお上りなされませ。（ト茶を出す。）
逸平　是は〳〵お照殿のお手づから此お茶の出花とは別段風味も格別でござらう、いや忝なう存じまする。
お照　（甚之助に向ひ）これ甚之助、重三郞樣が先刻から奧の座敷で讀物のお稽古をして遣らうとおつし

やる程に、願つて參つたがよいぞや。

甚之　左樣でござりましたか、只今門弟衆と稽古を致しをつたので、嘸かし重三郎樣にもお待遠でござりましたらう。左樣なれば大鳥樣御免なされませ（ト奥へ入る。）

お照　どれ私も（ト立上り）左樣なら又後程（ト行きかゝるを逸平袖をひかへて、）

逸平　是はしたりお照殿、何も其樣にそは〳〵としてお出には及びませぬ。やゝともすると重三郎の傍にばつかり、拙者とても此道場に只一人徒然でもござるし、ちとお話しなされてもよいではござらぬか。

お照　はい有難うござりまするが、私もあのお歌の稽古を致しかけてをりますれば、

逸平　何と仰せらるゝ歌の稽古をめさるとか。これお照殿よく聞れよ、歌などはなまめいた物で入らぬ事でござる、武士の娘は武藝が肝腎、名におふ人に聞えたる神崎甚内殿の娘長刀の一と手木太刀の遣ひ樣位は御存じなくては叶はぬ事、其所は身共が手を取つて和らかに教へて進ぜる。さゝ是へお出なされ〳〵。

お照　いえもう有難うはござりまするが、劍術の稽古ならばあなたに御厄介を掛けませずとも、お父樣に教へてお貰ひ申しますわいな。

逸平　何もさうすげなう申さぬものだ、親子の中では却つて我儘があつて覺えられぬもの。是非々々身共が教へて進ぜよう。

お照　いえ〳〵それには及びませぬわいな。

トツイと奥へ入る、此時お照文を落して行く事、逸平うつとりと跡を見送り思入あつて、

逸平　えゝ忌々しいあのお照、こりや一通では行かぬわえ。(ト思案の思入、このとき文に目を付け取上げ見て)なに、重三郎様へ照より、ムゝ是で様子が分かつたわえ。此逸平が云ふ事を聞かぬも道理此文だ、てつきり二人が様子と云ひちゝくり合つて居るは必定、どうで女に彈れるは敵役の當りまへだ可愛さ餘つて憎さの譬、こりや一思案せねばならぬわえ。

ト思入、此時ばた〳〵になり、下手より源太羽織着流し白足袋草履にて門弟六人に引立てられ、此後より幕明の子分付き出で、源太を舞臺中央へ引据る、逸平是を見て、

逸平　こりや門弟衆、仰々しい其態は何事でござる。

軍藏　はつ大鳥様お聞くだされ、我々共が道場にて試合を致すを表より差覗き、

大助　どちらが強いの弱いのと、蔑なす奴故此所へ連れて參り、

栗平　定めて我々共を難じるからは心掛があらうと存じ、

運八　此道場にて我々が相手になつて立合はうと存じ、是迄引摺つて參つてござる。
逸平　何と仰せらるゝ、あれなる若者が武士たる者の立合をば蔑すとは憎くい奴。
トきつといふ、源太前へ出て、
源太　あゝもし〳〵、それは私ではござりませぬ、あれに居りまする若い者が、何か麁相を申しましたとやら、一足後れて私が參つて見れば只今の仕合せ、取るにも足らぬ不骨者でござりますれば、何卒先生の御勘辨を持ちまして、御了簡なされて下さりませうならば、有難うござりまする。
逸平　して汝は何所の者で、住居は何所だ。
源太　へい私は數寄屋河岸で、お屋敷樣へ人入渡世を致しまする喜三郎が身内の者でござりまする。
逸平　何と申す、すりや喜三郎が身内と申すか。
源太　へい左樣にござりまする。
逸平　その喜三郎と申す者は、身共も兼々聞及んでなる神影流の劍術に達し、町人風情の身を持て子分の者に劍道の稽古をなすと承はる。定めしそれなる若者も神影流を學びならん、某是にて見物致せばそれにて彼と立合召され。
軍藏　大鳥氏のお詞故此場に於て我々が、

粟平　足腰の立たぬ樣、打つて〳〵打据ゑくれるわ。

逸平　さあ立合はぬか、いやさ立上らぬか。

軍藏　きり〳〵と、

皆々　立合つせえ（ト皆々きつと云ふ、源太迷惑なる思入あつて、）

源太　これは又思ひも寄らぬ其お詞、却々もちまして町人風情の私共が劍術の柔術のと存じませう樣がござりませぬ。此儀ばかりは幾重にも御用捨なされて下さりませ。

軍藏　いや罷成らぬ、心掛がある事は我々共が存じて居るわ。

ト源太種々詑びる、門弟皆々無理に源太を前へ出す、兩人の子分口惜しき思入あつて、

蔦藏　こいつあ餘つ程面倒になりさうだ。

梅吉　親分へ知らせて來よう（ト兩人は逸散に下手へ入る。門弟皆々見て、）

皆々　あいつは當人だ、迯す事はならぬぞ〳〵（ト皆々立上つて追つかけ行に掛る、源太是を留めて、）

源太　あゝもし〳〵、なにも其樣にお騷ぎなさるには及びませぬ。あの者が迯げましても私が是に居りますればあなた方のお耻辱にはなりませぬ。先々お下にござりませ。

ト思入、逸平源太を見て思入あつて、

逸平　最前より見る所、落付たる彼が樣子、是非此所にて勝負致せ。

源太　其所を何卒御勘辨をもちまして、

逸平　いゝやならね、罷ならぬ。

運平　さあ立合はぬか、えゝきり〳〵と、

皆々　それへ直れ。(ト四人竹刀にて源太を苛く前へ突出す。此時奥より甚之助出で、門弟を留めて、)

甚之　是はしたり各々方如何な事でござる、只今奥にて承れば、彼者も只管詫て居る樣子、今日は父上もお留守の事何れもにも了簡して此儘免して遣はすがようござる。

逸平　いや〳〵甚之助殿、左樣でござらぬ、貴殿は何も存じた事ではござらぬ、打捨てお置下され。

甚之　左樣でもござりませうが、町人風情を其樣に、

逸平　町人と仰せられるが、町人故に狎了簡相ならぬ、身の程知らぬ不届きゆゑもう貴殿はお口出しは御無用でござる。假令先生の留守にもせよ道場を預かるは此逸平、門弟共の恥辱になれば是非共勝負致させねば、武士道の一分が相立たぬわ。それ何れも、ぐづ〳〵と面倒だ、其奴を打据ゑて仕舞つせえ。

四人　心得ました。(ト四人一時に双方より打つてかゝる、源太一寸留めて、)

源太　すりやどうあつても私めを、
逸平　道場預かる大鳥逸平、刀の手前了簡ならぬ。
源太　是程お詫申しても、
逸平　くどいことだ。
源太　こりやもう是非に及ばぬわえ。
四人　覺悟致せ。

ト四人竹刀にて打て掛る。是を相手に矢張竹刀を持ち一寸立廻つて中央にて屹度見得、是より十分立廻りあつて、四人を打据ゑ竹刀にて散々に打つ、甚之助よい氣味と云ふ思入にて奥へ行かうとする、此時奥より重三郎袴裝一本差刀を持出て、甚之助と一寸囁き、甚之助は奥へ入る、逸平此時飛んで出で、源太に拔掛ける、爰へ重三郎割つて入り、逸平を留めて、

重三　先暫く、大鳥氏、
逸平　誰かと思へば重三郎殿、何故身共を留めさつしやる。
重三　さお止め申すも相人が町人、御成敗なされても左のみお手柄にも相なりますまい。
逸平　ではござれども、憎くい若者。

重三　先お止まり下され、町人の身を以て武士たる者に手向ひ致すにつくい奴。こりや町人、なぜお詫申さぬのぢや。さゝお詫致せ〳〵。

源太　へい〳〵重々の不調法、麁忽の段は幾重にも御免なされて下さりませ（ト詫びる、重三郎思入あつて）

重三　大鳥氏、あの通り詫て居りますれば、もう免してお遣りなされ。未熟なるあの若者、何で貴殿と立合が出來樣筈がござりませぬ。先々お下にお出なされませ。

逸平　えゝいくぢなしの素丁稚めが、此大鳥が微塵に致し吳れうと存じたなれど、重三殿が御挨拶故今日は差免す、えゝ命冥加な奴だわえ。（ト竹刀にて俯向いて居る源太の額を打つ、是にて額へ疵付く事、重三郎思入あつて）

重三　是程拙者がお止め申すに、お聞入なくあの者の、

源太　（額の血を見て、）こりや男の生面を、

逸平　おゝ割つた、いかにも身共がぶち割つた。

源太　むゝ。（ト源太口惜しき思入）

逸平　其面は何だ、えゝ面を見るも小胸が悪いわ。（ト源太を蹴倒す、是にて源太屹度なつて）

源太　もう了簡が、

ト立上る、重三郎これと留めるを振拂つて又立掛る、逸平も立上り刀に手を掛ける、此途端ばた〳〵になり下手にて、喜三郎『暫く〳〵』ト聲を掛ながら、羽織脊流し一本差人入の頭の打扮、以前の梅吉、蔦藏付き出來り直に舞臺へ來て、源太を取つて引据ゑる　源太喜三郎を見て悄りする、喜三郎皆皆を見て、

喜三　これは〳〵何れも様、御挨拶も致さず御道場へ罷出まして、麁忽の段眞平御免下さりませ。これ源太どうしたものだ、お歴々様のお出の席で立騒いで失禮千萬、日頃からあれ程噛んで哺る様に言聞しておくぢやあねえか。其裝あどうしたといふのだ。

源太　もし兄貴見ておくんなせえ。お歴々でも侍でも斯う面へ疵を付けられちやあ、わつちやあ厭だ、了簡なりやせん。

喜三　え丶又してもく己が云事を聞かねえのか。(ト屹度云ふ。是にて源太無念の思入にて扣へる。喜三郎思入あつて、)へい〳〵何れも様失禮の段御免なされて下さりませ、私は人入渡世を致しまする喜三郎めにござりまする。何か召仕の者があなた方へ對し、御麁相を申上げましたさうにござりますが、あれなる者が宿元へ知らせに參り様子を聞いて悄り致し、取る物も取敢ず宙を飛んでお詫に罷出ました。どうか私に御免じ下され、御勘辨の程お願ひ申し上ます
る。

ト皆々に詫ろ。重三郎思入あつて、

重三　すりや其方が喜三郎と申すか。

喜三　へい、不調法者にござりまする。

重三　拙者とても子細は委しく存ぜぬが、其方の召仕の者が何れも方へ粗言を申したとやらで、大鳥氏が殊の外の御立腹、其方參りしこそ幸ひお詫言を申したがよい。

喜三　左樣なればあなた樣が大鳥樣でござりまするか、誠にはや申譯もござりませぬ。若い者が粗相御免なされて下さりませ。

逸平　すりや喜三郎とやら申すは其方か、これよく聞け、武士たる者の劍道はこりや表藝だぞ、其道場へ理不盡に踏込み、是なる門弟衆へ手向ひ致し恥辱をあたへし不禮なやつ、それ故身共が許さぬのだ。（ト云ふを源太前へ出て、）

源太　もし〳〵兄貴さういふ筋ぢやあござりやせん。二人の奴等が粗相をしたと六ヶ敷捻るから、わつちが詫をしてゐるを有無も云はずに出し拔けに竹刀を持て掛られちやあ、わつちも默つて居られぬ故、無據お相人になつたのでござります。

喜三　あゝこれ源太、餘計な口をきかねえがいゝ、今更それを並べても水掛論といふものだ。假令何と

おつしやらうとも、己がお詫をする程に、四の五の云はずと先へ歸れ。
源太　つまらねえ事を言ひなさらあ、お前を置いてどうして前へ行かれるものか。
喜三　何も案じる事はねえ、跡の始末は己がするから早く歸れ。
源太　それだと云つて、
喜三　（梅吉、蔦藏に向ひ、）これ〳〵手前達は早く源太を連れて歸れ。
梅吉　おい〳〵小頭、親分があゝ言ひなさるからまあ歸んなせえ。
蔦藏　さうした方がよからうぜ。さあ〳〵歸らう〳〵。
喜三　まだ行かねえか、
源太　えゝ今歸りやす。

ト合方にて不承々々に立上る、子分兩人傍よりせり立てながら源太は後に心の殘る思入にて兩人附て下手へ入る。喜三郎思入あつて、

喜三　扨早ゝゝさつな奴等、如何なる麁相を致しましたか、あいらが麁相は私の麁相も同然。幾重にもお詫を申しあげまする。何分御了簡をお願ひ申しまする。
逸平　何と申す、子分の麁相は我麁相と申すか。

喜三　左様にござりまする。
逸平　然らば今日理不盡を働いたは喜三郎其方が業ぢやぞよ、子分の代りに此所で身共と立合ひ勝負をさつせえ。
重三　大鳥氏の御立腹御尤もにはござれども、子分に代りあの樣に喜三郎がお詫致せば、最早免して遣はされい。
逸平　いゝや免す事罷りならぬ、是非とも此場で勝負致せ。
喜三　どうぞ此儀は御勘辨の程を、
逸平　いゝや是非ともそちが手の内を見ねば相ならぬ。
ト逸平突然に竹刀を取り、喜三郎を打たうとする、喜三郎竹刀にてぐつと押へ付け、
喜三　これにお出遊ばす重三郎樣、お歷々の此中でお手向ひは恐入りますれど、お詫をなせどお聞入がござらぬ故、是非に及ばずお相手を仕りまする、御免なされて下さりませ。
重三　身共も詞を添へたけれど、御不承知の上からは其所へ十分、いやさ、十分に心を附けお相手致したがよい。
喜三　さあ大鳥樣、此竹刀を手に取りますれば最う致方はござりませぬ。お望の通りお相手仕つるでご

ざりまする。

逸平　おゝさ、今の內言ふことがあるなら申して置け。今息の根を留めてくれう。

喜三　如何樣とも御勝手次第。

逸平　何を、

ト竹刀にて一寸立廻り、尙兩人烈しき立廻りあつて喜三郎逸平の竹刀を卷落し打たうとする。此まへかた下手より、甚内羽織袴大小老けたる打扮、後より正作若徒の裝にて付添ひ出で來り、門口まで來て伺ひ居て、此時ツカ〳〵と內へ入り、喜三郎を打据ゑる、是にて逸平は上手へ扣へる、喜三郎愕なし、甚内と顏見合せ、

喜三　やゝ思ひがけなきあなた樣は、お師匠樣でござりましたか（ト飛退いて平伏なす、甚内思入あつて）

甚内　やあ師匠とは誰が事、其方の樣な不肖者を弟子に持つた覺えはない。

喜三　へい〳〵まことに久々の事故御見忘れでござりませうが、私めは御指南を受けましたる喜三郎めでござりまする。

甚内　見忘れたとは何の戲言、年罷り寄つたれどもまだ老耄は致さぬわえ。尤も先年喜三郎と申す弟子もあつたれど、身持が惡さに勘當致し、師弟の緣を切つたる某、よもその喜三郎は參るまい、其

方とても町人の身を以て我道場へ脚踏込み大鳥氏と立合ふなどとは言語に絶えし痴け者、早く此場を歸りをらう。

ト屹度言ふ、これにて喜三郎ぢつと思入あつて下手へ行き扣へる。重三郎前へ出て、

重三　先生にはお早いお歸りでござりました。

甚內　おゝ重三郎か、御上の御用も思ひの外早く相濟み、それより觀世音へ參り、大きに遲くなつたわえ。

重三　それは宜しうござりました。先生に異な事を伺ふやうではござりますが、只今あれにて承れば露骨にそれとはおつしやらねど、あの喜三郎と申す者は、以前やはり先生の御門弟でござりまするか。

甚內　さあ、聞かつしやれ。餘人ならぬ其許ゆゑ事の仔細をお話し申すが、彼は以前結城の藩中葛飾十左衞門が悴にて、幼少の砌より我門弟となり、わづか四五年の修行なれど一を聞いて萬を知る榮に勝れし彼れが上達、行く〳〵は適れなる遣ひ手に相ならんと末賴もしく存ずる故、神影の奥義迄傳授なせしが惜いかな身持悪しく酒興の上では喧嘩口論、其所で拔いたはかしこで切つたと、よからぬ噂、惜き者故異見を加へ其心を撓直さんと種々訓戒はいたせども、持つたる病ひ性根も直

らず、剰へ我手廻りの腰元と密通なし、女を連出し行方知れず、親父十左衛門殿も事の仔細を聞くより、元より堅き仁なれば直樣勘當我も師弟の緣を切り勘當なせし其後は、音信不通に過行きしが承はれば只今にては此江戶表にて人となり、達者で居ると聞きたるが、よくこそ無事で、（ト思入あつて、）是迄の汚名も雪がず師匠の家へ脚踏込み、憎つくい奴でござりまする。

ト屹度云ひながら愁ひの思入。

重三　初めて承はつた喜三郎殿の身の上、あたら業を持ちながら、あゝ惜しい事でござりまする。

喜三（涙を拭ひ。）面目次第もなき仕合せ、あなた樣のお屋敷と存じますれば何しに是へ參られませう。御表札もござりませず、殊には以前とお名前も替りあれば存じませずに參りし麁忽、どうぞ御免なされて下さりませ。又あまへました事ながら、何卒御勘氣御赦免ある樣偏にお願ひ申しまする。

甚内　免して遣度きものなれど、今は叶はぬ、時節があらう。これ正作、早く彼を引出せ。

正作　はつ只今引出しまするでござりまする。さあとつとゝそこらへ、いやさ、其所らになる事は相ならぬ、早く立つて行かつせえ（ト引立てながら其所らへ行つて待つて居よと云ふ思入。喜三郎も何分賴むといふ思入）。さあ〳〵、早く立つた〳〵、な、おらが部屋で　（ト呑込ませる。）

喜三　左樣なれば御機嫌宜しう。

正作　え丶行かぬかといふに、

ト追立てながら思入あつて、喜三郎も心の殘る思入にて下手へ入る。甚内思入あつて、

いや、馬鹿なやつでござるわえ。

重三　扨は以前は結城の家中葛飾氏の子息にてござりましたか、あたら業を持ちながら町人に致し置くは殘念な義でござる。

逸平　只今迄口をつぐんでお話を承はつたが、あの喜三郎とか申す奴、どれ程手練致したとて高が町人。素人の中ではどうか勝れて見ゆれども其職には及ばぬもの、どの位の手の内か試し見んと思ひしに、師匠の歸りにそれもそれ限り、

軍藏　今一足お歸りが遲いなら、きやつの體は粉微塵、

大助　あの者の仕合せと申すもの、

栗平　然し立合にならいで殘念な事でござつた。

運八　惜い事を致しました。

甚内　いや／＼門弟衆、身共が日頃申聞かすはこゝの事、藪にも香の物とやら町人風情と侮つて耻辱を取るはまゝある事、某初め何れもにも劍道を心掛ける侍は、自分の用心慰みではござらぬ。

皆主人への奉公、いで御馬前の一大事といふ時こそ命を捨て御用に立てる。それ故習ひ覺えゐ劍術、君に替るが武士の表、それをお手前方の樣にさゝいな事を咎め立を致し、先の相手が詫びればこそよけれ、相人に寄つては各々方が主君の爲に死す命を落す樣な事も計られず、武士たる者は愼みが肝腎、以來は町人百姓たりとも必ず人を侮どり召るな、屹度申附けましたぞ。

ト逸平へ掛けて門弟を叱る。

門弟 以來は愼みますでござりまする。

お照 (奥より出て來り、甚内の前へ手をつき、)お父樣只今お歸り遊ばしましたか。

甚内 おゝ今日は觀世音へ參詣致した故、思ひの外遲くなつた。

お照 それはよう御參詣なされました。

逸平 (前へ出て、)いやなに先生、只今仰せられます通り、某が不鍛錬故門弟共が恥辱を取りました。是と申すも日頃より拙者がお願ひ申す神影奥義の一卷を身共へお讓り下されば、未熟ながらも喜三郎づれに不覺は取り申さぬ。是等の義を思召し、早速お讓り下さる樣お願申上げまする。

甚内 いかさま豫々貴殿が望なれども、彼の一卷は疾くより殿樣御懇望故、明日差上げねば相ならぬ、内見とても許されぬ、併し貴殿は奥義の卷は讓らずとも我門弟數百人の中お手前の右に立べき者

はござらぬ甚内が一の高弟、我亡き後は殿樣へも御指南も致さにやならぬ貴殿の身の上なれば、別に奥義を極めずとも十分ではござらぬか。

逸平　なるほどそれは分りました、然し左程某を御賞美下さらば、奥義の卷の其外に申し受けたい物がござる。

甚内　其の望みと仰せらるゝは、

逸平　外でもござらぬ、御息女のお照殿をどうか身共に下さるまいか。

甚内　何事かと存ずれば、照事でござるか。御存じの通り忰とても若年故娘に聟をと存ずる折柄、丁度似合の緣組故、直樣應と申したけれど、

逸平　下さらぬと申さるゝか。

甚内　いかにも。

逸平　傳授の卷は兎も角も、お照殿は逸平が曲げてお貰ひ申さねば相ならぬ。

甚内　そりや又何で、

逸平　師匠の耻辱を雪がん爲め。

甚内　何と。

逸平 疵がある故、御息女をそれ合點で申し受けたい。

甚内 なに、娘に疵があるとは、(トきつと言ふ。)

重三 (前へ出て、)これ〳〵逸平殿、師匠の娘に非難を付け、めつたな事を仰せられるな。

お照 なんで私に其樣な事がござりませう。言ひたいがいの出放題、お父樣の前ぢやとて樣子によれば聞捨にはなりませぬぞ。

逸平 それ〳〵とほけさつしやるなお照殿、又ぬつぺりと重三殿眞顏でなんと申さうとも、これなる二人は密通致してをりまする。

甚内 なに、娘が不義致しをるとは、それには何ぞ證據あつてか。

逸平 いや證據も證據此一通、何と立派な證據でござらうがな、(ト以前の文を出して見せる)

お照 どうしてそれを、(ト取らうとする。)

逸平 どつこい、さうは參らぬわ。重三郎殿へ照より、しかも見事な御家流、是でもとほけさつしやるか。(ト重三郎へ突付ける。)

重三 さあそれは、

逸平 不義でないと申さるゝか。

お照　さあ、それは、
逸平　さあ、
兩人　さあ、
三人　さあ〳〵。
逸平　是ぢやに依て娘御を申受けるも師弟の情。
　　トこれにて重三郎お照面目なき思入にてうつむく、甚內もぢつと思入。
軍藏　お歌の稽古の讀物のと、間がな隙がな戀歌の稽古、
大八　上句の果が師匠の娘疵物にした重三殿、
栗平　劍術稽古の道場で木太刀や槍は手に持たず、
運八　竹刀で濟まぬ不義大罪。
軍藏　彼の川柳點にも申す如く、知らぬは亭主ばかりなりと、御存じないは先生ばかり、
大八　數百人の門弟は疾くより存じてをりまする。
逸平　弟子の身として師匠の娘と不義致しては相濟みますまい。いやさ、此成敗は如何でござる。
甚內　別に子細も五さいもござらぬ、不義の成敗手討に致す。

逸平　すりや、あの、お照殿を、

甚内　親が手づから首討ちまするわ。

皆々　えゝ（トびつくり思入）

甚内　さあ娘、何も別には申さぬぞ。親たる者の目を掠め、いたづらひろぐ憎くいやつ、覺悟致せ。

ト刀を持ちきつとなる。此時下手より以前の喜三郎出で來り、

喜三　どうぞ暫くお待ち下さりませ。

甚内　そちや喜三郎、何故あつて是へ參つた。

喜三　さゝ御勘當の身を顧みませず、申上げるも恐れあれど申上げねばなりませぬ。お孃樣のお命乞に罷出ましてござりまする。

逸平　又してもく入らざる所へ出しやばつて、控へてをらう。

喜三　いゝや控へては居られませぬ。御勘當は請ましても心は直な喜三郎。もし旦那樣、以前御家に居りました頃、お腰元の小磯と不義を致せし私、其節直にお暇給はり御勘氣を受けて一命をお助けありし先例もござりますれば、お二人共に御勘氣あつてお命助けて下さる樣、偏にお願ひ申しまする。

甚内　いや〳〵それは人の娘、我娘では助け置かれぬ。

喜三　さゝ不義は男女兩人の科、お照樣のお命斷ち、重三郎樣をお助けあらば命助かりそれでよいと、
さながら見てもをられますまい。又お二人共お手討になされて御法は立ちませうが、以前私小磯共お助けありし事があれば、重三樣につながつた御緣のお方があなたをば不仁の仕方とお恨みなされませう。物辨へぬ私が何か理窟を申しまするも、詰る所はお孃樣又二つには重三樣、只お命が助けたさ、爰の所を幾重にも思召し分けられて、喜三郎めが面を冠つて此お願ひ、どうぞお聞屆け下さりませ。（ト思入にて言ふ。甚内理に服したる思入にて、）

甚内　なるほどそちが申すのも一理ある申分、然らば二人が命を助け、勘當なして追放致さん。

喜三　すりや、私が詞を立て、お聞濟み下さりまするか、えゝ有難う存じます。又お二人樣のお身の上は請けし御恩の送り所、何とぞ今日より私へお預けなされて下さりませ。

甚内　いや其方はいまだ勘當許さねば、預ける事は相ならぬ。

逸平　然らば拙者にお預けなさるか。

甚内　いや大鳥氏もあの照を執心ある故、是以て預けられぬ。

逸平　すりや、身共にも預けられぬか

甚内　いかにも。

逸平　然らばどうとも勝手に召され（ト立上り、思入あつて、）何と何れも見さつせえ、不義働いた横道者、武士たる者の風上にも置かれぬ奴、身共などは歌俳諧は不得手なれど武道一通りに於ては腕を磨く大鳥逸平、是より身共が宅へ參り、晝夜をわけず稽古が肝腎、門弟衆身が宅へお出なされ。

軍藏　御同道仕つるでござりませう。あの樣な不義者などと同席致すと武藝の穢れと相なりまする。

大八　左樣でござる。力の滿ちた此腕がたるむ樣に思はれまする。

栗平　拙者なぞも最前耻辱を取りしも、不義者の影がさしたと見えまする。

運平　是より大鳥先生のお宅へ參つて、穢れた腕を淸めませう。

軍藏　いか樣それが宜しうござらう。

逸平　さ、門弟衆參らうか。

四人　先々お先へ、

ト唄になり、逸平思入あつて甚内へ一寸默禮をして、ゆう〳〵と先に立ち、四人の門弟付いて下手へ入る。跡重三郎思入あつて、

重三　師匠へ對し今更に申譯なき此身のしだら、

お照　先立つ不孝は、お父様、

重三　御免なされて、

兩人　下さりませ。

ト重三郎は刀へ手を掛け腹を切らうとする。お照は喜三郎の脇差へ手を掛る。甚内喜三郎兩人を留め、

甚内　こりや早まるな、重三郎。

喜三　どうなされまする、お照樣。

甚内　疾くより二人がわりなき樣子親ぢやもの知らいでならうか。丁度似合の年ばい故、女夫になして此跡を相續させせんと思ひしも、今となつては詮なき事、

喜三　お孃樣も短氣なされず、假令御勘氣請ければとて、只蔭ながら親御樣へ御孝行必ずお忘れなされまするな。

甚内　いやなに重三郎、斯くなる上は何か厭はん、娘はそこ許に遣はす程に足らはぬ彼が生れゆゑ、見捨てぬ樣に末長う何所へなりとも連退いて、中好う二人添うて下され。

重三　えゝ勿體ない師匠のお詞、不義せし拙者をお叱りなく、

お照　仲よう添へとのお詞は、盡未來迄忘れませせぬ。

兩人　有難う存じまする。
喜三　くどい樣ではござりますが、どうぞ此上お二人樣をお預けなされて下さりませ。
甚内　いや／＼生れ付いたる其方の氣早、心よからぬ逸平めが執心致す此お照、如何なる事をか仕出さん。左ある時は我名も出で、又二つには主人の恥辱、先刻よりも申す如く不義して勘當せし者に預け遣りしと申されなば、武士の表が相立たぬ。
喜三　すりやお世話とてもなりませぬか。
甚内　そちが勘當許した上、預け遣りたいものなれど、今はどうも許されぬ。
喜三　あゝ是を思へば世の中に、義理に柵む武士の、
甚内　表を立てるも世界の義理、
重三　御勘氣蒙むる我々も、
お照　親子の緣につながる義理、
喜三　義理はせつない、
四人　物ぢやなあ。
ト唄になり、此仕組宜しく、道具廻る。

と本舞臺元の門の道具となる。左右に柄杓の附し番手桶あり、宜しく道具留る。と、ばた〳〵になり、花道よりお磯人入女房の打扮草履にて走り出て來り、直に舞臺へ來てほつと思入あつて、

お磯　嬉しや、まだ來ない樣子だ。家の人が此屋敷へ捕囚になつて居ると云つて、弟野郎の源太を初め後先見ずの若い者が、拔刀を持つて出たといふから譯も聞かずにつまらねえ間違でも出來た日には、名前目に掛はる故裏通しに駈けて來たが、一足後になつたと見える、あゝせつねえ息が切れた。（ト番手桶の水を柄杓にて呑み、胸をさすりながら屋敷の内へ思入あつて、）屋敷の内はひつそりと、何にも譯のない樣子、爰へ浮かり踏込んでどんな間違にならうも知れねえ。（ト向うを見て、）おゝ向うへ見えるは若い手合、爰に待受け留めてくれう。

トお磯肌を脱ぎきつと思入、ばた〳〵になり花道より源太向う鉢卷尻端折細襷拔身の脇差を持ち、跣足にて出て來る、跡より甚三同じ打扮、左吉若衆鬘裾を左右ではし折同じ打扮、長藏同じ打扮、皆々拔身の脇差を持出て來る、お磯花道へ行き、よき所にて留め、

源太　や、こりや、姐御には、

四人　いつの間に、

あこれ、みんな待つた〳〵。

お磯　おめえ方が拔身を持つて此屋敷へ行つたと聞き、先へ廻つて留めようと裏町を駈けて來たが、譯も聞かずに振込んで大事の命を捨る氣か、家が居てならいゝけれど、留守の間に間違ひがあつちや私が濟まねえから、白い黑いの分かる迄、まあ〳〵待つて下さんせいな。

源太　いゝや、姉さん留めなさんな、是が堅氣の商人なら引込でも居られやせうが、牡丹紅葉の行燈より皆御存じの數寄屋川岸、喜三郎と云はれちやあ子分子方も大釜で年中喧嘩の焚出しに、日に何俵と焚く飯も柔らけえもありやあ硬いもある、一粒選の其中で負けぬ生米の曙源太、こんなせりふも去年から古背鰹を熨斗替り燒いて喰ふとも煮て喰ふとも、片身はおろされ皮作り切刻まれるも合點で、兄貴の加勢に來たからは、お前も遁れぬ中落の骨を拾つてくんなせえ。

甚三　腕と云はるゝ親分故、引けを取つちやあ歸るめえが、子分が聞いちやあ居られねえ。其所が勝氣な人入稼業、江戸は卅六見附旅は五十三次から六十九次宿々を、股に掛けても草鞋は穿かず仁王の樣な駕舁に、あうんの聲で擔せる音に響いた達師の元〆、其下請の血祭ア赤いが名代の紅絹裏甚三、人より背丈は短かいが、生れ立から表裏袖ねえ事が大嫌ひ、襟垢のねえしらつ子だが向うが曲つたおくみなら、直に行かぬが產すな柄、ずた〳〵になるそれ迄あ五分でも後へは引きやあしねえ。

左吉　兄い手合に誘はれてお先眞つ暗向う見ず前髪達ら色氣のねえ、よせばよいにと言はれるのも見て居られぬが生れ付、二の字繋ぎで賣込んだほんの親父の俤のみ、道中師でも箱根から先は何所やら双六の畫で見たばかり知らねえが、江戸の中ぢやあ親分の光に輝く銀鎖、前金物は菊川の花も莟の前髪左吉、心の裏座は横やすり根付の丸くいかねえのが、こゝが達師の子分だけ細い煙管も天窓勝ち、へこまされちやあ了簡ならねえ。

長藏　四人の中ぢやあ年かさの手前迄が大人氣ねえと、叱られるのも合點で出掛けて來たは是迄に、寒の師走も法被一枚面肌に迄功を積み、太鼓が鳴りやあ足袋はだし振出す喧嘩の纒持、どんなあほりを喰はうとも後へ引かねえ我慢者、命知らずと云はれたも、親分の手に付いてから今ぢやあ小ざしの頭分、親方とか馬方とか人に云はれる幻長藏、銀拵えの脇ざしも斯ういふ時に遣はにやあ重い思えをするのは徒勞、向うを殺すかこつちが死ぬか、血を見ぬ中あ歸られねえ。

源太　元より死ぬ氣で四人とも、

甚三　拔いた白刄の鞘を捨て、

左吉　水盃をして來たからは、

長藏　留めずとやつて、

四人　くんなせえ。

お磯　いゝやゝられぬ遣られねえ。家の人が居てならば引を取ては名の穢れ、死にゝ行くのも合點で行けとこそいへ留めやあしねえ、其所が達師の喜三郎腕といはれる其人の私も小指になつたからは切つても切れぬ五本の中、假令源太が死なうとも愚痴や未練は言はねえ氣だが、留守に遣つては私の麁相斯うして出掛けて來たからは留まり難いは承知だが、喧嘩は人の留めるが花、爰は留つて私にも花を持たして下さんせいな。（トお磯皆々を留める。）

源太　なんぼ姉御の詞でも是ばつかりやあ留られねえ、元はおいらが喧嘩から義理ある兄貴を此屋敷へ擒にされた上からは、命を捨てゝも連れて來にやあ浮世の中へ面が出せねえ。

甚三　折角おめえの頼みだが、あゝして來たも人おどし姉御が留るを幸ひに歸つたなどと云れちやあ、子分の者の名折となる。

左吉　どうで命を捨てる氣で水盃迄して來たからは、遣る所迄やらして吳んねえ。

長藏　假令是がどうもつれ、組合初め江戶中の親分頭の厄介に、なればといつて此儘に拔身を提げちやお歸られねえ。

お磯　それぢやあ私が是程に留めても留つてくれねえのか。

源太　他人と違つて眞身のおれが先頭に居るから猶聞けねえ。
四人　留めずとやつてくんなせえ。
お磯　いゝやならねえ、行くならば、私を殺して行きなせえ。
源太　いらざる女の支へ立て、
甚三　邪魔をせずと、
四人　退きなせえ。
お磯　いゝや退かれぬ。
四人　えゝ面倒な。

ト源太先にお磯を掻退け行く、是にて千鳥に皆々かき退け舞臺へ來る。お磯も續いて來て四人をさゝへろ、此内門の内より喜三郎出で悧りなし、羽織を脱捨て、門の内へ這入り竹階子を持つてツカ〳〵と出て、四人を階子にて留め、

喜三　あゝこれ待つた、早まるな。
源太　や、お前は兄貴、
長藏　何でおいらを、

四人　留めるのだ。
喜三　いゝや留めにやあならねえのは、此屋敷へは芥子程でも手向ひ出來ねえ譯があるから、おれが留めたら待つて呉れ。（トこれにて四人思入あつて）
甚三　して此屋敷へ手向ひの、
左吉　ならねえと云ふ、
四人　其譯は、
喜三　サ、己も知らずに出掛けて來たが、此道場の主と云ふは、常から話すおれが師匠女房と共に數年來、御恩になつた神崎樣。
お磯　えゝ、そんなら爰は旦那樣の、（ト愕りなす。）
喜三　おゝ勘當受けて十何年、音信不通にお屋敷がこゝにあるとも露知らず、源太が喧嘩の挨拶にうかり爰へ出て來たが、名乘つて見りやあ逸平と己とは同じ兄弟弟子、どうで遺恨は殘らうが表面ぢやあ師匠へ對し、向うも其儘歸つた譯、殊にやァおれが勘當もまだ許しのねえ中は敷居の高い此道場、一本持つて行く所か、面でも掛けにやあ入られねえ、それとも知らず手前達が向う鉢卷繩襷眞劍勝負に來られて見ろ、竹刀の竹の折れる程おれが體を粉な〲にぶち殺されても濟まね

え義理、門弟頭の逸平へ遺恨を返すは後日の試合、負るは勝だ此儘に、己と一緒に歸つてくれ。

ト これにて四人思入あつて。

源太 それぢやあさつき喧嘩をした、あの逸平は門弟頭、主と云ふは兄貴の師匠か、

甚三 繫がる緣のおら達は云はゞ孫弟子同然だ。

左吉 其所へ無闇に踏込んで亂暴したら濟まねえ上、

長藏 定めて强氣な手利ゆゑ、片つ端から切られる所、

源太 いや、あぶねえ事で、

四人 あつたなあ。

お磯 (いゝ氣味だといふ思入) 大方こんな事だらうと思つて私が留めに來たに、それも女と侮つて留るも聞かず旣の事御門の內へ這入る所、愚痴な事をいふ樣だが姉御々々と常不斷人に厄介を掛けながら、附合のねえお前方、辛いか甘いか知らねえが役に立たねえ女でも、先へ生れて居るからは惡い事は云やあしねえに、よく私をへこまして云ふ事を聞いて吳んなさらなんだ。是からどんな事があつてもおめえ方のお賴みはもう聞かねえから、さう思ひなよ。

ト 是にて皆々鉢卷を取り、面目なき思入にて、

甚三　さう姉さんに言はれちやあ誠にこりやあ濟まねえ譯、ついあの時あ氣が立つて折角留めてくんなすつたを、聞かなんだが惡かつた。

左吉　只親分の身の上に間違えでもあつちやあと、其所へばつかり氣が行つて、

長藏　實の所は目が眩み何を云つたか知りませぬ。どうぞ堪忍して、

三人　お吳んなせえ。

お磯　いゝえお前方の知つた譯ぢやあない、みんな源太が惡いからだ。

源太　おれが惡いとは何が惡いのだ。（ト立掛るを長藏留めて。）

長藏　これ〳〵こつちが惡い、默つて居ねえか。

甚三　いえ源太ばかりぢやァありませぬ、わつちらが惡う、

四人　ございます。

お磯　なに、私が惡いからさ。

喜三　これ〳〵お磯何をつまらねえ事を言ふのだ、おれが屋敷へ擒になり若しもの事でもあらうかと、それを案じて此手合が命をきりに出て來たのだ、もうい、加減に言はねえか。

お磯　（つんとして）それぢやあ私が留めずに置いて、屋敷へ遣りやあよかつたね。

喜三　え丶又そんな皮肉を言ふか。留に來たのは手前の手柄、又押掛けて出て來たは若い手合の深切だ。どつちがどうとも言えねえ譯、是が他人づくぢやあなし實の兄弟親分子分、濟むも濟まねえもあるものか、何にしろ最う半時早かつたらば枝が咲き、みんな命を捨てる所、怪我のねえのは神の助け家へ歸つて身祝ひにお神酒でもあげようぜ。

甚三　今親分があ丶言ひなさるから、

長藏　それぢやあ姉さん、

三人　お前も笑つて、

お磯　何の笑ふも笑はねえもあるものかね。

喜三　いや爰に長居は師匠へ恐れ、些も早く、(ト皆々を見て、)と云つた所が其裝ぢやあ、往來中をゐつともねえ白刄を鞘へ納めねえか。

源太　みんな死ぬ氣で出て來たから鞘は家へ置いて來た。

左吉　どうか仕樣はあるめえか。

源太　手拭へでも包んで行かう。

ト四人繩襷を取り手拭へ白刄を包み、腰へ差す、お磯思入あつて門へ向ひ拝み居る。喜三郎脱捨し

羽織を取り、是を着ながらお磯を見て、

喜三　これ、お磯何をして居るのだ。

お磯　さあ御門前迄來ながらも行くことならぬ御勘氣故、せめて爰から申譯を御恩になりし旦那樣へ、心でお詫をしましたのさ。

喜三　それも歸つて相談なし、どうかお詫の仕樣があらう。（ト氣を替へ）さあ、手前達は先へ行け、

源太　そんなら兄貴、

四人　先へ行きやすよ。

ト甚三先に左吉、長藏、源太花道へ行く、跡より喜三郎うつかり階子を持ち花道附際へ行く、お磯是を見て、

お磯　お前それを持つて行くのか。

喜三　おゝ、うつかり持つて來た。（ト此時舞臺へ中間出て、）

中間　うぬ喜三郎め、

喜三　何だと、（ト振返る。中間氣味惡く震へる。喜三郎腹を立つては惡いと云ふ思入あつて、）おゝいゝ所へ來た、是を持つていつて下つし。

ト階子をほふる、中間受取り階子を持つた儘見事に轉るを木の頭。四人こなたへ立掛り、

四人 あれは、（ト息込むを、）

喜三 これ（ト制する、此見得宜しく引張の見得にて、拍子幕。と、幕引付けると、）さあ、行かつし。

ト腮で敎へ四人ゆう〳〵と花道へ入る。跡から喜三郎、お磯これを見ながら、

喜三 血の氣の多い奴ぢやあねえか。

お磯 ほんに命知らずだね。

ト兩人話しをしながら花道へ入る。後シヤギリ。

中幕

神崎屋敷の場
喜三郎内の場

〈役名――腕の喜三郎、神崎甚内、曙源太、幻長藏、紅絹裏甚三、二見重三郎、大鳥逸平、甚内倅甚之助、若徒正作、喜三郎一子喜之松。喜三郎女房お磯、甚内娘おてる及び子分、門弟等。〉

（神崎座敷の場）――本舞臺三間の間中足の二重、正面上手床の間、下手襖、上の方一間丸窓の附屋體、いつもの所枝折戸、下の方建仁寺垣、紅葉の立樹、舞臺前四ツ目垣、萩の下草、總て神崎座敷の

て幕明く。

態。爰に若徒正作着流し一本差にて手桶を持ち水を打居る。傍に軍藏袴大小にて立掛り居る、唄に

軍藏 こりや正作、先生は何れにござる。

正作 今日は御休日故お骨休めに御居間にて、御療治をなされてゞござりまする。

軍藏 左樣でござるか。お丈夫な樣ではあるが最早五十を過ごされたれば、日々多くの御稽古故お勞れなさる筈でござる。

正作 せめての事に重三郎樣がおいでなされた事ならば宜しからうと存じまする、劍術よりは色事のお稽古が積みまして、お出入さへも叶はぬ仕宜、飛んだ事になりました。

軍藏 いや重三郎などがをつたとて何の役に立ちはせぬが、惜しいのは逸平殿、豫てお照殿に執心なれば早く聟にし召れて、此道場を讓られたら先生のよい片腕、お樂が出來るでござらうのに、元はと云へば先生の御了簡が惡い故、(ト此時奥より甚之助出で咳拂ひをする軍藏悧りして、)いやさ、御氣分が惡いさうなが、先生は如何でござるな。

正作 いえ何所もお惡くはござりませぬ。

甚之 軍藏殿、何ぞ御用でござりますか。

軍藏　いや別して用事もござらぬが、御近邊迄參りし故、お立寄り申したは、御休日を附込んで何か武邊のお話しを承はらうと存じまして、
甚之　それは折角のお出ながら、夜前より肩がこり只今療治を致し居れば御面會致されませぬ。
軍藏　いえ今日に限りました事でもござりませねば、先生へ宜しう仰せ下されませ。
甚之　こりや正作、水を打つてしまつたら風爐へ炭を致して置きやれ。
正作　畏りましてござりまする。
甚之　序に裏の花壇へ參り、がんぴを一もと切つてくりやれ。
正作　へえお投入でござりまするか。
甚之　圍ひの花を差替へたいのぢや。
正作　畏りましてござりまする。
軍藏　いや近頃は藥草などがだいぶ流行致しますが、嘸御花壇は見事でござらう。
甚之　少し末にはなりましたが、まだ七草もござりまする。
軍藏　正作そちが參るなら、身共もどうか拜見したい。
正作　御案内致しませう。

軍藏　左樣なれば甚之助殿、
甚之　御寛りと御覽なされい。
軍藏　忝うござる。
正作　さあ斯うお出なされませ。
　ト唄になり、正作先に軍藏付いて下手へ入る。合方にて下手家體より甚内着流し一本差にて出て來り。
甚内　伜、軍藏は歸つたか。
甚之　いえ花壇の草花を見たいと申し、正作と同道なし、裏の花壇へ參つてござる。
甚内　彼は逸平に懇意を結び、淫酒にばかり心奪はれ風韻のない不骨者、花壇の花を眺めんとは何か所存のあつての事。
甚之　大方左樣でござりませう。
甚内　療治中失敬故、對面を致さなんだが、御近習の伊織殿は何用あつてござつたな。
甚之　夜前御寶藏へ盗賊入つて、先達て殿樣へ御献上遊ばせし、神影極意の一卷が紛失致せし由、尤も心當りもござる故密に御詮議あるとの事申置かれて歸られました。
甚内　ふむ、すりや、夜前紛失せしとか、あれは我師一神齋より傳來なせし祕密の一卷、一子相傳と思

ひしかど殿樣頻に御懇望故、先達て差上げしが豫て逸平めが望み居り、讓り呉れずば内見なりと許し呉れと賴みしに、口外なさんを憚る故内見すら許さゞりしが、若しやほしさの餘りにて、

甚之　すりや、逸平が一卷を、

甚内　こりや（ト甚之助を止め）正しくそれとは存ずれど、めつたな事は申されぬぞ。

正作　（下手より長き菓子折を持出て來り、）はつ、申上げます。

甚内　何事ぢや、

正作　只今お庭口へ年の頃卅餘りの町家の妻が參りまして、旦那樣へお目通りをお願ひ申して呉れと、斯樣な折を持參致しました。（ト件の折を甚内の前へ置く。）

甚内　なに、年の頃三十許りの町家の妻が參りしとか。して姓名はなんと申す。

正作　はつ、承りましてござりますが、お目通りを致しますれば御存じの者と申し、押返して尋ねましたが姓名は申しませぬ。

甚内　ふう、姓名を名乘らぬとか、（ト思入あつて、）苦しうない、是へと申せ。

正作　はつ（ト下手へ向ひ、）あいやそれにござる女中、旦那樣へ申上げましたれば、遠慮なく通り召れ、

お磯　有難うござりまする。（下手よりお磯世話女房にておづ〳〵と出て來り小腰をかゞめ、）お免しなされて下

さりませ（ト枝折の内へ入り下手へ控へ）是は〳〵旦那様には、久々にてお目見え致しまするが、以前に替らず御機嫌宜しうお目出たう存じまする。

甚内　さう云ふお身は誰なるか、某も老衰致し昨日の事を今日忘れ、殊に眼氣が薄い故、面さへ見分らぬが、お身は誰であつたな。

お磯　それにお出遊ばします若旦那様がお五つのお祝迄居りました、お出入の乗物屋七右衛門が娘磯めでござりまする。（ト甚内思入あつて、）

甚内　なるほど十ヶ年程後の事左様な召仕があつたれど、若氣の至りといひながら葛飾喜三郎と申す我門弟と密通なし不奉公致せし故、勘當なして音信不通許しもなきに其者が、よもや是へは參るまじ、察するところ其磯が身寄の者でがなあらうな。

お磯　左様仰せござりましては申上様もござりませせぬが、據ないお願ひ故お許しもない御屋敷へ押して上りし不束も、今となりては後悔に何時ぞはお詫を〳〵と、思ひの餘りお叱りも顧みませず十年振り、此お目見得がしたきゆゑ、お免しなされて下さりませ。

甚内　磯は元より身寄でも勘當なせば緣はない、如何なる願ひか知らねども、聞届ける事罷りならぬ。

お磯　お詞返すは恐れあれど、最早十年立ちますれば、何卒お慈悲を持ちまして、

甚内　十年立たうが百年立たうが、勘當許さぬ其内は目通りならぬ。左すれば只今持參せし此品迚も受けられぬ。それ正作此折を戻し、早う去なしてしまへ。

正作　ハッ、畏ましてござりまする。これ女中旦那樣があの樣におつしやれば、幾ら云つても無駄な事だ。殊に此間も現在こなたの夫喜三郎殿が種々歎いて頼んだが、それでさへも叶はぬお詫、無駄な事だと諦めて、さあ〳〵早く行かつしやい〳〵。

お磯　すりやお目見得は叶ひませぬか。

正作　はて其身の科だ、仕方がない。

お磯　はあゝ。

正作　さあ、爰には叶はぬ立たつしやい。

トお磯是非なく枝折の外へ出る。正作戸を立て、枝折の傍に扣へ居る。お磯正作に向ひ、

お磯　申し、其所にお出なさりまするお方樣は御存じござりますまいが、私は其以前こなたに御奉公致して居りましたが、ふとせし心の間違よりお弟子内の喜三郎殿と不義をなし、既にお手討にもなりまするを、旦那樣のお慈悲にて命をお助け下されて、二人共の御勘當お詫の仕樣もなき故に、知るべを頼りて夫婦となり、人入稼業致せし所以前お教へ下されし劍術が役に立ち、仲間の衆が

弟子になり、喜三郎は勝れし腕強い腕ぢやと賞美され、自然と人にも用ひられ、只今にては綽名をば腕の喜三郎と申しまして、此江戸は申すに及ばず京大阪迄人樣に知られまするも誰がお蔭、お師匠樣のお蔭故どうかお出入のなります樣、神や佛へお願ひ申せど、橋なき所へは參られませず、どうがなしてと思ふ折柄、先達て喜三郎がお屋敷へ上りまして宿へ歸りて申しまするに、久々にてお師匠樣のお替りもなきお顏を拜し、一言でもお詞をお掛けなされて下さりましたれば、是で死んでももう己は思ひ置く事がないと淚をこぼして悅びましてござりまする。それを承りましてより私が心の内、少しも早う上り度く御勘氣御免のない所へ押して上りましたのも、絕えて久しき旦那樣のお顏を拜したさ故、どうかお前樣から能い樣にお執なしをお願ひ申しまする。

ト宜しく思入あつて云ふ、正作も氣の毒なるこなしにて、

正作 段々聞けば尤も至極、併し今が今と申す譯にも是は行くまいから、折を見て若旦那樣迄お願ひ申して置かうから、まあ今日は歸つたがよい。

お磯 はい〳〵。（ト歸り兼ねる思入、此內甚內本を見て居る。甚之助思入あつて）

甚之 父上お聞きなされましたか。

甚內 おゝ書見に心奪はれて、何か申す樣であつたが、とんと身共は聞かなんだ。

甚之　先非を悔いての彼が身の詫、あなたのお目に掛りたいと只管願ひ居りますれば、出入なすは兎も角もお逢ひなされて遣はされては如何でござりまする。
甚内　されば逢うてやりたい物なれど、一つの功の立たざる内は勘當は許されぬ。さすれば對面も叶はぬ事ぢや。いやお照がならねば奥が無人伜そちは奥へ參れ、又正作は玄關へ參り取次を致しやれ。
正作　畏りましてござりまする。
甚之　左樣なれば父上樣、
甚内　是へ誰も參らぬ樣、
甚之　心得ましてござりまする。
　ト唄になり、甚之助は奥へ、正作は枝折より下手へ行掛るを、お磯袖をひかへ頼むを正作其所に居たがよからうと云ふ思入あつて下手へ入る。甚内邊を見廻し、お磯に向ひ、
甚内　こりや、磯、
お磯　はゝ、はつ（ト嬉しき思入にて枝折を明け、内へ入らうとする。）
甚内　あ、こりや〳〵勘當許さぬ其内は、表立つては逢はれぬぞ。矢張其儘枝折を隔てゝ餘所ながら逢うて行きやれ。

お磯　有難うござりまする。

甚内　斯う我強くは申す物の、我とても最早五十路又倅事は若年故、誰ぞ力になる者と數多ある門弟中誰彼と指折れど、是ぞと云ふ者もなく、あゝ喜三郎が居たらばと心に思ふは幾度か、勘當なして十ヶ年が其間音信不通に致せども、我子も同じ弟子の事思ひ出さぬ日はなけれど、不義せし者を故もなく許し難きが武士の表、宿所へ歸らば此趣き喜三郎に申し聞かせよ。

お磯　其仰を喜三郎が承りました事ならば、嘸悦びますでござりませう。若い時には仰有る通人に負る事が嫌ひで、よう喧嘩を致しましたが、それも次第に取る年と二人が中に子供が出來、一年增に堪忍なし、只今にては其身より人の喧嘩の中へ入り濟み濟ませをする程におとなしうなりましたれば、どうか御勘辨下さりまして、二人の者の御勘當お許しなされて下さりますやう、偏にお願ひ申しまする。

甚内　いやいやそれは僞りぢや、假令相人は何人でも喜三郎が一人行けば喧嘩に引けを取らぬ故、強い腕ぢやと人より譽め、今腕の喜三郎と異名に呼んで俠客の頭分とやら。あゝ未だに心が直らぬかと歎はしう存じをつた。それゆゑ勘當は許されぬ。

お磯　隱す事程顯るゝと、其事が旦那樣のお耳へ入つてござりますか。

甚内　おゝ悪事千里と世の譬、其根性の直らぬ内は勘當は許されぬ、以來は必ず詫な致すな。
お磯　すりや、其心が直りましたら、お許しなされて下さりまするか。
甚内　おゝ心さへ改めなば、我片腕ともなるべきもの、勘當は許し呉れる。
ト此時下手より喜三郎羽織着流しにて、下手へ控へ、
喜三　はつ、御勘氣御免下さりまして、有難うござりまする。
甚内　や、そちは喜三郎、扨は疾より、
喜三　先刻よりあれに控へ、委細の樣子承はり、多年の願ひ叶ひまして大慶至極にござりまする。
ト此時下手より、軍藏出て伺ひゐる。
甚内　然し、以來喧嘩を致さぬ樣しかと心を改めねば、勘當は許されぬぞ。
喜三　はつ其仰は御尤も、此程はからず御目に懸り有難い思召を承はつて、私も決して喧嘩は致すまいと只堪忍の二字を守り、向後心をすつぱりと改めましてござりまする。
甚内　すりや心を改めしと申すには、何ぞ慥な證據あつてか。
喜三　いかにも、それに一札替り慥な證據がござりまする。
甚内　して、其證據は、

喜三　只今女房が持參せし土產の品、御覽下され。
甚內　なに、此品が證據とな（ト折の蓋を明け悔りなし）やゝ、此片腕は、
喜三　神影流の極意を極め、假令十人二十人白刄を振つて參るとも悔りともせぬ喜三郎、是と申すも師匠のお蔭、所へ持た負ぬ氣で是迄數度の喧嘩口論、其荒氣をば止ざれば御勘當は許されませぬと身に染み〴〵との御教訓、是非に及ばず幼年より御指南請し此腕を（ト腕まくりをなし、切口を見せ）御覽の如く切つたれば、假令土足に掛けられても、只堪忍の二字を守り荒氣を出さぬ一札替り、是を證據に御勘氣を御免なされて下さりませ。
甚內　ほゝお、流石は以前が結城の藩中葛飾氏の子息とて、適れなる其誓言、有無を申さずそち達が、勘當は許したぞ。
喜三　すりや兩人が御勘當、
お磯　御免しなされて下さりますとか。
兩人　えゝ有難うござりまする（ト兩人嬉しき思入。）
甚內　最早誰に遠慮もない、是へ〳〵。
兩人　御免なされて下さりませ、

ト兩人嬉しき思入にて内へ入る、軍藏うなづいて下手へ入る、よき所へ兩人控へ、

喜三　先改めましてあなた様にもお替りなく、御健勝にて、

兩人　お目出たう存じまする。

甚内　そち達も無事で重疊。あゝ我身の老になるは知らず、以前に替つて二人共よい年配に成つたな。今承はれば子供が出來たといふ事ぢやが、女子か男子か。

喜三　へい、男子でござりまする。

甚内　それは何より、して何歳になるな。

お磯　はい、七つになりましてござりまする。

甚内　おゝ最早七つの子持になつたか。

喜三　月日の立つは早い物にて、御勘氣を請けましてより、最早十ケ年になりまする。

お磯　旦那様には其時にさのみお替りはござりませぬわいな。

甚内　心に替りはなけれども、餘程加減が違つて來たて。それと云ふも賴みに思ふ伜は若年、又姉は知つての通の不埒故、捨て仕舞ひは仕舞ふものゝ、血を分けた親子の情合、つい心配を致す故、餘計に體へ障つてならぬ。

喜三　御尤もにござりまする、是も世間にない事でも、いや、眼前に私夫婦がお目を掠めし身の不埒、隨分覺えもござりますれば、せめて少しの御恩送りに、お照樣のお身の上どうがなしてと存じますれど、表立つてお世話もならず、それ故女房と申し合せ、

お磯　お乳を食る時分よりお傍に居つた此小磯、何御遠慮もござりませねば、不奉公せし申し譯お世話を致したうござりますれば、どうぞお預けなされて下さりませ。

甚內　おゝ勘當許せば何が扨以前に替らぬ師弟の仲、そち達が申さずとも此方より賴みたい娘が身の上、年は取つても懷子、又重三郎迚もその如く、屋敷育の世間見ず中々誰ぞ後見がなうては町家の住居はならぬ。一人は娘一人は弟子二腰帶する刀の手前、強い事は申せども案じられるは親心、何分共に世話を賴むぞ。

喜三　其お賴みがござりませずとも、私といひ女房とも、

お磯　年頃請し御恩返し、

甚內　疾より世話を致し吳れるか。（ト兩人ぎつくり思入あつて。）

喜三　すりや旦那樣には、

兩人　其事を、

甚内　頼る方なき二人の者、さこそあらんと推量致す。
喜三　御推量の上からは何をかお隱し申しませう、あの砌より私方へお伴ひ申しまして、お世話は致しますれども、御勘氣御免のない内はと、あなた樣へ憚りましたが、
お磯　早速御勘氣御免下され、表立つてお孃樣をお預けなされて下さりまして、是で世間の肩身も廣う暑さ寒さの御機嫌伺ひ、お出入が出來ましてこんな有難い事はござりませぬわいな。
甚内　いやそち達よりもこの甚内、喜三郎の勘氣を許し元の師弟となる上は誠に身共のよい片腕（ト腕へ思入あつて）身共が我強きばつかりに切らせたる殘念さ、此程勘當ゆるしなばそちを片輪にせまいもの、此甚内が一生の過り免してくれよ喜三郎。
喜三　あ勿體ない事おつしやりませ、其腕のある時は愼みますれど勝に乘り、ついには此身を果します、切つたは丁度身の仕合せ、
お磯　是で生涯私迄無事に月日が送られまする。
喜三　御勘氣御免のある上は、また元々のあなたのお弟子、
お磯　私事も以前に替らず、磯や斯うせいあゝせいと、
喜三　御用の節は御遠慮なく、

お磯　お遣ひなされて、
兩人　下さりませ。（ト此時時計の音する。喜三郎思入あつて）
喜三　内の留守は長藏に云附て置いたれど、
お磯　お孃樣がお出なされば氣掛りでならぬ故、もうお暇申さうではござんせぬか。
ト喜三郎の袖を引き小聲で云ふ。喜三郎うなづき、甚内に向ひ、
喜三　餘り早速にはござりますれど　留守中を案じますれば、
お磯　最早お暇、
兩人　致しまする。
甚内　然し、此の儘歸すも殘念、喜三郎一寸待てくりやれ（ト床の間に飾りありし桐の箱を持來り、）改め云ふには及ばねど、人間一生愼むべきは慢心の一つなり、我壯年の折劍術にておさ〳〵人に負けざる故若氣の至り慢心なし、諸國修行に出でたりしが暫く上州に足を止め夜陰に登山をいましめし榛名山へ參詣なせしに、山上に於いて六七人の修驗者に出合、武邊の爭ひより立合なせしが、首尾能く彼れを打伏せしに、其長と見え丈拔群なる驗修者顯れ出で、いざと聲掛立合しが雷光石火の早業に木太刀を卷かれ打据られ、思ひ掛けなき不覺を取り初めて我身の未熟を知り、拙き業

を誇りし故、正しく天狗のいましめなりと悟りし故に耻辱を捨て、先非を悔いて詫ければよくこそ改心なしたりとて、彼の修驗者が某へ右劍左劍と名附たる二卷の祕書を讓られたり、今關東に名を得しも天狗に授かる極意故時に取つて其方が右の腕を切つたる故、左劍の一卷讓り遣はす、是ぞ則勘當を許せしと云ふ盃替り、(ト一卷を出す、喜三郎取る。)又是なる短刀は我幼年の守り刀、右の腕を切つたる汝に中身は緣有る左文字の一腰、五十年來息才故是は伜へ讓り呉れるぞ。

ト お磯へ渡す、お磯受取り、

お磯　是は〳〵伜へ迄の下され物、

喜三　あなた樣にあやかります樣、受納致しますでござりまする(ト戴く。)

甚內　いや、喜三郎は其一卷を披見致せ。

喜三　はつ(ト一卷を開き見る、甚內思入あつて)

甚內　どうぢや、會得せしか。

喜三　はつ思ひ掛なき御賜、有難頂戴仕つてござります。

甚內　其祕書を會得せば、假令左りの腕たりとも右にも增る程なるぞ、最早荒氣を出さぬ其方用ゆる事もあるまいが、然し是もまさかの爲ぢや。

喜三　重ね〴〵のお心添詞にお禮は盡されませぬ。

甚内　又其方に賴み置くは、此程殿へ差上げし神影流極意の一卷、昨夜紛失なせし由正しく大鳥逸平が仕業なりと存ずれど、證據なければ詮議もならず、若し又出合ひし事あらば、心を付けて詮議を賴むぞ。

喜三　すりや逸平がその傳書を、

甚内　あ、こりや、密に〳〵（ト思入あつて）又心を籠し此片腕、庭へ埋めて腕塚と印を立つて門弟共へ義心を磨く手本に致す。

お磯　すりや忌はしい其品を、

喜三　えゝ冥加至極もござりませぬ。

甚内　さあ、最早留めねば勝手に行きやれ。

喜三　左樣なれば、

兩人　また其内、

甚内　寛りと來るを相待つぞ。

兩人　はつ（ト兩人下にをり）

喜三　いや憚りながら、若旦那様へ、
お磯　宜しうお願ひ申し上げます。
甚内　おゝ申し聞すであらう。(ト喜三郎先に門口へ出るを、)あゝこれ、磯、
お磯　はつ、御用でござりまするか。(ト門口へ來る。)
甚内　照は、無事かな。
お磯　お替りはござりませぬ。
喜三　あゝ、親子といふものは、
甚内　えゝ(ト兩人顏見合せ双方顏を背けるを木の頭。)急いで行きやれ。

ト喜三郎、お磯枝折の外にて辭義をなす、甚内宜しくあつて、早き合方にて拍子幕。

ト調べにてつなぎ直引返す。

(喜三郎宅の場)――本舞臺三間の間平舞臺、正面暖簾口、上手茶壁是へ勘忍と云ふ掛物を掛け、下手押入戸棚、正面欄間に立派な神棚、是へ誂の造酒徳利土器へ供物備あり、上の方中二階障子立切りあり。いつもの所門口、太き繩簾を掛けし勝手口、鐵箍の井戸、總て喜三郎内の態。爰に子分蔦藏紺半纏腹掛にて摺子木を振上げ、梅吉同じ装摺鉢を持ち兩人立掛りゐる、是を勘太、谷松同装にて留

て居る模様にて幕明く。

勘太　これさ〱、靜にしねえか〱。

谷松　何を手前達は喧嘩をするのだ、

蔦藏　翌日御難の牡丹餅を拵へるから、胡麻を摺つて置かうと思やあ、此ごま摺野郎が己が事を胡麻摺だとぬかしやァがるから、何時己が胡麻を摺つたと云つたら胡麻ァ摺つたから胡麻ァすつたと、胡麻摺野郎がいやあがるけれど、おらあ胡麻ァ摺つた覺えはねえに、それを胡麻ァ〱えゝ、

トせりふにつかへる。

勘太　これ〱何を云ふのだ、手前の云ふ事はさつぱり分らぬえ。

谷松　胡麻ァ摺つたから〱と、何時迄云つてもおんなじ事だ。

梅吉　云ふことも通らねえくせに、よく愚圖々々云やあがる、何所ぞ其方へ小さくなつて居ろえ。

蔦藏　べらぼうめ、小さくなつて居ろと云つたつて、生れ付いて大きいのが小さくなれるものか、悔しかァ己が樣な股引をはいて見ろ、一足半ぶり錢を取られらァ。

勘太　あんまり自慢も出來ねえぢやあねえか、大げえ人間の定りがあらあ、

谷松　年中半纒で居るからいゝが、着物を着りやあ一反半ぢやあ出來ねえ。

梅吉　片袖ねえのも意氣なものだ、手前初めて流行らせりやあいゝ。
蔦藏　こいつらあ寄てたかつて己をひやかしやあがるな。
梅吉　誰が手前をひやかすものか、干上りきつてせえ此脊丈だ。
勘太　是をひやかして見ろ、仕樣がねえ。
谷松　股引の錢を二足ぶり取られらあ。
蔦藏　最う了簡がならねえぞ。
ト右の鳴物にて蔦藏摺小木にて打つて掛る、是を三人にて留める。此時奥より長藏出て來り．
長藏　これ〳〵手前達は靜にしねえか、今日は親分も姉御も據ねえ用があつて己に跡を頼んで行つたが、留守の内に間違があつちやあ親分へ對し己が濟まねえ、どう云ふ譯か知らねえが、どうで手前達の喧嘩だから根も葉もあることぢやアあるめえ、己が一ぺえ買つて遣るから臺所へ行つて笑つてしまへ。（ト長藏懐の丼から額を一ツ出して投げて遣ると梅吉取つて、）
梅吉　こりやあ長藏さん有難うござります。これみんなお禮を云はねえか。
長藏　何禮にやあ及ばねえから、間違をしてくれるな。
勘太　いゝえ此野郎せえ愚圖々々云はにやあ、

谷松　誰も喧嘩をする者はござりません。
蔦藏　何時己が愚圖々々言つた。
梅吉　まあいゝから早く、
三人　さあ、あゆべ〳〵。（ト三人して蔦藏を引張つて下手へ入る。）
長藏　あの野郎も愚圖蔦と云ふが、ねえ名は人の付けねえものだ、あんな愚圖な奴はねえ。
ト奥よりお照振袖屋敷娘の打扮、倅喜之松流手な裝にて清書双紙と手本を持ち出て來り、
お照　これ長藏殿、まだ喜三郎殿は歸らぬかいの。
長藏　これはお照樣、嘸お淋しうござりませうが、最う今に歸りませう。
お照　先刻にからかゝさん〳〵と、此子が待遠がつてぢやわいな。
長藏　おゝさうでござりませう〳〵。これ坊よくおとなしく待つて居るな、今に能いお土産を買つて歸つて來るぜ。
喜之　長ぢいやあ是を見な（ト双紙を見せる。）
長藏　おゝお清書が出來たか、見せな〳〵。
喜之　なに、まだお清書は書かないのだよ。

お照　お双紙の切目故、今綴ぢて遣つたのぢやわいな。
長藏　左樣でござりますか。坊は今何を習つて居る。
喜之　おらあ難波津だ（ト手本を見せる、長藏いろはの手本を明けて、）
長藏　それぢやあもう此いろはは上げたのだな、强氣だ〳〵。
お照　年よりはよう出來ますわいな。
　　　ト花道より以前の喜三郞、お磯手遊のも組の纒を持出て來り、
喜三　久し振のお天氣に御勘當が許りたので、今日は淸々とした樣だ。
お磯　こんな嬉しい事はござんせぬ。
喜三　嘸お照さんがお待ちなすつてだらう。
お磯　お照さんより喜之助がどんなに待つて居るか知れやあしない。
喜三　早くそれを見せて悅ばしてやらう（ト舞臺へ來り、直に門口を明け）長藏、今歸つた。
長藏　親分歸りなすつたか。
喜之　おつかあお土產は何だ。
お磯　それ、こんな物だ。（ト纒を見せる。）

喜之　やあ是りやあ當番だ、嬉しい〳〵（ト纒を持ち悦ぶ。）

お照　お磯今歸つてか、だいぶ遲かつたわいの。

お磯　いえもうお待兼でござりませうと、たいてい急いだ事ぢやござりませぬが、日が短うなりましたので、つい遲うなりました。

喜三　嘸お淋しうござりましたらう、長藏留守に誰も來なんだか。

長藏　えゝ左吉が一寸來た許り誰も來ませなんだ。さうして御屋敷のお首尾はどうでござりました。

喜三　首尾よく御勘氣が御免になつたから悅んでくれ。

長藏　そりやあお目出たうござりました。

お照　そんなら父樣の方へ行かれるやうになつたかいな。

お磯　はい、もう是からは表向上られまする樣になりました。

お照　それは嬉しい事ぢやわいの、それにつけても私の身の上、どうか其中お許しがある樣、

喜三　其義は又折を見合せお願ひ申すでござりますから、お氣長にお待ちなされませ。

トばた〳〵になり、花道より門弟の大助袴大小にて出て來り、直に門口へ來り、

大助　たのまう。（トこれにてお磯お照を隱す、此時簪を落す事。）

長藏　へいどちらからお出なされました。
大助　喜三郎は在宿なるか。
長藏　へい、宅に居りますでござりまする。
大助　在宿ならば只今是へ大鳥逸平參る程に、差控へ居る樣に申しついでくりやれ。
長藏　畏りましてござりまする。
大助　他出せね樣こたへ置くぞ。（ト引返して走り入る。）
喜三　いつぞや道場で別れし儘遺恨ある逸平が、押して此家へ參るのは、
お照　若しや私の身の上か、
長藏　但しは遺恨の仕返しか、
お磯　何か仔細のある事なれば、お照樣にはあの二階へ、
お照　そんなら私は、
喜三　逸平めが歸る迄、お忍びなされて下さりませ。
お照　合點ぢやわいの（ト中二階へ入る。）
長藏　高の知れたる大鳥逸平、爰へうせたら腕づくで、

喜三　あこれ、今日からしては喧嘩はならねえ。どれ、奥へ行つて待つて居よう。

ト喜三郎先にお磯喜之松を連れて奥へ入る。

長藏　いつぞや源太が喧嘩をして、話にやあ聞いて居るが、どんな奴だか面を知らねえ（ト門口より向うを見て）おゝ向うから來る四五人連、慥にあれが大鳥逸平、何と云つても侍士だ褌を〆て掛らにやあならねえ。

ト長藏帶を〆身支度をする、花道より逸平羽織袴大小裝にて門弟四人何れも袴大小にて竹刀を擔ぎ出て來り、

逸平　すりや喜三郎は片腕切つて、師匠へ誓に喧嘩をせぬとか、それに相違ござらぬな。

軍藏　いかにも先刻師匠の宅にて、確と見屆け參つてござる。

逸平　申さば彼は我兄弟子、殊に神影の極意を極め兩腕あれば我手にも餘る程の手練なれど、片腕ないと喧嘩をせぬ誓をなせしがこつちの幸ひ。

大助　手向ひ致さぬ弱身へ附込み、厄病の神で敵とやら。

栗平　先達道場にて源太に打たれし遺趣晴らし、

運八　蹴たり踏んだりさいなんで、

逸平　日頃の恨をはらしてくれう。
四人　然らば先生、
逸平　何れもお來やれ（ト舞臺へ來り、）それ案内致せ。
大助　はつ、喜三郎在宿なるか。
長藏　どなたか存じませぬが、こちらへお這入りなされませ。
逸平　大鳥逸平だ、免しやれ（ト合方になり逸平先に四人内へ入り、逸平お照の簪を拾ひ懐へ入れ、）して、喜三郎は何れに居る。
長藏　へい、奥に居ります。
栗平　先生が參りし趣喜三郎に左樣申せ。
長藏　いえ先刻お使がござりまして、あなたがお出の趣を承知致して居りますれば、只今是へ參ります、先お莨でも召上り、お待ちなされて下さりませ。
逸平　先刻申し入れたるに、出迎ひせぬは失敬至極。
軍藏　奥にをるとあるからは、
大助　いで我々が、

四人　引きずり出して、（ト四人立掛る、此時奥にて、）

喜三　あいやお出に及ばぬ、喜三郎只今それへ參りまする。（ト奥より喜三郎好みの打扮にて出て來り、中央へ住ひ）是は〳〵大鳥樣を初め御同門の何れも樣、見苦しき私宅へようこそお出なされました。

逸平　先達神崎の道場にて逢うた儘其後尋ねて參らうと存じたなれど、稽古に暇なく漸く今日參つてござる。

喜三　何の御用か存じませねが先御寛りとなされませ。これお莨盆を差上げぬか。

長藏　はつ（ト莨盆を逸平の前へ差出す、奥よりお磯茶を汲み來り、）

お磯　御免下さりませ（ト出す、逸平取つて、）

逸平　そちや喜三郎が女房か、

お磯　左樣にござりまする。

逸平　然らば兼々噂に聞く、神崎殿の召仕、

軍藏　いまだ我々門弟に參らぬ先の事さうなが、

大助　喜三郎と密通なし出奔なせし腰元小磯、

栗平　聞きしに增るよい女房、勘當請けたも尤も至極。

運八　斯様な女に惚れられるとは、我々共の及ばぬ事自慢さつせえ〳〵。
お磯　是は〳〵思ひも寄らぬ其御座興。
喜三　十年立てば一昔、ほんの若氣の至りにて面目次第もござりませぬ。
逸平　それに付いて此逸平其方に頼みがあるが、何と聞いては呉れまいか。
お磯　如何なる事か存じませぬが、
喜三　身に叶ひました事ならば、
逸平　早速の承知忝い、
喜三　してお頼みと仰有るは、
逸平　外でもない、此家の内に隠匿ひある神崎の娘お照をば某が貰ひたい。
喜三　何事かと存じましたに、其お照様は先達不義密通露顯の折、重三郎様諸共に何れへお出なされしか、お行方さへも存じませぬ。
軍藏　然らば此家にお照殿、
大助　隠匿ひおかぬと申すのか。
栗平　慥に隠匿ひある事を、

運八 存じて我々參りしが、

逸平 それでもそちは知らぬと申すか。

喜三 毛頭存じませぬ。(ト逸平件の簪を出し、)

逸平 これ、只今是に落散ありし照と云ふ字に裏梅を比翼に彫りし此簪、こりや何者の所持なるぞ。

喜三 其簪は、

逸平 裏梅はお照が定紋、此家の内に居ぬものが、なんで爰に落ちてあつた。

喜三 さあ、それは、

逸平 よも隱匿はぬとは申されまい。

お磯 あいや申し、其簪はお照樣より私がお貰ひ申しましてござりまする。

逸平 そんなら是を貰ひしとか。

喜之 (奥より出て來て、)や、是りやお照樣の簪を、

お磯 あこれ、めつたな事を(ト喜之松を抱き口を抑へる、)

軍八 天に口なし人を以つて云はしむると、

大助 うつかり云ひし子供は正直。

粟平　隱匿ひ置きしに相違あるまい。
運八　但し知らぬと申し切るか。
喜三　さあ、それは、
逸平　隱匿ひ置きしか
喜三　さあ、
兩人　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
逸平　えゝ面倒な、家搜し召れ。
四人　心得ました。
ト合方聖天囃子にて四人二階と奥へ行かうとする。長藏お磯留めるを振拂ひ、行かうとするを、長藏左右へ突退ける。喜三郎悧りして是を留め、
喜三　あこれ、常とは違ふ喜三郎、只何事も穩便に、
長藏　それだと云つて、
喜三　えゝさつき言つたを忘れたか(ト云ふ、長藏是非なく控へる。)

逸平　家捜しなすを支へるは、隠匿ひ置きしに相違あるまい。
喜三　いつぞや密通露顕の折既にお手討にもなるべき所、御勘氣あつて重三樣へ遣はされたるお照樣、申さば親より許されし主有る花のお照樣、それをあなたが理不盡に手折つてお連なされたら、不義は申すに及ばぬ事、柄をすげますれば勾引、花盗人と申されたらお名の穢れとなりませう。
逸平　むゝ、然らばお照は貰ふまい。
喜三　すりや私が申せしを、
お磯　お聞濟み下されて、
逸平　いかにもさつぱり思ひ切つた。
お磯　嬉しやそれで此場は此の儘、
長藏　花も散さず無事に納り、
逸平　いゝや納めぬ大鳥逸平、お照を貰はぬ其替り外に所望の品がある。
喜三　して、お望の。
お磯　其品は、
逸平　そちが命を貰ひたい。

喜三　そりや又なんで、

お磯
長藏　どう言ふ譯で、

逸平　いつぞや神崎の道場にて我に恥辱をあたへし其方、只一討と思ひしも甚内殿に止められ、無念を堪へ立歸りしが、遺恨は胸に止み難く返報なさんと參りし逸平、併し無下には殺すまい。そちも神影の遣ひ人なれば眞劍の勝負なせ。

喜三　中々以て町人風情ほんの竹刀を遣ふのみ、大鳥樣のお相手に元より及ばぬ其上に五體が片輪になつたる私、此義は偏に御用捨を、

逸平　なに、五體が片輪になつたとは、

喜三　御覽下され（ト片肌脱ぎ切口を見せ）生兵法は大疵の元と下世話に申す如く、少し許りの覺ある腕を頼みに喧嘩口論遂には師匠の勘當受け、大小捨て町人に身を持崩して十ケ年、腕と異名を取る迄には喧嘩の數も幾度かそれも段々とる年に師匠へ恩が返したく、荒氣を出さぬ誓言に右の腕を切たる私、片輪を相手になされましては、今神崎の道場で一と云はるゝ大鳥樣あなたのお恥でござりませう。

逸平　假令恥辱にならうとも、遺恨重なる喜三郎、生けては置かぬ覺悟なせ。

喜三　すりやどうあつても、

逸平　血を見ぬ内は、

四人　歸らぬのだ。（ト是にて長藏ツカ〳〵と前へ來て）

長藏　さつきから親分が割つ口說つ譯を云つても、聞入れのねえ二本棒、血を見ねえで歸らざあおれを替りに切らつせえ、一度死んで二度は死なねえ人間わづか五十年、浮世は夢に幻長藏死ぬと度胸を据ゑたらば、一人ぁ死なねえ大鳥樣、覺悟極めて切らつせえ。

四人　何を、（ト立掛るをお磯留めて）

お磯　あゝこれ長藏、何を言ふのだ、あれ程家で留るのをなぜ聞分けて呉れねえのだ、それぢやぁ贔屓の引倒し、爲を思はば何事も蟲を殺して居ておくれ。

長藏　えゝいめえましい、うづ〳〵すらあ。（ト手を握り、是非なく控へろ）

喜三　あなた方へ對しまして只今の無禮過言、定めてお腹も立ちませうが、高の知れたる私の子分の者にござりますれば、大きく申せば蟲けら同然蚯蚓が鳴いたと思召して、お耳に掛ず何れも樣御了簡なされて下さりませ。又其替り先達の御遺恨がござりますなら、此喜三郎を御存分に、とは申す物の町人でも人一人でござりますれば、命を取らば時宜により御身分にも關はりませうから、

お腹がいずば私を打つなりと踏むなりと、お心任せになされまして、
四人　了簡しろと申すのか。
喜三　へいお手向ひは仕りませぬ。（ト是にて逸平四人と顔見合せ思入あつて、）
逸平　いかさまそちが云ふ通り・高が町人蟲けら同然命を取るも益なき殺生、望みに任せ某が遺恨の仕返し覺えて居よ。
　　ト逸平喜三郎の肩へ足を掛けろ、喜三郎懐より珠數を出し爪繰ちつと思入、長藏是を見て
長藏　こりや親分を土足に掛けて、
逸平　おゝ土足に掛たら何とする、遺恨があらば心任せ、打つなりと踏むなりと勝手にせいと言つた故望みに任して踏んだがどうした。
軍藏　大鳥氏は我が師匠、神崎殿の弟子頭、
大助　道場預かる高弟なれば、いはゞ師匠も同じ事、
栗平　手出しをすりやあ腕を切り、誓を立つたが噓言になるぞ。
運八　自由になつて打たれずば、改心なしたと云はれまい。
長藏　むゝ（ト喜三郎ちつと思入。長藏悔しきこなし、）

逸平　まだこんな事ぢやあない、遺恨の仕返し、かう〳〵〳〵（ト門弟の竹刀を取り喜三郎をさん〴〵に打ち）
何と骨身にこたへたか（ト手ひどく打つ。）

喜之　あれ父さんを（ト行かうとするをお磯抱く。）

長藏　こりやもうどうも（ト立掛るをお磯留めて、）

お磯　爰をぢつと堪へるが、堪忍するのでござんすぞえ。

長藏　えゝいめえましい。

ト長藏悔しき思入。此以前下手より源太好の打扮にて出て來り、門口にて伺ひ、內へ跳込うとして、
イヤ〳〵と云ふ思入あつて伺ひゐる。

逸平　これ何れも、先達彼が弟 曙 源太に打たれたる其返報に打たつしやれ。

四人　打つても宜しうござりませうか。

逸平　おゝよいとも〳〵、後には身共が居る存分に打たつしやい。

軍藏　然らば御免下されい（ト四人竹刀を持ち、）

四人　喜三郎覺悟致せ。

ト四人一時に打つ。喜三郎ぢつと思入あつて左右を振向く。四人恟りして思はず相打に打合ひ、

四人　あいたゝゝゝ。
栗平　あゝ我身つめつて人の痛さを知れだ。
運八　喜三郎免しやれ（ト一寸辭儀をして後へ退り）
四人　大鳥様有難うござりまする。
逸平　最早それでようござるか。
四人　存分打ちました。
逸平　何れも方の遺恨が晴れゝば、これで身共が武士も立ち、お照が事は又重ねて、さあ何れも參らうか。
四人　御同道仕つりませう（ト門口へ出る、是にて源太下手へ入る、逸平思入あつて）
逸平　いや男達の俠客のと名立がましく申せども、以前は兎もあれ今は町人、武士に逢つては意氣地はない。猫に逢つたる鼠同然尻尾を挾み四足を縮め、ちうと云ふ音も出やあしねえ。
長藏　えゝ云はして置けば（ト立掛ると、）
喜三　こりや（ト長藏を留め、思入あつて）左樣なれば大鳥様、
逸平　喜三郎、其中逢はう。

ト先に立ち四人附いて花道へ入る。長藏鉢巻尻端折をする、奥より以前の子分四人若い衆の子分大勢皆々庖丁棒など思ひ〳〵の物を持ち出て來る。

長藏 さあ、みんな來い。

皆々 合點だ（ト駈出さうとするを、喜三郎門口を〆皆々を留め、）

喜三 やあ又しても〳〵己が云ふ事を聞かねえか。

長藏 それだと云つてあんまりな、手出しの出來ねえ親分を寄つてたかつてぶちやあがつて、子分が見ちやあ居られねえ。

梅吉 さつきから出よう〳〵と思つたけれど、家ぢやあ面倒、

勘太 外へ出りやあ構やあしねえ、

谷松 後から行つて追ひぶちに、

蔦藏 叩き〆にやあ、

四人 腹がいねえ。

喜三 然うでもあらうが此己が掛替のねえ腕を切り誓言立つて止めた喧嘩、他人は知らず喜三郎が子分の者は一人でもやる事アならねえ。

お磯　其深切は嬉しいが、切つた腕が無駄になるから、どうぞ辛抱しておくれ。
長藏　親分といひ姉御迄事を分けて留めるのを振りもぎつても行かれめえ。
喜三　己を思はゞ此の儘に否でも辛抱してくりやれ。
長藏　ようござります。思ひ切りました。(ト鉢卷を取り尻をおろす。)
喜三　さあ手前達もみつともねえ、奥へ行け〳〵。
皆々　今行きます(トぐづ〳〵するを、)
喜三　えゝ愚圖々々しねえで行燈でも點けねえのか。
長藏　はゝい。(ト皆々奥へ入る時の鐘。)
喜三　やれ〳〵大風の吹いた後のやうだ。(ト奥より子分行燈を持出る。)
お磯　してお前何所ぞ疵でも附きあしないかえ。
喜三　なに、小兒の時分から竹刀ぢやあ打たれつけて居るから、何ともねえ。
　　ト時の鐘はなり、下手より源太出て門口を明け、
源太　兄貴、此間は、(ト言ひながら内へ入る。)
喜三　おゝ源太か、どうした。

源太　四五日宿へ行つて遊んで居やした。(ト能き所へ住ひ)

喜之　兄いお女郎買か。

源太　又そんな事を言ふか。

お磯　小遣のあるうちは五日も十日も家を明けて、錢がなくなると歸つて來るが、よく家を忘れねえものさね。

源太　人を小猫か何ぞの樣に、歸り早々姉御の皮肉だ。

お磯　私が云はにやあ誰も云ひ人がねえからよ。

喜三　えゝ囂しい、又いがみ合ふのか、こんな仲の惡い兄弟はねえ。

源太　いや兄貴、今佐吉に逢つて話を聞いたが、お前とんだ事をしなすつたの。

喜三　お照樣をお置き申すに勘當の身ぢやあ表向お世話をする事が出來ねえから、荒氣を出さねえ誓言に腕を切つて行つたので、悅んでくれ、御免になつた。

源太　そりやあ何にしろよかつたが、然し腕の喜三郎と云はれた其腕を切つて仕舞つたは惜しい事だ、髮を切るのは譯もねえが指位迄は切られようがどうして腕は切られねえ。おいらなぞも金比羅樣へ酒で二三度髮を切つたが、いや、金比羅樣と言やあ兄貴、おらあ一寸金比羅樣へお參り申して來

やす。
喜三　十日でもねえのに、何で行くのだ。
源太　ちつと願掛けがあつて、
長藏　今つから遲からうに、虎の門か三絃堀か。
源太　なに讃岐へサ。
長藏　え、株でそんな事を云ふぜ、ちよつとお參りに行くと云ふから虎の門か三絃堀だと思やあ、百何十里ある讃岐迄、ちよつとでもあるめえぢやあねえか。
喜三　何と思つて讃岐迄お參りに出掛けるのだ。
源太　ちつと江戸に居ちやあ面倒な事があるから、信心半分二月ばかり旅をして來ますのサ。
お磯　一人で行くならいゝけれど、女なぞを引張つていつて、後へ難儀を掛けてくんなさんなよ。
源太　なに、そんな厄介を掛けるものか。
長藏　嶋や成田と云ふぢやあなし、讃岐と云やあ長旅だ、神奈川迄も送つて行かうが、何時立つのだ。
源太　今夜直ぐ立つ積りだ。
喜三　そりやあ何にしろ早急だが、路用の手當はいゝか。

源太　實は暇乞ながら其事で來ましたのさ。
喜三　お磯掛硯を持つて來やれ。
お磯　あいッ（ト押入より硯箱を持つて來る。喜三郎引出しから、二十五兩包を出す。）
喜三　さあ少しばかりだが餞別だ。（ト出すを、源太取つて）
源太　こりやあ兄貴有難うござりまする。
お磯　おや、みんな遣らずとよいのに、
喜三　なに長旅は一分でも餘計な方が氣が丈夫だ。
源太　兄貴こりやあ二十五兩包だね。
喜三　さうよ、額だから重からうが、あひにく家に金がねえから取替えて持つて行つてくれ。
源太　なに額でも錢でも何でもいゝが、是ぢやあちつと足りませぬ。
喜三　むうそれぢやあ足らねえと云ふのか。これが京大阪や大和廻り遊山旅と云ふぢやあなし、信心參りの道中だ、餘りもしめえが讃岐迄二十五兩あつたらば往つて來られさうなものだぜ。
　　ト源太額包を下へ打付け、
源太　そりやあ柄杓一本で金比羅參りに御報謝と、野宿をして行つたなら一文なしでも行かれやすが、わ

つちも若い身の上だ酒も呑みたし宿々で女郎の一つも買ひてえから、端た金ぢやあ行かれねえ。千兩箱を馬に付けて珠數繋ぎに引いて行つても遣つた日にやあ足りねえが、そんな大きな事は言はねえ。兄貴百兩わつちに呉んなせえ。

喜三 なに百兩呉れと、

源太 實は二本貰ひてえのだが、御時節柄故半減に百兩と云つたのだ。

お磯 （傍へ寄り）これ源太、そりやあ手前何を云ふのだ、一本の二本のと飴ん棒でもしやぶるがいゝ。此せちがれえ世の中に錢でも呉人はありやあしねえよ。

源太 そりやあ云はねえでも知れた事だ、是が堅氣な商賣ならこんな事も云やあしねえが、川溜の三日もありやあ不時な金の儲る商賣、増して他人ぢやあなしつながる縁の兄弟だから、それで貰ひに來やしたのだ。

喜三 誰も遣らねえとは言はねえが、これが身でも持つ事ならそりやあ二本が三本でも遣るめえ物でもねえけれど、信心で行く金比羅參りに女郎を買ふ其金は、氣の毒ながらおらあ遣られねえ。

源太 呉れざあようござります、貰ひますめえ。二十や三十は腰の邪魔だ、是もお返し申します。

ト二十五兩包を喜三郎の前へはふる。

喜三　不用なら止しにしろ、強つて遣らうとは言はねえわ。（ト金を取る。）

源太　遣らうと云つても貰やあしねえ。姉御の緣に繫がつて兄貴々々と云つて居るなあ斯う云ふ時に一本と二本の金を貰ふばかり。何だ二十や二十五の目腐れ金、こんな吝つたれな兄貴は要らねえ、血を分けた仲ぢやあなし緣を切りやァあかの他人、今日から兄でもなけりやあ弟でもねえぞ、翌日が日どんな事があつても、（ト源太思入あつて）兄弟でなけりやあ知らねえぞ。

喜三　はて、おつな事を云ふな。（ト思入、お磯ట్ల）

喜三　はて、おつな事を云ふな。（ト思入、お磯塒へ糸れ喜之松を喜三郎の傍へ遣り、）

お磯　これ、源太（ト源太の胸づくしを取る。）

源太　何だ。

お磯　手前そんな事を云つては濟まねえぜ。

源太　濟むも濟まねえもいるものかえ。（ト振拂ふ。お磯膝を突付け）

お磯　これ、どの口でそんな事が云はれるぞ。ほんに〳〵十年此方家の人の厄介になつたのはどの位、算へ立つて云はれやあしねえ。先吉原は云ふに及ばず、品川新宿剩へ神奈川迄金を持たして迎へに遣つたは幾度か、遊びの足が遠退いてちつと狐が離れたかと思ふと直にくすぶつて、何所の部屋から來ましたと步行に渡す其金も三度に一度は私の金、もう是限で止めますと酒と一緒に髮

を切り金比羅様へ願掛も十日と持たぬ三日坊主、願酒を破つた上句が喧嘩、相人の天窓をぶちこはし、明るい體も暗闇へ繩が掛つて行所、金で濟して中直り、やれ嬉しやと云ふ間もなく、人の娘を引つ浚ひ表向から勾引と四角に來たも内の顔丸く濟して是も金、今日は三兩あすは五兩又は十兩二十兩、微塵積つて山よりも高い恩をば忘れたか。是迄手前に入り上げた金を〆たら何百兩しみつたれとはよく云つた、現在實の弟だが想相もこそも盡果てた、そつちから縁を切らずともこつちから縁を切る、姉と云ふな、人でなしめが。

ト此内源太莨をのみ素知らぬ振をして居る、お磯胸ぐらを取り振廻して突放す。

源太 おゝ其縁切を待つて居たのだ、是で兄貴もなけりやあ姉もねえ、一本立のおれが體、さばくとしていゝ心持だ。（ト是にて長藏思入あつて）

長藏 これ源太、さつきから聞いて居たが何でそんな想相盡かしを云ふのだ。今姉さんの云ふ通り、是迄兄貴に御厄介を掛けた事を忘れやあしめえ、何所かで喧嘩でもして來て八つ當りかあ知らねえが、そんな事を云つちやあ濟まねえぜ。

源太 何だ手前迄が同じ様に、何ぞと云ふと濟むの濟まねえのと水切の井戸ぢやァあるめえし、生利な事を云やあがるな。甚三や左吉は無口だがよく四文と出やあがる、うぬが様な好かねえ奴はねえ。

長藏　そりやあ好かざあ好かれなくつてもおらあどうでもいゝけれど、兄たァ云へど義理有る仲、さつきからの不手勝手を傍で聞いてる姉さんがどの位氣の毒だか知れやあしねえ。これが十や十一の小兒ぢやあなし、ちつたあ其所らも思つて見たがいゝ。

源太　えゝ囂しいやい、よくつべこべ〳〵と根よく胡麻を摺りやあがる、見掛倒しの摺小木野郎め、今兄弟の緣を切りやあ手前にも緣はねえ、友達付合は今日限りだぞ、えゝ面を見るのも蟲唾がはしらあ。

長藏　なに見掛倒しの摺小木だと（ト屹度なり、喜三郎へ思入あつて氣をかへ）それやあ摺小木でも摺鉢でも根が無賴漢から上つたおれ、何とでも言ふがいゝが、兄貴へ對して云つちやあ濟まねえ、よく考へて見るがいゝ。

源太　こけが占を見やあしめえし、考へるも考へねえもいるものか、賴みにならねえ兄弟は要らねえ。こんな家に居ると身の穢れだ、どれ行きやせう〳〵。

ト此中お磯奥へ入り、位牌を持つて來て、立たうとする源太を引付け、件の位牌を目先へ出し、

お磯　これ源太、此位牌を知つて居るか。（ト源太見てぎつくり思入）手前が家を潰した故位牌に彫つた戒名の父さんやかゝさんも、爰の佛檀に居候、死んだ人迄此樣に居所立所に困るのは、こりやあ誰

がした業だ。十年此方私の緣で兩親初め手前迄大恩請けた爰の家、身の穢れとは何で穢れだ、手前こそ人間の皮を着た畜生だ、犬や猫と一つに居ればこつちでこそ身の穢れ、よくそんな事が云はれた事だな。（ト襟がみを取つて位牌で打つを振拂ひ）

源太　えゝ何をするのだ、惣領だつておめえは女だ、何で己をぶつたのだ。

お磯　おゝ手前をぶつたなあおいらぢやねえ、これ、この位牌のとつさんかゝさん草葉の蔭から見て居られず、私が手を借り親の折檻、こう〳〵〳〵（ト又引付け位牌でさん〴〵に打ち）些とは骨身にこたへたか。

源太　姉さん、もうそれでいゝのか、一つぶたれるのも百ぶたれるも打たれる味は同じ事だ、さあ幾らでも打ちねえ〳〵、何なら一思ひにぶち殺して吳んねえ。（トお磯に體を摺付ける。）

お磯　うぬ打たねえでどうするものだ。（ト又引付け打つを）

喜之　あれ、おつかあが喧嘩をするよ。

喜三　なに喧嘩ぢやあねえ、兄ィが叱られるのだ。

長藏　これさ〳〵姉さん、腹の立つのは尤もだが、もういゝ加減にしなせえ〳〵。

お磯（悔し泣に泣きながら）それだつてあんまりの奴だ、お師匠樣へ誓言に荒氣を出さぬ家の人、默つて見

て居る心の内嘸叩き倒したからう、身内でさへもほんに〳〵愛相もこそも盡果てた奴だ。これ親のない後は姉は親、七生迄の勘當だぞ。(トきつといふ、源太思入あつて、)

源太　うむ、勘當受けりやァあかの他人、きつと是限縁を切つたよ。長藏、今迄兄弟同樣にした友達づき合は今日限りだぞ。

長藏　こつちにやあ替りはねえが、否ならよしねえ突合ふめえ。

源太　兄貴、お前とも兄弟の縁は切つたよ。

喜三　むゝ、手前の方から望故切つて遣らうと云ひてえが、おらあ切らねえ。

源太　なに、切らねえとは、(トきつといふ。)

喜三　心にもねえ愛相づかしで、兄弟初め友達迄縁を切つて今日限り生先長い命をば手前は捨てる氣だらうが、

源太　えゝ、(トぎつくり思入。)

喜三　知らねえでどうするものか、何日ぞや師匠の道場で手前の喧嘩が遺恨となり、さつき己が打たれたる其仕返しに行く氣だらうがそりやあ惡い了簡だ、心は曲つた逸平だが直な竹刀の神影流極意を極めた腕めえ故、中々以て瘦腕の生兵法ぢやあ覺束ねえ。まして向うは多くの門弟たつた一人

で踏み込んだら飛んで灯に入る夏の蟲、其所は手前も江戸つ子だけ、死ぬのは覺悟で兄弟へ後の難儀の掛らぬ樣、緣を切らうと云ふのだらうがおらあ切らねえ、何所迄も手前の難儀を背負込む氣だが、昨日に替る今日の身の上喧嘩をしめえと誓言に片腕切つた喜三郎、翌日が日手前が短氣な事をすりやあ云はずと己が身に掛りやつながる兄弟仲、假初ながら十年此方緣を結んだ上からは、切つた誓の此腕が無駄にならねえ樣にしてくれ。

源太 む〻、

ト源太ぢつとせつなき思入、お磯扨はさうかといふ思入あつて。

お磯 そんなら今の愛相づかしは（ト嬉しき思入、源太思入あつて、）

源太 い〻や、おらあそんな立役な芝居でする樣な了簡はねえ、實はお前の云ふ通り己が遺恨を背負込んで行かにやあならねえ所だが、然うする日にやあ相手が侍士、切られて死なにやあならねえから、それを遁れる金比羅參り、命の御報謝に出かけるのだ。

長藏 それぢやあ眞底命が惜しく、それで讃岐へ出掛けるのか。

源太 知れた事よ。

お磯 まだしもさうかと思つたに、彌々さう云ふ心なら片時爰へは置かれない。さあきり〳〵と出て行

け。

源太　行かねえでどうするものだ。（ト思入有つて立上り、行掛るを）

喜三　これ、源太待て。

源太　何ぞ用か。

喜三　おゝ強て行くなら留めやあしねえが、あの逸平は師匠の弟子、手前が喧嘩をする日にやあ己が誓は反古になるぞ。おこがましいが此珠數の（ト持つてゐる珠數を出し）二つの玉は己と女房、又四菩薩の四つの玉は手前に甚三、長藏、左吉、跡は殘らず子分の者玉の數せえ百八の水滸傳にも負けねえ勢ひ、それを一つに緣の絲で繫いで置けば丈夫だが、切て仕舞へば皆ばら〳〵、元の珠數にはまとまらねえ。どうぞ命を長房に短氣な事をしてくれるな。

源太　うむ（ト思入あつて）なに金比羅へ行くのだから案じなさんな。然し愛相づかしは云ふものゝ是迄長の其間大きにお世話になりやした。是から行きやあ長旅故もう是限お前にも逢はれねえかも知れねえぜ。（ト禮を云ふ思入）いや緣を切りやあ二度と再度もう逢ふ事はありやしねえ。おい姉さん。

お磯　姉さんと云はれる覺えはねえよ。

源太　おゝ姉さんぢやあなかつたおかみさん、お前も持病の多い體煩はねえ樣にしねえ。（ト名殘だと

云ふ思入。）いや是も他人にいらねえ世辭だ。これ長藏、

長藏　何だ。

源太　おれが居にやあ手前は後を、

長藏　えゝ、

源太　跡で思入り胡麻をすれッさ。（トづう〳〵しく門口へ出る。お磯ツカ〳〵と行き、）

お磯　まだそんな憎まれ口を、きり〳〵とうしやあがれ。

ト位牌で打つて掛る、其手をとらへ位牌を見て濟まれえ事だと云ふ思入にて、ホロリと涙をこぼし、お磯と顔見合はせ氣を替へ、

源太　えゝ面を見るも嫌だ。（トお磯を内へ突倒し、きつとなつて尻を端折り、）おゝさうだ。

ト逸散に花道へ入る。お磯起上り門口へ出て、

お磯　うぬ、どうするか見やあがれ。（ト長藏是を留めて、）

長藏　これさ、姉さん待ちなせえ。

お磯　えゝ長藏留めてくれるな。（ト振拂ひ、花道へ追掛け入る。）

長藏　えゝ待ちなせえと云ふに、（ト尻をはし折りながら、跡を追掛け入る。）

喜三　えゝみつともねえ、いゝ加減にしねえのか。

喜之（傍へ來て）おつかあやい〳〵、一緒に行かうよ、

喜三　おつかあは今歸つて來るから、とつさんと遊んで居やれ。

喜之　おらあ遊ぶのはいや、眠くなつたものを。

喜三　眠くなつたら爰へ來い。（ト喜之松喜三郎の傍へ來て、）

喜之　あした機關を買つておくれよ。

喜三　おゝ買つて遣るとも〳〵（ト喜之松を抱き思入あつて）おれへ濟まねえ所からお磯が眞正に腹を立ち源太の跡を追掛けて行つたが、みつともねえ事をしにやあいゝが。長藏が一緒に行つたから大方連れて歸るだらう、何にしろ源太にもあれ程己が言つて遣つたから、よもや振込んで行きやあしめえが、喧嘩の元が手前故行かにやあ男が立ねえなぞと折角切つた此腕を、無駄にしてくれにやあいゝが。オヽ眠い〳〵と云つたが、直にモウ寢て仕舞つた。あゝ子供は罪のねえものだなあ。

ト子供を見て思入、これにて道具廻る。

（喜三郎宅裏手の場）――本舞臺一面の黑塀、此内上手二間の二階家、九尺四枚の障子建切り、下手

平家の家根、紅葉、松の見越の枝、外に大八車。總て喜三郎内裏手の體。時の鐘にて道具止る。と時の鐘打上げ誂の雨吟になり、唄一くさりあつて二階の障子を明ける、内に丸行燈を點し以前のお照居て、

お照　今宵も雨を催して星さへ見えぬ薄曇、私の心と同じ空戀し床しい重三樣と浮世の義理故此樣に別れ〳〵に居る悲しさ、早う一つになりたいと思へどそれも叶はぬは、逸平づらが戀慕故、若しもの事でもあつてはと喜三郎が心遣ひ、それに付けても今日で三日お出のないは增花の外にあつての事ではないかと、思へばほんに夜の目も合はず、あゝ案じられる事ぢやなあ。

ト雨吟になりお照案じる思入、此中花道より重三郎着流し大小にて出て來る、後より離れて、大鳥の門弟一人頰冠り尻端折り大小にて伺ひながら出て來る、重三郎花道へ留る門弟下に居て伺ひゐる。

重三　秋の長夜といひながら、暮れてより餘程立てどまだ五ツを打たぬ樣子、晝は人目の多い故夜に入つてから逢に來るが、何時御勘氣の御免あつて肩身を廣う世間晴れ、二人一緒に添はれることか、師匠の緣に繫がれて喜三郎が深切に言うて臭れるが他人故、まさか每夜行かれもせず、我と我身に意見なし一兩日行かざりしが、一夜を千夜と思ふは戀路、嘸やお照が待つて居よう。

ト雨吟になり重三郎行きかける、門弟伺ひ寄り拔掛る、重三郎振返り顏を見る、門弟刀を納め袖

にて顔を隠し引返して花道へ入る。重三郎是を見送り何だかと思入あつて舞臺へ來る。唄のきれ、月
出て重三郎思入あつて、

雲間を洩れし月影に、見れば爰は數寄屋川岸、喜三郎が住居の裏手、（下二階を見上げお照を見て）
やゝ其所に居るのは、お照ぢやないか。

お照（下を見て）おゝ重三郎樣でござりましたか、えゝ逢ひたうござりましたわいな。

重三 其の逢ひたいは同じ事今日は〳〵と思へどもあたりの人目に我慢して、一日二日遠退いたが、替
る事もなかつたか。

お照 私に替りはなけれども、お前に替りがあらうかとそれが心に掛る故、いつその事此場より連れて
退いて下さんせいなあ。

重三 わしも然うしたいと思はぬ事はなけれども、眞身も及ばぬ喜三郎が深切にしてくれるのを、袖に
するかと思はるゝが濟まぬ義理故、此儘にどうも連れて行かれぬわいの。

お照 さあさうではあらうが私故、さつきも大鳥逸平にうち打擲に逢うたのを蔭で見て居る此身のつ
らさ、いつそ私の居ぬ方が喜三郎へも難儀が掛らず、よからうかと思ふ故、

重三 すりあ逸平が汝の事より喜三郎を打擲せしとか、それは定めて此程の遺恨故ではあらうけれど、

元はと云へばおぬし故さう云ふ事と聞く上は、六本木に知べの者あれば是よりそれへ伴うて二人一緒に暮さうわいの。

重三　善は急げ、ちつとも早く。（ト重三郎上手へ行かうとする。）

お照　あゝ申し重三郎様、表からでは人目が邪魔、どうか爰から塀越に下りる事はなりますまいかいな。

重三　（車へ思入あつて）おゝ丁度それには幸ひな、爰に有合ふ此車、是をば立てゝ梯子となし、塀越に連れ退かん。（ト雨吟になり、重三郎車を塀へ乗掛け歯へ石を挟む、此うちお照奥を伺ひ身仕度をする）さあ仕度がよくばこれへ下りよ。

お照　私やこわうて、どうしてまあ。

重三　何の怖い事があらう、わしが押へて居る程に其所の連子へ扱帯を掛け、それに縋つておりたがよい。

お照　あいあい合點ぢやわいな。（ト雨吟になり、お照扱帯を欄間へ掛け、それへ縋つて、こはごは車へ足を掛ける、重三郎是へ手を掛け漸々下へおりてほつと思入。）そんなら是から手に手を取り、お前のしるべと云はしやんす、

重三　其行先も離れざる、連理の枝の六本木、
お照　麻布と云へば幸橋、夜るは往來も稀にして、
重三　月さへ落ちる西の久保、
お照　芝の御寺の五重の塔、
重三　木の間に赤き赤羽根を、
お照　後に見なして古川傳ひ、
重三　流れに添うて、
お照　少しも早う、
重三　さあ來やいの。
　　ト兩吟になり、重三郎お照の手を取り行き掛る。ばた〳〵になり下手より門弟四人後より逸平出て來り、兩人を取卷き、
逸平　兩人待ちやれ。
重三　や、さう云ふ聲は、
逸平　（前へ出て）誰でもない、大鳥逸平だ。

兩人　えゝ、（ト悧りなす、お照重三郎の後へ隱れる。）
逸平　疾からこなたに逢つたらば無心を云はうと思つて居たに、はていゝ所で逢ひました。
重三　して、此重三へ無心とは、
逸平　無心と云ふは外でもねえ、お照は身共が執心故、刀に掛けて貰ひたい。
重三　こは理不盡のおつしやり樣、此お照故大恩ある師匠の勘氣を受けたる重三、門弟頭のそこ許がお望みなれどおいそれと、お照ばかりは上げられぬ。
軍藏　どうですべよく熨斗を付け、さあ進上とも云はれまい。
大助　否やを云ふは合點で、助鐵砲に參りし我々、
栗平　いやと云はうが應と云はうが、はごに掛つた鳥同然。
運八　羽根ツぱたきもさせぬから、
皆々　大鳥氏へ差上げろ。
重三　假令何樣云はるゝとも、町人ならば知らぬ事、身共も兩腰たばさめば、刀の手前此儘に妻と定めし女をば、故なく人に渡さうか。
逸平　えゝしやらくせえ其一言、邪魔のない間ちつとも早く、

六人 合點だ。

ト又雨吟になり、四人お照を連れて行かうとするを重三郎支へる立廻りあつて、件の車を引出し、是にて重三郎をさゝへ此間に兩人お照を引擔ぎ、逸平付いて逸散に花道へ入る。重三郎これをやつてはと行かうとするを四人支へる。重三刀を抜き切拂ふ、四人も抜合せ立廻り、よき見得にて月隱れ、重三郎四人を相手に車を遣ひ暗がりの立廻りあつて、又月出で、雨吟になり立廻りあつて、重三郎眞中にて車の端を踏む、是にて車のはな上り上手の兩人刀を振上げ車で支へられる、下手の門弟刀を差付けられ、たぢ〳〵となる。此見得引張り宜しく雨吟の切にて道具廻る。

ト本舞臺元の世話場の道具へ戻る、と時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽秋雨に水かさ增る外堀の樋口の音も物さびて、夜は淋しき數寄屋川岸。

〽子分の者があわたゞしく息を切つて駈來り。

ト花道より子分梅吉走り出て、直ぐ舞臺へ來て内へ入る。

梅吉 もし〳〵、親分々々、親分は何處に居なさる親分々々。

喜三 (奥にて)おい〳〵誰だ〳〵(ト云ひながら出て來り、子分を見て)手前は梅吉、仰山にどうしたのだ。

梅吉 どうした所か、親分大變だ〳〵。

喜三 なに、大變とは、

梅吉 さあお聞きなせえ、今裏町で、さつき爰へうしやあがつた逸平が、弟子めらと重三樣と切つはつつ、どうか味方が危ふい故、私ち等が彌治馬にどぶ板をめくつて叩き散し、とう〳〵弟子めらが逃げましたから重三樣に樣子を聞いたら、お照樣を連出して麻布の方へ逃げる所、逸平めにお照樣を引拂はれたとおつしやりました。

喜三 すりや、お照樣を逸平めが引つ拂つて行つたとかして、重三樣は、

梅吉 跡追掛けて行きなすつたが、川岸通りが知れねえから、みんなも附いて行きました。

喜三 え、

〽聞くに南無三、一大事、

さうして先の所を突留めたか。

梅吉 わつちがこれから行つて樣子を見て來ます。

喜三 先の居所を突留めたら、直ぐに此方へ知らしてくれろ。

梅吉 合點だ。

〽言ふより早く一目さん、見附をさして駈けり行く。(ト子分逸散に花道へ入る。)

〽後に兎や角喜三郎覺悟極めて吐息つき、

喜三　お照様を盗まれては、けふ改めて預つた師匠へ對して喜三郎が顔向ならね今宵の仕儀、こいつあ誓も破れかぶれ、一番腕を見せにやあならねえ。然し、お磯に此事を一筆書いて殘してえが左の手で書けりやアいゝが、

〽言ひつゝ以前の硯箱取出す紙も糊離れ、縁も薄き半切へ書かんとすれば筆震へ

ト喜三郎以前の硯箱を取出し抽出しより卷紙を出し、左にて書きかけ書けぬ思入、

えゝ書きつけねえと云ふものはいけねえものだ。あゝどうか仕樣がありさうなものだ。

〽困る後へ幼子が（ト奥より喜之松出て來り、）

喜之　お父さん、おいらが書いて上げようか。

喜三　おゝさつぱりと氣が付かなんだ、然しいろはを上げた許りで淺香山の習ひかけ、幾ら手筋がよくつても、こりやあ手前にやあ書かれねえ。おゝいゝわ、あの手本を爰へ持つて來い。

喜之　あい／＼。

喜三　どれ墨を磨つてやらうか。

〽磨出す墨も濃き中の音を鳴く鹿の命毛も、今日を限りと白紙の妻のお磯が立戻り、

ト此内喜三郎喜之松硯箱にて墨を磨りながら喜之松を見て愁ひの思入。此内よきほどに花道より以前

のお磯出で來り、

お磯 人の心はいつ何時どう替るか知れぬもの、よくはなけれど源太めもあゝ云ふ氣ではなかつたが、今日に限つて愛相盡かし、どうやら樣子のありさうな詞に後を追掛けたが、女の足に追付かず、一緒に行つた長藏に樣子があらば聞いてくれと賴んで遣つて歸つたが、何の仲でも我弟家の人へ氣の毒で、何だか敷居が高いやうだ。

〽我家の口へ來ながらも流石女の入り兼ね、内を伺ふ折柄に、

トお磯舞臺へ來り、門口より内を伺ふ、此内宜しく墨を磨り双紙を廣げ、傍へいろはの手本を開き、

喜之 お父さん何と書くのぢやえ。

喜三 それ此かの字にきの字におの字、又きの字にのの字、それからこの字にとの字だ。

トいろはの手本の字を敎へる、喜之松其通りに書き何心なく讀み、

喜之 「かきおきのこと。」

お磯 えゝ(ト悧り思入あつて、内へ入らうとして門口に伺ひゐる。)

喜三 それ一二三の一を書くのだ。

喜之 あい〳〵。

喜三　それ、こよひ、（ト手本を突いて敎へる、喜之松其通りに書く）おてる、さまを、いつぺいに、うばひとられ、もうしわけに、いのちを、すてそろ、あひだ、おしせう、さまへ、もうしわけ、また、あとのこと、たのみそろ、かしく、（ト手本の字を突いて敎へ、書置を書かせ）おゝ美事々々よく出來た〳〵。今におつかあが歸つて來たら、是を讀んで聞かしてくれ。

喜之　あい〳〵。翌日坊に御褒美に、何ぞ手遊物を買つておくれよ。

喜三　おゝ買つてやるとも〳〵、何でも好きな物を買つて遣るぞ。

喜之　うれしい〳〵、（ト手を叩き悦ぶ。）

喜三　あゝ幼き時は世の中に兩親程のものはなく、明暮慕ふ其親が命を捨てる書置も、何の事やら辨へず、

〽しらぬが佛持遊びを、買うて呉れろとねだらるゝ親の心の苦しさは、鬼でも泣かずに居られうか。

〽人目なければ抱き上げ、不便のものや可愛やと頰摺なして泣く親の心を知らず幼子が、悦ぶ顔は泣くよりも哀れさ増さる門の口、始終聞居る女房が堪へ兼ねて戸口を明け、

ト此内喜三郎喜之松を抱き宜しく愁ひの思入、お磯も宜しく思入あつて門口を明け。

お磯　あい、今歸りました。

喜三　や、お磯か、

〽悔りなして書置を押し隱せば聲をかけ、
　ト喜三郎件の双紙を後へ隱す。

お磯　あ、もし、隱して下さんすな、そりや書置でござんせうが、

喜三　や、それぢやあ手前さつきから、

お磯　さあ歸りかゝりし門の口、書置と云ふ一聲が耳へ入つて何事かと戸口に身を寄せ伺うて、樣子は殘らず聞きました。

喜之「かきおきのこと」（ト讀みかける。）

喜三　あ、これ門で樣子を聞いたとあれば、最う讀むには及ばぬわい。

喜之　そんなら玩弄を買つておくれ。

お磯　おゝ翌日尾張町へ連れていつて、澤山買つて遣らうわいな。

喜三　コレ、お磯聞いたとあれば隱さぬが、今此二階の裏手より重三樣がお照樣を連出うとした所へ、狙けてをつたる逸平が多くの弟子を引連れて、お照樣を引つさらつたと子分の者の知らせを聞き

南無三寶最う是迄、所詮和らで行つた所が直素直にやあ返すめえ、どうで命は捨物と誓ひを破つ
た今夜の仕儀、師匠の爲と諦めろ。

〽云ひ放したる一言は、常の氣質とわるびれず、

お磯 よく言つて吳んなすつた、連添ふ夫が命を捨て死ぬと聞いては女房が留めねばならぬ所なれど、
留めてはお前の男が立たぬ。決して留めはしないから潔う行かしやんせ。

喜三 それぢやあ手前は得心して、

お磯 さあ女房となつて十年此方、お祖師樣ではなけれども生死にのある四度の喧嘩、小さな喧嘩は數
知れず、いつか一度は此樣な悲しい別れのあらうとは、疾から覺悟して居ました。

〽泣は女子の常なるに連添ふ夫の別れにも、泣かぬ心ぞいぢらしゝ。

ト兩人顏見合せ愁ひの思入あつて、

喜三 いつか一度は斯う云ふ事のあらうと覺悟して居たとは、女に稀な手前の心、是で己も未練がなく
思ひの儘に今日の仕返し、後へ噂の殘る樣左ながらも神影流の極意を受けた喜三郎、腕の强さを
見せて遣らう。

お磯 私も一緒に行きたいが、喜三郎の仕返しに女房が一緒に行つたなどゝ云はれた日には後日の名折

れ、とても死ぬ氣で行かしやんすなら、誰も連れずに只一人潔よう行かしやんせ。
〽お前が死なば共々に死ぬる心でござんすが、二人死んだら後は闇、
死にたい命を生延はり、お前の骨を拾つた上、
〽此子を守り立て、二代目の腕と云はして喜三郎の名前を繼がす心ゆゑ、
そんな愚痴はあるまいが、死なば一緒と云つたのに、水臭い女だと、
〽必ず恨んで下さんすなと、誠顯す親切に、

喜三　男增りの手前故、跡の苦勞は少しもねえが、然し多くの出入屋敷、是ぞと云ふ後見がなけりやあ御用が勤まらねえ、あゝ甚三に逢つて行きてえものだ。

甚三　（此以前より甚三出て、門口に伺ひ居て）其お頼みは何なりとも命に掛けて頼まれませう。

ト甚三內へ入ろ、兩人見て、

喜三　や思ひがけなき紅絹裏甚三、

甚三　今梅吉に今日の樣子、殘らず聞いて出掛けて來ました。

喜三　すりや、さつきからの一部始終を、

お磯　委しく聞いてござんしたか。

甚三　此期に望み兎やかうと餘計な事は言ひませぬ。些も早く親分には、其仕返しに行きなせえ、今云ひなすつた跡の事は及ばずながら是迄に何の役にも立たねえ者が、紅絹裏甚三と人樣に知られる樣になつたのも、皆親分のお蔭故お世話をするは恩返し。又長藏や佐吉を初め多くの子分があるからは、跡を決して案じずに腕一ぱいにやんなぜえ。神影流の極意迄極めた腕の親分故とつ百人の相人でも左り許りで澤山だが、どういふ不意の手段があつて萬に一つ犬死に死んだらそれ迄、わつちらが弔ひ軍の仕返しは命に掛けて首を取り、お前の墓へ手向けます。

〽假にも親子の交際とて、深切見えし一言に、

喜三　いや頼もしい其詞不斷は無口な男だが斯ういふ時には大丈夫。呉々頼むは小僧が事、

お磯　跡の所も甚三さんへ頼んだ上は、門出を祝うて、

〽無事をば願ふ神棚の德利に添へる土器も、晴れぬ心の薄曇り、涙隱して取並べ、

トお磯神棚の神酒德利お備へを乘せし小三寶へ供物を盛りし土器を載せ、喜三郎の前へ置き、

さあ、是で別れの盃を、

喜三　おゝ目出度く祝つて出掛けよう。（トこれより床と下座の打合の合方になり、喜三郎土器を取り上げる、お磯德利の酒をつぐ、喜三郎呑んで甚三にさし、）さあ甚三こりやあ手前へ、

甚三　先姉さんから、
お磯　これ、遠慮する所ぢやあないわね。
甚三　それぢやあお先へ（ト土器を取るお磯つぐ、甚三呑んで）親分お前へ、
　　ト喜三郎へ返す、又お磯つぎ喜三郎呑んで、
喜三　さあこれが別れだ。（トお磯へさす、甚三酌をする。）
お磯　一ぱいお呉れ。（ト一口呑み咽る思入、是にて喜之松起上り、）
喜之　あつかあ、おいらも呑みたい。
喜三　あゝ、虫が知らすか、
甚三　親分爭はれねえものだな。
お磯　さあ、是を半分遣りませう。（ト呑さした呑ませろ。喜之松呑んで、）
喜之　あい父さん、（ト喜三郎へさす、）
喜三　おゝ、
　　〽又いつの世に廻り逢ふ事かと惜しむ憂別れ、
それぢやあこれで納めよう。（ト喜三郎呑み仕舞ひ、三人宜しくあつて、）

お磯　目出度く濟んだ上からは。
喜三　丁度幸ひ、拵へた浴衣を出して呉れ。
お磯　あい〳〵。
　へ あいとお磯が押入より取出す浴衣に七字の題目。
　　ト お磯押入より白地の題目を書きし浴衣を出す。
甚三　や、浴衣に書きし題目は、
喜三　喧嘩を止めて今日からは髮こそあるが坊主の氣で、昨日態々上人へ賴んで書いて貰つたが、今となつちやあ前表か、あの世へ曠の死裝束。
甚三　(傍にあるいろはの手本を取つて)それも七字これも七字、昔は知らず親分は、今の浮世に義を磨く男達のいゝ手本、
お磯　いろはにほへとちりぬると、書いたる假名の字の留めを、
喜三　續けて横に讀む時は、とがなくてしす我終。
甚三　思へば筆の命毛捨て、
お磯　泣くにも增さる、

三人　思ひぢやなあ。

〽互ひに胸迄突きかくる涙を隠す二人が、心の内の苦しさは、堤を越ゆる秋の水堰留め兼ねし如くなり。

ト三人宜しく泣かぬ愁ひの思入。本釣鐘を打込み、

喜三　や、今のは八つか九つか。

お磯　更け行く月も西へ行く、

甚三　今日は九月の十一日、

喜三　翌日は御難の辰の口。（ト此時揚幕にて題目太鼓を打つ）

甚三　祖師の利益に助かるか、

お磯　胡麻のお萩も手向けとなるか、

喜三　生死二つは今夜の大難、（ト大鳥の門弟兩人掛るを捉へて、）こいつも丁度よい道連、

甚三　其行先も深川に、

お磯　お通夜に參る講中の、

喜三　太鼓に紛れて、おゝさうぢや、

ト土器を持ち立上る。）

〽門出を祝ふ土器も砕けて元の土となる、身の行末ぞ、

ト喜三郎土器を打付け彼方を見込みきつとなる、お磯浴衣を廣げ着せようと云ふ思入、甚三傍にある脇差を差出す、喜之松書置の双紙を見せる、此の模様宜しく三重題目太鼓にて、　幕
と波の音にてつなぎ、直ぐ引返す。

大切　新大橋仕返しの場

〔役名〕――腕の喜三郎、神崎甚内、曙源太、幻長藏、紅絹裏甚三、大鳥逸平、子分、門弟等。

〔新大橋の場〕――本舞臺下の方へ斜に橋、袂の所欄干附橋普請の足場取附けあり、下の方新大橋普請小家といふ傍示杭、竹矢來、橋の下斜に屋形船、後ろ一面の黒幕、舞臺前は河の面の模樣、總て新大橋普請の態。爰に繩にて結びし四ツ手駕を下し上手に逸平下手に伴藏、牛平駕舁二人立掛り居る、波の音佃にて幕明く、

逸平　いや駕の者大きに太儀であつた。爰迄來れば氣遣ひない、一休みして行きやれ。

駕屋　有難うございまする。

伴藏　扨今日は大鳥氏、

兩人　よい手番ひでござりました。
逸平　是と申すも各々方の骨折、御苦勞に存ずる。
　　　トばた〳〵波の音にて軍藏、大助、栗平、運八走り出て來り、
四人　大鳥氏これにござりましたか。
逸平　お、四人の衆待兼ねてをつた。して重三郎めは如何でござつた。
軍藏　唯一と打と思ひの外、中々手強き立振舞、
大助　爰を先途と打合ふ所へ喜三郎の子分めが思ひ〳〵の得物を引提げ、
栗平　加勢をなす故是非なくも、多勢に無勢手に餘り、
運八　其儘にして、
四人　歸りました。
逸平　左すればお照を引上げしは我々共が仕業と云ふ事喜三郎が聞いたは必定、定めて今に子分の者後追掛けて參るであらう、何に致せ素町人でも喜三郎が仕込み故、
栗平　腕に覺えがあると云へば、油斷のならぬ子分の者、
逸平　いや假令何人來ようとも恐るゝには足らねども、折角こつちへ引上げしお照を此儘彼奴等の方へ

取返されぬ樣にしたい。
伴藏　いかさま、是迄伴うて取返されてはつまらぬもの。
栗平　とあつて是なる駕屋許りに任して遣られる物でもなし、
逸平　こりや御苦勞ながら御兩所には深川の別莊へお照を同道して下せえ。
伴藏　心得ました、我々兩人附添參れば行道筋は大丈夫、
栗平　必ず氣遣ひ召さるゝな、
逸平　何分ともにお賴み申す。
兩人　然らば何れも、
皆々　御苦勞でござる。
逸平　駕の者賴むぞ。
駕昇　畏りました。
伴藏　どれ假橋から、
兩人　參らうか。（ト件の駕に兩人付添ひ下手へ入る。）
逸平　先これで安堵致した、然し子分の者の參る迄爰に待つても居られまい。幸の橋普請矢來の內で待

合さう。

運八　何樣屈竟の足溜り、

逸平　それ、矢來を破らつせえ。

四人　心得ました。

ト矢來を破り、皆々内へ入り忍ぶ。ばた〳〵になり、花道より以前の源太一本差尻端折りにて駈けて出て來る、後より長藏同じく一本差尻はし折にて追掛け出て來り、

長藏　これ源太、待てと云つたら待たねえのか。

源太　しみしつこい待たねえと云ふに、

長藏　然うでもあらうが、たつた一言、いひてえ事があるから聞いてくれ。

源太　えゝ聞いて居る暇はねえわえ。（ト振拂ひ舞臺へ來るを追掛け來る立廻り一寸あつて、長藏源太を留め）

長藏　これほど己が留めるのに、待つてくれてもいゝぢやあねえか。

源太　何の用か知らねえが、おらあ命を捨てる體、聞いても無駄だ放してくれ。

長藏　さあ其命を捨てるのはさつき打たれた親分の仕返しに行くのだらうが、然うならさうと此己に譯を聞かして行つてくんねえ。

源太　さあさつき兄貴を逸平が蹴たり踏んだりする所を門口から見た故に、飛込まうと思つたが、家で喧嘩を仕た日にやあ腕を切つた兄貴に濟まず、堪へ憎い蟲を堪へ仕返しに行く此源太、包み隠した胸の中斯うぶちまけて仕舞つたら、どうぞ留めずに遣つてくれろ。

長藏　おゝよく打明けて云つてくれた、それでこそ友達だ。己も手前を留めやあしねえ、今追掛けて來る道で、梅吉に出つくはし樣子を聞いて悄りしたが、お照樣を逸平が引拂つて往つたといふ事、それ故親分も捨てゝ置かれず後から來ると云ふ噂を聞いたを幸ひ、親分に替つて己が取返さうと追掛けて來て此事を、一言手前に云ひてえのだ。

源太　おゝそんなら今夜逸平がお照樣を引上げたとか、さう聞く上は猶の事生けちやあ置かれぬ。是から直に遺恨の仕返し、

長藏　斯う打明けた上からは、一人命は捨てさせねえ、己も共々手前の加勢、

源太　して逸平の行く先は、

長藏　深川の別莊へ連れて行つたといふ噂、

源太　それぢやあ是から橋を越え、（ト兩人きつとなる。此時後へ逸平等四人出て、）

逸平　いや深川迄行くに及ばぬ、其逸平は爰に居る。

源太　や、思ひがけねえ大鳥逸平、
長藏　何故あつて此所に、
逸平　うぬ等の來るのを、
四人　待つて居た。
源太　待つて居たとは神妙な、さつきうぬ等が引上げたお照樣は云ふに及ばず、
長藏　遺恨に遺恨の重なる奴等、命を添へて貰ひたい。
逸平　如何にもうぬ等が云ふ通りお照は己が引上げた。假令一日半日でも女房にしにやあ武士が立たぬ、それ故駕籠でこつそりと媒人なしで別荘で己が自由にする心だ。其前祝ひに二人とも命を取るから覺悟なせ。
源太
長藏　何をこしやくな。

ト波の音になり、逸平拔掛けるを源太留める、四人拔掛けるを長藏足場の小丸太にて留める。逸平拔いて切つて掛る。源太もぬき合せて立廻り、是にて矢來の繩を切りばら〳〵とこはれ、逸平源太立廻りながら橋の上へ行き立廻り、長藏は袂にて四人を相手に立廻りあつて橋の上へ行き、入亂れになり逸平長藏と立廻り、源太四人を相手に烈しき立廻り、よき程にばた〳〵になり、花道より前幕の喜

三郎題目の着付尻端折り、一本差にて出て來り此中へ割つて入り、四人を左右へ投退け、蹴倒し中央へ來る。逸平上手に刀を振上げるを、喜三郎留めて引ばりの見得、

源太　やゝこりや兄貴には、

長藏　誓ひを捨てゝ、

喜三　おゝ、堪へに堪へた堪忍の二字を破つて出て來たのだ。

逸平　いやいゝ所へ喜三郎、若い者では逸平が相手にならぬと思つたに、片腕なくても骨つぽい神影流の極意迄極めた體に切でがある、どれ三枚におろしてくれう。

喜三　えゝちよこ才な其一言、祖師の利益で是迄に既に命も取られる程な、大難四ヶ度小難は數の知れねえ體の疵、伊豆の流罪もまぬがれて松葉が谷や小松原、其追打の拔身の中土の牢へも幾度か雨乞よりやあ命乞、片瀨片腕切る迄にやあ惡い浮名も龍の口、佐渡へ渡海の浪よりも荒い氣にせえ塚原のつかの間忘れぬ師匠の娘、引上られた其上に八の卷より大事の傳書取られた上は是非がねえ、おのが身延を捨てる氣で仕返しに來た喜三郎、題目唱へて覺悟しろ。

逸平　もう云ふ事はそれ限か、愚痴があるなら云つて置け、今息の根を留めてくれるぞ。

源太　やあ兄貴が來りやあ百人力、

長藏　さう言ふうぬが息の根を、(ト立掛るを喜三郎留めて、)

喜三　片腕なくとも喜三郎仕返しするなあ只一人、手前達は見物して居ろ。

兩人　それだといつて、

喜三　はて、己が命を取られたら敵は二人で取つてくれろ。

逸平　それ、面倒なたゝんで仕舞へ。

皆々　合點だ。

ト此中喜三郎珠數にて片襷を掛け、皆々打つて掛るを喜三郎左で一腰を拔き立廻り、源太長藏是非なく上下に見物して居る、逸平橋より屋形船の家根へ飛下る。是にて船より船頭六人浴衣三尺帶にて出て來り、逸平を見て、

船頭　や、喧嘩の相手は、

皆々　大鳥樣か、

逸平　橘屋の若い者、骨は偸まぬ加勢しろ。

六人　合點だ。

ト此時喜三郎屋形船の上へ飛下りる。船頭六人板子たはしの附きし竹などにて立廻り、よき見得にて後

の黒幕切つて落し、川岸通り灯入の遠景になり、淨心寺へ朝參りの灯入りの萬燈を引いてとろ、題目太鼓の入りし鳴物に替り、喜三郎皆々を相手に面白き立廻り、源太、長藏兩人ちよい〳〵と出て邪魔になる者を追散す。と、船頭は皆々川へ飛込み、四人は橋より上下へにげて行く、逸平、喜三郎立廻つて逸平懐中より傳書の一卷を落す、喜三郎刀を下へ置き傳書を取上げ見て、

喜三　やゝ、こりや神影奥義の一卷。

逸平　南無三それを、(ト取らうとするを手早く懐ろへ入れ、刀を取上げ、)

喜三　一神齋より傳來にて師匠が年頃祕藏せしを、上へ上げしと聞きたるが、扨はおのれが盜んだな。

逸平　それ知られたら、最う是迄(ト兩人烈しき立廻りあつて、喜三郎逸平の刀を打落し、疊み掛けてあびせ、とゞ逸平を切倒し、屋形の上にて、止めを刺す。此時上手彼方にて、)

大勢　人殺しだ〳〵。

源太
長藏　やあ、あの人聲は、

喜三　惡い奴でも人一人殺した日には己が上手人。源太は是を神崎樣へ密にお屆け申してくれ。(ト件の一卷を源太へ渡し、)是にて思ひ置く事なし、繩目の恥を請けぬ中に、

ト脇差を取直し、腹を切らうとするを兩人留めて、

源太　これ兄貴、早まつた事をしてくんなさんな。

喜三　いゝや生きちやあ居られねえ、放せ〳〵。（ト此時下手にて）

甚三　いや死ぬにやあ及ばねえ。

喜三　何と、（ト喜三郎ためらふ、下手より以前の甚三繩に掛り、是を子分兩人繩を取り出て來る。）

源太　ヤ、思ひ掛けねえ紅絹裏甚三、

喜三　何で繩目に掛かつたのだ。

長藏　是にやあ何ぞ、

三人　仔細があらう。

甚三　仔細と云ふは外でもねえ。さつき親分に頼まれて後に殘る氣で居たが、考へて見りやあ年若な己が後見する時は姉さんとても若い身につまらぬ浮名を受けにやあならねえ。それよりいつそ身替りに己が行つたら親分の體に何の恙もなけりやあ、家は元より多くの子分人の助けになる事故、繩に掛つて行く甚三。

勘太　强つて二人へ頼み故、

谷松　これから直に奉行所へ、

源太　いゝや、其身替は此源太、己が喧嘩の起り故脊負て行かにあならねえ體。
長藏　いや手前は姉御もある身の上、後に殘つて居るがいゝ、此身替は己が行く。
源太　いゝや手前は遣られねえ、おれが行く。
長藏　いゝや己が行かにやあならねえ。（ト兩人爭ふ。）
甚三　えゝふたりともによしみのねえ、折角己が繩に迄掛つて來たを無駄にする氣か、是非とも己が行かにやあならぬえ。（トきつといふ、喜三郎思入あつて、）
喜三　其志しは忝いが、三人の中誰にもせよ、己が替りに命を捨てさせそれでいゝとは喜三郎がどの面さげて居られる物だ。此身替に立つよりも、お照樣重三樣お二人樣の身の落着き、就いちやあお磯や子僧が行方、跡の面倒見てくりやれ。
源太　そんならどうでも、
長藏
甚三　親分は、
　　ト屹度云ひ三人顏見合せ是非なき思入。ばた〳〵になり、下手矢來の蔭より甚内羽織袴にて出で、
甚内　やれ死ぬに及ばぬ喜三郎、樣子は具に聞いたるぞ。
皆々　やあ、あなたは神崎甚内樣、

喜三　此喜三郎は人殺し、何故お止めなされしぞ。
甚内　ほゝお止めしは外ならず、其逸平は神影の奥義の一卷奪ひし盜賊、殺害なしても苦しうない。
長藏　すりや、親分の身の上に、
甚内　恙はないぞ。安堵致せ。
皆々　えゝ有難うござりまする。(ト是にて子分甚三の繩を解く。)
源太　何は兎もあれ大事の一卷、(ト件の一卷を出し)いざ、お請取り下さりませ。
　　　ト甚内へ渡す、甚内改めて見て、
甚内　紛ふ方なき神影の一卷、慥に身共が落手致した。まつた娘照事も某が只今是へ參る道にて助けし所へ折よくも、重三郎が參りし故二人諸共知るべの方へ預け置けば、氣遣ひ致すな。
喜三　扨は御無事でござりましたか。ちえゝ忝い。
甚内　測らず一卷手に入る上は、此悦びに勘當許し夫婦となして家名を讓らん。
喜三　すりや、御勘氣御免にて御家督お讓りなさるとか。
源太　是にてあなたの御家といひ、
甚三　又親分初め我々迄、

長藏　何から何迄無事の納り、
四人　ちえゝ忝ない。（ト皆々悦ぶ思入、此時船頭後より伺ひ出て、）
舟頭　うぬ喜三郎め、（ト組付くを振解いて引附る。）
甚內　最早しらむか鳴く烏
源太　明ければ、九月十二日、
甚內　其敷革の御難より、
長藏　危ふい命を、
三人　脫れたは、
喜三　是も高祖の、（ト船頭を片手で川へ打込む。船頭見事に轉るを木の頭。水の花ぱつと立つ、）御利益だなあ。
ト片手で拜む。甚內初め皆々悦ぶ思入。波の音佃へ題目太鼓を冠せ、宜しく、
拍子幕。

（をはり）

◎表紙に用ひた模様は、默阿彌が横書き（原作本）を包んで持歩く爲めに愛用してゐた更紗の風呂敷から採り、見返しの面づくしは五歳の袴着の時の下着の模様を借用したものである。また、序文に添へた饗庭篁村翁及び默阿彌の序文は、實は第一卷に採録すべきものであつかも知れないが、都合上本卷に廻つたものである。尚、各作の扉の勘亭流の題字は默阿彌の手蹟であり、「語り」は書卸し當時のものである。（第一卷例言の參照を乞ふ。）

此狂言の發端は上總の國の上行寺で先非を悔し宗次が自殺刃物け名譽の村正にて夫を尋れに木更津の濱邊で出合正作に疑ふ傳七宗之助が又腹切も刃の祟りあぢに絡んだ因縁に水死を助し佐右衛門が圍者とも夕まぐれ蝙蝠安に連られて廻ろ車の源氏店に横櫛お富が三歳の再會

切られたるかな密夫殺しに新島與三が四十五所

茲鎌倉花水橋 赤間 白瀧 大喧嘩騒佃送船

此狂言の大切は下總の國の千葉殿へ汚名を雪新三が歸參土產は重器の香爐にて夫を筺にけなげにも妹脊の道を切髪のお岸が心汲分て扨緣切のあいそづかし義理にしがらむ同胞とも知で殺しみよ吉と同じ其夜の宵の口お渚が長期に憂事の積異見の雪の下に念佛六兵衛が六字の教訓

切つたるかな藝者殺しに越後の助が三十五人

一刀救小天狗永代譽

「縮屋新助」美代吉殺しは、萬延元年七月四十五歲の時市村座で書卸された。その時には前段へ「切られ與三」を置きそれと組合せになつてゐたから、作中へ赤間等の人物が攝取されてあるのである。この作は兩隣りの二座に立つてゐる幟を祭禮の幟と見立て、深川の祭禮に永代橋の落ちたのや、其當時の出來事なる美代吉殺し等をあて込み、旁ゝ小團次の希望を實現して越後の縮賣を主人公として新作されたもので、異常の成功を收めた芝居であつた。殊にこの頃第一の人氣者たる先代芝翫と對抗した關係などで、市村座は初春以來不況に陷つてゐたのが、この作によつてすばらしい大當りを得たのですつかり挽回したといふ。繁昌するに連れて樂屋内にも祭の趣向が凝らされて藤棚ができる、揃ひの浴衣や首ぬきができる、幕間には馬鹿雜子をして景氣を添へるといつた有樣で、七月から九月までは打續けられると言はれてゐたのが八月の二十八日に三座とも類燒したのでそのまゝになつたといふ。詳しくは拙著「河竹默阿彌」（一二〇頁）に述べておいたが、この作の如きは作者の三題噺的頓才的趣向の才の顯著なる發揮を示したもので、この邊に至つて作者の地位も堅固にされたのであつた。作そのものも特殊な戀愛を取扱つたものとして、出色の世話物たることは言ふまでもない。

書卸しの時の役割は、市川小團次（縮賣越後新助、劔術師小天狗正作）、關三十郎（赤間源左衛門、念佛六兵衛）、岩井粂三郎（藝者美代吉）、河原崎權十郎（穗積新三郎）、市村羽左衛門（白藏の佐吉）、市川白猿（みるくひの松）、中村歌女之丞（正作妹おきし、藍屋おつる）、吾妻市之丞（おなぎ、野花屋女房おつゆ）、市川米十郎（若徒富津傳七、荷擔ぎ作助）、關花助（濱田宗之助）、松本國五郎（山鹿毛平馬、縮賣九郎助）、嵐吉六（娘分笹葉おすゞ）、等。――挿畫にしたのは樂屋の大入祝ひの圖で、卷頭の玻璃版の錦繪は作とは少し異なる所もあるが、美代吉殺しの圖で例の豐國の筆である。

大正八年十一月　　　　校訂者誌す

三階八幡宮祭禮の圖

八幡祭小望月賑（縮屋新助――四幕八場）

序幕

仲町野花屋の場

〔役名――縮賣越後の新助、赤間源左衞門、穗積新三郎、海松杭の松、荷擔ぎ作助、山鹿毛平馬、小道具屋利七、船頭乘切り長次、赤間の子分熊藏、虎松、丑助、豚八。藝者新藁おみよ、野花屋女房お露、笹葉おすゞ等。〕

（野花屋見世先の場）――本舞臺四間通し常足の家體。上手に障子家體。軒口へ巴の紋の幕を張り、巴の紋に雁木山形のある提灯を澤山に下げ、正面奧座敷の遠景、これへも巴の紋の提灯を澤山に下げ、上下に金屛風、一面に毛氈を敷き、深川形の煙草盆を出しあり、下の方に風雅なる門、この前に床几二三脚ありてこれにも毛氈を敷きあり、總て仲町野花屋見世先祭禮棧敷の態。こゝに○□△◎の四人娘分の打扮、金八世話役の打扮にてをり、酒肴を列べ酒宴をしてゐる模樣にて賑やかに幕明く。

と、上下よりお祭り番附、鬼灯賣など上下へ入違ひて入る、

金八　なんと、久しぶりの本祭りで日和は好し、このやうな目出度いことはござりませぬ。

○　左樣でござりまする、大そう賑やかにできました。これと申すも、みんなお世話役さんのお骨を

りでござんすわいなあ。

□　それにこの仲町の羽織藝者衆が手古舞に出なさるので、大評判でござりますわいなあ。

△　その中にもおみよさんの綺麗なこと、女でも見惚れるやうでござりますよ。

◎　早く練物が見たうござりますわいなあ。

金八　いやもう今に地走りの踊りが來るであらう。私あまた晩の俄のことで會所へ寄合に行かにやあならぬ。お上さんにもよういうて下さりませ。

○　まあよいではありませんか、お燗のよいのをもう一つ上つておいでなさりませ。

金八　いや、また後に來てゆつくりとやりませう。

□　それではもうお歸りでござりますか。

金八　どりや行つて來ようか、やれえらいことだ。（ト足早に下手へ入る。）

○　ほんにいつもながら、見番の金八さんは、氣輕な人でござんすわいなあ。

□　お祭りの御祝儀に、もう一つやらうぢやあないかえ。

三人　それがよいわいなあ。

ト皆々わやわや言つてゐる、花道より平馬武士裝にて出で、後より利助道具屋の裝にて出來りて、

利七　もし〳〵そこへおいでなされまするは、山鹿毛平馬樣ではござりませぬか。
平馬　イヨウ誰かと思つたら道具屋の利七か、はゝあ、今日は祭り見物で命の洗濯だな。
利七　へい、先づ祭禮見物と號しまして、實はやつぱり慾張の方でござります。
平馬　いつも〳〵拔目のない錢儲けをする男だ。何しろ儲け口は耳寄だ、半口乘りてえの。
利七　あなたもあまり慾のない方ではござりますまい、はゝゝゝ。
平馬　何しろ野花屋へ行つて一ぱいやらうか。
利七　左樣ならお供いたしませう。
ト兩人舞臺へ來る。娘分皆々見て、
○　これは平馬さん、ようしやいました、御祭禮を御見物でござりまするか。
□　さあ〳〵此方へお上りなさりませ。
△　おや、道具の利七さん、
◎　まあこゝへおかけなさんせいなあ。
平馬　いつも〳〵全盛だの、今日はまた祭禮の故か別仕立に磨きたつたな。
利七　皆さんの顏を見ると、氣が晴々するやうだ。

○　おや、きつい乘せやうでござりますよ。
平馬　利七、何にいたせこれへかけて一服いたさう。
利七　それがよろしうござりまする。(ト兩人床几に腰をかける。)
平馬　ときに、今日は赤間源左衞門はまだ見えぬか。
○　是非々々今日はいらつしやいますお約束でござりまするが、まだお見えなさいませぬわいなあ。
□　もうおいでがありさうなものぢやわいな。
利七　今日は是非おいでゞござりませう、私も少々商賣のことで用がござりまするが、野花屋へ行つて待つてゐるとおつしやいました。何にいたせおいでまでこれで待合してをりませう。
平馬　これ利七、して、赤間に何の用事だ。
利七　へい、別のことでもござりませぬが、村正の一腰をどうか欲しがる人があるなら相談をしてくれとおつしやりました故、少々心あたりもござりますから、何にいたせ代物が正眞でござります故そこを見込みに引受まする積りで、今日は代金も持參いたしました。
平馬　それぢやあ今日は金方だな、ちつと浮かれるがいゝわな。
利七　イヤモその金も見たばつかり、行き拔けでござりまする、はゝゝゝゝ。

平馬　あの村正を手放すからは、赤間もお富がなくなつてから一人寂しく通ふのか、但しは自棄になつたのか。この江戸へ來ておれと一緒に辰巳通ひ、妙なとこから乘りこんだは、死んだお富に似てゐるとあの新藁のおみよを呼ぶが、これが眞の無駄骨だ、彼女はおれが同藩の穗積新三郎といふ奴と、二世までと言ひ替してをる故に無駄といつても聞入れず、兎角未練が殘るかして、大切にかけた村正まで手放すとは、金轡でおみよをば手に入れる心と見えるわえ。

利七　はゝあそんならお前樣も、少し岡燒女郎衆でござりますね。

平馬　べらぼうめ、おれなぞは女に買はれる身分だ、はゝゝゝ。

トこの時花道の揚幕にて、大勢の聲にて「うしやあがれ〳〵」となる聲がして、赤間源左衞門一本差にて出來る、後より海松杭の松縮屋の裝の新助を引きずりて出來り、その後より赤間の子分熊藏、虎松、牛助、豚八出來り、荷持の作助縮の荷を擔ぎ、これも引張られ、長次船頭の裝にて出來る。

海松　やい、この百姓め、人雜の中へこんな物を持込みやあがつて、なんで親分に突當りやあがつたのだ。

子分　何でも此奴等ア了簡があつて、打ッつけやあがつたのだ。

海松　どうするか見やあがれ、こちとらが腕つ節を見せてやるのだ。

長次　お祭りの前祝ひだ、ちつと痛え目をさせて、こり〳〵させてやるがようござりやさあ。
新助　全く供の者が土地慣れませぬ故の粗相でござります、御免なされて下さりませ、御免なされて下さりませ。（ト頻りに詫びる、源左衛門思入あつて、）
源左　やい〳〵〳〵、往來中で見つともねえ、彼方まで引きずつて行け。
子分　さあ〳〵、うしやあがれ〳〵。

ト皆々本舞臺へ來る、娘分皆々これを見て、

○　赤間さん、海松杭さんも御一緒で、
皆々　ようござんしたなあ。
平馬　あゝ赤間先生、最前から待兼ねてをつたわえ。
利七　これは〳〵源左衛門様、だいぶお手間がとれました、先刻よりお待受け申しました。
源左　今日の祭りを見物に、子分の奴等を連立つて来かゝる途中で縮屋めが、天秤棒の尖端をおれに突つかけやアがつて、詫りやうが悪い故、例の氣早で海松杭が腹を立て、たうとうこゝまで引ずつて來たのだ。
海松　一人通るも雜沓ですれ合ふ中をこの野郎が、大きな物を擔ぎあがつて、親分にぶッつけた故、

子分　それで了簡しねえのだ。

長次　いつてえ此奴等アなまじつか江戸へ來てゐやあがるものだから、生利で鼻持がならねえや。ねえもし旦那、

平馬　そりやあ憎い素町人め、越後者の癖をして縮屋なんぞといふものは、江戸者を馬鹿にしやアがるからだ。こんな奴はこつぴどい目に遭はせるがいゝわ。

新助　あゝ申しお侍樣、つい雜沓で突當りましたはこの荷物でござりますが、何を申しても當年始めてこの江戸へ出ましたもの、不調法の段は幾重にもお詫を仕りまする。どうぞとも〳〵お詫事をなされて下さりませ。

海松　やい〳〵汝あ江戸慣れねえとぬかすが、何故そんな野郎に雜沓の中を擔がせやあがつたのだ。

新助　いえ、これはかやうでござります、この周邊は私の賣場でござります故、今日の御祭禮にお家主方のお揃ひを仕立ぐるみ請合ひましたところ、つい仕立が間に合ひ兼ねまして、まだか〳〵の御催促が櫛の齒を引くやうでござります。それ故仕立がやう〳〵出來ました故、祭りのお間をかゝせましては濟みませず、取るものも取りあへず心は急けどあの雜沓、聲を嗄らして、お頼み申しますく〳〵とやう〳〵通つたお祭り場所、氣の急きますまゝに思はぬ粗相、どうぞ御勘辨を持ちま

してお許しなされて下さりませうならば、へい〳〵有難うござります。

作助　（田舎漢の動作にて）これ親方、そんなに何も詫びさつしやるにやあ及ばねえわ、これが何もこつちから突當つたといふではなし、雜沓だから心配して避けて通るのに、彼方から突きあたつて言ひてえざんまいをまき出して、あんまり詫りすぎるから、猶々つけ込みますわ。イケ馬鹿々々しい、なんで詫びることがあんべい。

子一　何だ、詫びることがねえ、なにねえことがあるものか、

子二　イケ强情な椋鳥め、

子三　こんな奴はたゝきくじけ、

子四　さうだ〳〵、やッつけろ。

ト子分皆々にして作助の横面をくらはす、作助むつと思入あつて、

作助　こりや男體したものゝ面をぶつたな、こりや面白い、おれを普通の荷擔ぎだと思ふか、これでも國ぢやあ家柄だ、一ヶ村で席順を爭ふ作助だ。さあぶたつしやい、さあぶてろ〳〵、もつとぶて、サアぶて〳〵〳〵（ト强情にいふ、新助もてあぐみて）

新助　これ〳〵、どうしたものだ、あなた方に向つてめつたなことを言ふではないぞ。

作助 何の構はつしやるな。さあぶてろ〱。おれも男だ、一番立入をやんべい。えゝ親方うつちやつておかつせえ。

新助 えゝ、おれがいふことを聞かぬのか。

ト新助作助をなだめる、利七中へ入つて、

利七 これさ〱どうしたものだ、お前が悪い〱。

作助 何で、私が悪いのだ。

利七 いゝといふことよ、何でも誤らにやあ事件が面倒だ、さあ〱誤らつし〱。

長次 利七さん、うつちやつておきねえ、癖にならあ。

ト此時娘分四人とも前へ出て、新助を見て、

○ おや、誰かと思つたら、お前は縮屋の新助さん、

□ とんだことでござんしたなあ。

△ もし赤間さん、私等も知る人でござんす故、

◎ どうぞ勘忍してあげて、

四八 下さんせいなあ。

ト皆々源左衞門へ詫びてやろ、源左衞門思入あつて

源左　いゝやいやだ、了簡ならねえ。手前達が口々にさう詫びるほど、依估地になり持つて生れた癇癪の蟲が猶々募つて來らあ。詫びをされゝばされるほど、そんならさうかと言はねえのが、ちつとこんな色里ぢやあ野暮とか不通といふだらうが、木更津生れのうぶすながらだ、いらざる口をたかずと、待人でもかけてひつこんでゐろえ。

海松　さうだ〳〵、假令こんな野郎の一匹や二匹たゝつ殺して下手人に命を捨てるは何とも思はねえ、引込思案に了簡しちやあ上總産れの魂が廢らあ、まだ厄年にやあなるめえが、覺悟を極めて言やあがれ。

新助　さゝゝゝお腹立は御尤もでござりますが、どうぞそこの所を幾重にも、御了簡なされて下さりませ。（ト詫びるを、又作助新助をかきのけるやうにして出で、）

作助　えゝ親方、お前さんの粗相ぢやござりませぬ。荷をぶッつけたのはこの私でござります。さあさあ了簡ができずば、私を存分にしたがいゝ。この親方に何にも科はない、さあ〳〵どうとも腹の癒えるやうにさつしやるがいゝ。

新助　あゝこれ作助、手前に怪我でもさしちやあ、おれが貴樣の親父から預かつて來た大切の身體だ、

おれをかばつてくれるは忝いが、それぢやあ親父へ濟まねえ譯だ、そつちへ寄つてゐろ〳〵。

作助　いえ〳〵さうぢやあござりませぬ。私がしでかしたことだ、お前は知つたことぢやあない。

新助　それでは、おれが濟まぬわい。（ト兩人爭ふ、源左衞門思入あつて、）

源左　やい〳〵〳〵、此奴等あ哀れつぽいことを吐かしやあがつても、そんなことを恐れるやうな根性で、旅から旅へごろついて盆蓙の胴をとつて歩けるものかえ。面倒だ、海松杭たゝきしめろ。

海松　合點でごんす、こんな奴にかゝつてゐちやあ、祭り見物の邪魔にならあ。

長次　おいらもちつと持前の彌次馬に出かけようか。

海松　長次、手前も慰みにやッつけろえ。

源左　えゝ、ぐづ〳〵せずと早くやらねえか。

皆々　合點だ。

ト皆々立上る。とこの時花道の揚幕にて『赤間さん、まあ〳〵待つて下さんせいなあ。』と呼ぶおみよの聲がする、

皆々　あの聲は、

トきやり崩しの端唄へ鳴物を冠せ、花道よりおみよ祭りの手古舞の打扮にて出來る、後より祭禮の練

子揃ひの手拭を襟に卷き扇蝶に美代と紅にて書きたる大きなる團扇を持ち、その後より藝者三人手古舞の打扮にて出で、尙祭禮と印したる團扇を持ちたる若い衆大勢附き出來る。舞臺の娘分見て、

○　ほんにお前はおみよさん、

□　皆さんも暑いのに、

△　ようまあござんしたなあ。

◎　まあ〳〵こゝへ、

皆々　ござんせいなあ。

みよ（思入あつて）赤間さん、皆さん許して下さんせ。

藝一　そんならおみよさん、

三人　さあ行かうわいなあ。

　　トこれにて皆々舞臺へ來る、源左衞門思入あつて、

源左　誰かと思へばそなたはおみよ、事情もしらずにもの〳〵しく、何でこの場へ、

子分　留めに出たのだ。

みよ　さあ、譯は何にも知りませぬが、これが相手が達師とかお侍とかいふのなら、お前の男も立つま

いが、見なさる通りの旅商人、弱いところを附込んで、打ち打擲をなさんしたとて、あんまり見榮にもなりますまい、情は人の爲めならずとやら、ちつと出すぎたやうなれど私に免じて了簡して下さんせいなあ。

藝一 私とてもとも〴〵に、お詫を申しますほどに、

藝二 お腹立もあらうけれど、おみよさんの挨拶故、

藝三 今日のところはお祭りのことなれば、

藝一 堪忍してあげて、

三人 下さんせいなあ。

源左 (思入あつて)むゝ、ほかの奴が挨拶なら假令どんな顏役でも了簡ならねえところなれど、今仲町で名うての藝者新藁おみよが挨拶故、魚心あれば水心、了簡してやらうわえ。

みよ そんなら私の言葉を立つて、

源左 この場は濟ますが此方にも、聞いて貰はにやあならねえ事が、

海松 でも親分、このまゝで濟ましちやあ、

源左 はて、何にもおれが胸に、

平馬　いかさまこゝはあのおみよに、預けてやるも後の魂膽、

海松　そんなら親分、いゝかえ。

源左　えゝ、いゝと言つたら、うつちやつておけといふに、

長次　こいつあ後で何か思案があると見えるわえ。

子分　そこは親分だ、そつがあるものか。（ト此時娘分○△奧へ行つてゐたが出て）

○　もし赤間さん、お肴の支度が出來ました。

△　奧座敷へおいでなさりませ。

源左　いかさま、奧で氣を替へて一ぱいやらうか。

平馬　然らば、身共も同道いたさう。

利七　左樣なれば何かのお話は、奧でゆつくり、

源左　さあおみよ、おれと一緒に（トおみよの手をとる。）

みよ　私は後から、

源左　そんなら奧で待つてゐるぞよ。

海松　そんなら親分、

源左　皆もいつしよに、

皆々　さあ、おいでなされませ。

ト源左衛門先に皆々奥へ入る。後に新助、作助、みよ吉、藝者等殘る、新助思入あつて進み出で、

新助　よい所へおみよ樣、お前樣がおいでなされまして、危い難儀を遁れました。

作助　どうなることかと私なざあ、心の中で國元の親父へ暇乞をしてをりました。

新助　實に命を拾ひまして、有難うござりまする。(ト兩人おみよに禮を述べる。)

みよ　なんのお禮に及びませう。あの赤間といふ奴は私の客でござんすが、たしか上總の道樂者、却々一筋繩では行かぬ人、まあ何にしろお怪我がなうてようござんしたなあ。

新助　なるほど、見受けました所が、却々一りきみあるお方と見えまする、これ作助手前もおれもいゝ日を喰つたのぢやの。

作助　ほんにさうでござりまする。

藝一　私等もどうなることかと思うたわいな。

藝二　いつ來てもく、あの客人ほど難しい連中はござんせぬ。

藝三　强いことばつかりいうて、今の世界には合はぬわいなあ。

藝一　あれがあの衆達の自慢でござんすわいなあ。

三人　ほゝゝゝゝ、

ト奥より野花屋の女房おつゆ茶屋女房の裝にて出來り、

つゆ　おみよさん、今の樣子は蔭で聞いてゐたわいなあ。よくまあ新助さんの詫事をして上げて下さんした、私やほんたうに氣がもめたわいな。新助さんも災難を脫れたといふもの。

みよ　あんまり見兼ねた故、憎まれるも合點で詫事をしたわいなあ。

新助　お上さん嘸おやかましうござりましたらう、御免なされて下さりませ。

つゆ　何のまあ丁度お前にはいろ〳〵勘定も上げたし、今日は祭りのこと一口やつて行つて下さんせいなあ。

新助　有難うはござりますが、又今の衆に逢ひましては面倒でござりますれば、

作助　もし親方、御馳走ならば遠慮は失禮だ。

新助　えゝまた餘計な口をきくよ。

つゆ　そのことなればお案じでない、奥の小座敷で上げるわいな。

新助　左樣なれば御祭禮の御祝儀に、御ざうさにあづかりませうか。

作助　そんなら、私もお相伴いたします。
新助　おみよさん、御免なされませ。
つゆ　お前も奥で一口どうだえ。
みよ　有難うございますが、ちつとこゝに、
つゆ　そんなら、新助さん、
藝一
藝二　どれ、私等も奥で一休み。さあござんせいなあ。
新助　どりや御馳走になりませうか。
　　　トおつゆ先に新助、作助、藝者等皆々奥へ入る、おみよ殘り思入あつて、
みよ　思ふやうにはならぬが浮世、待つ人は來もせいで蟲の好かない赤間面、コノ新三郎さんは何をしてござんすやら、あれほど今日は是非々々と約束したに、ぢれつたいことではあるわいなあ。
　　　ト此時奥より、娘分のお鈴の聲にて『えゝも好かない壽樂さんだよ、覺えておいで』と言ひながら、走り出來るをおみよ見て、
みよ　お鈴さん、いつもいゝ元氣だねえ、何を大きな聲をしなさんすえ。
お鈴　おみよさん聞いておくんなさいよ、あの壽樂ぢゞいがいつでも〳〵私を捉へてからかつていけな

いのだよ。

みよ　そりやあお前にあたりをつけるのだわね。

お鈴　おやまあどうせうねえ、いやだねえ。そりやさうと今日はまだ新さんはおいでなさんせぬかえ。

みよ　今日は是非々々來ると言ひなさんしたが、どうしてこのやうにおそいことぢややら、實にぢれつたいのだよ。

お鈴　なあにお案じでないよ、彼人のことだからきつと來なさいますよ。

みよ　此の頃ぢやあ當にはならないよ、どんなに性惡になんなすつたよ。それだから餘計に氣がもめてならないのだよ。

　　　　トお鈴おみよに水をむける思入にて、

お鈴　おや〳〵さうかへ、道理で此間もね、條本のかるこ衆と矢倉下で話しをしてゐなすつたよ。

みよ　お鈴さん、そりやあいつの事だえ。

お鈴　四五日あとの事だがね、どこでもかしこでも、新さんにやあみんなが岡惚れだよ、おみよさん、お前うつかり油斷ができないよ。

　　　　トいろ〳〵おみよに氣をもませるやうにする、この中新三郎浪人の打扮にて奥よりいで、これを聞い

てゐる、これに兩人心附かず、おみよは段々お鈴の傍へよりて、

みよ　ほんたうに男といふものは氣が多いから、それにあの新さんは女にやさしいものだから、ついひかされるよ。

お鈴　男ぐらゐ氣の定まらないものはないよ、それだから都々逸の文句にもね、男心と木曾路の山はいくら切つても木が多い、とさ。よく作るものぢやないかねえ。

新三　（前へ出て）おみよ、もう惡口はそれぎりか。

　トこれにておみよびつくりして新三郎を見て、

みよ　おや、新さん、いつの間にござんしたえ。

お鈴　私あびつくりしたよ、胸がどき〳〵しますわいな。

新三　俺やさつきからこゝにゐたわえ。

みよ　嘘言ばつかり、

新三　いや〳〵嘘言ではない。この頃はだいぶ性惡になつた故、うつかり眼は放されぬ。

お鈴　おや〳〵そんなら今の話を、

新三　さ、聞いたでもなし聞かぬでもなし、女といふものは氣が多い故、それにおみよなぞは男にやさ

しいから、誰でもついひかされて、
みよ　えゝも憎らしい、又あんなことを、
新三　女ぐらゐ氣の多いものはない、都々逸の文句にも、女心と木曾路の山はいくら切つても木が多い。よく作つたものぢやなあ。
お鈴　おや憎らしい新さんだよ、私達が言つたことをみんな聞いてさ、どうせうねえ。
みよ　お鈴さん覺えておいでよ、たうとう私をすつかり乘せなんしたね。
お鈴　おみよさん、堪忍おしよ。
　　ト お鈴はそゝくさと奥へ入る、後兩人思入あつて、
みよ　もし、新三郎さん。
新三　用ありさうに改まつて。これおみよいつ見ても美しいが、取分けかういふ打扮ではおれが慾目か知らないが、一際目立つて器量があがつたやうだ。
みよ　えゝも人にばつかり氣をもませ、あんまりなぶつて下さんすな。
新三　なに、なぶつていゝものか、おれのやうな浪人は粗末にすると罰が當るわ。
みよ　今日も祭りの會所へ行くと、皆々が私に聞けがしにお前の事を褒める故、いゝしんに私あ氣がもめる

よ。

新三　その氣のもめるは汝より、おれが方がよつぽど餘計だ。

みよ　それや何故でござんすえ。

新三　はて知れたこと、おれは汝一人守つてゐれど、そなたは身體を賣る身の上、假令女郎でないにしろ藝者も勤めは同じこと、それぢやによつて氣がもめるといふことよ。

みよ　私の心を知らぬかなんぞのやうに、えゝ憎らしい。

　　トおみよつんとする、この時以前のお鈴出て來て、

お鈴　おみよさん、今奥へお酒の支度をしておいたから、新三さんと一緒においでよ。

みよ　おや、さうでござんしたか、そんなら新さん奥で一口呑みなさんせ。

新三　汝が行くなら一緒に行かう。

お鈴　早くおいでなさんせいなあ。

みよ　お鈴さん頼みましたよ。

　　ト新三郎とおみよは思入あつて上手家體へ入り、お鈴は奥へ入る。と海松杭の松さきに平馬、長次、娘分等出來りて、

海松　今親分が道具屋の利七と何だか話しがあるさうだ、その中眞面目でもゐられねえ、これからこゝで祭りを見ながら酒とやらかさう。

長次　それがようござりませう。さあ〳〵酒だ〳〵、酒と肴をどし〳〵持つて來い〳〵。

娘分　はい〳〵只今直でござります。（ト手をたゝくと奥より二人の娘分酒肴を持つて出る。）

娘分　さあ〳〵皆さん、お酒がまゐりましたわいなあ。

平馬　この所で踊りを見ながら大酒とは又一興、面白い〳〵。

長次　これで女にさへ惚れられりやあ十分でござります。

娘一　おやまあ、お前さんなら誰でも惚れますよ。

長次　今までねえから、あんまり當にもならねえ。

子分　そりやあ間違へねえところだ、はゝゝゝ。

と海松杭の松大きな盃を取上げ、

海松　長次、これへ注いでくれ。

長次　あんまりそれぢやあ大きいぢやあござりやせんか。

海松　こんな時にやあ、醉つてしまはにやあ面白くねえ。

長次　そんなら注ぎやすぜ。（ト酌をする、平馬見て、）

平馬　いよウ、見事々々。

長次　（花道の方を見て）もし〳〵、彼方へ地走りの踊りが來やすぜ。

子分　違えねえ、踊りが來らあ、こいつあごうぎだ。

皆々　丁度ようござんした、こゝで見物なさんせいなあ。

海松　隨分祭りも野暮なものだぜ。

ト渡り拍子になりて、花道より大紋半纏股引の鐵棒引二人、その次へ家主三人警護の打扮にて續き、その後より祭禮の衆大勢出で、一人大きなる拍子木を持ちたるが來てその後より松風、村雨、此兵衛の衣裳をつけたる者出で、附添ひの者日傘、團扇などを持ち、この後より清元連中袴裝にて順よく出で、囃子連中屋臺にて囃しながら出で、茶瓶一荷擔ひたるが續き、皆並よく出て本舞臺へ來り、よきほどに拍子木を鳴らし、これより清元の『三五月須磨寫繪』の淨瑠璃になり、よろしくあつてこの人數上手へ入る。と二重になりし者これを見送りて、

海松　今の踊りこは皆々器量揃ひぢやあねえか。

娘一　あの衆は、水木歌春さんのお弟子でござりますわいなあ。

ト此中源左衞門奥より出來るを皆々見て、

子一　親分、もう用は、
皆々　濟みましたか。
源左　見りやあ、まだおみよが見えねえが、野郎ばかりの酒宴ぢやあ氣が浮かねえ、おみよを早く呼べ。
女等　はい〳〵畏りました、唯今直に參ります。（トうぢ〳〵する。）
源左　えゝぐづ〳〵と埒が明かねえ、早く呼べ〳〵。
皆々　おみよ〳〵。（ト頻りに呼びたてる、と上手家體の内にて、）
みよ　忙しない、今行くわいなあ。
　　　トおみよ出來りてそしらぬ思入にて中央へ住ふ、源左衞門思入あつて盃をおみよへさし、
源左　これおみよ、人ぢらしの小路隱れ、手前がゐにやあ座が白けらあ、まあ落着て一つ呑みやれ。
みよ　有難うござんすが、私やちつと心願があつて願酒でござんす、どうぞ堪忍して下さんせいなあ。
海松　やいおみよ、親分もお前の來るのを待つてゐたのだ、野暮を言はずと祭りのことだ、
皆々　一つ呑め〳〵。
みよ　えゝも靜にして下さんせ、氣のほせがするわいなあ。
源左　これおみよ、手前がいくらぴんしやんと振りつけても、言ひ出すからは何處までも假令邪が非で

あらうとも、後へ引かぬがおれが持前、一度は言はうと思つてゐたが、長くも來ねえが此中から雨の降る日も風の日ものろいゝ奴だが通つても、ついに一度いゝ顔もせず、噂に聞きやァ情夫があるといふことだ。してその男は何者だ、どんな奴だか名が聞きてえ。

トこれにておみよどうなるものかといふ思入にて、

みよ　あい、情人がござんす。可愛い男がござんすわいなあ。

源左　何と、

みよ　さあ、さう知らしやんしたら匿しても言はさずにはおかしやんすまい。二世と三世と言替した男が外にござんすほどに、お氣の毒ではござんすがお前の言葉には從はれぬ故、此廣い仲町に外にいくらもある藝妓、誰なと呼んで下さんせ。あんまり愛想がないやうだが、これも私の生得でござんすわいなあ。(ト煙草を喫みゐる。)

平馬　して、その情人は唯だ、いやさ何者だ。

みよ　さあ、その男といふは、

平馬　その男の名は何と、

トこれにておみようぢ〳〵する、此時海松杭の松つか〳〵と前へ出ておみよの左の腕を捲り、

海松　その情人は海松杭が黒眼で睨んでおいた。さあこゝへ出せ。(ト無理に腕を捲るをおみよ押へて、)

みよ　いゝえ、それは、

海松　いゝや隠しても役にやあたゝねえ、腕に彫つたこの新の字、何とこれであらうがな。

長次　男の名を腕へ彫るとは、よつほど時代な女だわえ。

みよ　さあ、もうかう見られたら仕方がござんせぬ。あい、これが命と二世かけた可愛い男でござんす
わいなあ。

源左　(思入あつて)さう白ばけにぶちまけりやあ、これまでおれが鼻毛を讀まれたその野郎めは、何處
の奴だ。

平馬　いや赤間待たつせえ。(おみよに向つて)この新の字は身が朋輩、浪人なせし穂積新三郎の新の字か
(おみよ默つてゐる。)よいわ、新三郎なら面白い、香爐詮議で大切な身でありながら、その役目も
打忘れ遊里の女に魂奪はれ、殿の上意を輕しめる不所存者の新三郎、繩打つて屋敷へ引かうか
ト立上る。

みよ　さあ、それは、

源左　情人といふのは、新三郎か、

みよ　さあ、それは、
海松　但しは外の客だといふか。
みよ　さあ、
四人　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
源左　女め返事はどゞどうだ。
　　　トおみよぐつと詰る、この前方より新助、おつゆ出かゝりゐしが、此時新助前へ出て。
新助　はい。その言替しました男といふは、私でござりまする。
　　　トこれにておみよ合點の行かぬ思入、皆々びつくりして新助を見る。
源左　汝あ先刻の縮屋だな。
海松　この新の字の入墨子が、
皆々　何で貴樣が情人だ。
新助　（懷中より帳面を出して）へい、此の帳面に記しある縮屋新助、私が情人でござりまする。
みよ　えゝ、

ト びつくりするをおつゆおみよの袖を引き呑込ませる。新助源左衛門海松杭等氣味合の思入。

つゆ　おみよさん、もうかうなつたら仕方がない、お前の情人は、あの新助さん、いえさ新助さんでござんせうがな。（ト呑込ませる、これにておみよ思入あつて、）

みよ　はい、なるほど、今の今まで隠してゐたれど、この彫物が何もかも。私の情人といふは新助さんそれ故さつきも赤間さん、お前が手込になさんす時見るに忍びず留めたのが、たしかな證據でござんすわいなあ。

源左　そんならおみよが情人といつたは、あの越後者の縮屋か、なるほど物好な者もあるものだなあ。

海松　なるほど情人と見えらア、頭工合から装のこしらへ、よつぽど粋な扮装だぜ。

平馬　ありやあ、越後の情人はあゝいふ装が流行ると見えるわえ。

子一　こりやあてつきりかうだ、あの女が縮の借でもあるのだらうよ。

子二　道理で、面を見てちゞみ上らあ。

子三　あいつがほんの越後ざらしだ。

海松　業ざらしが聞いてあきれらあ。

皆々　むゝはゝゝゝゝ。

ト これを聞き新助むつとして憤るを、おみよ制へ新助を引寄せて、

みよ あい、私や物好でござんす。これが芝居でするやうに、器量のよいのが情人と定まつたら、廣い世界が片ずむわいなあ。いつがいつまで藝者して暮されるものでもなければ、一生の身の納り、堅いところと親切なぬしの心に惚れたわいなあ。

ト思入つたやうに新助にいふ、新助汗を拭きながら術なき思入、源左衞門思入あつて、

源左 いゝわ、いくらじたばた騒いでも、藝者は賣物、身請をすりやあこつちの儘だ。これ長次、利七を呼べ、利七を呼べ。

長次 おい〳〵道具屋の利七さん、早く〳〵。

利七 はい〳〵畏りました(ト出來り)お約束の代金卽ちお渡し申しまする。

源左 おつとよし〳〵。こりやおつゆ、おみよが年拔、この金で親方へかけあつてくりやれ。

つゆ はい、お氣の毒ではござりますが、おみよさんの身請のことは先約がござりますわいなあ。

源左 して、その先約の客は誰だ。

皆々 どこの奴だえ。

新助 (前へ出て)へい、やはり私でござりまする。

源左　むゝ、先約の客といふは貴様か。

新助　左様でござりまする。

源左　むゝ、いゝわ、貴様が先約なら先約にして、改めてちつと貴様に頼みがある。ちよつとこゝへ顔が借りてえ。

新助　あの、私に、（トもぢ〳〵する。）

源左　はて、遠慮せずとこゝへ來なせえといふに。こう、改めて頼みといふは外でもねえ、おれも上總の木更津ぢやあ人に面も見知られて、赤間とか赤馬とか跳ねた野郎と思はうが、若い時なら腕づくでも命を限に喧嘩もするが、高が女の貰ひ引き角めだつちやあ色氣がねえ、これまで人に下から出て物を頼んだことはねえが、そこが互えに見得の場所、どうぞおみよは私に下せえ。この源左衛門が貰ひやした。新助どん、まあさう思つてくんなせえ。

新助　（思入あつて）へい、折角のお頼み故差上げませうと手を拍つて、おまけ申して上げたけれど、どうもこればかりは上げられませせぬ。

皆々　何で、こつちへよこされねえのだ。

つゆ　それ新助さん、赤間さんへの念晴し、もうかうなつたら隱さずとも、あの妓とお前のその仲を、

そこへどうなとよいやうに、

新助　そこへどうなとよいやうに、

つゆ　これ（ト制へ、こなしあつて）むゝ、なるほど、男の口から色戀の話しもどうやら妙なもの、そこは女子でないければ、

みよ　（思入あつて）さいなあ、手柄らしく話すのでもないけれど、しかも去年の山開き、仲間のお方と附合でこの野花屋へござんして、初のお客へその日からどうした時のはずみやらあのゝものゝの口說から、互に心打解けて目顔で知らし、それから後はなあ申し、

新助　深うなるほど家を外、今日は花見ぢや明日は雪、その雪からの思ひ附いつそのことに國元へ行き身幅も廣く奈良晒、互ひにすきや好きあうて、氣も藍さびの二人が仲、寢る眼も鼠のかすり地で末は夫婦が共稼ぎ、思ひ染地も二年越し、

みよ　一日逢はねば氣にかゝり、身上りしても呼び遂げて浮名巽の年も明け、世帶の苦勞をするのが樂しみ、

新助　それほど思ふ二人が仲

源左　そんなら、これほど賴んでも、

新助　お氣の毒でござりまする。
子分　呆れたものだ。
海松　親分こりやアどうしませう。
源左　その色男もほんに出來合、狐を馬に乘せられた話しの種は知れてあるわえ。
海松　それだといつて、(ト立ちかゝるを、)
つゆ　さあ、お腹の立つは御尤もでござりまするが、さう性急に行かぬが此の道、今日は取分土地のお祭り、赤間樣も私へお預けなされて下さりませ、どうかお顏の立つやうに及ばずながらいたしませう。
源左　これまでおれが言ひだして引込んだことはねえが、今仲町で裁き人と噂の高いこの家の女房。このまゝ素手で引込んぢやあこれまで賣つた名が廢れど、器用に貴樣に預けるから、なるならざるとも面の立つやう、
つゆ　そこは私も野花屋のつゆでござんす、どうぞ祭りの濟みますまで、
源左　きつと汝に預けたぞよ。初めて逢つた縮屋新助、此の後途中で逢うた時たゞぢやあ顏を見忘れるわ。見違へぬ爲め目印うつて、(ト煙管を逆手に持ち新助の額を割る。新助ムヽと思入。)これで忘れぬ

おれが極印。

ト源左衛門につたりと思入、おみよ口をしき思入、女連皆々思入あつて、

みよ　こりや、新助さんを、（ト立上らうとするを新助留めて）

新助　はて、恨みを受けるは當り前だ。

海松　あゝ小胸の惡い、（ト新助を蹴倒す。新助無念の思入。）

源左　いらざる所へ出しやばつて、割つた煙管の吸口と合はねえ野郎の附燒刄、見りやあ見るほど、

皆々　無慘な態だ。

源左　むゝはゝゝゝ。どりや行かうかえ。

ト先に立ち皆々花道へ入る。新助うつぶせになつてゐる、おみよおつゆ介抱して、

つゆ　もし新助さん、嘸無念でござんせう、堪忍して下さんせ。ひよんなことをお前に頼み、お氣の毒でござんすわいなあ。

みよ　手向ひせぬを附込んで、お前の額へこのやうに、嘸痛うござんせう、私や何とお禮を言うたらよからうやら、お上さんどうしたらよからうわいなあ。

新助　あゝ申し、そのやうにおつしやつて下さりまするど、實に私が困りまする、お得意のお内儀様の

お頼み、大したことではござりませず、この位のことは何でもござりませぬ。今打たれいでもさつきの時、どうでも打たれる額の疵、美代吉さまのお詞に難なくその場は脱れました、差引勘定いたしますれば、損得はござりませぬ。

作助　（出來りて）えゝ親方嘸痛うござりませう、さつきから次の間で見たり聞いたりする度に、悔しくつて〳〵駈出さうといたしたところ皆の衆に留められて出るにも出られず、悔しいやら口をしいやら、一人で袖を喰ひきつてをりましたわえ。

新助　疵というても些細なこと、なにも氣にかけるほどではない、然し情人には始めてなつて見たが、いや辛いものだわえ。

卜奥より新三郎出來り皆々へ會釋して新助に向ひ、

新三　これは〳〵新助殿とやら、ひよんなことにて難儀をかけ、何とお禮を申さうやら、忝うござりますわいの。

みよ　新三さん、ようお禮をいうて下さんせ、貴方の難儀になるところを、新助さんが引受けて下さんしたもお前の爲め、

つゆ　ようお禮をおつしやりませいなあ。

新助　そんなら、あなた様が、
娘分　穂積新三郎さんで、
皆々　ござんすわいなあ。
新助　（新三郎の顔をつく〴〵見て）なるほどなあ、初めてお目にかゝりましたが、男の私でさへ見惚れまする、これでこそほんまの情人ぢやなあ。
作助　親方、よい男には生れたうござりますね。
新助　貴様やおれもどうか拵へやうがあつたらうに、これを思ふとおれが親父やお袋は恨みだなう。
みよ　（癪の起りし思入にて）私や今のもや〳〵で逆上せた故でござんすか、いつもの癪がきや〳〵とさし込んでまゐりましたわいなあ。
つゆ　それでは明日が大切な日ぢやほどに、ちつとの間小座敷で休みなんせ。
みよ　そんならお上さん、世話役衆へどうぞ譯をいうて下さんせいな。
つゆ　そこは私が呑込んで、よいやうに言はうわいなあ。
新三　女子といふものは、よいにつけ悪いにつけ、兎角持病の起るものぢや。
つゆ　申し新三さん、憚りながらあの妓の癪を、

新三　私に介抱せいといふのか。
つゆ　美代吉さんには何より藥さ。
　トしつぼりした端唄になり、おみよ新三郎上手の家體へ入る。娘分は皆々奥へ入りおつゆ殘る、新助は新三郎の後を目も放さずぢつと見てゐて煙管を持つたまゝ二重より下りる。おつゆ合點の行かぬ思入にて傍へ行き、
つゆ　もし、新助さん。もし、新助さん。
　ト背をたゝく、新助びつくりして、
新助　えゝ（トべつたり下にゐるを、木の頭。）びつくりするわえ。
　トこの模樣よろしく、屋臺囃子にて、
ひやうし幕

二幕目

花水橋喧嘩の場
同　橋上の場

同返し　稲瀬川波除の場

〔役名━━小天狗正作、赤間源左衞門、縮屋新助、穂積新三郎、海松杭の松、若徒傳七、濱田宗之助、藍屋次郎兵衞、山鹿毛平馬、道具屋利七、鳶の者豆蟹の仁三。藝者おみよ、正作妹おきし、藍屋娘おつる、藝者等。〕

（花水橋袂の場）━━本舞臺三間の間正面一面に蒸籠の積物。上手に茶見世、軒口に巴の紋附の提灯をかけあり、下手祭禮の竹矢來。よき所へ床几二三脚列べ、こゝに平馬武家裝にて娘おつるを引捉へてをり、後ろに赤間の子分二人、下手に次郎兵衞老爺にて跪つてゐる。この見得、祭りの囃子にて幕明く。

次郎　こりや平馬樣には、娘を捉へて何となされまする。

平馬　はて知れたこと、日頃より戀ひ慕ひをる娘おつる、身が妻に貰はうと思ひ、この江戸まで後を追ひかけ參りしところ、最前折よく仲町で見かけし故捉へようと存ずる中、踊り屋臺に遮ぎられ、終に姿を見失ひ殘念と思ひしに、不思議にも又もやこゝで逢ひしは結ぶの神、これから直に連歸り、身共が妻にいたすのだわ。

次郎　そりやあなた御無體と申しまするもの、先達中も木更津にて女房にくれとおつしやつたその時に

お斷りを申した故、御存じでもござりませうが、いはゞ主人ある娘のからだ、それをとやかうおつしやるはちと御人體にもお似合ひなされぬかと存じまする。
平馬（むつとして）やあしやらくさいその一言、主人があらうがあるまいが、譬に申す戀は仕勝、それぢやによつて身共が連れて罷り歸るのだわ。（トおつるを引立てようとする。）
つる　あゝもし、どうぞその事ばかりはお許しなされて下さりませ。
平馬　そのやうに情の強いことをいふものではない、これ程思ふ身共が心中、あいと申せ〳〵。
次郎　假令どのやうにおつしやいましても、娘をやることはなりませぬ〳〵。
平馬　いくらやらぬと申しても貰ひかゝつたこの緣談、是非とも連れて歸らねば身が一分が相立たぬ。
子一　さうだ〳〵、平馬樣ばかりぢやあない、こちとらもこの通り遠いところからついて來て、
子二　見つけたからは連れて行かにやあ、おら達ばかりの耻でない、親分までが名の出ること。
兩人　何でも貰つて行かにやあならねえ。（トおつるを引立てようとするを次郎兵衞支へて、）
次郎　まあ〳〵待つて下さりませ、拜みまする〳〵。
平馬　留めるからは得心して、身共へ娘をくれると申すか。
兩人　さあ、きり〳〵と返事をしろえ。（トきつといふ、これにて次郎兵衞思入あつて、）

次郎　それほどまでに娘が事思召して下さるは、親の身にとりましてはどのやうにか有難く思ひますれど、御存じの通りの娘が身の上なれば、一旦の約束を變替致すと申す譯にもまゐりませねど、そこは又世に申す詠と歌どうかいたしやうもござりませうほどに、私共親娘の者が國へ歸りましたその上で、親類中とも相談いたし、その上の御挨拶をお待ちなされて下さりませ。

平馬　いや〳〵その一寸遁れは覺束ない、是非とも唯今このところで色よい返事せぬ中は立すことも罷りならぬ。

次郎　それぢやと申しまして、どうも卽答のお返事には、

平馬　ならずば娘を連れて行かうか、

次郎　さあ、それは、

平馬　身共へくれるか、

次郎　さあ、

平馬　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

平馬　面倒な、ひつぱらつてしまへ。

子分　さあ〳〵娘、うしやあがれ。

次郎　あゝもし〳〵こればかりは、許して下され〳〵。

平馬　えゝ、老耄め、邪魔いたすなえ。

ト留めるを蹴倒し、おつるを連れて行かうとするを縋り留めて、

次郎　誰ぞ來て助けて下され〳〵。

ト平馬次郎兵衞を突退け行かうと爭ふ、此の中上手より豆蟹の仁三手古舞の鳶の者にて鐵棒を持ち出來りて中へ割つて入り、兩人の子分を投げ、平馬を突退けおつるを圍ふ。

平馬　やい〳〵〳〵、見れば知人でもない青二歳め、身共へ對し無禮致した老耄を、折檻いたすその處を何故邪魔を致すのだ。

仁三　いえ、何もお邪魔をするといふ譯ぢやあござりませぬが、町内中のごたつきは見てゐられねえ私が職業、どういふ事の間違ひか、高が相手は女と老人三人寄つて踏んだり蹴たり、ト次郎兵衞に向つて）もし、いつたいこりやあどうしたのでござりますえ。

次郎　はい〳〵御親切なそのお尋ね、何をお隱し申しませう、私は上總木更津の商人、これにをりますのは手前の娘つると申しまする。先達中國元にをりまする時分に、そのお侍樣がこの娘を妻に

くれいとおつしやりますれど、許嫁のある身の上故、據なくお斷りを申しましたを、今日こゝで出逢ひがしら娘を捉へて無理無體に連れて行かうと仰しやるのみか、御覽の通り踏んだり蹴たりどういたさうと存じたところ、丁度あなたがおいで下されまして親娘二人が助かりました、この上ともにお前樣、よろしうお願ひ申しまする。（ト淚ながらに頼む。）

仁三　そりやあお侍お前樣が無理といふものだ。主人ある娘を連れて行きやあ言はずと知れたこなたは間男、知らねえ中は兎も角も、さう聞いちやあ親御より私がどうも上げられねえ、とさあ言つたらば、お前方も入らざる奴と思ひなさらうが、足弱連れた老人の弱身をつけ込み無理無體、娘を捲上げ行かうとは勾引も同然だ。野暮な話にならねえ中、きり〳〵と歸んなさる方がよからうぜ。

ト始終思入にていふ、平馬嘲笑ひ、

平馬　いや、聞いた風な小野郎め、わいらが知つたことではないわ。

子一　小望月の酒の持越し機嫌か知らねえが、

子二　何の入らざる鐵棒引、

平馬　彌次馬なれば、

三人　退いてゐろ〳〵。

仁三　いや、退いちやあゐられねえ、留めかゝつたら金輪際後へ引かぬはおれが持前、いらざる口も御最屓と水道の水に染まつたからは、假令劍の眞中でも飛んで飛込む鳶頭、留めに入つたこの場の喧嘩、不承であらうがこのおれに、どうぞ預けてくんなせえ。

平馬　いや此奴が〳〵、最前より押しだまつて聞いてをれば、さま〴〵のことを吐き散らし、人もなげなるその振舞、

子一　相手の奴が强けりやあ引いてゐられぬ男づく、

子二　邪魔しやがつた埋草に、鼻柱をたゝきをるぞよ。

平馬　それがいゝ〳〵、先づ野郎からたゝんでしまへ。

兩人　合點だ。

ト子分兩人仁三へ棒にて打つてかゝり立廻りになり、仁三兩人を散々に打ちのめし、兩人は上手へ逃げて入る。平馬刀を拔いて仁三にかゝるを仁三刀を打落し足をかけ曲げて投り出す、平馬口惜しがつて

平馬　うぬ、この返報は、(トちよつとおこつく。)

仁三　どうしたと、

平馬　覺えてをらうぞ。

トいつさんに上手へ走り入る。茶見世の蔭より次郎兵衞、おつる出來りて、

次郎　これはまあお前樣、どこもお怪我はござりませぬか。やれ〳〵御親切に、大きに有難うござりました。

つる　ほんにもうどうなりまする事かと存じましたに、よい所へおいで下されました故私等二人も恙なう、此のやうな嬉しいことはござりませぬ、有難う存じまする。

仁三　いやもう惡い奴等でござります、女中連れのお老人と侮つて、したいがいの今の亂暴、わつちもあんまり見兼ねたから、ちよつと彌次馬に飛込んだのだが、まあ何にしろお二人に恙がなくてようござりました。

次郎　これと申すもあなたのお蔭。まあ何にいたせこゝではとつくりお禮も申されませねば、ちよつとそこまで、なう娘、

兩人　おいでなされて下さりませ。

仁三　どういたしましてそんな事を言つちやあいけませぬ。殊に私も祭りで忙しく、またお前さん方も今のやうに無法な者が多うござりますから、ちつとも早く〳〵お歸りなさるがようござります。

次郎　左樣でござりまするか。左樣なればお言葉に從ひまして、

つる　これでおいとま、

兩人　申しまする。（ト兩人仁三に一禮なして立上る。）

仁三　それぢやあ急いでおいでなせえ。（ト兩人は下手へ入る。）とんだ事にかゝりあつて大きに手間がとれた。嘸みんなが待つてゐるだらう、どれ會所へ行つて一口やらうか。

ト花道へ行きかける、と此時上手より赤間源左衞門、後より海松杭の松出來りて、

源左　おい、若いの、ちよつと待つて貰ひてえ。

トきつといふ。仁三振返り源左衞門を見て合點の行かぬこなしにて、

仁三　待てといふのは、わつちのことかえ。

源左　いかにも、（ト皆々床几へかける。）

仁三　む、どれそこへ行かうかえ、（ト下手へ來りて）呼びなすつたのは、私に何ぞ用でもあるのかえ。

源左　さればさ、用がありやこそ呼びもしようか。

仁三　さうして、私へ用といふのは、

ト源左衞門の傍に立つてゐる故、源左衞門ぢろりと見て、

源左　まあ、そこへかきやれな。（ト仁三思入あつて下手の床几へかける、源左衞門思入あつて、）これ若いの、

呼びかけたのは外でもねえ、かうやつていゝ年をして大人氣ねえと言はれるだらうが、それも合點、自分の土地なら兎も角も、木更津から來てこの江戸に長らく逗留する中は、堅く亂暴するなよと言ひつけちやァあるけれど、多い子分のことなればさうは制しが行屆かねえ、何が仕落か知らねえが、あんなやくざな子分でも打たれた日にやあそのまゝに濟まされねえのがおれが持前、この江戸へ來て源左衞門が退をとつたと言はれては、世間の人は言ふに及ばず子分の者へ面が立たねえ、そこでこなたを呼びかけたは、おれが顏を立てゝ貰ひてえ。（ト思入にていふ。）

仁三 なるほど流石は赤間源左衞門殿ほどあつて立派な言分、何が子分の仕落だと言はれて見りやあ言ひてえが、そこを言はぬがこつちも男、明らさまに言つたなら血で血を洗ふこなたの名折、言はねえ方が花だらうよ。

海松 こりやあ面白い、あぢにからんだ言葉尻、血で血を洗ふ名折だと言はれて見りやあ親分よりこつちとらまでが恥の恥、どういふ譯か知らねえがこいつは一番聞所だわえ。

源左 これさ、そんな理窟は後にしろえ。（ト仁三に向ひ）さあかう言ひかけたらそつちも男、よもやそのまゝぢやあ歸られまい。

仁三 御大層に人を呼留め、何の用かと思つたら、高が子分のいざこざにわざ〳〵こゝ迄御苦勞な。お

氣の毒ぢやあござりやすが、私あ祭りで忙しい、そんな事にかゝりあふ暇はねえ、またこのごろのことにしようよ。（ト取り合はぬ動作、海松杭せゝら笑ひて、）

海松　なるほど親分の威光は恐ろしい、勇肌とやらきをいとやらが、名ばかりに聞怯ぢして男に似合はぬ逃口上、みんな見ろえ、よつぽと怖いと見えるなあ。

子一　それほど親分が怖ければ、早く詫れば濟むことだ。

子二　とてもわいらがじたばたしても、なに親分に齒が立つものかえ。

子三　さつきの樣子に打つて替り、物も言はずにぶる〳〵と、顏の色さへ青二才め。

子四　鐵棒引くのは知つてもゐようが、達引喧嘩はまだ知るめえ。

子一　知らざあ、おいら達が、

四人　敎へてやらうか（ト四人仁三に立ちかゝるを源左衞門留めて、）

源左　やい〳〵手前達はどうしたものだ、そつちへ引込んでゐろえ、（トこれにて子分四人控へる。源左衞門こなしあつて、）さあ、若いの、忙しからうが乘りかゝつた船、一か八かやらぬ中はどうも蟲が落つかねえ、いつたいおれが顏はどう立てくれる氣だ。

仁三　その顏の立てやうは、どうすりやあようござります。

源左　ほかでもねえ、お前の命が貰ひてえ。（トきつといふ、仁三思入あつて、）

仁三　なるほど、望まれたらば仕方がねえ、いかにも命を上げやせうと言つたらよからうが、まあ厭だ。そりやあ江戸つ兒同士の喧嘩なら知らねえこと、向う前でも十何里海をへだつた上總の國、塵芥船の船頭か七里法華の講頭間拔なものなら兎も角も、上總房州下總かけ誰知らねえものもねえ長脇差の頭分、相手にとつて不足のねえ赤間と聞いちやあ了簡ならねえ、ほしくばやらうおれが命取れるものならとつて見ろ。（トきつと見得、肌を脱ぎ源左衞門の前へ片足あげて詰寄る。）

源左　流石は江戸の生れだけ、見かけによらねえい、度胸だ。とるに足らねえ網小魚と思ひのほかに骨つぽい尾鰭があつて面白い、こいつは料理をしにやあならねえ。

仁三　さあ江戸前だ、すつぱりとやれ、然し上總の赤鰯でおれが體が切れりやあよし、切れねえ時にやあうぬらが首、こつちへ取るから覺悟しろ。

海松　しやらくせえ小二歳め、切れるか切れぬか赤間の子分、この海松杭が切味を見せてやらうわ。

源左　はて、小野郎でも男一疋、手前達の冴えねえ腕で長く憂目をさせるも不便、おれが一思ひにやつつけてやるわ。

海松　いゝや親分構ひなさんな、元の起りは子分の間違ひ、こなたにこりやあ賴めねえ、わしらが方で

殺らしてしまはう。
子一　今海松杭がいふ通り、
子二　事件のおこりはわしら故、
子三　是非とも親分、わつちらへ、
子四　こりやあ任して、
四人　おくんなせえ。
源左　それぢやあ汝等に任せるから、しつかりとやれよ。
皆々　合點でごんす、（ト皆々鉢巻などして身支度をする。）
仁三　汝等ぢやあ不足だが、望んで来りやあ是非がねえ、なれた鐵棒先棒にこの世の暇を取らしてやるわ。
子分　うぬ、その頰げたを、（ト兩人左右より仁三の胸ぐらをとる。）
仁三　えゝ、何をしやあがる、（ト振解いて兩人を投げる。）
海松　えゝ面倒な、殺らしてしまへ。
四人　合點だ。

ト四人仁三へ打つてかゝる、仁三鐵棒にて四人を相手に床几を使ひよろしく立廻り、此の中上手より鳶の者にて手古舞裝の若者四人出來り見て、

四人　頭が喧嘩だ、相手の奴等をたゝきしめろ〳〵。

ト有合ふ物を持ちて打つてかゝりごつちやの立廻りあつて、鳶の者は子分三人と立廻りながら下手へ入り、仁三は海松杭と立廻りながら上手へ入る、源左衞門殘り。きつとなつて、

源左　えゝ意氣地のねえ子分の奴等、こりやあうつちやつては置かれねえ。

ト立ちながら尻を端折りきつとなり上手へ逸散に入る。この時上手より仕出し大勢出來りて、『喧嘩だ、喧嘩だ』と言ひながら下手へ入る。と花道より小天狗正作武張つた打扮にて、妹おきし振袖娘にて日傘を持ちて附添ひ出來りて、

正作　妹見やれ、おびたゞしい人ではないか。

きし　左樣でござりまする、あなたと御一緒なればこそよけれ、女子連なぞでは參られませぬわいなあ。

正作　何でも、かやうな群集のところへ、女子ばかりでは決して參らぬことぢや。

きし　それはさうとお兄樣、さきはどういたしましたか、後の四角ではぐれましたが、嘸捜してをるこ

とでござりませうなあ。

正作　あゝこの雜沓では、めぐり逢へばよいが、

きし　ほんに困つたことでござりますするなあ。

正作　あゝこりや斯樣いたさう、彼方の茶見世にて暫時待合はして見ようわい。

きし　それがよろしうござりませうわいなあ。

正作　然らば、あれへまゐつて休息いたさう。

次郎（上手よりうろ〳〵しながら出來りて）やれ〳〵今日のやうな間の惡いことはない、折角災難を免れてやれ嬉しやと思ふ間もなく、またあの平馬めに出つくはしごた〳〵とするその中に、たうとう娘を見はぐつてしまうたが、あゝ雜沓で、どうぞ怪我でもしてくれねばよいがな。（ト案じる思入にてきよろ〳〵見廻しおきしを見て）おゝ娘そこにゐたか、どのやうに尋ねたか知れぬ（ト言ひながら傍へ寄り、おきしをよく〳〵見てびつくりなし）これは〳〵お侍樣まつぴら御免下さりませ、ついこのお孃樣が手前娘にあまりよう似ておいでなされた故、大きに失禮をいたしました。

ト言ひすてゝ、そこ〳〵に下手へ入る。

正作　扨々よい年をいたしながら、そは〳〵と、粗相千萬な人もあるものではないか。

きし　大方あのお人も、連の娘御にでもはぐれたといふやうなことでござりませう。
正作　そのやうなことであらう、それにつけてもその方必ず我にはぐれぬやうにいたしやれ。
きし　かしこまりました。
ト此の時後にてわや〳〵と人聲する、正作聞耳を立て思入あつて、
正作　はて、だいぶ騷がしいが、もしや喧嘩などにてもありはせぬかしらん。
きし　いやなことでござりまするなあ。
正作　それにつけても、さきめが怪我でも致さねばよいが、案じらるゝことぢやわい。
ト上手茶屋の內より茶屋女房出來り、正作を見て、
女房　おや、おめづらしい、先生ようおいらつしやりました。
正作　これはお內儀大きに御無沙汰をいたした、然しながらいつも繁昌でよいな。
女房　有難う存じまする。（ト又後にてわや〳〵と人聲する。）
正作　最前よりだいぶ騷がしいが、ありや何事ぢやな。
女房　はい、あれは唯今こゝで喧嘩がござりまして、それから向う川岸の方へ參りましたが、何を申すも相手が惡うござりますから、どうぞ大きな喧嘩にならねばよろしうござりまするが。

正作　それはハヤ折角これまで參つたが、身共一人ならよけれども、そちを同道いたしては參られぬわい。
きし　左樣なれば私はこゝでお待ち申しませうほどに、あなたお一人で御參詣なされませ。
正作　いや、そち一人これに待たせておくも、何とやら心元ない。
女房　まあこちらへお上り遊ばしてお休みなされませ、その中には少しは靜かになりませうから、まあ御ゆるりといらつしやいませ。
正作　いかさま供の者にもはぐれたれば、幸ひこれにて待合せながら、ゆるりと休息いたして參らう。
女房　それがよろしうござりますわいなあ。
　ト此時ばた〳〵になり、上手より平馬走り出來り、おきしを見て、
平馬　おゝおつるぼうこゝにゐたか、よい所で逢つた、さあ〳〵來やれ。（ト傍へよりよく〳〵見てびつくりなし）南無三、違つた。これは粗相、まつぴら御免下され。
　ト言ひすてゝこそ〳〵と下手へ入る、これにて正作心得ぬこなし。
正作　はて合點の行かぬ、兩度までの人違ひ、こりや何ぞ仔細のある事と見えるわい。
きし　何とやら私は氣味が惡うござりまするわいなあ。

正作　いや〱ありや大方狂人であらうわい。
　　　ト上手より前幕の利七風呂敷包みの刀を持ち出來り、正作を見て、
利七　おゝそれにおゐでなされまするは、葛飾の先生ではござりませぬか。
正作　これは、道具屋の利七殿か、まゝこれへかけやれ〱。
利七　左樣なら御免下さりませ。(ト床几へかけおきしを見て)はゝお妹御樣も御一緒で、今日はお祭りを御見物でござりまするな。
正作　だいぶ立派に祭禮が出來たと申すこと故、妹にも見物いたさせようと存じ、手前までが思はず遊山をいたした。して、今朝話の差添へは、そこに持參いたしてござるかな。
利七　へえ、今日その事に就きましてお宅へ上りましたところ、お祭りと承り、丁度私もこの邊へ參る所がござりまして、もしお目にかゝることもござりませうかと、持參いたしましてござりまする。
正作　それは重疊、これにて一見いたし度きものぢやが、何を申すもこゝは往來、幸ひ茶屋の奥を借り受け、あれにて一見いたすであらう。
利七　なるほどそれがよろしうござりまする。

正作（おきしに向ひ）こりや妹、そちはこれにをつて祭りの通るのを見物いたしたがよい、然しながら必ず此所を離れてはならぬぞ。
きしいえ、どこへもまゐりはいたしませぬ。
正作お内儀・何分ともにお頼み申します。
女房かしこまりましてござりまする。
正作然らば利七どの。
利七先づおいでなされませ。（ト兩人は奥へ入る。）
女房（おきしに）あなた、お茶をもう一つ差上げませうか。
きしいえ〳〵もう必ずお構ひなされますな。
女房生憎お祭りで取込んでをります故、ろく〳〵お構ひ申しませぬ。
きしどういたして、とんだお賑やかでよろしうござりまする。
女房それにもう當年はお祭りが立派にできたと申すので、人の出が多うござりまするわいなあ。
きしほんに大層な見物でござりまするなあ。
ト此時上手より前幕の新三郎出來りて、

新三　當年は正八幡の祭禮殊のほかなる賑ひ、それに就き唯今途中にて承りしが、何か向うの川岸に大そうなる喧嘩があるとやら申す噂、ゆる〳〵と山車屋臺などを見物ながら參らうとは存じたれど、譬に申す危ふきに近寄らず、少しも早く歸宅いたさう。(ト行きかけおきしを見て)そこにをるはおきしどのではないか。

きし　おゝ思ひがけない新三郎樣、先々これへおかけ遊ばしませ。

新三　然らばこれにて一服いたして參らう。

ト床几へかける、茶屋女房茶を出す。

きし　あなたも今日はお祭りを御見物でござりまするか。

新三　外ならぬ弓矢神八幡宮の祭禮故、武運長久祈りの爲め參詣いたし、唯今丁度歸り道でござる。

きし　それはまあよう御參詣をなされましたなあ。

新三　して、おきしどのには、誰と御同道にて參られたな。

きし　はい、御兄樣と御一緒に。

新三　すりや、あの正作殿とな。

きし　左樣でござりまする。

新三　それはよう御參詣をなされましたな。

ト こゝへ上手よりおみよ手古舞の裝にて、後より藝者二人やはり手古舞にて出來り、おみよこの態を見て悋氣のこなしにて、ずつと入つて兩人の中へ割つて入り、

みよ　まつぴら御免下さりませ。

ト これにて兩人びつくりなし、新三郎おみよを見て、

新三　えゝびつくりいたしたわい。

きし　私もびつくりいたしましたわいなあ。

みよ　こつちもびつくりいたしました。（ト少しつんとしていふ。）

藝一　はい、私等もびつくりいたしました。（ト同じく中へわつて入る。）

藝二　はい、私もびつくりいたしました。

ト 兩人替る〴〵に中へ割つて入る。これにておきしはだん〴〵に押されて床几の端へ小さくなる。新三郎おきしへ面目なき思入にて脇を向いてゐる、おみよ動作あつて、

みよ　ほんにまあ厚皮な、晝日中に門中で、呆れて物が言はれぬわいなあ。

藝一　それぢやによつて常から私等が言はぬことではござんせぬ、あんまりお前が手放しでおきなさん

す故。
藝二　これに懲りて此の後は一緒にお歩きがようござんす。（ト口々に言はれて新三郎、術なきこなしにて）
新三　あゝこれ〳〵こなた衆は譯も知らずに何を言やるのぢや、そのやうな詰らぬことを申さずとも、早う行きやれ〳〵。（トおきしへ心遣ひの思入）
藝一　そのやうにお邪魔になされずとも、御遠慮には及びませぬ、たんとお話をなされませいなあ。
藝二　それとも强つてお邪魔なら、私等よりはあなたの方でおいでなさるがようござんす。
新三　いやさ何も邪魔と申すわけではないが、あまりこなた衆が彼是と申す故。
みよ　そりやァ言はいでかいなあ、言うてもよいによつて言ふのぢやわいなあ。
新三　（思入あつて）そのやうに疑うてゐやるなら是非がない、何を隱さうあの娘は、そなたも豫て知つてゐやる、この新三郎が許嫁ぢやわいなう。
みよ　えゝ、そんならあなたが噂に聞いた。
新三　あれがおきしどのぢやわいなう。
みよ　おやまあ、さうでござんしたか。（ト面目なき動作。）
藝一　おみよさん、お前もよつほど人がいゝ、それを眞實にするといふがあるものかいなあ。

藝二　常から女子をだます口故、尤もらしう言はんしても、私等が得心せぬわいなあ。
新三　これ〳〵浪人なれども侍ぢや、なに嘘言を申してよいものか。
兩人　おやまあ眞面目で、憎らしいお人だねえ。
みよ　（腹の立ちし思入にて）皆さん、もうようござんす、大概樣子は分りました。（トおきしへ思入あつて）も

し、お許嫁のおきし樣とやら、もつとお傍へおいでなされませ。
きし　必ずお構ひなされまするな、私はこれが勝手でござりまする。
みよ　いゝえお前はそれが勝手でも、私がお邪魔をいたしまして、御亭主の新三郎樣へ濟みませぬわい

なあ。（ト少しぢれていふ、新三郎困りし思入にて、）
新三　そのやうなことばかり言つてゐては、わしが仕方がない。（トおきしの日傘へ眼をつけ）おゝ丁度よい

ものがある。（ト取上げ）これ見やれ、この日傘の印しにきしと書いたる漆し文字、これが何より

たしかな證據、

トおみよの前へ日傘を出す、おみよ日傘の印しをよく〳〵見て、

みよ　それではあなたが、ほんたうの（トおきしへこなし。）
藝一
藝二　おきし樣でござんすかえ。

新三　なに、嘘言を言ふものかいなう。
みよ　こりやまあどうしたらようござんせう。
兩人　惡いことをいたしましたなあ。（ト皆々面目なきこなし。）
みよ　どうぞお前さん、御免なされて下さりませ。
きし　どういたしまして、そのお詫より私からお禮を申さねばなりませぬ、毎度新三郞樣をようお世話をして下さりまして、有難う存じまする。
みよ　はい、はい。（ト術なき思入、藝者兩人もこれを見て呀き合ふ。此時下手にて拍子木鳴る。）
兩人　おみよさん、拍子木が鳴る、早う行かうわいなあ。
トおみよこれをしほに立上り、間の惡さうにおきしに向ひ、
みよ　これはお初にお目にかゝり、ろく／＼御挨拶も申さず、（ト言ひかけるを）
兩人　さあ／＼早うござんせいなあ。（ト手を取つてひつぱる。）
みよ　えゝも忙しない。御免なされて下さりませ。
トほつと思入あつて兩人附き上手へ入る。新三郞間の惡き思入にて、
新三　おゝ、さつぱりと忘れてをつたが、靈岸島まで行かねばならぬ用事があつた（ト言ひながら立上る。）

きし　そんなら、もうおいでなさりますするか。

新三　さればさ、是非今日中に用辨いたさねばならぬ事故。

きし　それでもちよつとお兄様に。

新三　いや、急ぐによつてお目にかゝらずにまゐらう。

きし　どうやらそれでは。

新三　よろしく申しておくりやれ。

ト唄になり、足早に下手へ入る。おきし後を見送りホロリと思入あつて、

きし　今の女子を見るにつけ、新三郎様がこの身をお嫌ひなさるも無理ではない。とはいへ此身は捨てられても一旦夫と定めし殿御、女子の道を立てるが貞女、いつそ今の様子をばお兄様に打明けて

おゝ、さうぢや〳〵。

ト思入あつて奥へ入る。ト上手より濱田宗之助に若黨富津傳七附添ひ、深編笠一本差浪人の打扮にて出來り、

宗之　何と傳七、今日この群集の中を往來致すに、いまだ知る人に一人も出逢はぬが、はて江戸は廣いものぢやなう。

傳七　然しそれも幸ひでござりませう、唯今のお身の上にて萬一古傍輩のお方にでもお出逢ひなされ、あれ見よと後ろ指をさゝるゝも、甚だ心外に存じまする。

宗之　尤も、これより向う川岸へ越しなば、かやうに往來の繁きこともあるまい、早う雜沓を離れ度いものぢや。

傳七　（思入あつて）かやうに人目を憚りまするも、お身の不運とは申しながら、これが以前でござらうなら、下郎めがお供にて、今日の祭禮も立派に御見物ができませうもの。あゝ是非もなきことでござりまする。（ト少しく愁ひのこなし、宗之助も思入あつて）

宗之　それにつけても思ひいだすは兄上の御事、不慮の御最期遂げられしも、いかなる仔細か相分からず、殊にお家重代の村正の刀その場より行方知れず、それ故にこそ我々主從、あの砌より三年以來かく浪々の身と相成り、密に詮議いたすと雖も、いづれの誰が所持なしをるか今に何の手がゝりとてもあらざるは、よく／＼武運に盡きたる身の上。（ト落涙する。）

傳七　そのやうに御心配なされまするな、案じるより生むが易いと譬の通り、やがて村正の行方が知れさへすれば、お兄樣が御自殺の次第も知れまいものでもござりませぬ、それ故にこそ今日も早く刀の行方が知れお身の汚名を晴らしたく、弓矢神故八幡宮へ參詣なしお願ひ申して參りましたれ

ば、やがて手蔓に取りつきませうほどに、お心丈夫に思つておいでなさりませ。

宗之　返すぐも汝が親切、たゞこの上ともに力に思ふは其方ばかり、若年の某なれば萬事よしな
に賴むぞよ。

傳七　及ばずながら私が假令身を粉に碎きましても、きつと詮議をしいだしませう。

宗之　やがて本地へ歸參なし、この艱難を主從が昔語にいたし度いものぢやなう。

傳七　さうなりましたらどのやうに嬉しいことか知れませぬ。それに就けても吉左右を早く聞きたいも
のだなあ。

ト思入、この時上手にて大勢の聲にて『喧嘩だく』と呼ぶ聲して大勢出て來る。

もし、騷がしいは、何事でござりませうな。

○　お聞きなされませ、赤間とやらいふ長脇差と、鳶の者の衆との大喧嘩でござりまする。

□　その相手同士は兎も角も、往來の人に大そう怪我がありました。

△　ところで、逃げる人が落合ひますので、橋が落ちるといつて亂騷ぎでござりまする。

皆々　お前も氣をおつけなさい。

ト言ひすてゝ皆々わやくと下手へ入る。

傳七　若旦那、大變なことではござりませぬか。
宗之　さばかりの事恐るゝにはあらねども、大事を抱へし身の上なれば、どうか左樣なところへ立寄らずに、向う川岸へ越したいものぢやな。
傳七　先づ何にいたせ、そこらまで參つて見ませう。
宗七　然らばさやういたさう。
傳七　必ず怪我せぬやうにおいでなされませ。
宗之　承知いたした。
　　ト兩人上手へ入る。と、上下より仕出し大勢出來りて、
大勢　大變だ、大變だ。
　　ト言ひながら上下へ入違ひて入る。これにて、上手の茶見世をたゝみ込みにて消し、正面の蒸籠半ばより上は引上げて霞となり、下半分は疊み込んで浪の模樣に替り、花水橋の場となる。
（花水橋の場）——本舞臺上手より下手へかけ一ぱいの橋、中央三間ほど欄干の落ちたる態、橋の下は河の面にて一面の浪布、こゝに源左衞門大童向う鉢卷にて拔刀を持ち、仁三鐵棒を持ち、兩人よ

ろしく立廻り、此中上下より子分、鳶の者大勢出來りごつちやの立廻り、結局源左衛門は鳶の者、仁三は子分を上下へ別れ追つて入る。ばた〳〵になり下手よりおつる逃げて來る後より平馬追かけ出來りあちこちと追廻し、とゞおつるを捉へ、

平馬　どつこい、逃さぬぞ〳〵。

つる　どうぞ放して下さりませ。

平馬　いゝや放さぬ〳〵。コレサおつるほう何もそのやうにぴんしやんするものではない、武士たるものがこのやうに人目も耻ぢず戀ひこがれ、これほど思ふ心中者、そのやうに情なうせずと、色よい返事を頼む〳〵。

ト振放し行かうとする、平馬は逃がすまいと爭ふ中平馬紙入をおとし、

つる　えゝも、存じませぬわいなあ。

平馬　南無三、身共が紙入を、

トうろつく中おつる振拂つて逃げる。此時また仕出し大勢出て來る、此中へ以前の正作妹を探す思入にて大勢をかきのけ〳〵來て、おつるに行き合ひ妹と心得、物をも言ずに圍ひ雜沓をかきのける動作、仕出しこれに構はず押して渡らうとしていろ〳〵揉み合ひ、結局橋の欄干こはれ、大勢川へ落

ちる。正作これを見て氣遣ひの思入にて、

正作 是非に及ばぬ。

ト刀を拔きて振廻す、仕出大勢これを見てびつくりなし、

仕出 そりや侍が拔いた〳〵。

ト大勢上下へばら〳〵と逃げて別れる、平馬おつるへかゝるを正作突廻して平馬を蹴る、これにて平馬川へ落ちる。此時上下へ橋番人六尺棒を持ちていで往來を留める。正作ほつと思入。

正作 最早越えるものもあらざるか、亂暴には似たれども、人を助ける身共が情。

つる それ故私も恙なう。

ト言ひかけるを正作心の急く動作にて、

正作 さ、妹立歸らう、仕度しやれ。

つる はい。(ト合點の行かぬ動作。正作身繕ひをなし懷中へ思入あつて)

正作 おゝこりや唯今の騷ぎに取紛れ、紙入を失なうたわい。

つる (平馬が落せし紙入を取つて)もし、お紙入はこれではござりませぬか。

ト出すを正作取つて、おつるをよく〳〵見て、

正作　や、妹と思ひしに、そなたさまは。
つる　唯今あなたのお情故、危ふい難儀を脱れしもの。
正作　扨は今の騷ぎにて。
つる　もしやあなたのお連樣は。
正作　入水なせしか。
　ト川の中へ思入、此時橋番人左右より窺ひ寄りて、
橋番　狼藉者、
　ト六尺棒にて打つてかゝるをちよつと立廻る。此中上手より傳七水に濡れ、正作の落した紙入を啣へ、泳ぎながら出で、下手の方より同じく水に濡れたる宗之助出來り、兩人橋杭へ取りつく、橋の上にて正作立廻つてゐて刀をすらりと拔く、これを木の頭。
つる　あれエ。
　ト正作に縋るを、正作圍ひて、
正作　はて、是非もない。
　ト水中へ思入、宗之助、傳七は橋杭に取附き、きつと思入。浪の音烈しく聞え、『船ヤアイ』と大勢し

て呼ぶ聲にてよろしく

ひやうし幕

トこの幕川岸の道具幕にて、川へ落ちし人々大勢出る。その中に、拍子木を首にかけたる祭の人足、柿色の脚袢を穿いて、床几を肩にかけし奴、或は雷の打扮の者、犬の頭を被げる者、紫の袱紗を附けた警固の杖を持つてゐる人足等よろしく出來りて、混雜の中にも祭りの名殘りらしい樣子のことさまざまよろしくありて、絶えず浪の音にてつなぎ、引返す。

(返し稻瀬川波除の場)——本舞臺四間通し中足の浪除石、後方は一面に佃島の遠景にて川中の模樣こゝに漁船、内に新助矢立の筆にて鼻紙へ手紙を書いてゐる、傍におみよ手古舞の裝にてをり、船頭棹を持つてゐる。

新助 小父さん、大きに御苦勞だつた、そこらへ附けてくんなさい。

船頭 あいく。(ト棹を立てゝ船を繫ひ)もし、新助さん、まだ向うの方ぢやあ大騷ぎでござりますぜ。

新助 そりやあその筈のことだ、橋から落ちたはどの位だか知れねえ。

みよ 亡くなつた人もござんせうな。

船頭 あるどころか、お前さんなぞもこの船へ落ちなさらねえと、直にぶくくと行くところだ。

みよ　危ふいことでござんしたなあ。
船頭　まつたく新助さんに助けられたのだ。
新助　（手紙を書き封をしてしまつて）それに就いて仲町まで送り届けにやならぬ故、今夜の歸りもおそくなれば、怪我でもしたかと私が宿で案じるであらうから、ちよつと知らせてやりたい故、この手紙を縮宿の六兵衛どのまで屆けるやうに、番太でも御苦勞ながら賴んで下さい。
　　ト百錢を二枚添へて手紙を渡す。
船頭　あい〳〵、そねぢやあ賴んで來ますから、ちつとの中待つてゐて下せえ。
新助　錢が殘つたら蕎麥でも喰つて來なさい。
船頭　それは有難い。（ト浪除石の上へ上り上手へ入る。）
新助　おみよさん。どこぞ痛みはしないかえ。
みよ　いえ〳〵何ともござんせぬわいな。
新助　そりやあ仕合せなことであつた。
みよ　ほんにお前の船がないと、川へ落ちて死ぬところ、よう船で來て下さんしたなあ。
新助　さあ、今日仲町から歸りがけ、あんまり人が雜み合ふ故、船と思つてゐたところ、祭りでみんな

休みと聞き、平生四つ手で馴染だけ、今の親仁をやつと頼み此の漁船へ乘つて來たが、喧嘩と聞いて險危故、急いで通る橋の下、途端にこはす欄干と共に上から落ちる人、これはと思ひ抱留めて顏を見ればお前故、びつくりなしてその場を漕ぎぬけ、介抱なせば怪我もなく、こんな目出度いことはない。

みよ　昨日手詰の難儀を救はれ、今日又死ぬるとこをば、不思議にかうして助けられしは、どうした深い緣ぢややら、命の親の新助さん、お禮のしやうがござんせぬわいなあ。

トこれを聞き新助思入あつて、

新助　いやそのお禮なら何よりか、私の望みがござりますが、なんと適へては下さりませぬか。

みよ　そりやもう命の親の新助さん、この身に適うたことならば。

新助　そりや適はぬといへば適はぬし、適ふといへば適ふこと。

みよ　して、その頼みは、

新助　さあ、その頼みといふは。(ト言ひ兼れる思入あつて)どうも私には言ひ難い。

みよ　なんのまあ、見るから堅い新助さん、それ故昨日も赤間さんへ情人だというたもお前の氣をおつゆさんも知つてのこと、私も安心してゐます、大方頼みと言はしやんすも、いゝいやみなことではご

ざんすまい。どういふことか打明けて早う言うて下さんせいなあ。

新助（術なき動作にて）さ、それ故どうも、口までは出てゐるけれど。

みよ　言はれぬ譯は、

新助　あの、

みよ　あの、

新助　思ひきつて言つて見ませうか。

みよ　さあ、早う言はしやんせいなあ。

新助　あの、どうぞ、

みよ　どうぞ、

新助　情人になつて下さりませ。（ト言つて顔をかくす。）

みよ　えゝ。（トびつくりして呆れし思入。）

新助　さゝ、そのびつくりは尤もだが、言ふに言はれぬ新助が心の内の切なさを、これおみよ様まあ一通り聞いて下され。しかも昨日野花屋で、その場をくろめる色仕掛嘘僞りとは知りながら、引き寄せられたその時に、これが實際であつたならとそれからぞつと思ひ染め、宿へ歸れど夢現、縮

仲間の話しさへ唯一筋にこなさんを思ひ佃の騒ぎと聞え、乘込む胸を抑へつけ。あゝ、いや〳〵、あの通り彫物をして二世までもと言ひ替したるお方のあるを知りながら、かういふ心を出しては濟まぬと心で心に意見して、ぢつと辛抱しましたに、今日又橋から落ちる時怪我させまいと抱き留め、氣を失ひしを介抱なし、正氣に復れば煩惱の思ひ切られぬ身の因果、きつとした情夫のあるのも合點で、言ひだすからはよく〳〵なことゝ思つておみよ樣、どうぞ適へて下さりませ。

ト新助よろしく思入にていふ、この中おみようつむいてゐたが、思入あつて、

みよ　南無阿彌陀佛。（ト川へ飛込まうとするを新助留めて）

新助　あゝこれ、危い、まあ〳〵待つた。

みよ　どうぞ放して下さんせいなあ。

新助　いゝや放さぬ放しはせぬ。折角私が助けた命、何で死なうとさつしやるのだ。

みよ　さあ、命の親のお前の頼み、厭と言はれぬ義理なれど、その御返事のならぬのは、二世をかけたるこの彫物、新三郎樣も以前と違ひ世に便りなき御浪々、どうも今更突出しては二世と替した操がたゝず、あちらこちらのその事情に、此の身を捨つる私の覺悟、どうぞ死なして下さりませいなあ。

新助　あゝさう聞いては尤もだが、それはあんまり一圖な仕方、死ぬる命を長らへてそでないことの頼みながら、たつた一度でよいほどに、一旦思つた私の頼み、どうぞかなへて下さりませ。

みよ　それほどまでに足らぬ身を思つて下さるお志し（ト思入あつて）そんなら、かうして下さんせ、新三郎様も御浪人故突出したと言はれては、仲町の名にかゝはれば、明日にも尋ぬる香爐が御手に入れば本地へ御歸參、その時こそは事情を話し、きれいに別れて表向お前の女房になりませうわいな。

新助　むゝ、なるほどこりや尤もだ、落日になつた新三殿故、突出されぬとはまことの心、猶々思ひが増しました。さういふ事ならその香爐の手に入るまで待ちませう。

みよ　そんなら、待つて下さんすか。

新助　假令一年が二年でも、私も男だ、承知しました。

みよ　それで私も安堵しました、かう打明けて言ふからは、お前も共々その香爐をどうぞ捜して下さんせいなあ。

新助　おゝそりやもう此の身の願ひの適ふ香爐、命にかけて尋ねて進ぜよう。

みよ　また、新三さんも永の浪々。

新助　金が入るなら何時でも、
みよ　あの、貢いで下さんすか。
新助　どうなと私がしませうわいの。
みよ　えゝ嬉しうござんす。
新助　その替りには、香爐の首尾よく手に入るその上では。
みよ　お前の頼みも、
新助　適へてくれるか。
みよ　あい。（トこなしにていふ。）
新助　こりやもういつそ（トおみよの顔に見とれ、思入あつて氣を替へ）こゝが辛抱どころだわい。（ト彼方を見て、）あれ〳〵向うへ流るゝ死骸。
みよ　えゝ氣味のわるい。
トおみよ新助に寄り添はうとして思入、こゝへ海松杭の松泳ぎながら出で、船の小縁へ手をかけるを、新助すかし見て、
新助　やゝ、おのれは赤間の、

海松　子分の海松杭、助けてくれ〳〵。
　ト船緣へ捉まるを新助拂ひのけて、
新助　うむ、さつきの返報、勝手にさらせ、（トこれにて海松杭どんと落ちるを木の頭。）よい氣味ぢやなあ。
　ト新助棹を構へて川の中を見込む、おみよ裾に縋る、これにて海松杭川に沈む、この見得、浪の音にて、「お浪ヤアイ」、「お汐ヤアイ」と呼ぶ聲にて、
ひやうし幕

三幕目

葛飾正作道場の場

〔役名――葛飾正作、穗積新三郎、富津傳七、濱田宗之助、藍屋次郎兵衞、道具屋利七、門弟。新三郎母おなぎ、正作妹おきし。〕

（道場の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面大形の襖出入り、下手一間羽目板、竹刀をかけあり、上の方に障子屋體、いつもの所門口、葛飾正作といふ表札、下の方は板羽目の稽古場、總て葛飾正作道場の態。四人の門弟稽古をしてゐる見得、角兵衞獅子にて幕明く。

伴藏　これ〳〵千八殿、何をそのやうに腹を立てさつしやるのだ。

千八　腹を立てなくつてどうするものだ。身共まゐつたと申すのにめつた無性に眉間を打ち、既のこと氣絶する所だ。

喜太　それは伴藏殿の方が惡い、なぜまゐつたといふにぶたつしやつた。

萬作　おほかた面ぽうで耳が聞えぬのであらう、了簡さつしやれ〳〵。

伴藏　いや、千八殿のまゐつたといふは、やアと立合ふと直にまゐつた〳〵と打たれぬ算段をさつしやる故、わざと打つたのでござる。

千八　なに、さう直に申すものだ。

伴藏　然らば、今一本まゐらうか。

千八　いや〳〵貴殿のやうな無法な者とは、もう〳〵立合は致さぬぞ、あゝ痛い〳〵。

ト正作奥より稽古裝にて出來りて、

正作　これはしたり、何れにもには高聲の雜談、たしなみ召れ。

皆々　恐入りましてござります。

ト花道より藍屋次郎兵衞、菓子折の風呂敷包みを背負ひし下男を連れて出來り門口へ來て、

次郎　お頼み申す。

皆々　どうれ。
次郎　藍屋次郎兵衛にござります る。
伴藏　おゝ誰かと思へばこのほどござつた藍屋殿か。
次郎　先生御在宿にござりますならば、お目通りを願ひまする。
千八　幸ひ今日は御在宿故、さゝこれへ通らつしやれ。
次郎　左樣なら御免下さりませ。（ト風呂敷包みをとり內へ入る。）
正作　これは次郎兵衛殿、ようこその御入來、唯今稽古中でござれば失禮の態御免下されい
次郎　先生には早速お逢ひ下さりまして、有難うござりまする。
正作　扨、朝夕は冷氣になりましたな。
次郎　御意にござりまする。
正作　いや、又このほどは見事な鮮魚を澤山に忝うござる。
次郎　いやもうほんの心ばかり、左樣に御意遊ばしては恐入りまする。
正作　こりやお茶を進ぜぬか。
門弟　はつ〳〵。（ト茶を汲み來る、次郎兵衛取つて）

次郎　これは憚りにござりまする。扨くどうも申上げまする。先達八幡祭禮の砌、娘がすでに水死いたすところを先生のお蔭にて一命を助かりまして、お禮は言葉に盡されませぬ。

正作　いや、左樣に言はれては甚だ迷惑、壽は天の賜物にして死するも生きるもその身の果報、されば某の妹なども誰助けねど危難を免れ、無事に宿所へ歸つてござる。

次郎　それはまつたく先生の御仁心が深き故、神や佛のお助けにて、御無事でなくては叶ひませぬ。

伴藏　いや、師匠を褒めるではござらんが、當時劍道の達人にて、而も軍學兵書の博識、

千八　又武ばかりの強きにあらず、敷島の道もお嗜みにて、文武に秀でし大先生、

萬作　とりわけ弟子を哀れみて、子も同然に日夜の御敎諭、

喜太　されば他門の人々も、德を慕つて尊敬なす、

伴藏　殊にはまた花水橋で多くの人を助けし故、

千八　上よりあまたの御褒美頂戴、これ皆先生の、

四人　德でござる。

次郎　いえもう先生の御高名は誰知らぬ者もござりませぬ。それと申すも御仁心故、お妹御樣のお行方の知れぬ中にて、わざ〳〵と娘が逗留致しをる宅までお送り下されしその御親切の有難さ、思ひ

出してもこのやうに涙が先へこぼれまする。（ト涙を拭ひ）老の癖とてこのやうに手前の申すことばかり、肝腎の品を忘れました。（ト風呂敷より菓子折を出し）これは粗末な品ではござりますが、お妹御樣へ娘めがお目にかけたいと申します故、持參いたしてござりまする。

正作　それは〳〵忝い、嘸かし妹も悦ぶであらう。

次郎　お禮がてら娘をば同道いたします筈のところ、先日も申上まする通り、私めは木更津住ひ娘は當地横山町の伊豆屋喜兵衛方の次男與五郎の許嫁、然るに千葉の御藩中山鹿毛平馬といふ侍押して呉れいと無理所望、それ故當地の緣家へ預け、程もたつたることとなればこのほど祭りへ伴ひしに途中で出逢ひ思はぬ難儀、それから外へ出ませねば失禮の段嚴重にも御免なされて下さりませ。

正作　はて扨それは嘸かし心配、若き娘を持つものは左樣な輩がうるさうござる。

伴藏　その山鹿毛平馬といふは、新三郎樣の御朋輩、

千八　心よからぬ侍と豫て噂に聞き及ぶ。

次郎　失禮ながら、お話の新三郎樣とおつしやりますは、穗積浦之進樣の御子息ではござりませぬか。

伴藏　いかにも浦之進殿の御惣領にて、即ち先生のお妹御おきし樣とお許嫁。

次郎　へゝえ左樣でござりまするか、それは〳〵不思議な御緣、娘が緣をくみましたる伊豆屋喜兵衛が

正作 すりや伊豆屋喜兵衛と申すは、穂積の御次男でござりまする。惣領の與三郎殿と云はれるは穗積の御次男の參りしところか、はて扨それは存ぜぬこと。して與三郎にも息災にござるかな。

次郎 へえ。(ト言ひ兼ねる思入にて) 御息災にござりまする。

伴藏 その伊豆屋とやらへ參られし穂積氏の御次男は、身持不埒と申す噂。

次郎 へえ、お若い中故少々はお遊びなどもござりませう。してお孃樣にはもはや御婚姻遊ばしましてござりまするか。

正作 いまだ婚姻は致さぬて、

次郎 申すまではござりませぬが、お若い同士故御婚姻はお早い方がよろしうござります。

正作 いかさま左樣存ずれど、兎角物には障りあつて、いや、盛りの過ぎぬその中に取結びをいたすであらう。

次郎 それがよろしうござりまする。いや老人の長話し、嘸御退屈にござりませう、もはやお暇仕りまする。

正作 まだよいではござらぬか。

次郎　また御きげんを伺ひませう、憚りながらお妹御様へ、
正作　これも少々不快故御挨拶もいたさず、
次郎　どう仕りまして、左様なれば先生、
正作　ようござられた。それ門弟衆。（ト送れといふ思入、門弟立ちかゝるを留めて）
次郎　あ、いや、それにおゐで下さりませ。
　ト辭儀をなし門口をしめ、下男をつれて花道へ入る。
正作　さて〳〵篤實な老人ぢやな。
四人　左様にござります。
正作　先刻玄關で、道具屋の利七の聲がいたしたな。
伴藏　へえ、先達先生へお約束を申せしその村正の差添を持参いたしましてござりまする。
正作　おゝ、持参いたしたか。（ト伴藏とつて渡すをとつて見て）どうして今時かやうな品が賣買に出たことぞ。（ト拔いて見る、皆々傍へ寄りて）
伴藏　結構なお道具でござりまする。
正作　ちよいと取次いでくれゝばよいに、代金を渡さうものを。

伴藏　又後刻上ると申しました。
正作　これ千八どの、刀掛へかけておいてくりやれ。
千八　はつ。(ト刀掛へかける。)
伴藏　喜太郎どの、萬作どのは道場を片附けてくりやれ。
兩人　かしこまりました。
　　　ト兩人奥へ入る。花道より濱田宗之助、富津傳七出來りて、
宗之　これ傳七、小路より二軒目とあれば、たしかに向うの道場であらう。
傳七　表札がござりますとの事、あれへまゐつたら分かりませう。(ト門口へ來て表札を見)劍道指南葛飾正作、これに相違ござりませぬ。
宗之　然らば案内を乞やれ。
傳七　かしこまりました。賴み申すく。
伴藏　どうれ。(ト門口を明け兩人を見て合點の行かぬ思入にて)いづれからおいでなされた。
傳七　拙者どもは旅の者、御在宿にござりますなら、憚りながら先生に御對面を願ひます。
伴藏　いかにも御在宿でござるが、各々方には、

傳七　御目にかゝれば相知れます、何卒御取次下されい。
伴藏　(正作の傍へ來て)先生、お聞きなされましたか。
正作　むゝ、何れからござられたか御面會いたすであらう。これへと申しやれ。
伴藏　はつ。(ト門口へ來りて)師匠御目にかゝりますれば、あれへお通りなされませ。
宗之　すりや御對面下さるとか、
傳七　まつぴら御免、
兩人　下さりませ。
　　ト兩人內へ入る。正作出迎へて、
正作　何れより御入來ありしか、拙者葛飾正作でござる。
宗之　豫て御尊名は伺ひをりまする、拙者どもは仔細あつて唯今姓名を申上げ兼ねまする。
傳七　失禮の段は幾重にも御用捨下し、
兩人　おかれませう。(ト辭儀をなす。)
正作　何かは知らず、まづ〳〵これへ。
兩人　御免下されっ(ト前へ進む。)

正作　見受けますれば御兩所には、お目にかゝりしことありしが、はて何所でござつたやら、
　　　　　　ト考へこんで、
宗之　いかにもお目にかゝりしは、最早三年以前の事、
傳七　而も所は上總國木更津浦の濱邊にて、
正作　むゝ、なるほどそれにて思ひ出したり。房總かけて某が海岸遊歷なせし折、
宗之　頃は彌生の末にして、身に憂きことの重なりて、八重の汐路も見え分かぬ、
傳七　朝靄深き東雲に夜道をかけて早立の心も急ぐ磯つゞき、
正作　まだ小暗きに提灯の灯りを貸せしが緣となり、
宗之　一樹の影の旅宿り、問はれし地理の話さへ、
傳七　道分石の右左り、別れ程經て三ヶ年、
正作　思ひがけなく又こゝで、
宗之　一河の流れ盡きずして、
傳七　再會なすも他生の緣、
正作　先は堅固で、

兩人　あなたも御無事で、
正作　あゝ重疊々々。（ト三人よろしく思入。）
伴藏　すりや先生が常々からお話しありしは御兩所なるか。
千八　ようこそ御入來なされました。
正作　して、御兩所にはいかゞして、拙者が姓名御存じにてお訪ね下さりしぞ。
宗之　ふとせし事より御姓名承知いたして參つてござる。
傳七　早速ながら、先生にはこのほど八幡祭禮の折、お取落しの品はござりませぬか。
正作　いかにも、懷中物を落してござるが、扨はそこ許方が、
傳七　測らずその場で拾ひとり、いづれの誰か屆けたく開いて見れば御苗字を記せし書翰に諸々方々御同姓をお尋ね申し、やうやくお宅が相知れてお屆け申しにあがりました。
正作　それは千萬忝い、かの騷動の砌故、まさしく水中へ落せしと思ひをつたに、恙なく再び戻るは盡きざるところ、人命も斯の如くでござる。
傳七　（この中風呂敷より紙入を取出して）中に聊僉はござりませぬか、お改め下されい（ト正作の前へ出す。）
正作　はて、御念には及ばねど（ト中を改め、合點の行かぬ思入にて）外に聊僉はござらぬか、狀が一通見

えませぬ。

宗之（自分の紙入より書置を出し）その狀とおつしやるは、この一通でござりますか。

正作　いかにも左樣。

宗之　然らばお戻し申しまする、（ト戻し、思入あつて）この一通をお戻し申せば、又其許よりこの方へ申し受け度き品がござる。

正作　そりや、如何なる品を、

宗之　その書置に記しある村正の一刀を、

正作　なんと、

宗之　今は何をか包み申さん、某ことは千葉の浪人濱田宗之助と申す者、

傳七　又拙者めは以前の家來、富津傳七と申す者、

宗之　兄宗次郎の自殺より三年以來尋ねし行方、思はず拾ひし紙入にて姓名知れしは天の告、

傳七　この書置に記しある濱田重代の村政は、貴殿が奪ひとられしならん。

正作　こは思ひがけなき身の疑ひ、この一通は木更津にて其許方に逢ひし折濱邊に於て拾ひしが、村正の一刀は夢もつて存じ申さぬ。

傳七　いや、この書置を所持あるからは存ぜぬとは申されまい。まさしく主人切腹のその場へ來合せ奪ひしならん、彼地で逢ひしが遁れぬ證據、さゝ包まず明してお渡しあれ。
正作　こりや無實の難題、妹が縁にて姓名も存ぜし濱田某故、縁者の者に屆けんと拾ひ取りしが我過り弓矢をかけて一刀を盗みし覺えかつもつて、
　　　トこれにて宗之助思入あつて上手の刀掛の村正の差添を見て、扨こそといふこなしあつて、
宗之　盗みし覺えござらぬ貴殿が、何故あれなる刀掛にその村正がかけてござるぞ。
正作　何と言はるゝ。
宗之　一目見ても覺えの拵、鍔は南蠻鐵にして目貫は後藤が三疋獅子、又縁頭は赤銅にて目貫に取り合ふ牡丹の毛彫、鞘は蠟色の蟲喰塗り、よもや違ひはござるまい。
正作　（かの刀を取上げ見て）すりや、これなる差添がその村正であつたるか、（ト思入。）
傳七　空とぼけをなされずと、その村正に書置添へ、身の罪詫びて返しめされ。
伴藏　やあ、最前から押しだまつて承れば、さまぐな言掛いたす不屆き者、この村正は道具屋より先生がお求めなされし品、
千八　見れば尾羽打ち枯せし浪人、察するところ生計に困り、樣子を聞いて騙りに來たか。

伴藏　人もあらうに小天狗と異名を取りし先生へ、言掛いたす憎き輩、
千八　强つて申さば竹刀にて一本づゝまゐらうか。（ト兩人竹刀を持つて立ちかゝるを傳七見て）
傳七　むゝはゝゝゝゝ、いや師が師なれば弟子までが無法無體のその雜言、いかにもお手前達が推量の通り、三年この方の浪々に人目を忍ぶ深編笠、破れ扇で門に立ち、一朱二朱の合力受け、その日の烟りも立て兼ねて飢渇に及べど、盜泉の水は呑まざる武士氣質、それに引替へ其許等は、身には絹布を纏へども心はよごれし襤褸同然、劍道指南の表札かけ、人の標示になる者が盜みするとは片腹痛い。
伴藏　やあ、言はしておけば、ずばら／＼と、
千八　我師を捉へ盜人呼ばはり、
傳七　はて、盜人故に盜人といふのだ、但し盜まぬといふ證據があるか。
兩人　さあ、それは、
傳七　よもや證據はあるまいが、
兩人　もうこの上は、（ト有合ふ竹刀を持つて立ちかゝるを、）
正作　こりや／＼兩人控へぬか。

兩人　でも、あまりなる雜言故、
正作　はて、控へいと申さば、控へてゐやれ。
兩人　へゝえ（ト兩人控へる、正作思入あつて）
正作　斯く疑ひを受けし上は、萬言を以て言ひ解くともよもや疑ひは晴れますまい、假令汚名を受くるとも諺にいふ正直の頭に宿る神の加護、いつかは晴れる時節もあらん。望みの如く其許へこの一刀はお渡し申す。（ト思入あつて宗之助の前へ出す、門弟兩人見て）
伴藏　やあ、實際求めしあの品を、お渡しあるとは先生には、
千八　如何召されたことでござる。
正作　はて、某に所存もあれば、そち達は控へてゐやれ。さ、さ、受取り召され。
宗之　我家重代のこの村正、受けとらいで何とせう。
　　　ト村正を受取る、この時下手より道具屋利七出來り、直に内へ入り。
利七　これは先生樣には、これにおいでなされましたか。
正作　おゝ道具屋の利七どのか。先刻見えられたさうなが度々御苦勞でござる、かの代金をお渡し申さう。

利七　それは有難うござります。

正作　御兩所御免下され（ト兩人へ會釋して）こりや、手箱をこれへ。

千八　はつ。（ト上手家體より手箱を持來る、正作中より包み金を出し、）

正作　卽ち代金百兩（ト渡す。）

利七　左樣なれば、お受取りを、（ト利七は金を頂き請取を正作に渡す、正作開き見て、）

正作　一金百兩、拵へ附村正の一腰、右代金慥に受取申候、葛飾正作樣道具屋利七。

　　トこれを聞き宗之助と傳七とは顏見合せ合點の行かぬ思入。

利七　よろしうござりますか。

正作　このほど花水橋にて人命を助けしとあつて、上より下さる御褒美金、封のまゝ渡し申す。

利七　有難うござりまする。

傳七　（思入あつて）すりや、この村正は道具屋より求められし品なるか。

正作　いかにも、唯今見らるゝ通り、代金拂うて求めし一刀、

兩人　え、（トびつくりする。）

利七　へい、そのお差添は私が差上げましたのでござりまする。

傳七　して、この一刀は何れよりそなたの手へは入りしぞ。
利七　これは上總の木更津でその名も高い長脇差、赤間源左衛門といふ人から買受けましたでござりまする。
宗之　すりや、赤間源左衛門より、この村正を求めしとな。
傳七　かれは御舍兄宗次郎樣が召連れられし女郎をば、盗みとつたる惡漢なれば、
宗之　扨は彼れめが所業なるが。（ト兩人顏見合せ、ハツト思入あつて、）
傳七　若旦那樣、
宗之　傳七、
兩人　ほい、（ト村正を下へおき面目なき思入、正作動作あつて、）
正作　御疑念は晴れましたか。
兩人　むゝ（ト兩人術なき思入、利七この體を見て、）
利七　いや、私はもうお暇いたしませう。
正作　おゝ、太儀であつた。
利七　有難うござりまする。

傳七　ト利七思入あつて下手へ入る。兩人はしほ〳〵と兩手を突いて、扨、葛飾氏へ吾々ども申譯なきこの場の仕儀、測らず主人の書置が手に入りしより心急き、まゐつて見れば上總にてお出逢ひ申せしことある故、いよ〳〵それと思ひこみ、最前からの雜言過言、

宗之　今更申して返らねど、折あしくも村正のあれにありしに猶以て、思ひ違へし身の粗忽。

傳七　若旦那は兎も角もいゝ、年なして拙者まで、心づかざる面目なさ。

宗之　元よりお覺えなき身にて、抗爭たまはず村正をお渡しありし御胸中、

傳七　寛仁大度のなされ方、それと知らざる吾々ども、

宗之　盜人なりと罵りし申譯には兩人とも、

傳七　御存分になしたまひ、

宗之　お心濟まして、

兩人　下さりませ。（ト兩人手をつきよろしく思入、正作も動作あつて、）

正作　あゝ、いや〳〵その言譯には及び申さぬ。身に覺えなき潔白はいつか一度は晴れようとお渡し申せしその村正、元より事を好まぬ某、たゞ各々の疑念さへ晴るればそれが身の重疊、一旦お讓り申せしからは、心置きなく持參めされ。

宗之　はゝ有難きその仰せ、身にあまりたることながら、大金を以て求められしを申受ける縁由がござらぬ。これは是非ともお返し申す。
傳七　まだその上に我々が命を添へて上げねばならぬが、この書置を持參なし、
宗之　兄宗次郎が不忠の汚名の申譯をいたすまで、
傳七　二人が命を二人の者に、
宗之　お預けなされて、
兩人　下さりませ。
正作　はて、唯今も申す如く某事件を好みなば、未熟なれども劍道の指南を致すこの正作、命にかけても一刀はお渡し申しはいたさねど、三年以來村正故艱難辛苦いたされしを推量なして、汚名を受けお讓り申せしあの一刀、武士の情を徒勞にせず片時も早く持參めされ。
　　ト正作兩人の前へ刀を出す、兩人顏見合せ思入あつて、
宗之　さほどに厚き思召し、もどくは却て本意にあらず、
傳七　左樣ござらば御意に從ひ、
宗之　このまゝ申し、

兩人 受けまする。(ト宗之助取つて頂く、傳七は平伏して辭儀をする。時の鐘。)
正作 折あしく今日は家内に少々取込ござれば、殘念ながら又重ねて、
宗之 御禮かたぐ、
兩人 參上いたし、
正作 ゆるく御意得ませう。
宗之 (村正を持ち思入あつて、)思はぬ此身の粗忽より斯くまで厚き御惠み受け、
傳七 いつの世にてか此の御恩、
正作 や、
宗之 然らば先生、
正作 濱田氏、
宗之 お暇申し、
兩人 上げまする。
ト宗之助しほくとして門口を出で、傳七は正作に感心せし思入にて附添ひ、花道へ入る。
伴藏 さてく先生には、いつもながら御勘辨強いこと、

千八　殊に大金にてお求めありし村正を遣はされしは、我々どもの及ばぬこと、

伴藏　憚りながら感心仕りました。

正作　實心面に現はれし彼等二人が流浪の辛苦、不便と存じて與へし村正、情は人の爲めならず、此の身に惡うは報ふまいて、

伴藏　陰德あれば陽報とやら、

千八　何しに惡う報いませう。

正作　どりや、身共も奥で休息いたさう。その菓子折は妹の部屋へ、

伴藏　畏りました。や、この菓子折は、（ト重いといふ思入にてばつたり落すと、中より百兩包み出る。）

千八　これは粗相な。や、こりや小判で百兩ばかり、

正作　むゝ、扨はこのほど持參せし金子を返し遣はせし故、菓子と號けて持參なせしか。はて氣の毒な

（ト立上り、袴の膝をたゝくを道具替りの知らせ、）ことぢやなあ。

ト唄、時の鐘になり、この道具廻る。

（正作宅奥座敷の場）――本舞臺三間の間中足の二重、正面瓦燈口、上手床の間、上の方に障

子家體、例の所枝折戸、下の方庭口。舞臺前の方に秋草。總て正作奥座敷の態。こゝに正作妹おきし秋草に舞ふ二羽の蝶に目を附けてゐる。

きし　今を盛りに秋草の咲揃うたる四つ目垣、花に狂うて蝶々の番ひ放れぬ睦じさ、凡そこの世に生を得し人は元より鳥畜類、僅な壽命の蟲でさへ妹背の道を辨へて、あれあのやうに餘念なく翼ならべてをりてこそ、女夫になりし甲斐もあれ、それに引替へ此の身の果敢なさ、後の世までと頼みたる夫に嫌はれ唯一羽比翼の契り知らずして、塒に迷ふ秋の蝶、袖に涙の露おきて哀れますほの糸芒、風に亂るゝ思ひぢやなあ。（トホロリと思入。）

喜太郎（奥より出で來りて）はつ、おきし樣へ申上げます、新三郎さま御親子が唯今これへおいでゞござりまする。

きし　なに、母樣がおいでなされしとか、これへお通し申しやいの。

喜太　畏りました。

ト引返して奥へ入る、おきし涙を拭ひ出迎へ、奥より新三郎母おなぎ老けたる屋敷女房の打扮にて新三郎と共に出來り、

なぎ　おゝおきしどの、これにござつたかいの。

きし　これは〳〵母様には、ようこそおいで遊ばしましたわいの。
なぎ　このほどからまゐらうと心には思へども、何をいふにも以前と違ひ一人身故に出られぬわいの。
きし　いえもう私よりも御無沙汰を（ト新三郎へ向ひ、）このほどは途中にて測らずお目にかゝりましたが、
　お早うお歸りなされましたか。
新三　暮れぬ中に宿所へ歸り、かの花水橋の騷動を程經て噂に承り、殊の外案じました。
きし　嘸お案じなされましたらう、さうしてお怪我はござりませなんだかいな。
新三　なに、怪我がなかつたかとは、そりや誰に、
きし　さあ、それは、（ト言ひ兼ねる思入。）
なぎ　いやもうそなたが見物に行つたと聞き、無事な便りを聞くまでは食事もろく〳〵咽へ通らず、大
　てい案じたことぢやなかつたわいの。
きし　危い命を助かりましたが、いつそあの折死んだ方が、
なぎ　え、
きし　いえさ、新三郎樣といひあなたまで、よしない御苦勞かけましたわいな。
正作　（奥より出來りて）これは御兩所には、よくこそござられた。

なぎ　いやも疾より參る筈のところ、何やかやに取りまぎれ、
新三　心外の御無沙汰、
兩人　御免下さりませ。
正作　いや、その御無音は御同然でござる。
なぎ　扨此間は花水橋で入水の折に刀を拔き、多くの人を助けしと、知るも知らぬもお手柄の何處へ行つても噂ばかり、
新三　御緣につながる拙者まで、肩身が廣うござりまする。
なぎ　蔭ながら嬉しさに、來る人達へ話して自慢してをりますわいの。
正作　いやも、さしてもない事をばそのやうに仰せられては、却て面目次第もない。こりや妹、お茶の仕度でもいたさぬか。
きし　畏りましたわいな。
正作　ついでに何ぞお菓子をば、
なぎ　あ、私等に何の馳走、
新三　必ず構うて下さりますな。

きし　左樣ならば御ゆるりと、どれ、お茶入れて上げませうわいな。

　　トおきしは新三郎を見て恨めしき思入にて奥へ入る、正作思入あつて、

正作　扨、今日はよきところへお二人にておいで下された。

新三　なんぞ御用でもござりまするか。

正作　少々申入れたい儀がござつて、

なぎ　案じることではござらぬかいの。

正作　いや、さのみお案じなことでもござらぬ。

なぎ　してまあそれは、

新三　いかなる事。

正作　別儀でもござらぬが、親どもいまだ存生の砌、それなる新三郎殿と許嫁せし我妹、最早年頃にも相成りし故婚姻を致さすべきなれど、血を分けし兄にすら心に適はぬ彼女が不束、所詮新三郎殿の心にも適はぬことゝ存ずる故、いまだ盃せぬこそ幸ひ、離別いたして貰ひたい。

なぎ　えゝ、おきしどのゝ婚姻を指折り算へ待ち侘ぶるに、離別せいとはそりや何故、

正作　さ、たゞ一向に申しなば手前勝手と思召さうが、所詮無益な御緣組、あなたは御存じあるまいが

新三　むう、(ト術なき思入。)新三郎殿は御合點ならん。
なぎ　これ伜、平生私が言はぬことか、紛失なせし香爐の詮議の爲めでもあらうけれど、内を外なる夜泊り日泊り、よからぬ噂も聞いてはゐれど、寶詮議の大切の身にさまでの事もあるまいと、忽にせし母が過り、隱すことほど現はるゝと正作殿の耳に入り、それ故わざと妹御に難を附けてのこの離別、そなたは何と思ひをるぞ。
新三　面目もなき今日の仕儀、申譯には似たれども香爐詮議の手蔓を求めに、一二度遊里へ參りしが、
正作　あいや、中言にはござれども、新三殿が放埓やらその儀はかつて存じ申さぬ、離縁を好むは妹が不束、なま中緣を結びなばつひには師弟の緣までも切らねばならぬことがあらうと、そこを存じてこの離別、後とも言はず今こゝで、去狀書いて下されい。その替りには此方より下世話に申す手切とやら、妹きしより其許へお渡し申す品がござる。(ト以前の菓子折へ封じたる質手形を載せて出し。)これを納めて下されい。
なぎ　ふう、すりや、おきしどのより此品を離別の印しに伜新三へ、
新三　樣子ありげなこの一封(ト手形を開き見て)一つ、元金百五十兩眞鶴の香爐一基、右はたしかに御預

り申候、尤も月切に相成候はゞ無御斷相流し申候、月日。山鹿毛平馬様、泉屋手代藤八。や、こりや紛失の香爐を質入なせし質手形、その置主は山鹿毛平馬。扨は香爐を奪ひしは、彼れが仕業であつたるか。(トきつと思入。)

なぎ　今一品のこの折は(ト蓋を明け、)や、中には小判で二百兩。

正作　質入なせしは百五十兩、利金を添へて二百兩、それにて香爐を受戻し、故主へ歸參いたされよ。

新三　は、忝き師の御厚志、お禮は詞に盡くされねど、離縁の印とござつては。何はともあれ如何して、手形はお手に入つたるぞ。

正作　それぞこのほど八幡の祭禮の折落したる我紙入を取違へ、拾ひし中に有たる手形、まつた金子はその砌人命助けし褒美として上より下さる二百兩、片時も早く質請なし、歸參致さば氣に適ふ妻女を迎へて某とも師弟の縁を結んでくりやれ。

新三　何とも以て一言の申譯なき身の過り、不埒の拙者へ斯くまでに、

正作　はて、弟子は我子も同じこと、殊には親御浦之進殿に恩になつたる恩返し、さあ二品納めて離別めされ。

なぎ　いえ〳〵聟引出なら有難くお受け申せど、二品を離縁の印とござつては、どうもお受け申されぬ。

正作　御得心ござらねば此方とても武士の意地、離別ばかりか師弟の縁をきつて貰はにや相成らぬ。

兩人　さあ、それは、

正作　但し二品受けめさるか。

兩人　さあ、

正作　師弟の縁まで切る心か。

兩人　さあ、

正作　離別いたすか。

兩人　さあ、

正作　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

正作　さゝ返答が承りたい。（トきつといふ、おなぎ、新三郎顔見合せ當惑の思入。）

新三　今更何と拙者におき、返す言葉もあらざる仕儀、（トさしうつむきゐる。）

なぎ　嘸かしお腹も立ちませうが、向後母が縁をきり遊里の念を絶たせますれば、何卒やはり元々に縁を結んで下さりませ。今離別になる時は、草葉の蔭の浦之進殿へ私がどうも濟みませぬ。定めお

て氣にも入りますまいが、おきしどのを下さるやう母がお願ひ申しまする、（ト思入にていふ。）

正作　何やうお望みなさるとも、唯今にては妹がござらぬ。

なぎ　え、おきしどのがござらぬとは、

正作　きしめは浮世を捨てました。

兩人　え、（トびつくりする。と上手家體よりおきし白の振袖墨の袈裟切髮にて出ろ、兩人おどろき、）やゝ、こりやおきしどのには、

きし　あぢきなき世をあきらめて、佛に仕ふるこの姿、お耻しう存じますわいな。

なぎ　扨は伜が不埒故、莟みの花をそのまゝにしぼむ姿の尼法師、なぜこの母がこれまでに打捨て置きしと正作殿、おきしどのの思惑が私や耻かしい、面目ない（ト新三郎を引附け扇にて打ち）思へばにつくき伜よなあ、（ト突放す、新三郎思入あつて、）

新三　此期に及び某が申譯は立たざれど、香爐詮議のその爲めに化粧坂へ入込みて、ふと馴染みたる藝者のおみよ、元は當座のことなりしが馴染むに從ひ親切に浪々の身を貢ぎの金、不甲斐なくも受けしより今となつては引くに引かれず、浮名の立ちし二人が仲、色に心を奪はれしと思召さうがまつたく以て、心の底までうつゝにならぬその證據は、卽ちこの場に於て、

ト新三郎差添へ手をかけ腹を切らうとするをおきし留めて、

きし　あもし、早まつたことなされまするな。

なぎ　おゝ出かした伜、まことの性根があるならば、切腹なしてお詫いたせ。

新三　いふにや及ぶ、（ト又切らうとするを、）

正作　こりや、何うろたへてその切腹、士たるものゝ一命は御扶助下さる主人の外濫りに捨てるは不忠の第一、既にいにしへより忠臣孝子その家衰へ恥辱を忍び、つひに會稽の時を得て名を萬天にあげしもの枚擧なすに遑あらず、まつその如く其許も紛失なせし寶を取り得、本地へ歸參なさゞれば、まことの武子とは言はれまいがな。濫りに命果たすのは、これ疋夫のなす所、死は一旦にして安く、生は得難きものぢやぞや。

新三　すりや、死ぬるにも死なれぬか、ほい（ト術なき思入。）

なぎ　とはいへどうもこのまゝでは、おきしどのへ濟まぬわいの。

きし　いえ〳〵私へなに御遠慮、この年までも家にゐて世間知らずの私故、新三樣と言交せし藝者とやらはどのやうなよい女子かは知らねども、明暮お通ひなされるとお噂聞けばねたましく、悋氣は一のつゝしみながら實はお恨み申しまして、八幡樣のお祭りへまゐりましたもありやうは、その

女子の顔が見たく思うた念が屆いてか花水橋で測らず出逢ひ、初めて見たるおみよどの、女子の身でさへほれ〴〵と思ふほどのよい器量、これではこの身の愛想が盡き、嫌はれるのも尤もと、ませたことをいふやうなれど、悟つて見れば恨みも晴れ女夫になりたい念もなく、それ故事情を兄さんに申してさつぱりと、妹脊の緣も黑髮も切て佛へ仕へる私、不便と思召すならば、妹と思うて末長うお目かけられて下さりませ。（トよろしく思入にていふ。）

なぎ　聞けば聞くほどいぢらしい、おきしどのゝ心の中、

正作　これみな定まる約束事、まが年若き身の上に不便なこととは思へども、浮世の中の女子の鑑、

きし　悋氣嫉妬の愼みが、ならばこの身は善智識、

新三　實にや前車のいましめに、

なぎ　その身は車の兩輪とも、

きし　いふべき夫に引放れ、

新三　片輪車にやるかたも、

なぎ　なきの涙のなき車、

正作　思へばうしの小車や、

きし　綱手にからむ縁の糸、
新三　引くに引かれぬ、
なぎ　この場の仕儀、
正作　あゝ義理は浮世の、
四人　楔子ぢやなあ。
　　ト四人よろしく思入。時の鐘ばた〳〵になり下手庭口より門弟出來りて、
門弟　はつ。先刻のお侍が又ぞろおいでにござりまする。
正作　むゝ、何かは知らず、これへと申しやれ。
門弟　はつ、（ト引返して下手へ入る、と下手より以前の傳七風呂敷に包みし村正を持ち出來りて、）
傳七　まつぴら御免下さりませ。
正作　そこは端近、まづ〳〵これへ、
傳七　いえ、これが勝手でござりまする。
正作　して、又ぞろこれへおいでありしは、
傳七　へい、先刻の御禮に、

正作　なに、先刻の御禮にとは、
傳七　扨、先生の御意に任せ頂戴いたせし村正の一刀、まさしくお求めありしと知り、故なく申受けましては何とも心濟まざる儀故、御返納申上げよと主人宗之助申附に、持參仕つてござりまする。
ト風呂敷を解き、村正の一刀を出し、正作の前へ置く、正作取上げ見て、
正作　むう、すりや村正を（ト思入あつて、扨はといふ動作にてすらりと拔き尖端を見てびつくりし、しやんと納めて）や、こりや宗之助殿には、切腹ありしか。
傳七　はつ（ト泣伏す。）
三人　やあ（トおどろく。）
正作　はて、あたら若者を殘念至極。（ト愁ひの思入、傳七顏を上げ思入あつて、）
傳七　先刻主人はこなた樣より歸ると直に一間へ籠り、若年ながら殊勝にも腹一文字にかき切つて度を失はず我を呼び、こなた樣への申譯、若年の至りに心逸り、科なき御身を疑ひて盜人呼ばはりなしたる不覺、その場を去らず切腹と存じたなれど、お座敷を血汐に穢すを憚りて腑甲斐なくも悄悄と恥辱を忍び歸りしは、あなたへ御難儀かけぬ爲め、また大金を以て求められし村正の一刀を緣なき者に下されし仁心厚き御所存に、家重代の村正で自殺なすは身の仕合せ、くれぐ〵この事

しか。

正作　申下げ御返上いたすやう、又二つには書置を國屋敷へ持參なし兄の汚名を雪ぎくれと、遺言なしてにつこと笑ひ、これにて思ひおくことなしといふ息さへも尻聲なく、笛かき切つて果敢なくも相果てましてござりまする。（ト愁ひの思入にていふ。）

正作　あゝ千悔なすとも返らねど、よしなき一通某が拾ひしばかりに、若者に果敢なき最期いたさせしか。

きし　思へばこの身につまされて、おいとしうござりまする。

傳七　これも前世の因縁ながら、僅か三年立たぬ間に、兄弟二人村正の刄を以て相果つるは、

新三　實に村正は銘刀なれど、血汐を好むと世の取沙汰、

正作　何にもいたせ殘念至極、（ト愁ひの思入あつて村正を取り）この村正はその方へ一旦讓りし品なれば賣代なして取片附、追善供養をいとなまれよ。

傳七　はゝ重々厚きお志し、お禮は言葉に盡されませぬ。
　ト村正をとつていたゞく、此の時時計の音になり、奧より以前の伴藏白臺へ拵へ附の差添を載せしを持ち出來りて、

伴藏　はつ、申上げます。

正作　何事なるぞ。

伴藏　先達の御褒美として、又々上より正宗の一刀御使者御持參にござりまする。（ト正作の前へ出す。）

正作　すりや、この正宗を下されしとか。（トちり手水をして抑しいたゞき）して、御使者には、

伴藏　玄關にお控へなされてござりまする。

正作　直に客間へ御案内申せ。

伴藏　はつ。

正作　こりや〳〵、上下を持ちやれ。

伴藏　はつ（ト奥へ入り持つて來る。）

新三　花水橋のお手柄にて、

なぎ　又もや上より御賜物、

傳七　これ皆仁者の御德故。

正作　あゝ、悲しみあれば悅びと、

新三　おきしどのゝ剃髮といひ、

きし

なぎ　宗之助どのゝ御切腹、

皆々 實に世の中は、

ト皆々愁ひの思入、正作上下を取つてひつかけるを木の頭。

正作 空でござるな。

ト袴の紐を結ぶ、謠、大小入りにて、よろしく、

ひやうし幕

四幕目

化粧坂仲町の場

同返し

雪之下縮宿の場

仲町裏手の場

洲崎土手の場

〔役名——縮屋新助、念佛六兵衞、穗積新三郎、荷擔ぎ作助、縮屋七郎兵衞、同九郎助、道具屋利七、船頭長次、縮屋三四郎、同八兵衞、梓巫子おゆみ、藍屋次郎兵衞、娘分おすゞ、縮屋四郎藏、荷擔ぎ市兵衞、同十藏。藝者おみよ、野花屋女房おつゆ、藝者、娘分等。〕

（仲町野花屋の場）——本舞臺一面の本舞臺、正面葭戸、上の方折廻して塗骨障子、いつものところ

門口、下の方千本格子、この前に八幡宮と印せし御神燈、總て化粧坂仲町野花屋の態。こゝにおゆみ巫子の打扮にて箱を前におき、梓弓を持ち、口寄せの思入、これと對ひ合つて五人の娘分聞いてゐろ。流行唄にて幕明く、

ゆみ　神は上らせたまへり、
　　卜口寄せ仕舞ひになる。
お鈴　なるほど、口寄せといふものは不思議だねえ。
ゆみ　何でも寄らぬといふことはござりませぬ。
娘一　よく笑談に、辨慶や德利を寄せるさうだね、
娘二　口を利かないものでも寄りますかねえ。
お鈴　それは何でも情がありますから、口をきかないことはありませぬ。さあ、この後はどなたでござりまする。
お鈴　この後は、私が生口でござりますよ。（卜紙撚にて水向をする。）
娘三　おすゞどん、長さんかえ。
お鈴　知れたことさ。

娘　いゝきついこつたね。
　　　　ト此中おゆみ眼を瞑り、巫女の調子にて、
ゆみ　寄り來るわく〳〵あづさの弓に引かれて、寄り來るわく〳〵。
娘一　それ長さんが來なすつたよ。
ゆみ　これおすゞ、折角寢てゐるものを、何で起したのだ。
お鈴　何でとは知れたこと、一昨日私がお前に貸した三兩のお金はどうおしだよ。
ゆみ　あの晩手前が寢番だといふから嫌になつて、あひるへ行つて遣つてしまつた。
お鈴　何で又あひるへ行つてあんなに手をば廣げたのだ、お金の出る譯ぢやあなし、何だつてそんな所へ行つたのだよ。
ゆみ　それでも手前と話をしてゐると、お前の腋臭が臭つてたまらねえからさ。
お鈴　おや〳〵まあ憎らしい、あんな嘘をついてからに、
ゆみ　なに嘘をつくものか、その上醉ふとまだその上に、（ト言ひかけるをお鈴あわてゝ留めて）
お鈴　あゝ、それを言つては惡いよ。
ゆみ　言はなくつてどうするものだ。

お鈴　もういゝからしまつておくれ〳〵。（トおゆみの口を押へるを振拂つて、）

ゆみ　いえ〳〵寄つたゞけは言はにやあならぬ。

お鈴　これさ、後生だから言つておくれでないよ。

　　ト金を紙に包み、おゆみにやる、

ゆみ　おや〳〵これは一分かえ、思ひがけない（ト思入あつて、）神は上らせたまへり。

　　トおすゞの口寄せを仕舞ふ。と花道より船頭長次出來りて、

長次　あゝ眠い〳〵、なんでこんなに眠いんだらう。（ト言ひながら内へ入る。）

娘分　おや、長さんぢやござりませんか。

長次　おせんどん、何だか今日は眠い日だねえ。

娘一　そりやあお前眠い筈さ、今口寄せをされてゐなさるからよ。

長次　誰がおれを寄せるのだ。

お鈴　誰がお前を寄せるものか、私が寄せたのさ。

長次　道理で大そう眠かつた。

お鈴　これ長さん、よく私の讒訴をお言ひだね。私と話してゐると腋臭が臭くてたまらないなんてさ。

長次　そりやあ嘘だ〳〵、かつがれたのだ。
お鈴　いえ〳〵嘘でないのは、みんなが證人、
皆々　その通りでござんすわいな。
ト此中おゆみは風呂敷竹笠を持ちて門口へ出で、舌を出して下手へ入る。
お鈴　さあ、巫女さん、もう一ぺんやつておくれ、（トあたりを見て）おや、今の巫女さんはどこへ行つたか。
娘一　ほんにどこかへこそ〳〵と、
娘二　それぢやあ嘘を言つたのかね。
長次　いつでも來る巫女だらう、彼奴は嘘ばかりついてゐる。
お鈴　おや〳〵そんならいやがることを言つて、一分取つて逃げたのか、油斷のならぬ世界だね、この埋草は長次さん、私と一緒に奥へおいでよ。
長次　お前と一緒は恐れるな。
お鈴　えゝ憎らしい、おいでといふに、（トおすゞ先に長次奥へ入る。）
娘一　長さんもいゝ男だが、よく達引いなさるね。

娘二 そこが思案の外とやらさ。
娘三 なに、あひるに情婦があるさうだから、その踏臺にされるのさ。
娘四 お客で言つて見よふなら、
娘一 縮屋の新助さんだね。
娘二 まあ、そんなものさ。
ト流行唄になり、おみよ藝者の打扮にて出來り、
みよ おせんどん、巫女はもう歸つたかえ。
娘一 おや、おみよさん、
皆々 いつの間に、
みよ 今日は縮屋の新助さんが來なさんす約束故、さつきから來て待つてゐるが、早く來て下さんすりやよいが、
娘一 吉田家の船頭衆が今おいでなさんすといつてゞござんした。
みよ ちつと話がござんすから、下座敷の靜かなとこを明けておいて下さんせいなあ。
娘一 あい〳〵合點ぢやわいなあ。

娘二 それぢや、隅の六疊を片附けておかうね。

ト皆々奥へ入る、おみよ殘り思入あつて、

みよ ほんに待たるゝより待つ身とやらで、新三さんの身の上になくて叶はぬ香爐の金、せつぱ詰つて新助さんに無心をしたら、今日都合して來なさんす約束故、さつきから待つてゐれど、首尾よく金が調うて新三さんの望みが叶ひ、香爐が手に入るその時は新助さんに豫ての約束、一つよければ又一つ、苦勞のたえぬ浮世ぢやな。

ト煙管を杖にちつと思入。花道より新三郎出來りて、

新三 正作殿の厚恩に測らず寶が手に入りて本地へ歸るこの新三、それに就けて許嫁のおきしが尼となつたる故、おみよと緣を切らざれば正作殿へ義理たゝず、兎やせん角やと來る道も思案にくれてうか〳〵と、いつの間にやらもう野花屋、義理ある譯を打明けて話した上でと思うたが、さうしたならば未練が殘り別れ兼ねようと存じた故、愛想の盡きた態になし心を鬼に緣を切らん。(ト思入あつて門口へ來り、そつと内を覗き、)あゝ、丁度おみよがたゞ一人、(ト近くへ來り、)あゝ、最早言はねばならぬかと思へば、胸もどき〳〵。はて、何と言つたらよからうぞ。

みよ (聲を聞きつけて)もし、誰さんでござんすえ。(ト是にて新三郎門口より後ろ向に入る)えゝ氣味の惡

い、誰ぢやぞいの。
新三　誰でもない、おれぢやわいな。
みよ　や、新三さんか、待つてゐたわいなあ。
　　ト つか〳〵と來て新三郎に縋る、新三郎如何しようかといふ思入あつて、わざと手荒く突退け。
新三　なに、待つてゐることがあらうか、そりや人が違ふわいの。
みよ　なに、人が違ふとは、
新三　今仲町で名うての藝者、新藁おみよに逢ひたいと言はれる株は持たぬわいの。
みよ　え丶もう人の氣も知らず、來い〳〵早々愛想盡し、まあ下にゐやしやんせいな。
　　ト 手を取るを新三郎振拂つて、
新三　立つてゐようと坐つてゐようとおれが勝手だ、うつちやつておけ。
みよ　(思入あつて)もし新三さん、いつにないお前の樣子、酒でも呑んで來やしやんしたかいな。
新三　いつおれに酒を呑ました、呑んだ覺えはないわいの。(トつんとして後を向く。)
みよ　お前は私に氣を揉ませ、樂しむかは知らねども、私や氣が氣ぢやござんせぬ。まあ下にゐやしやんせ。え丶下にゐやしやんせいなあ。(ト新三郎の裾を捉へ無理に坐らせる。)今更いふではなけれども

昨日や今日の仲ではなし、算へて見れば三年越し互ひに隱すこともなく、內密のことも打明けて見得も飾りもないほどに、眞實の女夫と思うてゐるに、事情も言はずそのやうに私に當りなさんせずと、惡いことがあるなれば何故に言うては下さんせぬ。

新三 そりや惚れ合うた中のこと、言はぬは愛想が盡きて故、

みよ なに、私に愛想が盡きたとは、

新三 假名で言へば、いやになつた。

みよ えゝ、

新三 飽きたによつて緣を切る氣ぢや。

みよ えゝゝゝ（トびつくりして）そりや、私に何科あつて、

新三 科はその身に覺えがあらうが。

みよ いえ〳〵お前に愛想を盡かされる私や覺えはござんせぬわいなあ。

新三 なにないことがあるものか、きつとした證據がある。

みよ なに、證據があらば見せなさんせいなあ。

新三 おゝ、證據は卽ちこの腕、これ、新といふ字の彫物は、外でもない縮屋の新助への心中ならうが

トおみよの腕をまくろ。

みよ　いえ〳〵これは新三の新の字、この彫物はお前へ心中、

新三　えゝ止してもくりやれ、同じこの名におれといひ、まことは縮屋新助へ心中立といふことは、誰いふとなく世間の噂。

みよ　そりやまあ誰が、そのやうな事を。

新三　はて、言ふまいものか、見る通り三年以來流浪の身の上、首尾よく尋ぬる香爐が手に入り、本地へ歸參がかなへばよし、さもない時は浪々に一朱二朱の合力受け、その日の活計を立てねばならぬ。又新助は年々に賣先廣く行々は分限になら るゝ身の上故、襟につくのが遊里の慣ひこりや乘替へるのも尤もだ。

みよ　えゝまあそんな無理言うて、新助さんとのその仲はお前も知つてぢやござんせぬか。

新三　知らぬ〳〵、おりや何にも知らぬわいの。

トきつといふ、此時奥より女房おつゆ、おすゞその他娘分四人出來りて、

つゆ　あゝもし新三さん、樣子は奥で承りました、まあ〳〵お待ち、

皆々　なさんせいな。

新三　おゝ、さういふはお内儀、皆の衆、

つゆ　どういふ譯か存じませぬが、新助さんのことならば知らぬというては濟まぬわいの。お前も知つてござんす通り、いつぞや祭りのその折に赤間さんへ言譯なく、私が頼んだ情人、それがあちらこちらなら乘りかへまいものでもないが、お前を突出し新助さんへ惚れるやうな藝妓衆は、まあ仲町にはござんせぬ。

お鈴　誰がそんな事をいつたか、岡燒餠の焚附を眞實にするとは新三さん、お前さんでもござんせぬ。

娘一　外にお腹の立つことがあるならあると隱さずに、

娘二　割つてお話し、

皆々　なさんせいなあ。

新三　（思入あつて）おゝ別に腹も立たぬけれど、愛想の盡きたは薄情故、五大力のせりふにも、妓女に戀なし寶を以て戀とすと、並木五瓶が書いた通り、寶に迷ふは遊里の慣ひ、その薄情に愛想が盡きた。（卜氣の毒なる思入にて）ふつと厭だと思つたら、おみよはもとより此家の内儀、二階廻しの女中達、これまで長のその中は、よう親切に、いやさ、その親切に引きかへて身幅も狹き浪々におれをば袖に新助が襟についたる皆々の仕方、あゝ薄情なと思つたら愛想もこそも盡きた故、突

出されぬ中こつちから縁を切りに來たのだわ。（ト思入あつていふ。）

みよ　もし、お上さんお聞きなさんせ、言ひたいがひの愛想盡かし、こつちはさういふ心と知らず、尋ねなさんす香爐の在所が知れても、肝腎の金がなうては手に入るまいと新助さんに嘘いうて、百兩無心をいうておいたに。

新三　むゝ、お爲ごかしにその金でおれが身へ恩を着せ、否應なしに縁を切り新助の方へ行氣であらう、その香爐も手に入つて、いや、我手に入らず一生涯、身は浪人で暮すとも、けがれた金は要らぬわい。

みよ　あれまあ、あんなこと言うて、

新三　言はねばどうも、腹が癒ぬわい（トきつといふ、おつゆ思入あつて、）

つゆ　さつきからの樣子を見るに、どうやら事情のありさうなこと、そりやもう人の口故に、襟についたの、袖についたのといふものもござんせうが、外の者は知らぬことおみよさんに限つては、憚りながら私が證人、そんなことはござんせぬから、腹が立つなら立つ譯を、何故に言つては下さんせぬ。おみよさんもお前さん故多くの客を突出して、ぱつと浮名のたつた仲、今更それを切られては、この土地にもゐられぬわけ、この妓がゐねば三軒の茶屋の衰微になることなれば、機嫌

なほして相替らず來て上げて下さんせ。はて、お前さんも昨日今日この仲町へもござんすまい、酸も甘いも御存じなら、もうよい加減になさんせいな。

ト これにて新三郎愛想盡しを言はうとして氣の毒なる思入、

お鈴 もし、新三さん、お上さんがあのやうに事を分けて言はしやんすれば、もう大概に仲直り、一口あがつて下さんせ。それ、お肴とお燗を早く。

娘二人 あい〱。

ト 奥へ入り、奥より臺の物銚子盃を持ちて出來り、中央へおく、

つゆ さあ、お厭であらうが私のお頼み、機嫌なほして新三さん、一つ上つて下さんせ。

ト 盃を取つて出す、新三郎氣の毒なる思入にて、

新三 お志しは忝いが、(ト氣を替へ)愛想が盡きたら呑みたくない。(トおつゆの出した盃を打落し)長く居たなら薄情が、こつちの身體へうつるであらう、うつらぬ中に(ト思ひきつて立上り)歸りませう歸りませう。(トこれにておつゆむつとせし思入にて、)

つゆ もし、新三さん、待ちなさんせ。長くゐたなら、薄情がうつるとはそりや何事、この妓はいふに及ばず、私を始めこいらまで不實なことをせぬのが自慢、お氣にさはるか知らねども、これまで溜

る勘定も出所は知れたこの妓故、ついに一度催促をしたことはござんせぬぞえ、これが不實や薄情なら、疾うに二階を斷つて、お前を客にはせぬわいなあ。
お鈴　ほんにお上さんのお言ひの通り、これまでお前のおいでの時、いつも變らずやれこれといふのはみんな實がある故、おみよさんがいやになり、切れる切れぬはそつちの勝手。こゝに長居をしてゐると薄情なのがうつると言はれ、此の野花屋の暖簾にかゝれば、もう來なさりもしなさるまいが、こつちも客にできぬから、さあきり〳〵と歸りなさんせ。
新三　おゝそつちで歸れと言はねえでも、歸りたくてうづ〳〵してゐる、この野花屋も今日が見納め。この後敷居を跨ぐものか。
お鈴　あい、跨いで貰ひますまいよ。
新三　そんならこれが、（ト皆々を見て氣の毒だといふ動作あつて）再び顏を見るものか。
ト思入、おみよ泣きながら裾にすがりて、
みよ　すりやどうあつても愛想が盡き、私と縁を切らしやんすか。
新三　おゝ、突出されぬ中こつちから切れたら汝の仕合せだ。
みよ　なんでこれが私の仕合せ、假染ながら三年越し、人に知られた二人の仲、未練なやうだが新三さ

ん、腹が立つなら立つやうに、どうなと譯をつけようから、心をなほして下さんせぬか。
新三　ほかのことなら心をばまた取直すこともあらうが、目當に思ふ汝に飽き、愛想が盡きて切れるのだ。
みよ　これほど思ふ私をば、
お鈴　愛想が盡きて切れるとは、
皆々　あまりといへば、
つゆ　あこれ、皆々も靜にしな、傾城に眞實なしとは譯知らぬと、新内節にもある通り、苦界の譯を知らぬなら、いくら言つても駄無なこと、おみよさんも心が殘り切れにくゝはござんせうが、思ひきつてしまひなさんせ。假令をしいお客でも、死んだと思へば濟まうわいな。
新三　さすがはお内儀、よいあきらめ、死んだと思うて（ト思入あつて、）勝手にしやれ。
みよ　そんなら、どうでも、
新三　切れる證據は汝から貰つた起請のこの守袋、去状替りにくれてやるぞ。
ト懐ろから守袋を出し、おみよに打ちつける。
みよ　いえ〳〵私や受取らぬわいな。（ト守袋を投げ返す。）

つゆ　爭ふものは中よりと、去狀替りのこの守袋は、私が預かつておかうわいな（ト取つて懐へ入れる。）

お鈴　さあ、薄情のうつらぬ中、ちつとも早く歸らしやんせ。

新三　おゝ、守袋を渡せば切れたる證據、後でとつくり、これで後腹が痛めぬわい（ト思入あつて立上る。）

お鈴　えゝ、ぐづ〳〵せずと（ト新三郎を門口へ突出し）をとゝひござんせ。

ト門口をぴつしやり締める。新三郎思入あつて名殘をしき思入にて、

新三　この門口の見納めなるか。

トぢつとこなし。唄になりしほ〳〵と花道へ行き、後を振返り免してくれと手を合せ、思入あつて氣を替へ逸散に花道へ入る。お鈴門を明け彼方を見て、

お鈴　あれ〳〵、打たれでもするかと思つて、雲を霞と逃げて行つた。

娘一　ほんに人といふものは、何時氣が變るか知れぬもの、

娘二　なるほど、男の心と秋の空とは、よくいうた、

皆々　ものぢやわいな。

トおみよはこの前より泣伏してゐるのでおつゆ傍へよつて、

つゆ　これ、おみよさん嘸悔しうござんせう。これまで足かけ三年越し、みんなお前の働きで呼通した、

新三さん、愛想が盡きたと言ひがゝり、無理に切れたる今日の仕儀、然し新助さんと關係のある
お前の身でもないことなれば、又その中には心も解け、彼人の方から詫つてござんすに違ひない、
必ずきな〳〵思ひなさんすな。
みよ　お上さん、有難うござんす。（ト有合ふ茶碗など取つて）一つ注いで下さんせ。
お鈴　お前願酒ぢやござんせぬか。
みよ　さあ、好な酒も新三さんと一つになりたいばつかりに、金毘羅樣へ斷つたれど、もうかうなつたからそれからそれ、願酒も破らにやならぬわいな。
お鈴　なるほど尤もでござんす、かういふ癇の起つた時には、酒でなければならぬわいな。
つゆ　然しお前は醉はしやんすと、氣が强くならしやんす故、澤山呑まぬがようござんすぞえ。
みよ　ほんの一つか二つばかり、
お鈴　ちとお相手でもしませうかねえ。
ト皆々にて酒宴になる。と、花道より新助同じ縮屋仲間の七郎兵衞、九郎介と共に出來る、
七郎　ときに新助殿、今日は二人交際故、頭割では不承知だぜ。
九郎　それ〳〵貴公はおみよといふ情人があれば、實はおんぶでなければ合はぬて。

新助　いえ〳〵さうはなりませぬ、お前方は私よりも得意の多い大商人、こつちでおんぶをせねばならぬが、遊び事故へだてなく三つ割にしませうわいの。
七郎　そんなら藝者か船賃でも、
九郎　そなたの方で出すがいゝ。
新助　はて商ひづくなら五厘でも爭ふけれど遊びごと、どうなと私がしませうわいの。
七郎　その氣前におみよが惚れたか。
九郎　えゝ色男め、あやかりたいわい。（ト新助の背をたゝく。）
新助　あんまりおだてゝ下さりまするな。（ト三人門口へ來て、）
九郎
七郎　お家さん、來ましたぞや〳〵。
つゆ　おや、どなたかと思ひましたら、七郎兵衛さんに九郎介さん、
お鈴　お祭り限りさつぱりと、きついお見限りで、
皆々　ござんすわいな。
七郎　つい、勘定に隙がなくて、大きに無沙汰をしましたわえ。
九郎　早くお稻とおやまをば、口をかけてやつてくりやれ。

お鈴　丁度お稻さんもおやまさんもこつちの家へ出てゐなさんすが、もう今に明きますわいな。
九郎　それは丁度よい首尾だッ
新助　（後より内へ入りて）どなたもこの間は。
つゆ　おや新助さんかえ。あゝ惡いところへ、
新助　え、
つゆ　ようおいでなさんしたな。
新助　いやもう約束の事がある故、嘸おみよどのが待つてゐようと急いだせいか、暑うござります。
お鈴　ほんに待兼ねてゐなさんしたわいな。
七郎　いよう〳〵、待たれ樣〳〵。
九郎　いろ男にはなりたいものだ。
新助　これ、美代吉へ、新助が約束のものを持つて來たと、ちよつと呼びにやつて下され。
お鈴　いえ、呼びに行くにやあ及びませぬ、こゝへ來てゐなさんすわいな。
　　　トおみよを敎へる、新助見て、
新助　おゝそこにゐたか、いや逢ひたかつた〳〵、（ト皆々へ辭儀をしておみよの傍へ來り）これ、賴まれた

ものを持つて來ましたぞ。

トおみよ新助を見て、お前故に新三郎に切られたといふ思入、酒に醉つたる動作にて、

みよ　なんの、來ないでもよいことを。

トおみよつんとする、新助合點の行かぬ思入にて、

新助　なに、來ないでもよいとは、

七郎　あゝ、貴公の來やうがおそい故、ちよつとひぞつて見たのであらう。

九郎　こゝが戀路の面白いところだ。

お鈴　まあお一つお上りなさんせいな。

娘一　どれ、お酌をしませうわいな。

ト七郎兵衞、九郎介の兩人はよろしく酒を呑む、奥より船頭の長次出來りて、

長次　おゝ縮屋さん、今日は遊びかえ。

七郎　やあ、お前は若竹の長次さん、いつも御用を有難うござりまする。

九郎　まあこゝへ來て一つお上りなさいませ。

長次　御馳走になりませうかね。

新助（思入あつて）これ、おみよどの、何故物を言はぬのぢや。
みよ　世辭のないのは性得さ。
新助　なんで今日はそのやうに、つん〱としやるのだ。もしおかみさん、おみよどのはどうかしましたか。
つゆ　あい、ちつと氣のもめることがあつて、氣合が惡いのでござんすわいな。
新助　それは持病の癪でござりませう、癪ならよい藥があります、（ト紙包より藥を出し）これは越中富山の反魂丹、よく利くから呑まつしやれ（ト藥を出すを、）
みよ　私やなんともござんせぬ、藥なぞは入らぬわいな。（ト拂ひのける、これにて丸藥こぼれる。）
新助　えゝ勿體ない、入らずば入らぬでよいことな、そこら中へこぼしてしまつた。
　　ト丸藥を拾ひとり、藥包へ入れる、
七郎　これはきつい疳癪だ、然し人目がある故であらう。
みよ　えゝもう、ぢれつたい。
　　トつッと立つて行かうとするを、新助つか〱と行きて裾を捉へ、
新助　これ、おみよどの、待たつしやれ。

みよ　なんだえ。
新助　そなたの頼みの五十兩を、都合して持つて來たに、（ト懐から財布を出す。）
みよ　すりや、あの金を（ト財布を見て氣の毒なる思入であつたが氣を替へ）もうその金も入らぬわいなあ。
　　　ト顔を背ける、新助むつとせし思入にて、
新助　私が來やうもおそいけれど、人に物を頼んでおいて、腹を立つといふがあるものかいの。
みよ　さあ、お前に科はないけれど、腹を立つのは私が持前、
新助　腹を立つては徳がない、まあそれよりはこの金を、（ト財布を出すを、）
みよ　入らぬわいな、（ト新助を突倒す。）
七郎　いや、こりや怪しからぬ體裁。
九郎　それでは情人だと言つた新助は、
長次　少しぺけさね。（ト新助を見て嘲笑ふ。）
新助　これ、美代吉、いや、おみよさん、なぜ入らぬものなれば私にこなたは頼んだのだ。そつちの心は知らねども、こつちに豫ての望み故、出來ぬ金をも才覺して持つて來たのに愛想もなく、唯入らぬとはどうしたのだ。譯があるなら譯を言やれ、さ、その譯はどうでござる。

みよ　その譯が聞きたいかえ、聞きたくば言うて聞かさうわいな。おせんさん憚りだが一つ。
ト茶碗を出す。
娘一　おや、お前願酒ぢやござんせぬか。
みよ　願酒も破つてしまつたわいな。
娘二　大そう醉つてゐなさんすに、
娘三　これで呑んだら過ぎようぞえ。
みよ　なに、私やあ、醉やあしないわね、(ト酒を呑む。)
つゆ　おみよさん、新助さんへの話しなら、明日のことにしなさんせ、今夜に限つたことでもない、まあそれよりは奥へ行つて、ひと寢入しなさんせいな。
みよ　いえ〳〵言はねばならぬわいな。もし、新助さん、譯といふのはかうでござんす、お前に賴んだその金は、私が二世も三世もかけて言交した新三さんが、なくてならぬ金故にお前に無心も言うたれど、その新三さんが今しがた來なさんして言はしやんすには、浪人者故見限つて金に目がくれ縮屋の襟に着いたといつにない詞も荒く腹を立て、取交したる起請までこゝへおいて行かしやんしたれば、もうこの金は新三さんへ上げることができぬから、それ故これは入らぬわいなあ。

新助　むゝ、そんなら私がことからして、腹を立つて切れたとか、それはもつけの幸ひだ。新三殿と切れたなら、約束通りこの私と、

みよ　なに、約束通りとはえ、

新助　はて、いつぞや船で約束したは、新三殿が元の身になつたら別れて、私に身を任せようと言うたぢやないか。

みよ　ありや皆嘘でござんすわいな。

新助　え、そんならあの時言うたことは、嘘ぢやといふのか。

みよ　あい、陸と違つて川中の船の中には唯二人、厭と言うたら手込にもしなさり兼ねぬ素振故、ほんのお前の氣休めに、あゝ言うたのはみんな僞り、それが苦界の仕掛文庫、打明けて言や僞りを眞實と思ふは舟水のまだ味知らぬお前故、手鍋提げよと口には言へど實は乘りたい玉の輿と唄に唄へどありやうは、玉の輿より味噌こしを提げても好いたその人と添はうと思ふが苦界の樂しみ、身の詰りとは知りながら、浮名巽の中裏で噂になつた新三さん、裡は元より看板の櫛笄も入上げて、金八さんから損料で借りて座敷へ出るやうになつても襟につかぬが情。譬へて言はゞ船よりも駕籠は丈夫なものなれど、乘りかへられぬが仲町育ち、新地の尖端ぢやなけれども、かう乘

つきつていふからは、これが別れの八幡鐘、突きだされたら新助さん、言へば言ふほどお前の趾はて三月から袷着る嘘は所の習ひぢやわいなあ。

新助　そんなら悉皆僞りとか、もしお上さん、今美代吉が言ふ通り、嘘をついてもようござりますか。

つゆ　さあ、よいといふではなけれども、厭な客にも比翼蓙と惚れたやうにいふのが勤め、何ぼ正直がよいというて、厭なお客を厭というてはそれではお客がござんせぬ。譬へて言はゞ縮屋さんが、柄の悪い縞柄でも褒めて賣らねば賣れぬ道理、悪いと知りつゝ嘘言ふも賣買づくでござんすわいなあ。

トこれを聞いて新助思入。皆々この中酒を呑んでゐたが、

七郎　これ新助つ子、いや新公、つい今來る道々も、來月國へ歸る時は一緒に連れて行くのだが、縮屋仲間におみよほどな女房を持つとる人はないと、自慢たら〳〵言つたのは、ありやあいつたいどうしたのだ。

九郎　大方こんなことであらうと思つた。一二を爭ふ仲町の藝者に情人はできぬ筈だ。

長次　これから見るとお前方は、年中江戸へ出てゐる替り、藝妓衆を傍へ引附け、見せ附けた話だね。

七郎　可愛がられはせぬけれど、まさかこんな目には逢はぬ。

九郎　ほんに縮屋の面汚しだ。
娘一　えゝも、よい加減にいゝなさんせ。
娘二　新助さんへ氣の毒ぢやわいな。
お鈴　なに構ふことがあるものか、ついに一度渡りも出さず、新助さんの氣の利かぬのは、今初まつたことぢやござんせぬ。
つゆ　これ、なぜそのやうな憎まれ口を。新助さん、堪忍して下さんせ。
七郎　いや、この間抜けなのに引替へて商賣づくには賢い奴、おれが得意も何軒か競込まれて取られたが、今日の仕末で腹が癒た。かういふ事とは知らぬ故、まことと思つてこの間國へ報せてやつたつけが、飛脚賃だけ損をした。
九郎　ほんの縮屋といやあ、角兵衛獅子と同國で間抜な者のやうに言ふ故、人のことでも嬉しいから、行く先々の得意衆へ、今度私が仲間にて藝者に思ひつかれましたと、世辭半分に觸れ歩いたが、これでは國へも得意へも、また觸れなほさねばならぬわえ。
長次　へゝえ、それぢやあぱつと世間まで浮名の立つた新助さん、今更こんな目に逢つちやあ、外聞も悪いわけだが、然しこれが本役だ。

お鈴　左樣々々、いま仲町で一二の藝者衆新藁のおみよさんと言つちやあ誰知らぬものもないに、よく口幅つたくなく情人だなどゝ、

四人　ほんに言はれたものだね、はゝゝゝゝ。

新助　（思入あつて）あこれ〳〵、なにも世間へ見得らしく觸れ歩きはいたしませぬ。今お前方のいふ通り、野暮な生れのこの新助、誰が眼で見ても眞實とは思はれまいが、然しまた形のないことは言ひませぬ。新三殿が香爐を詮議し出して歸參したなら斷りいうて、隨ふといふた言葉を僞りと知らぬは私が正直故、耻かしながらその時より神や佛へ願がけなし、待ちに待つたる甲斐もなく、折もあらうにこのやうに二人の衆と一緒に來た今日に限つて愛想盡かし、何故かういふことなれば、内密で言うては下されぬ。いかに嘘をつくのが慣ひとて、そりや情ないどう慾だ。また、神樣や佛樣も何故知らせては下さりませぬ。（ト淚を拭ひ思入あつてお露を捉へ）これ、お上さん、嘘を眞實と思つたは私が落度でござりまするが、かういふ事と知らぬ故、集めし掛合を使つてしまひ、仲間内から借荷してそれを殘らず質入れなし、身の詰りとは知りながら、思つた念を晴らさうばつかり、それもかなはぬ今日のしだら、二人の衆の耳に入れば、國は元より仲間へもこの事情が知れますれば、顏向けならぬ私が身の上、この江戸にもゐられねば又在所へも行かれませぬ。騙

されたのは仕方もないが、明日から路頭に迷ひまする、それが悔しうござりまする。

つゆ　尤もでござんす〳〵。腹が立たうがおみよさんがお前に向つて當るのは、少しく事情のあること故、私があとでとつくりと言ふこともござんすれば、今日はこのまゝお歸りなさんせ。

娘一　ついした事から言募り、呼びたい客を切つてしまひ、後で後悔することは私等にも往々あること、

娘二　お上さんに何にも任せて、今日は新助さんあつさり一口呑みなほし、機嫌なほして、

皆々　ござんせいなあ。

新助　お前方がそのやうに言うてくれるは嬉しうござりまするが、人に顔向ができませねば、どうもこのまゝ歸られませぬ。

七郎　これ〳〵新助、貴公ばかり情人だといつても、先方が情人でないからは、

九郎　ぐづ〳〵言つても仕方がない、騙されたのが間拔故、

お鈴　人を恨まず身を恨み、

長次　きり〳〵と歸りやあがれ。

ト新助の肩を持つて引立てるを振拂ひ、

新助　かうとは知らずこなたにも、取られた金は何程だ。

お鈴　そりやあお前ばかりぢやあない、お客さんから貰ふのはこりやあ女中の當り前。
みよ　遣つた金がをしいなら、私がお前に上げうほどに、早う歸つて下さんせ。
新助　えゝ遣つたものはをしくはないが、騙されたのが腹が立つ。
　　ト悔しき思入にて立かゝるをおつゆ留めて、
つゆ　あゝこれはしたり新助さん、腹も立たうがおみよさんは親方のある抱への身、疵でもつけたらお前の難儀、惡いことは言はぬほどに、まあ〳〵待ちなさんせいなあ。
七郎　これ〳〵新助、汝は縮屋の面汚し、なんでそんなことを言はれるのだ、
九郎　同伴の者まで耻をかくは、汝が間抜から起つたことだ。
兩人　あゝこゝな業晒しめ。
　　ト兩人して新助の胸ぐらを取りて喰はし、突放す。
娘二　あれ、お前さん方まで同じやうに、
皆々　よい加減になさんせいな。
七郎　いや打つてもいゝ、叩いてもいゝ、この新助が親といふは喰ふや喰はずの水呑百姓、これが妹を五歳の時に五兩で賣つた苦しがり、

九郎　それが私等と同じやうに緒賣りになつたのは、誰がお蔭だと思つてゐる、得意先から代物まで私等が世話をしてやつたのだ。

七郎　長くゐるほど襤褸が出て、段々耻をかゝねばならぬ。

九郎　さあ足元の明るい中、きり／＼と歸つた／＼。（ト兩人して新助を引立て、門口へ連れて來る。）

新助　はい／＼歸ります／＼。あゝ耻に耻をかいた上、この衆にまでこのやうに手込に逢ふも誰故ぞ、元はといへばおみよどの故。

みよ　さあ、その恨みは尤もなれど、言ふだけ未練でござんすぞえ。

新助　えゝ未練故に何にも言はぬが、禮はその中、

長次　えゝ、まだぐづ／＼と、行きやあがれ。

ト長次手荒く新助を突出すを、おつゆ留めて門口へ來り、

つゆ　新助さん、何事も私の胸に、

新助　はい、有難うござります。

お鈴　おつと、羽織があるよ、（ト投る、おつゆ取つて、）

つゆ　あゝこれ、路の惡いに、

長次　おゝ、定紋附が泥だらけだ。
つゆ　それは悪いことをしましたなあ。
新助　なに、この泥よりも我顏へ、泥をぬられし今日の仕儀、（トきつとなるを、）
長次　なにイ、さあ歸りやあがれ。（トおつゆ新助を宥め、私が呑込んでゐるとの思入。）
新助　いえ、おやかましうござりました。
ト羽織をひつかけ、紐を結びながらしほ〳〵と花道へ行き、振返りきつとなるを、おつゆ見て思入あつて門口をしめる。新助泪を拭ひ逸散に花道へ入る。
つゆ　あ、氣の毒なことをしましたわいの。
七郎　間拔野郎は歸りましたか、あんな者と一座をすると、縮屋の價値が下る。
九郎　錢をつかつたこともなくて、藝者狂ひも氣が强ひ。
娘一　そりや言はずとも知れたことだが、あんなにみんなが口々に言はないでもよいことを、
娘二　早く歸りなさんすりやよい事を、いつ迄もゐなさんす故、餘計に耻をかゝしやんしたわいな。
長次　ときに邪魔を拂つたれば、呑みなほしはどうでござります。
七郎　いや、それよりは早歸り故お片附として貰ひませう。

九郎　なるほど、それが何よりだ。
お鈴　それぢやあ奥二階へおいでなんせ。
皆々　さあ、ござんせいなあ。
　　ト皆々奥へ入りおみよおつゆ殘ろ、おみよは癪のさし込む思入にて胸を押へ酒を呑みゐろ。
つゆ　これおみよさん、新三さんの事情からして心も心ならぬ故、尤もではござんすが、何科もない新助さんへ言ひたいがひの愛想盡し、あれではお前濟まぬぞえ。
みよ　さあ、後では濟まぬと思へども、新三さんに切られたも新助さんから起つたこと、つい疳癪と後前の考へもなく愛想盡し、これといふのも新三さん故、何科あつて起請まで返す心にならしやんしたか、私や悔しうござんすわいな。
つゆ　ほんに、さつきの切れ文を懷ろへ入れておいたが、(ト守袋をだして)さつきは心附かなんだが、守袋の中はたしかに手紙。(ト守り袋より手紙をだす。)
みよ　え、手紙がござんすとえ。
つゆ　おみよどのへ新三郎、やゝ、これに樣子が記してあらう。
みよ　早う讀んで見て下さんせいなあ。

つゆ　どれ〳〵（ト開き見て）「一筆書送り〳〵扨兼々尋ぬる紛失の香爐、我等と許嫁せしおきしの兄正作殿の情にて首尾よく手に入り候まゝ御悦び下さるべく候、それに就き一つの難儀は許嫁のおきし事そもじと我等を夫婦になさんと、髪を切り尼となり縁を切り候故、そもじとも縁を切らねば兄正作殿へ濟まざれば、これまでの縁とあきらめ、新助殿に身を任せ行末樂に暮さるべく候、我等ことは二人へ義理に一生一人身にて暮しら〳〵、この事言ひ兼ね候まゝ文にて申入候、先は目出度かしく。おみよどのへ新三郎。」

みよ　え〻、さういふ義理であるならば、何故かう〳〵と打明けて私にいうては下さんせぬ。さうしたならば新助さんに辛く私もあたるまいもの、え〻聞えぬわいな〳〵。

つゆ　ほんに聞えぬ新三さん、よしないことを言はしやんした故、新助さんへの愛想盡し、嘸や悔しうござんせう。まあこの事を一筆書き、少しも早く上げなさんせ。

みよ　いえ〳〵私が言ふ事は何を言うても嘘と思ひ、取上げはなさんすまい。

つゆ　でも、このまゝにしておいては、

みよ　それぢやというて、

つゆ　まあ一筆書かしやんせいなあ。

トおみよへ硯を突附ける、この見得よろしく流行唄にて道具廻る。

（縮宿の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面一面に襖、上手に障子家體、いつもの所門口、越後縮品々とした表札、下の方黒塀、路次口にこの裏に貸座敷ありといふ札あり、總て縮屋旅宿の態。こゝに縮屋の三四郎、八兵衞、次郎兵衞、四郎藏等何れも縮屋の裝にて帳合をしてゐる、市兵衞、十藏は荷擔ぎにて荷拵へをしてゐる模樣にて幕明く。

八兵　ときに今日は、盆後から涼しいのでさつぱりと動かないから、今日は見切りに安く賣つて來ました。

四郎　たいがいなら賣るさ、來年まで持つては合はねえ。

三四　そりやあ違ひない、それ故私も芝居町へ十四五反賣りました。

八兵　今時分さう賣れるとは、荒錢を取るところは違つたものだ。

三四　なに、みんなやりくりで買つて、質に置くのさ。

次郎　私も前に芝居町を廻つたことがあつたが、賣れることはよく賣れるが、後の掛金は取れぬて。

四郎　堅氣な所へ商賣すれば、大丈夫な替りに値切られるし、

八兵　何でも樂はさせぬ世界だ。
市兵　もう雁が出て來たから、四五日で歩きじまひだ。
十藏　ちつとも早く國へ歸つて、ラツポン小路へでも行きたいものだ。
市兵　ほんに、女郎は國のことだ。
十藏　ほかぢやあ色が白くいかねえ。
作助　（奥より出來りて）こりやあ皆さん、お歸りなされたか。
市兵　おゝ作助どん、家であつたか。
十藏　新助さんはどうさつしやつた。
作助　今日は掛廻りに行くといつて、午つから出られたが、又仲町へでも行かつしやつたか知らぬ。
三四　新助殿は堅い人だが、惡い魔がさしたな。
次郎　聞けば仲町で評判の女ださうだ。
八兵　そんな者にかゝつては、資本を耗つてしまふに、
四郎　えい加減にさつしやればいゝ。
作助　なんだか今日は案じられる、迎ひに行つて來ませうわえ。

皆々　そりや御苦勞だな。
作助　仲町までは一つ走りだ。
　　　ト作助花道へ行きかけると、花道より新助しほ〳〵と出來り、兩人花道にて行き逢ひ、
　　や、新助さんぢやあないか。
新助　おゝそなたは作助、どこへ行くのだ。
作助　お前樣の迎ひに行くのさ。
新助　そりやあ御苦勞であつた。（ト直に内へ入る。）
皆々　おゝ新助どの、歸られたか。
新助　はい、今日は掛廻りに歩いて、大きにおそくなりました。
市兵　作助どの、よいところで逢はしつたの。
作助　すんでのこと、無駄足をするところだ。
三四　見れば顏の色が惡いがどうかさつしやりましたか。
新助　持病の疝えで、肩が張つてなりませぬ。
作助　肩が張るなら、揉んであげませうか。

新助　氣の毒だが、少しばかり。皆さんゆるして下さい。
八兵　さあ〳〵、遠慮なしにやらつしやい。
作助　これはきつい張りやうだ、（ト揉みにかゝる。）
三四　ときは、今日私は芝居町を廻りながら一幕覗いて來たが、面白いことであつた。
四郎　はあゝ、どこの芝居へ行かつしやつた。
三四　二丁目（市村座）を見て來ました。
次郎　狂言は何をしましたね。
三四　お妻八郎兵衞の心中狂言、緣切りから殺しを見ました。
作助　私あ芝居を見たことがねえが、どんなことをしますえ。
市兵　筋を話して、
十藏　聞かせなせえ。
三四　筋は、古手屋の八郎兵衞が深川の藝者お妻といふのと情人になつてゐたところ、そのお妻が八郎兵衞へ緣切の愛想盡し、傍の船頭だの輕子だのも口々に惡く言つて、たうとう突出してしまつたのさ。そこで八郎兵衞が腹を立つて、出なほして來てお妻を殺し、腹を切るといふ狂言だ。こり

やあ江戸にあつたことださうだ。
新助　へヽえ、江戸にあつたことかね。
三四　たしか八郎兵衞の家は、富澤町だとかいふことだ。
次郎　今でもかういふ筋合は、いくらも世間にあることだ。
八兵　あるとも〳〵おいらなども覺えがあるが、女にだまされたほど口惜しいものはねえ。
四郎　切る氣になるのも無理はないのさ。
新助　（これを聞いてゐて悔しき思入）なるほど、切らにやあなりませぬ。
作助　えヽ、（ト思入。）
新助　わしも一幕見に行きませう。
三四　間があつたら行つて見なせえ。實に芝居のやうではない。
次郎　その八郎兵衞で思ひ出したが、今夜新道の寄席で靱太夫の鰻谷だが、なんと聞きに行かうではないか。
四郎　今つから寢られもしまい、みんな一緒に行きませう。
市兵　どうぞ私等も連れて行つて下さい。

十藏　まだ靭太夫は聞いたことがない。

八兵　新助さん、お前も一緒に行きなせいな。

新助　私は氣分が惡いから、今夜は御免を蒙りませう。作助、貴樣は御一緒に行くがよい。

作助　いゝえ、私は今夜は止しにしませう。

新助　おれが奢るから聞いて來るがいゝ、これも國への一つの土産だ。

市兵　さあ、一緒に行かつしやいな、

作助　いや、聞きたくもねえ、義太夫は錢を貰つてもいやなことだ。

新助　そんな强情を言はねえで、話の種だ聞くがいゝ。

作助　お前が行かつしやるなら、一緒に行きませう。

新助　おれは氣分が惡いから、行かぬわいの。

作助　わしも氣分が惡いから、止しにしませう。

新助　そんなことを言はずと、行くがいゝ。

作助　お前もそんなことを言はずと、行きなさいな。

新助　えゝ、どう言へばかういふと。

作助　かういへばどう言ふと、
次郎　いや、鸚鵡の鳥の掛合だ。
八兵　それぢやあ二人とも、止すがいゝ。
四郎　こつちは少しも早く行かう。
三四　一段でもよけいに聞くが利得だ。
四人　それぢやあ、後を頼みます。
新助　私がしつかり預かりました。
四人　どれ、行つて來ませうか。

ト皆々花道へ入る、新助、作助殘り思入あつて。

作助　やれ〳〵騷々しい輩だな。
新助　やう〳〵氣が落ちついたやうだ。
作助　もし、お前、出先で喧嘩でもしはなさらぬか。
新助　え、なに、喧嘩などをするものか。
作助　それでも息づかひが惡うござります。

新助　なに、こりやあ疝えのせゐだ。

ト　こゝへ奥より六兵衞世話親仁の打扮にて煙草盆を提げ、片手に珠數をかけて出來り、

六兵　南無阿彌陀佛々々、おゝ新助さん、いつの間にお歸りだつたかさつぱり知らなんだ。南無阿彌陀佛々々。

ト　これにて新助作助にもうよいといふ思入、作助は下手へ來る。

新助　たゞいま歸りましたが、大そう肩が張りました故、作助にたゝいて貰つてをりました。

六兵　さうでござりましたか、さあ／＼遠慮なしにさつしやいまし。南無阿彌陀佛々々。

新助　いえ、もうよろしうござります。

ト　此中六兵衞よろしき所へ坐り、新助の顔を見て、

六兵　見れば、だいぶ顔色が悪いが、持病でも起きましたか。

作助　はい、疝えが起りましたさうでござります。

六兵　そりやあ困つたものだ。御苦勞ながら作助どの、奥に神功湯があるからあれを煎じて上げなさい南無阿彌陀佛々々。

作助　それは有難うござります、早速煎じて上げませう。

新助　なに、藥には及ばぬに、
六兵　はてさうでない、病ひは輕い中のことだ。
作助　左樣なら、お貰ひ申します、（ト奥へ入る。）
新助　いや、あの男も役にたゝぬその替り、極く正直な生れ故、よく世話をしてくれます。
六兵　兎角正直でなければいけませぬ。私なども念佛好で、明けても暮れても珠數三昧、正直なお蔭には、商人衆も大勢來られ一年增しに繁昌なし。念佛六兵衞と言はれては縮宿でも頭領役、それも偏に阿彌陀樣と商人衆のお蔭故、あゝ有難い、南無阿彌陀佛々々。して、新助さんには、いつ頃お立ちなされまするな。
新助　（思入あつて）最早荷も片附けましたれば、近々に出立いたします。
六兵　もう近々でござりますか、それはお名殘りをしい、南無阿彌陀佛々々。
新助　また、ことによりましたら今宵の中に、
六兵　え。
新助　今宵の中に荷物をこしらへ、四五日の中に出立しませう。
六兵　それでは、また來年でなくてはお目にかゝれませぬ。

新助（愁ひの思入あつて、）また來年來て、六兵衞どのに逢はれますればよいけれど、明日をも知れぬが人の身の上、もうこれぎりに逢はれぬかも知れませぬ。

六兵　あゝ鶴龜〱々々。南無阿彌陀佛々々〱。詰らぬことを言はつしやりますな、私なぞは此の年齒でも死ぬ氣は少しもござりませぬ。齒はよし、目はよし、耳はよし、まだ新造でも買ふ氣でござります。

新助　ほんにお前はその氣故。人より達者でござりますな。

六兵　ときに、今日も仲町へおいでなされましたか。

新助　いえ〱今日はお得意樣へ、お暇乞に行きました。

六兵　いや〱隱さつしやりますな、さつき野花屋の前でお目にかゝつたといふ人がござりました。

新助　え、そんなら私に逢うた人が、

六兵　それ御覽じろ、ちよつとかまをかけましたら直に知れました。いや、いつぞは申さう〱と疾うから思うてをりましたが、家においでのその時はお仲間の衆がおいで故、つい言ひおくれてをりましたが、今日は幸ひ誰もゐず、ちと御意見せにやなりませぬ、南無阿彌陀佛。

新助　なに、私に意見とは、

六兵　若いお人でもないこと故申さいでも御存じながら、まあ聞かつしやつて下さりませ。多くござる

商人衆の中でも別なお前樣、まだ剃ぺがしの時分から私が家へござるのも今年で丁度二十年、長い中には逗留中に女郎に陷り身をしまひ、ついに國へも歸られず私に難儀をかけた人も幾人あるか知れませぬ。南無阿彌陀佛々々。それに引替へお前樣は若い人には珍らしく、親の忌日はいふに及ばず、幼い時に別れたる妹の行方を案じられ、國を出た日を命日に手の内をやらつしやつたり、あゝ南無阿彌陀佛。若い人には感心なが、早死でもさつしやれねばよいと婆ァと二人で寢物語り、ちと遊びにでも行かつしやつたらと作助どのに勸めても、これも同じく堅藏どの、眞面目過ぎて案じてゐたに、いつのほどにか深川通ひ、初めのほどはよい事と思ひのほかにこの頃は、家を外なる夜泊り日泊り、商人衆の噂にも、新助も此間から大そう女に入上げたが、あれでは終ひは身の詰り、この秋には借金で國へ首尾よく歸られまいと、口々言ふを聞くにつけ、あゝ堅い堅いと自慢した私さへ今は面目ない。南無阿彌陀佛々々。どういふ譯か知らねども、嘘で固めた遊里の習ひ、取るだけ取れば突き出して、振り向いても見ぬ不人情、それ故果は切つたりはつたり、得て騷動ができまする。さうならぬ前切りあげて、もうよい加減になされませ。南無阿彌陀佛々々。（ト思入にていふ。新助も忝いといふ動作あつて、）

新助　二十年來馴染とてよう意見して下さりました。なるほど一二度友達に連れられて行たけれど、根

が野暮者の私故に、惚れられよう筈はなし、惚れられさへせにや陥りもせず、振られて歸る果報者と、近々國へ歸りますれば、必ず案じて下さりますな。

六兵　それで私も安堵しました。して國へお歸りなさるゝに、殘りの荷物はどうなさいます。

新助　さあ、荷物は飛脚で出す積り。

六兵　その飛脚にお出しなさる代物は、どこにござります る。

新助　え、（トぎつくり思入。）

六兵　お前の持つてござつたる、葛籠の中には一反も、

新助　え、

六兵　縮はござりますまいが、

新助　さあ、それは、

六兵　あゝ南無阿彌陀佛々々。何を隱さう、今日留守にもしやと思ひ葛籠の蓋明けてびつくり何もなく扨は人の噂の通り、代物までもなくされたか、早く意見をしたならばと悔んだとても返らぬ事、所詮これではお國へもたゞ歸られはいたされまい。そこはどうなとしませうから、思ひ留つて下さりませ。親御の代から年來の久しい馴染もこれぎりにならうと思や悲しうござる。南無阿彌陀

佛々々。（ト懷ろより小さな位牌を出し）釋之孤山草露信士、この位牌はお前の親御、わしがところで死なれた故、家佛も同然に朝夕拜んでをりますが、嘸や草葉の影にてもお前を苦勞にしてござらう。私が意見も私と思はず親御の意見と思はつしやつて、どうぞ心を入替へて思ひ留まるもお前のお爲め、必ず惡う聞かつしやるな。

ト珠數を爪繰りよろしく思入にていふ、此の中上手へ作助出てこれを聞き泣いてゐたが、この時わつと聲を上げて泣く、

作助　はあゝ。

六兵　や、作助どのか。

作助　有難涙にむせまして、この手拭をしぼりました。（ト泣きながら出來り、六兵衞に向ひ）旦那樣、よう言うて下さりました。私もかうして萬歲の才藏同樣供をして一緒に歩けば主家來、案じますゆゑは一倍に時折意見を申したけれど、汝が知つたることではないと、頭ごなしに言はるゝ故、ついそれなりにぐづ〳〵と押して言はれぬ私が身の上、生れついての不器用も新助樣の引立で、三年以來御得意樣の御贔屓受けるこの作助、ほんのことだが天道樣より力に思ふはお前樣、私を不便と思召して、六兵衞樣の御意見を、どうぞ聞いて下さりませ。

新助　あゝ、六兵衞様といひ作助まで、私を思うてその意見、ふとしたことの意氣張から引くに引かれず通ひましたが、何を隱さうその藝者と愛想盡しをしましたれば、今日から參りはいたしませぬ。
六兵　そんなら私の意見を聞き、思ひとまつて下さりまするか。
作助　それは何より有難い。
六兵　然し、何ぞ行かぬといふ誓言が見たうござる。
新助　さあ、その誓言は、
六兵　幸ひそれなるお前の魂、その脇差を預りませう。
新助　いえ、これればかりは、
六兵　それでは得心さつしやりませぬか。
佐助　ではなけれども、
作助　なけれどもなら身の潔白、早うお預けなされませ。
新助　（思入あつて）そんなら私が魂を、（ト是非なく渡す。）
六兵　しつかりと預かりました。
作助　これで私も安堵しました。

六兵　まづ〳〵今年辛抱なされ、又來年ござられたら少しは保養にもなる所故、私も一緒に行つて見ませう、その時こそは作助どのも、
作助　へい、私もお供いたすでござります。
六兵　いやも、六十の坂を越しましたに、いつまでも生きる氣で、南無阿彌陀佛々々。
作助　いやお前樣はお達者故、とつ百年も生きられませう。
六兵　さあ、生る積りでゐるけれど、いつ何時彼世からお迎ひが來ようも知れぬ。無南阿彌陀佛々々。
新助　(思入あつて)これが別れにならうやら、
六兵　知れぬでもつた浮世の中、
作助　定めぬものは人の身の、
新助　詰りとなりし今日の仕儀。
六兵　金がゐるなら何時でも、五十か百のことならば、
新助　有難うござりまする。
六兵　どれお看經でもしませうか、南無阿彌陀佛々々。(ト脇差を持ち、珠數を爪繰りながら奧へ入る。)
作助　おゝ私は藥をかけておいたが、嘸煮詰つたであらう、どりや見て參りませう。

トとつかはと奥へ入る。後時の鐘になり、新助位牌をとつていたゞき、

新助　え〻親父樣お許しなされて下さりませ、五つの年に別れたる妹の行方を尋ねんと、商賣兼ねて遊里へ入込み、それが緣にて仲町のおみよにふつと心迷ひ、尋ねる妹もうはの空、現金賣にとり溜めた金も殘らず遣つてしまひ、今日も無心に五十兩、仲間内から借荷をして質入なしたも鶍となり、愛想盡しの緣切りに耻に耻をかいたれば、最早國へは歸られないに、かういふことゝは知らぬ故、此間もお袋から無事を尋ねてよこした文に、歸る折には錦繪を土產に買つてくれとの賴み、それ故新繪に八幡樣の御祭禮の番附まで買つておいたも無駄となつたが、もう九月にもなつたれば嘸や國ではお袋が、今日は歸るか明日は歸るかと、待ちに待てる甲斐もなく、この始末を聞くならばその歎きはどのやうぞ。それも忘れて最前は耻をかいたる悔しさに片端から切らうと思ひ刄物を取りに歸つたところ、六兵衞どのに意見され、また脇差を取上げられしは、親父樣がお留めなされしか、今日は取分御命日に供物も上げぬ不孝者、あゝ申譯もござりませぬ。

ト位牌を葛籠の上へ載せ拜みゐる。時の鐘、花道より道具屋利七村正を風呂敷に包みしを擔ぎ、小田原提灯を提げ出來りて、

利七　扨不思議なのはこの村正、正作樣へ百兩に賣り五十兩儲けたところ、その時來てゐた侍が先生か

ら貰つたといつて賣りに來た故、半分だれ五十兩で又買つたが、後にてこの刃物で腹を切つたといふ噂、何だか無氣味な代物故、早く賣つてしまはうと、足手ばかりに持つて歩くが拐買人のないには困る、(ト行きかけ爪突いて提灯を消し)ほい、爪突いて消してしまつた。向うの家で明りを借りよう、(ト蠟燭を拔き門口を明けて)もし、御無心ながら、灯りを一つ貸して下さりませ。

新助　はい〳〵。(ト行燈を持つて出來り、)さあ、點けさつしやりませ。

利七　これは有難うござります、(ト灯を點けながら)や、お前は縮屋さんではござりませぬか。

新助　おゝ、さう言はるゝは道具屋さんか。

利七　とんだところでお目にかゝりました。ときに縮屋さん、道中差を一本買ひなさらないか。

新助　え、脇差を買へ、

利七　ごく〳〵切れる上作だが、急に金が入用故、どうか買つて下さらぬか。

ト　これにて新助又殺さうといふ思入あつて、外へ出て、

新助　そりやあ、どの位なものだね。

利七　百兩の代物だが、五十兩なら賣ります、まあ代物を御覽なさい、(ト脇差を見せる。)

新助　これは結構な拵へだ。(ト拔いて見てびつくりなし)なるほど、これは切れさうだ。

利七　名におふ千壽院村正なれば、切れることは受合さ。
新助（思入あつて）むゝ、こりや私が買ひませう。
利七　そんならそれを、
新助　それ、代金の五十兩。（ト懷ろより財布を出し渡す。）
利七　これはまあ思ひがけない厄介拂ひを、
新助　や、
利七　いや、お拂ひを有難うござります。（ト中腰になり、財布から金を出して改める。）
新助　血汐を好むと豫て聞く、この村正が手に入るも、これで殺せといふ報せか。
ト白刃をきつと見る。利七これをきいて、
利七　え、そんならそれで、
新助　恨み重なる輩共を、
ト刄を振上げきつとなり、刄の祟りで狂氣せし思入、利七びつくりして、
利七　やあ、人殺しだ。
ト大きな聲を上げるを一刀に切倒し、猶狂氣せし動作にて血刀を提げ、花道へ行く。花道より一人の

按摩出來りて突當る。

按摩　えゝ眼明の癖に突きあたりやあがつて、眼を明いて歩きやあがれ。

ト言ふを新助振返つて切りつける。按摩二つになりばつたり倒れる、これを見てにつたりと笑ひ花道へ入る。奥より作助盆へ藥を載せて持ち出來り、

作助　新助さま〳〵、はて、何處へ行かつしやつたかしらぬ。新助さま〳〵。

ト四邊を探す。ばた〳〵になり、花道より垂をおろせし四つ手駕を駕舁擔ぎ出來り門口へおろし、

駕舁　はい、お上さま、まゐりました。(ト垂を上げると、中より野花屋の女房おつゆ出で、)

つゆ　ちつと手間がとれようから、仕度でもしなさんせ、(ト紙へ包みし金をやる。)

駕舁　これは有難うござります、(ト駕籠をおいて下手へ入る。)

つゆ　はい御免なさいまし、新助さんはお家でござりますか。

作助　あい、その新助さんを尋ねてゐるのだ。

つゆ　さう言はしやんすは作助どのかえ。

作助　おゝお前は野花屋のお上さん、何の御用でござりますか。

つゆ　あい、急にお目にかゝりたいことがあつて、(ト内へ入る。)

作助　して、氣遣ひなことぢやござりませぬか。
つゆ　さあ、今日美代吉さんが新助さんに愛想盡しを言はしやんしたが、それがみんな間違ひで、外の者では分からぬ故美代吉さんに文をかゝせ、私がお詫に來ましたが、何處へおいでなさんしたぞいな。
作助　はあゝそれで讀めた。道理こそ顏附が平生のやうでなかつた筈だ。
つゆ　何處ぞ近所にゐなさんせぬか、早う屆けて下さんせいな。（ト文をだすを作助とつて）
作助　や、こりや封が切れてありますぜ。（ト此中より不動の像出るを見て。）此の唐銅の不動樣は、
つゆ　そりや美代吉さんが親の筐、菅谷とやらの不動樣、新助さんへの言譯に肌身離さぬ品なれど、噓僞りでないといふ、これが誓ひでござんすわいな。
作助　（びつくりして）え、それぢやあ美代吉どのは、新助樣が尋ねてござつた妹御だ。
つゆ　えゝ、
作助　平生の話しに、菅谷の不動樣が證據と聞く、
つゆ　それでは猶更、少しも早く、
作助　新助さまへ。

ト此時下手より駕舁出て、

駕舁　もし。お上さん、人殺しがござりますから、御用が濟んだら早く參りませう。

つゆ　なに、人殺しがあるとえ。

駕舁　新助とかいふ人が村正の刀を買ひ、それで切つたと、其刀を賣つた道具屋の話でござりまする。

駕舁　ちよつとしても、この邊で二三人も切られた樣子。

作助　そんならもしや新助さまが、

つゆ　さつきの遺恨で、

駕雨人　えゝ（トびつくりする。奥より以前の六兵衛出來りて、）

六兵　樣子は殘らず奥で聞いたが、打捨ておかれぬ新助殿、まさしく目的は化粧坂、

作助　これより直に。

つゆ　この文持つて、

ト件の文を渡す、作助手拭へ包みつゝ懷へ入れる。

六兵　ちつとも早く、

作助　合點だ。（ト逸散に花道へ入る。）

つゆ　私も家が案じられれば、（ト門口へ出る、駕舁駕籠をよき所へ出す。）

六兵　今の話の様子では、所詮命は（ト彼方へ思入。）

つゆ　え、（トびつくりなし駕籠の中へどうと倒れる。六兵衞は門を閉るを木の頭）

六兵　南無阿彌陀佛々々。

ト是非もないといふ思入にて珠數を爪繰る。おつゆはそのまゝ駕籠を上げさせる。早き合方、時の鐘にて、よろしく、

ひやうし幕

ト時の鐘のつなぎにて引返す。

（返し。仲町裏手の場）――本舞臺一面の柵矢來。よき所に火の番小屋、たそや行燈、柳の立樹、總て化粧坂裏川岸の態。こゝに四つ手駕籠へ繩をかけ赤間の子分五人立ちかゝりゐる模様にて、佃にて幕明く。

子分　こう、皆々聞きや、いゝ時にやあいゝ事が重なるものだな。親分も此間の喧嘩から喰ひ込み、今度は、島と思ひのほか、頼朝様の御法事でお赦になつたは仕合せだな。

子二　そこで今夜こちとらは親分へ遣ひ物に、手附の金を渡しておいたあの美代吉を引排ひ、
子三　夜船でこつそり木更津へ引越女房に連れて行かうと、宵から近所につけてゐたが、
子四　思ひがけなく美代吉にこの裏川岸で出つくはしたは、天道様のお授けだ。
子五　それ故、直に駕籠へぶち込み、これから夜通しにやる積り、こんな間のいゝことはねえ。
トばたくになり、赤間の子分六走り出來りて、
子六　こうく、みんなこゝにゐたか、（ト胸をたゝき息のきれる思入。）
子一　なんだ、ごうぎに息を切つて來たが、
皆々　どうしたのだく。
子六　どうしたどころか大變だ、手前達も知つてゐる縮屋の新助が、今日美代吉に突出され、そこからぼつと逆上せたところへ、いつか親分が道具屋へ賣つた村正の脇差が廻り廻つて手へ入り、それでむやみに切つて歩くが、誰といふ見さかひなく、雪の下からこゝまでゞ、二十六七人も切つたさうだ。
子一　や、そんならあの新助が、村正の脇差で、
子二　二十六七人切つたとか、そりやあとんだことをしやあがつたな。

子三　こちとらにも遺恨があれば、出つくはせば切られる身體。

子四　こいつあ何より險危だ、新助の野郎の來ねえ中、

子五　裏通しに洲崎まで、

子六　ちつとも早くやッつけろ。

五人　合點だ。

ト子分兩人駕籠をかつぎ皆々これへ附添ひ上手へ入る。靜かな佃になり、上手より燗酒屋荷を擔ぎ出來りて、

燗酒　おでんやおでん、甘いと辛い、おでんやおでん。（ト荷をおろし）今夜のやうによく賣れた晩はねえ。もう十四五本で山留だが、早く仕舞つて歸りてえものだ。おでんやおでん。

ト呼んでゐると花道より新助村正を持ち出來り、何か飲むものを呉れといふ思入、燗酒屋見て、

へい、御酒でござりますか、（ト何氣なく言つたが脇差を見てびつくりし、）やあ、人殺しだ。

ト言ふを一刀切りつける。燗酒屋びつくりして下手へ逃げて入る。新助荷の傍へ來て桶の水を柄酌にて汲んで呑む。この中上手より縮屋仲間の九郎助吉原冠りにて唄をうたひながら出來る、この肩へ同じく吉原冠りの七郎兵衛手をかけ、酒に醉つたる態にて出來る、この後よりお鈴、長次提灯を持ち

て出來る。

お鈴　もし、七郎兵衞さん、又いつおいでなさいます。

七郎　明日は掛廻りに出るから、明後日午からゆつくりと來よう。

お鈴　それぢやあきつとおいでなさいましよ、お前さんがおいでなさらないと、お山さんがふさいでばかり、

長次　ほんにあの妓は縮屋さんに、ごうぎにあつくなつてゐるの。

九郎　これ〳〵おれがのはどうだな〳〵。

お鈴　お關さんもお前さんにやあ大のろけさ。

九郎　そいつは有難い。（ト嬉しき思入にてひよろ〳〵とするを七郎兵衞押へて）

七郎　あゝこれあぶない〳〵、大そうに醉つたことだ。然し貴公なりおれなり、かう女子に惚れられるとは、男はよく生れたいものだ。これに就けても、可哀さうなはあの新助、これまで無駄な金を遣ひ、ついに一度思ひも晴らさず、揚句の果に耻をかゝされ、突出されるとは何たることだ。

お鈴　先から知れてあることを、騙されるのは間拔からさ。美代吉さんが惚れるか惚れぬか、よく考へて見ればいゝのに。

長次　あんまり目先の見えねえ奴だ。

ト新助これを聞いてゐて、此の中間へずつと出るを長次見て、

誰だ。やあ、新助か、(トびつくりする。)

お鈴　なに、新助、さま〳〵、(ト新助を見て震へる。)

七郎　こいつは堪らぬ。

ト七郎兵衛九郎助を突放し逃出す、新助九郎助をすつぽり切ると額半分下り、ばつたり倒れる。これにて三人おどろきうろ〳〵して、お鈴は番小屋の中へ逃込む。七郎兵衛ひよろ〳〵と逃げるを追廻し荷の傍にて首を打落す。長次後より組附くを振解いて立廻り、背を切る、と背二つに割れ倒れる。此時番小屋よりお鈴覗いて見て、

お鈴　もう行つたか。

ト言ふをしろべに、新助横なぐりに切る。これにて胴切になりお鈴の足のみ歩いて倒れる。新助これを見てにつたりと思入。時の鐘にて道具廻る。

(洲崎土手の場)――本舞臺三間の間草土手、後は洲崎の海の遠景、松の立樹。こゝに以前の四つ手

駕籠をおろし、子分五人立つてゐる。

子一　今うつたのはもう四つだが、船でこゝから行きてえものだが、あの野郎はどうしたらう。

子二　どこまで船を頼みに行つたか、早く歸つて來やがればいゝが、

子三　かうして居る中も、新助が險危だ。

子四　なに、高の知れた縮賣り、

子五　來やあがつたら、殺んでしまはう。

五人　それがいゝ〳〵。

トばた〳〵にて花道より子分の六逃げて出て來るを、新助亂れたる態にて追ひ出來り、ちよつと立廻つて舞臺へ來る、皆々見て、

子一　そりや來た、殺んでしまへ。

皆々　合點だ。

ト皆々息杖にて新助へ打つてかゝる、新助はめつた切りに切りちらす立廻りあつて、結局六人の子分は下手へ逃げて入る。後靜かなる佃になり、新助駕籠の細紐を切り、刄の先で垂をあげ中を覗く、中にはおみよゐて新助を見て、

みよ　や、お前は、

新助　美代吉か、

みよ　新助さん、

新助　汝、おぼえたか。

ト刀を振上げ切つてかゝる、おみよ駕籠の後へ抜ける、新助誤つて駕籠へ切りつける、此間におみよ花道へ抜けて行く、新助は駕籠の前後を探し何處へ逃げたかといふ思入、ふと花道を見てつか〳〵と追ひかけおみよへ一刀切附け、ちよと立廻つて髻を捉へ、引きずりながら舞臺へ來る、おみよ振拂ひ立廻つておみよは土手より落ち、新助は土手の上にて刀を振上げきつと見得。凄き鳴物になり、なぶり殺しにおよみを殺し、結局首を切り、切首を手に取つて唾を吐きかけ、踏みにじりなどしてホツト思入。本釣鐘。ばた〳〵になり花道より作助走り出て來り、

作助　や、新助さまか。

新助　何を、(ト刀を振上げきつとなる。)

作助　もし、作助でござります〳〵。

新助　おゝ作助か、(ト心附きし思入になり、)これまで汝にも苦勞をかけたが、この新助が騙されし憎き女はまつこの通り、(ト切首を見せる、作助びつくりして、)

作助　これ、新助樣、情ない事して下さりましたなあ。此の美代吉どのは、お前が日頃尋ねてござる妹御でござりますぞ。

新助　なに、この美代吉を妹とは、

作助　證據はお前へ言譯の文に添へたる不動尊。（ト文と不動の像とを出す。）

新助　どれ、（ト村正を結へてゐた手拭をとり、村正を下へおき、二品を取り）まことにこれぞ菅谷の、親父が話しの不動尊。して〳〵文の仔細はどうぢや、そなた讀んで聞かしてくれ。

作助　（とつて開き見て）なに〳〵、「心急き候まゝ申譯のみ書送りまゐらせ候、今日はお前樣へ新三郎樣の事に就き、心にもなきこと、と申し、御腹立てさせ申譯なく存じまゐらせ候。後にて承り候へば、新三郎樣のお許嫁なされ候おきしさま私事よりして尼におなりなされ候故、おきしさまへの義理に新三郎樣も餘儀なく私と緣をお切りなされ候まゝ、又私事も今となつては新三郎樣への義理にお前樣へも從ひ難く、便りなき身となりまゐらせ候、殊に又私事は五歳の年に親に別れ、力と賴むものもなく候まゝ、あまへましたることながらこれまでの御緣により、お前樣の妹とも思召し、行末長く御目をかけ下され候やう願ひ上げまゐらせ候。この事僞りならぬ印に、生の親の筐なる越後の國菅谷の不動樣の尊像相添へ差上申しまゐらせ候。」

ト新助これを聞きてびつくりして、

新助　やゝゝゝ、扨は美代吉は五歳の時別れて行方知れざりし、我妹であつたるか。

作助　それ見なされ、これぢやによつて先刻にから、いくら留めても聞入れず、滅多無性に大勢を切るのみならず、現在血を分けた妹の美代吉様までこの最期、どう取返しがなりませうぞい。

トこれにて新助件の村正を腹へ突立てる。作助見て、

やゝ、これ新助さま、らちもないことさつしやりましたなう。

新助　（思入あつて）神ならぬ身の情なや、現在妹と知らずして、ふつと迷ひし我煩悩寝ても覺めても忘られず、いつぞや船での約束を眞實と思つてそれからは、附けつ廻しつしたおれが、今となつては面目ない。義理にせまつてこのおれに汝が肌を觸れたなら、この世からなる二人は畜生。これ妹、堪忍してくれ〳〵、おりや汝の兄ぢやぞよ。その兄の身でこのやうに惨く殺すも互ひの因果、汝ばかりを殺しはせぬ。

作助　どうした心の狂ひやら、多くの人を殺したこなた、

新助　血汐を好むと聞及ぶ、この村正の祟りなるか。

作助　たゞしは、何ぞの約束なるか。

新助　あゝ是非もなき世の、

兩人　成行ぢやなあ。

ト兩人よろしく思入。此時ばた〳〵になり、捕手四人出來りて、

捕手　人殺し、動くな。（ト取り卷く。）

兩人　何を。（トきつと思入。此の時樂屋頭取出て、）

頭取　先づ、今日はこれ限り。

と目出度打出し

——をはり——

（附錄）

主なる興行年表

（本表は渥美清太郎氏の調査に據ることを感謝す）

宇都谷峠

年時	座名	名題	文彌	仁三	十兵衛	彦三	古今	才三	おしづ	小兵衛
安政三年九月	市村座	蔦紅葉宇都谷峠	市川小團次	市川小團次	坂東龜藏	坂東彦三郎	尾上菊五郎	河原崎權十郎	尾上菊五郎	淺尾與六
慶應二年六月	守田座	蔦紅葉宇都谷峠	市川小文次	市川小文次	中村福助	中村福助	坂東玉三郎	尾上梅幸	—	中村翫太郎
明治六年十二月	澤村座	宇都谷峠噂怪談	坂東太郎	坂東太郎	大谷門藏	—	澤村千鳥	—	—	—
明治十六年八月	新富座	小夜砧宇都谷峠	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川左團次	—	—	—	坂東秀調	—
明治三十五年九月	東京座	花薄宇都谷家話	市村家橘	市村家橘	市川染五郎	—	—	—	—	—
大正四年九月	市村座	蔦紅葉宇都谷峠	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村吉右衛門	—	—	—	尾上菊次郎	—

岩戸の景清

年時	座名	名題	景清	時政	義盛	義時	常胤	朝日	衣笠

年時	座名	名題							
嘉永三年三月	河原崎座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	市川海老藏	坂東彦三郎	市川鰕十郎	市川猿藏	尾上松緑	尾上菊次郎	岩井粂三郎
明治三十八年九月	歌舞伎座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	市川壽美藏	市川猿之助	｜	｜	｜	市川九女八	｜
明治四十一年一月	新富座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	市川九藏	尾上幸藏	中村竹三郎	市川雷藏	市川小文次	尾上紋三郎	｜
大正五年十一月	市村座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	尾上菊五郎	中村吉右衛門	守田勘彌	坂東三津五郎	中村東藏	尾上菊次郎	河原崎國太郎
大正八年一月	歌舞伎座	難有御江戸景清（ありがたやおえどのかげきよ）	市川段四郎	｜	市川中車	片岡市藏	市村龜藏	片岡我童	｜

腕の喜三郎

年時	座名	名題／役割	喜三郎	おいそ	源太	長藏	甚三	左吉	逸平	甚内
文久三年八月	市村座	茲江戸小腕達引（こゝがえどこうでのたてひき）	市川小團次	尾上菊次郎	市村家橘	市川九藏	澤村訥升	坂東三津五郎	片岡十藏	市川團藏
明治七年十月	澤村座	昔江戸小腕達引（むかしえどこうでのたてひき）	中村壽三郎	市川門之助	坂東家橘	澤村銑二郎	澤村百之助	市川女寅	市川荒次郎	澤村しやばく
明治二十八年四月	市村座	茲江戸小腕達引（こゝがえどこうでのたてひき）	市川九藏	岩井松之助	中村芝鶴	澤村訥子	市川猿之助	澤村訥升	市川宗三郎	市川八百藏
明治三十三年五月	明治座	茲江戸小腕達引（こゝがえどこうでのたてひき）	市川左團次	澤村源之助	市川小團次	澤村訥升	市川小米	市川米藏	市川壽美藏	市川權十郎
明治四十四年九月	市村座	茲江戸小腕達引（こゝがえどこうでのたてひき）	中村吉右衛門	尾上芙雀	守田勘彌	尾上菊五郎	中村東藏	坂東三津五郎	市川新十郎	中村歌六
大正八年十一月	明治座	茲江戸小腕達引（こゝがえどこうでのたてひき）	市川中車	坂東秀調	市川壽美藏	市川猿之助	市川三升	市川小太夫	中村鶴藏	市川段四郎

縮屋新助

年時	座名	名題	新助	美代吉	佐吉	源左衛門	作助	六兵衛	おつゆ	新三郎
萬延元年七月	市村座	八幡祭小望夜賑（はちまんまつりよみやのにぎはひ）	市川小團次	岩井粂三郎	市村羽左衛門	關三十郎	市川米十郎	關三十郎	吾妻市之丞	河原崎權十郎
明治十九年六月	中村座	三五夜中色新月（さんごやちういろのしんげつ）	市川九藏	澤村田之助	市川九藏	坂東彦十郎	中村福助	坂東彦十郎	澤村千鳥	市川新藏
明治二十八年五月	市村座	帝國萬歳八幡祭（ていこくばんざいはちまんまつり）	市川九藏	市川女寅	中村芝鶴	市川八百藏	市川猿之助	市川八百藏	市川團三郎	中村芝鶴
明治三十七年七月	東京座	八幡祭禮夜宮賑（はちまんまつりよみやのにぎはひ）	市川猿之助	市川女寅	尾上榮三郎	中村勘五郎	澤村訥升	中村勘五郎	尾上扇糸（おやま）	市川團吉

大正九年三月廿日印刷
大正九年三月廿五日發行
大正九年三月廿六日再版
大正九年四月一日三版
大正九年四月十五日四版
大正九年四月廿日五版
大正九年四月廿八日六版

『默阿彌脚本集第二卷』
實價金參圓五拾錢

補修　河竹糸女
校訂
編纂者　河竹繁俊
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彥
東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者　土谷清隆
東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂

□河竹繁俊氏編□

默阿彌物語

滿都の人氣を獨占せる日本の一大狂言作者河竹默阿彌翁の數多き戲曲中よ
り「村井長庵」「三人吉三」等の十傑作を選び、新に物語風に書き改めたるも
の本書也。何れも華かな舞臺を搖蕩する傳法肌の男女、戀の立引、めぐる
因果の恐しさ、善惡とり〴〵の好場面を髣髴せしめ、讀者をして遺憾なく
江戶情趣を玩味せしむ。正に之れ讀むべき芝居物語にして、又默阿彌の研
究資料として好適なり。

□縮刷四百五十頁
□定價　一二卷各金壹圓五十錢　三卷壹圓五十錢
□送料金八錢

河竹默阿彌

大近松と並べて我國戲曲家の雙璧と目さるゝ河竹默阿彌を傳し、或は論じ
たるもの、擧げて數ふべからずと雖、彼の人物と一生と時代と事業とを論
じて周到を盡せるものは獨本書あるのみ。蓋、本書は翁が二世の嗣子にし
て新進戲曲家たる繁俊氏が、無限の材料の堆積裡に沒頭して、遂に大成せ
られたる紀念的著述たればなり。翁が家系、生ひ立ち、發心等の機微なる
消息に筆を起し、劇作者としての翁が一生を巨細に亙りて傳す。而も翁が
一生の背景をなす江戶末期及び明治初年の文物亦遺憾なく本書に論じ盡さ
れたり。翁が全傳として、全作梗概としてまた歌舞伎發達史として、江戶
世相史として實に空前絕後の一大偉著たるを失はず。

□珍貴圖挿入
□價一圓六十錢
□送料八錢